
熊 谷 市

北 島 遺 跡 XV

ラグビーワールドカップ 2019TM会場整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 9

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第1号墓跡(円形区画墓)出土土器



2 第1号墓跡(円形区画墓)遺物出土状況

序

いよいよ今年、埼玉県ではラグビーワールドカップ2019TMが開催されます。また、来年には東京2020オリンピック・パラリンピックの開催が予定され、国際的なスポーツイベントが目白押しです。

これらのイベントに合わせて、国内外からの多くの観光客が訪れることが予想されます。本県の魅力を世界中に発信する絶好の機会であると同時に、県内埋蔵文化財についても、その魅力を多くの方々に知っていただけるチャンスになるのではないかと期待しています。

ラグビーワールドカップ2019TMの会場となる県営熊谷ラグビー場は、熊谷スポーツ文化公園の中にあります。同公園は平成16年埼玉国体のメイン会場としても使用された県内スポーツの拠点施設です。

公園内には周知の埋蔵文化財包蔵地として北島遺跡が所在し、過去28次に及ぶ発掘調査が行われています。本書にまとめた第26次～28次発掘調査は会場整備事業に伴う事前調査であり、埼玉県の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査では、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡が密集して発見されました。その一角から、両側に溝をもつ道路跡がみつかりました。また、円形に巡る溝によって区画された平安時代の墓跡は他に類例がなく、豊富な副葬品が出土した貴重なものです。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・活用の資料として、また学術研究の基礎資料、文化資源として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、埼玉県都市整備部公園スタジアム課、熊谷市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 田 栄 二

例 言

1. 本書は、熊谷市に所在する北島遺跡第26次～第28次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
北島遺跡第26次調査
熊谷市上川上777番地他
平成29年2月9日付け 教生文第2-50号
北島遺跡第27次調査
熊谷市上川上777番地他
平成29年4月14日付け 教生文第2-2号
北島遺跡第28次調査
熊谷市上川上777番地他
平成29年5月31日付け 教生文第2-13号
3. 発掘調査は、ラグビーワールドカップ2019TM会場整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課(当時)が調整し、埼玉県都市整備部公園スタジアム課の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業(平成28・29年度)
「ラグビーワールドカップ2019会場整備(サイドスタンドほか埋蔵文化財発掘調査業務委託)」
整理報告書作成事業(平成30年度)
「ラグビーワールドカップ2019会場整備(埋蔵文化財発掘調査整理業務委託その2)」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。
第26次の発掘調査は、平成29年2月1日から平成29年3月31日まで、第27次は平成29年4月1日から平成29年6月30日まで、第28次は平成29年6月1日から平成29年6月30日まで実施した。担当者は瀧瀬芳之、渡邊理伊知、

砂生智江、木戸春夫、久永雅宏(平成28年度第26次)、上野真由美、古谷 渉、加藤隆則、木戸春夫、砂生智江、入江直毅、近藤 洋、久永雅宏(平成29年度第26次・27次)、田中広明(平成29年度第28次)である。

整理・報告書作成事業は、平成30年4月2日から平成31年3月29日まで、富田和夫、渡邊理伊知が担当した。調査報告書は、平成31年3月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第453集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、有限会社ジオプランニングに委託した。
7. 発掘調査における空中写真撮影は、株式会社新日本エグザに委託した。
8. 発掘調査における自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
9. 巻頭図版の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。
10. 発掘調査における写真撮影は、各調査担当者が行い、整理作業時の遺物写真撮影は富田が行った。
11. 出土品の整理・図版作成は富田が行った。弥生土器については吉田 稔、鉄製品については瀧瀬、陶磁器については村山 卓・水村雄功、木製品については矢部 隆の協力を得た。
12. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が、他は富田が行った。
13. 本書の編集は富田・渡邊が行った。
14. 本書にかかる諸資料は平成31年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
15. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関・方々から御指示・御協力を賜った。記して感謝いたします(敬称略)。
熊谷市教育委員会
尾野善祐 鈴木敏則 原 明芳 藤澤良祐

凡 例

1. 北島遺跡におけるX・Yの数値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

V-7グリッド北西杭の座標は、X=18670.000m、Y=-38820.000m、北緯36° 10' 02.9902"・東経139° 24' 06.5769"である。

2. 調査に際して使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、座標値X=188800.000m、Y=-38880.000mを北西の原点（A1グリッド）に、事業地内の全体を覆うように設定した。
3. グリッドの名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせて呼称した。

4. 遺構の略号は以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡
SD…溝跡 SE…井戸跡 SK…土坑
SO…道路跡 SX…円形区画墓
P…ピット

5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

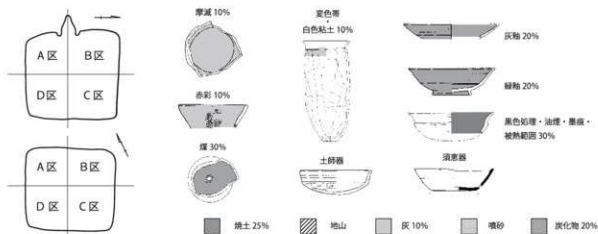
全体図 1/300・1/60
遺構図 1/100・1/80・1/60・1/30
土師器・須恵器等実測図 1/4
鉄製品・石製品 1/3・1/2
玉類 1/1
土師器・須恵器等拓影図 1/3・1/4

6. 遺構図・遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

焼土・網25% 地山・斜線 灰・網10%
須恵器・断面黒塗り 灰釉陶器・施釉範囲一点鎖線+網20% 緑釉陶器・施釉範囲網20%
黒色処理・油煙・墨痕・被熱範囲・黒斑・煤・網30% 赤彩・網10% それ以外は図中に示した。

なお、須恵器・土師器など実測図中の矢印はヘラケズリ工具の見かけの移動方向を示した。須恵器図外の短線はヘラケズリの範囲を示す。

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高（単位m）を表す。



8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

- ・遺物計測値はcm、重さをg単位とした。
- ・()内の数値は復元推定値、[]内の数値は現存値を示す。
- ・土器の胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。
A:雲母 B:片岩 C:角閃石 D:長石 E:石英 F:軽石 G:砂粒子 H:赤色粒子 I:白色粒子 J:白色針状物質 K:黒色粒子 L:チャート M:その他(小礫)
- ・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
- ・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記 No.、煤の付着、生産窯、調整技法、形態の特徴、彩色の有無等を記した。

また、備考に示したA区・B区等の表記は調査時の遺構区割りで、覆土出土遺物の大まかな出土位置を表す(参考図参照)。

9. 本書に使用した地形図は、熊谷市発行の1/10,000都市計画図を編集・使用した。

10. 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(4) 井戸跡	183
1. 発掘調査に至る経過	1	(5) 土壌	188
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(6) 墓跡	195
(1) 発掘調査	2	(7) 畠跡	202
(2) 整理・報告書作成	2	(8) ビット	202
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	4. 中・近世の遺構と遺物	211
II 遺跡の立地と環境	4	(1) 土壌	211
1. 地理的環境	4	V 第28次調査の遺構と遺物	212
2. 歴史的環境	7	1. 古墳時代の遺構と遺物	212
III 遺跡の概要	17	(1) 土壌	212
1. 北島遺跡の概要	17	(2) 畠跡	214
2. 第26～28次調査の概要	25	(3) ビット	215
IV 第26・27次調査の遺構と遺物	33	(4) 包含層出土遺物	215
1. 弥生時代の遺物	33	2. 奈良・平安時代以降の遺構と遺物	215
(1) 弥生時代の出土遺物	33	(1) 溝跡	215
2. 古墳時代の遺構と遺物	34	VI グリッド他出土遺物	217
(1) 竪穴住居跡	34	VII 遺構新旧対照表	223
(2) 掘立柱建物跡	80	VIII 自然科学分析	225
(3) 溝跡	84	1. 放射性炭素年代測定	225
(4) 井戸跡	94	IX 調査のまとめ	229
(5) 土壌	97	1. 調査の成果	229
(6) 畠跡	101	(1) 時期区分	229
(7) 河川跡	104	(2) 集落の変遷	236
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	106	(3) 墓跡について	240
(1) 竪穴住居跡	106	(4) 道路と溝跡	245
(2) 掘立柱建物跡	152	(5) 集落の消長	248
(3) 溝跡・道路跡	158		

写真図版

插图目次

第1図	北島遺跡の位置	4	第33図	第126・127・129号住居跡出土遺物	51
第2図	埼玉平野の地形面区分図	5	第34図	第129・130号住居跡(1)	52
第3図	利根川中流域の地形分布図	6	第35図	第129・130号住居跡(2)	53
第4図	周辺の遺跡(旧石器～古墳時代)	12	第36図	第130号住居跡遺物出土状況(1)	54
第5図	周辺の遺跡(古代～中近世)	14	第37図	第130号住居跡遺物出土状況(2)	55
第6図	北島遺跡のこれまでの調査地点	22	第38図	第130号住居跡出土遺物(1)	56
第7図	調査区の位置	23	第39図	第130号住居跡出土遺物(2)	57
第8図	北島遺跡第26～28次全体図	26	第40図	第132号住居跡・出土遺物	59
第9図	北島遺跡第26・27次全体図(1)	27	第41図	第133号住居跡・遺物出土状況	60
第10図	北島遺跡第26・27次全体図(2)	28	第42図	第133号住居跡出土遺物	61
第11図	北島遺跡第26・27次全体図(3)	29	第43図	第134・135号住居跡	62
第12図	北島遺跡第28次全体図	30	第44図	第137・158号住居跡	63
第13図	第26・27次調査区基本土層	31	第45図	第137号住居跡出土遺物	63
第14図	第28次調査区基本土層	32	第46図	第138・139号住居跡	65
第15図	弥生時代出土遺物	33	第47図	第138号住居跡遺物出土状況	66
第16図	第101号住居跡・遺物出土状況	34	第48図	第138号住居跡出土遺物	67
第17図	第101号住居跡出土遺物	35	第49図	第141号住居跡・遺物出土状況(1)	69
第18図	第111号住居跡・遺物出土状況	36	第50図	第141号住居跡・遺物出土状況(2)	70
第19図	第111号住居跡出土遺物	37	第51図	第141号住居跡出土遺物(1)	71
第20図	第112号住居跡・遺物出土状況	38	第52図	第141号住居跡出土遺物(2)	72
第21図	第112号住居跡出土遺物	39	第53図	第141号住居跡出土遺物(3)	73
第22図	第120・121・150号住居跡・遺物出土 状況	40	第54図	第142号住居跡・出土遺物	75
第23図	第120・121号住居跡出土遺物	41	第55図	第151号住居跡	76
第24図	第125号住居跡・第105号井戸跡・ 第125号溝跡・第167号土壌	43	第56図	第153号住居跡	77
第25図	第125号住居跡・第125号溝跡・ 第105号井戸跡遺物出土状況	44	第57図	第154号住居跡	77
第26図	第125号住居跡出土遺物	44	第58図	第155号住居跡・遺物出土状況	78
第27図	第126・152号住居跡	45	第59図	第155号住居跡出土遺物	78
第28図	第126号住居跡遺物出土状況	46	第60図	第156号住居跡	79
第29図	第126号住居跡出土遺物(1)	47	第61図	第1号掘立柱建物跡・出土遺物	81
第30図	第126号住居跡出土遺物(2)	48	第62図	第2号掘立柱建物跡・出土遺物	82
第31図	第127号住居跡・遺物出土状況	50	第63図	第103号掘立柱建物跡・出土遺物	83
第32図	第127号住居跡出土遺物	51	第64図	溝跡全体図(1)	85
			第65図	溝跡全体図(2)	86
			第66図	第120・121号溝跡・遺物出土状況	87
			第67図	第118号溝跡・遺物出土状況	88

第68図	第109・118・120・121号溝跡・遺物 出土状況	89	第101図	第110号住居跡・出土遺物	127
第69図	第118・122・123号溝跡・遺物出土 状況	91	第102図	第113・114・145号住居跡	128
第70図	溝跡出土遺物(1)	92	第103図	第113号住居跡出土遺物	129
第71図	溝跡出土遺物(2)	93	第104図	第115号住居跡出土遺物	130
第72図	第103・107号井戸跡	95	第105図	第122号住居跡	131
第73図	第103号井戸跡出土遺物	95	第106図	第122号住居跡遺物出土状況	132
第74図	第107号井戸跡出土遺物	96	第107図	第122号住居跡出土遺物(1)	133
第75図	第108・113・115・118・129・146・ 148・158・159・161号土壇	99	第108図	第122号住居跡出土遺物(2)	134
第76図	第162・164・169号土壇	100	第109図	第123号住居跡	135
第77図	土壇出土遺物	100	第110図	第123号住居跡遺物出土状況	136
第78図	第1・2号畠跡全体図	102	第111図	第123号住居跡出土遺物	137
第79図	第1号畠跡	102	第112図	第124号住居跡	138
第80図	第2号畠跡	103	第113図	第124号住居跡遺物出土状況	139
第81図	河川跡(1)	104	第114図	第124号住居跡出土遺物(1)	140
第82図	河川跡(2)	105	第115図	第124号住居跡出土遺物(2)	141
第83図	第18・115・149号住居跡	107	第116図	第131号住居跡・遺物出土状況	143
第84図	第18・115・149号住居跡・遺物出土 状況	108	第117図	第131号住居跡出土遺物	144
第85図	第18号住居跡出土遺物	109	第118図	第140号住居跡・遺物出土状況	145
第86図	第102号住居跡・カマド	111	第119図	第140号住居跡出土遺物	146
第87図	第102号住居跡遺物出土状況	112	第120図	第145号住居跡出土遺物	147
第88図	第102号住居跡出土遺物	113	第121図	第147号住居跡	148
第89図	第104号住居跡	115	第122図	第147号住居跡出土遺物	148
第90図	第104号住居跡遺物出土状況	116	第123図	第148号住居跡	149
第91図	第104号住居跡出土遺物(1)	117	第124図	第148号住居跡出土遺物	150
第92図	第104号住居跡出土遺物(2)	118	第125図	第157号住居跡	151
第93図	第105号住居跡・第101号溝跡	120	第126図	第158号住居跡出土遺物	151
第94図	第105号住居跡出土遺物	120	第127図	第101号掘立柱建物跡	153
第95図	第106号住居跡	121	第128図	第102号掘立柱建物跡	154
第96図	第106号住居跡出土遺物	121	第129図	第104号掘立柱建物跡	155
第97図	第107号住居跡	122	第130図	第101・102・104号掘立柱建物跡出 土遺物	156
第98図	第109号住居跡・第155号土壇	124	第131図	第105号掘立柱建物跡・出土遺物	157
第99図	第109号住居跡遺物出土状況	125	第132図	古代の溝跡全体図(1)	158
第100図	第109号住居跡出土遺物	126	第133図	古代の溝跡全体図(2)	159
			第134図	古代の溝跡全体図(3)	160
			第135図	古代の溝跡土層図(1)	161
			第136図	第101号道路跡・第105・106・110号	

	溝跡・遺物出土状況 (1)	165	第165図	第2～4号墓跡・出土遺物	201
第137図	第101号道路跡・第105・106・110号		第166図	第3・4号畠跡全体図	203
	溝跡 (2)	166	第167図	第3・4号畠跡	204
第138図	第101号道路跡・第106・110号溝跡・		第168図	ピット分布図 (1)	205
	遺物出土状況 (3)	167	第169図	ピット分布図 (2)	206
第139図	第3・6号溝跡 (1)	168	第170図	ピット分布図 (3)	207
第140図	第3・6号溝跡 (2)	169	第171図	ピット分布図 (4)	208
第141図	古代の溝跡出土遺物 (1)	170	第172図	ピット出土遺物	208
第142図	古代の溝跡出土遺物 (2)	171	第173図	第101・120号土壌	211
第143図	古代の溝跡出土遺物 (3)	172	第174図	中・近世の土壌出土遺物	211
第144図	古代の溝跡出土遺物 (4)	173	第175図	第170～173・175・176号土壌・遺物	
第145図	古代の溝跡全体図 (4)	176		出土状況	212
第146図	古代の溝跡全体図 (5)	177	第176図	第28次土壌出土遺物	213
第147図	古代の溝跡土層図 (2)	178	第177図	第5号畠跡	214
第148図	古代の溝跡土層図 (3)	179	第178図	包含層出土遺物	215
第149図	古代の溝跡出土遺物 (5)	181	第179図	第129～131・135・136号溝跡	216
第150図	第101・102・106号井戸跡	182	第180図	グリッド出土遺物 (1)	217
第151図	第101号井戸跡出土遺物	183	第181図	グリッド出土遺物 (2)	218
第152図	第102号井戸跡出土遺物 (1)	184	第182図	グリッド出土遺物 (3)	219
第153図	第102号井戸跡出土遺物 (2)	185	第183図	グリッド出土遺物 (4)	220
第154図	第105号井戸跡出土遺物	186	第184図	表採出土遺物	220
第155図	第301号井戸跡・出土遺物	187	第185図	自然科学分析	228
第156図	第112・114・116・117・121号土壌	190	第186図	第25～28次他遺構変遷図 (1)	
第157図	第122・123・127・130・131・132・			 230・231	
	142・143号土壌	191	第187図	第25～28次他遺構変遷図 (2)	
第158図	第145・147・154・156・157・160・			 232・233	
	165・166・174号土壌	192	第188図	第25～28次他遺構変遷図 (3)	
第159図	第178・179・301・302号土壌	193		 234・235	
第160図	古代の土壌出土遺物	194	第189図	第25～28次他遺構変遷図 (4)	
第161図	第1号墓跡 (円形区画墓)・遺物出			 236・237	
	土状況 (1)	196	第190図	第25～28次他遺構変遷図 (5)	
第162図	第1号墓跡 (円形区画墓)・遺物出			 238・239	
	土状況 (2)	197	第191図	土壌 (木棺) 墓参考資料	244
第163図	第1号墓跡 (円形区画墓) 出土遺物		第192図	第101号道路跡、第3・6号溝跡	
	(1)	198		位置図 (1)	246
第164図	第1号墓跡 (円形区画墓) 出土遺物		第193図	第101号道路跡、第3・6号溝跡	
	(2)	199		位置図 (2)	247

表 目 次

第1表	遺跡地図に掲載した遺跡の一覧	16	第33表	第147号住居跡出土遺物観察表	148
第2表	これまでの北島遺跡の調査概要	21	第34表	第148号住居跡出土遺物観察表	150
第3表	第101号住居跡出土遺物観察表	35	第35表	第158号住居跡出土遺物観察表	151
第4表	第111号住居跡出土遺物観察表	37	第36表	第101・102・104号掘立柱建物跡出土遺物観察表	156
第5表	第112号住居跡出土遺物観察表	39	第37表	古代の溝跡出土遺物観察表(1)	174
第6表	第120・121号住居跡出土遺物観察表	41	第38表	古代の溝跡出土遺物観察表(2)	181
第7表	第125号住居跡出土遺物観察表	44	第39表	第101号井戸跡出土遺物観察表	183
第8表	第126号住居跡出土遺物観察表	48	第40表	第102号井戸跡出土遺物観察表	185
第9表	第127号住居跡出土遺物観察表	51	第41表	第105号井戸跡出土遺物観察表	186
第10表	第126・127・129号住居跡出土遺物観察表	51	第42表	古代の土壇出土遺物観察表	194
第11表	第130号住居跡出土遺物観察表	57	第43表	第1号墓跡(円形区画墓)出土遺物観察表	200
第12表	第133号住居跡出土遺物観察表	61	第44表	ピット出土遺物観察表	208
第13表	第137号住居跡出土遺物観察表	64	第45表	ピット計測表	208
第14表	第138号住居跡出土遺物観察表	67	第46表	中・近世の土壇出土遺物観察表	211
第15表	第141号住居跡出土遺物観察表	73	第47表	第28次土壇出土遺物観察表	214
第16表	第155号住居跡出土遺物観察表	78	第48表	第28次ピット計測表	214
第17表	溝跡出土遺物観察表	93	第49表	包含層出土遺物観察表	215
第18表	第103号井戸跡出土遺物観察表	95	第50表	表採出土遺物観察表	220
第19表	第107号井戸跡出土遺物観察表	96	第51表	グリッド出土遺物観察表	221
第20表	土壇出土遺物観察表	101	第52表	第25～28次遺構新旧対照表	223
第21表	第18号住居跡出土遺物観察表	110	第53表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	227
第22表	第102号住居跡出土遺物観察表	114	第54表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、 較正年代cal BP)	227
第23表	第104号住居跡出土遺物観察表	118	第55表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、 較正年代cal BC/AD)	227
第24表	第105号住居跡出土遺物観察表	121	第56表	埼玉県内の土壇(木棺)墓出土遺跡	243
第25表	第106号住居跡出土遺物観察表	122	第57表	北島遺跡における集落の消長	249
第26表	第109号住居跡出土遺物観察表	126			
第27表	第113号住居跡出土遺物観察表	129			
第28表	第122号住居跡出土遺物観察表	134			
第29表	第123号住居跡出土遺物観察表	137			
第30表	第124号住居跡出土遺物観察表	142			
第31表	第131号住居跡出土遺物観察表	144			
第32表	第140号住居跡出土遺物観察表	147			

写真図版目次

巻頭図版 1	第1号墓跡（円形区画墓）出土土器	3～5	第104号住居跡遺物出土状況（1）～（3）
2	第1号墓跡（円形区画墓）遺物出土状況	6	第105号住居跡（南から）
図版 1 1	北島遺跡第25～28次合成写真	7	第106号住居跡（南から）
図版 2 1	第26・27次北サイドスタンド全景（南から）	8	第106号住居跡灰検出状況（1）
2	第26・27次南サイドスタンド・第28次全景（南から）	図版 8 1	第106号住居跡灰検出状況（2）
図版 3 1	第26・27次大階段全景（南から）	2	第109号住居跡（南から）
2	北島遺跡遠景（西から）	3～5	第109号住居跡遺物出土状況（1）～（3）
図版 4 1	北島遺跡第26～28次全景1（南から）	6	第110号住居跡遺物出土状況
2	北島遺跡第26～28次全景2（西から）	7	第111号住居跡（西から）
図版 5 1	第26・27次南サイドスタンド全景（西から）	8	第111号住居跡遺物出土状況（1）
2	第26・27次南サイドスタンド西側全景（東から）	図版 9 1・2	第111号住居跡遺物出土状況（2）・（3）
3	第26・27次南サイドスタンド南西部遺構群（南東から）	3・4	第112号住居跡（南から）・P 3
4～6	第26・27次大階段全景（北東から）（東から）（南から）	5	第112号住居跡遺物出土状況
7	第26・27次北サイドスタンド全景（西から）	6	第113～115号住居跡（南から）
8	第28次照明灯全景（北東から）	7	第113号住居跡掘り方・第145号住居跡（南から）
図版 6 1・2	第28次全景（東から）（北西から）	8	第115号住居跡カマド
3	第11・158号住居跡（西から）	図版 10 1	第120号住居跡（東から）
4	第18号住居跡（南から）	2	第120号住居跡カマド遺物出土状況
5・6	第18号住居跡遺物出土状況（1）・（2）	3	第121号住居跡（東から）
7	第101号住居跡（西から）	4・5	第122号住居跡遺物出土状況（1）・（2）
8	第102号住居跡（西から）	6～8	第122号住居跡カマド（西から）・貯蔵穴・断面
図版 7 1	第102号住居跡カマド	図版 11 1	第123号住居跡（西から）
2	第104号住居跡（南東から）	2	第123号住居跡カマド
		3・4	第124号住居跡遺物出土状況（1）・（2）
		5	第124号住居跡カマド遺物出土状況
		6	第125号住居跡（南から）

	7	第126号住居跡（南から）					（東から）
	8	第126号住居跡カマド	図版17	1～3	第101号掘立柱建物跡P 2～4		
図版12	1～3	第126号住居跡遺物出土状況 （1）～（3）		4	第103号掘立柱建物跡 （西から）		
	4	第126号住居跡カマド遺物出土 状況		5	第3・6号溝跡（南から）		
	5	第126号住居跡掘り方・第152号 住居跡（南から）		6	第101号溝跡（西から）		
	6	第127号住居跡（南東から）		7	第108号溝跡（西から）		
	7	第127号住居跡P 4断面		8	第110号溝跡遺物出土状況（1）		
	8	第129号住居跡（南から）	図版18	1・2	第110号溝跡遺物出土状況 （2）・（3）		
図版13	1	第130号住居跡（南東から）		3	第113・114号溝跡（南から）		
	2	第130号住居跡カマド		4	第116・122号溝跡（東から）		
	3～7	第130号住居跡遺物出土状況 （1）～（5）		5	第116号溝跡馬歯出土状況		
	8	第131号住居跡遺物出土状況		6	第117・119号溝跡（東から）		
図版14	1	第133号住居跡（南東から）		7	第118・121号溝跡（南から）		
	2	第133号住居跡カマド	図版19	8	第118・123号溝跡（南から）		
	3	第134・135号住居跡（東から）		1	第120号溝跡（南から）		
	4	第137号住居跡（南東から）		2	第121号溝跡（南から）		
	5～8	第138号住居跡遺物出土状況 （1）～（4）		3	第125号溝跡遺物出土状況		
図版15	1	第140号住居跡（南西から）		4・5	第128号溝跡（東から）・断面		
	2	第141号住居跡（南から）		6	第301・306号溝跡、第301号土壇		
	3～6	第141号住居跡遺物出土状況 （1）～（4）		7	第302号溝跡（南から）		
	7	第142号住居跡（南から）		8	第303・307号溝跡（南東から）		
	8	第148号住居跡（南西から）	図版20	1	第303号溝跡断面		
図版16	1	第150号住居跡（南東から）		2	第304・305号溝跡（南東から）		
	2	第152号住居跡（南から）		3	第304号溝跡（南東から）		
	3	第153号住居跡（西から）		4・5	第305号溝跡（北西から）・ 遺物出土状況		
	4	第155号住居跡（東から）		6・7	第309号溝跡（南から）・ C-9・10北壁断面		
	5	第156号住居跡（南から）		8	第310号溝跡（南から）		
	6	第157号住居跡（北から）	図版21	1	第311・313号溝跡（南から）		
	7	第1・2号掘立柱建物跡 （西から）		2	第314号溝跡（南から）		
	8	第101号掘立柱建物跡		3・4	第102号井戸跡・断面		
				5～7	第102号井戸跡曲物検出状況 （1）～（3）		
				8	第103号井戸跡		

図版22	1・2	第105号井戸跡・断面
	3・4	第107号井戸跡曲物検出状況 (1)・(2)
	5	第301号井戸跡断面
	6～8	第301号井戸跡曲物検出状況 (1)～(3)
図版23	1	第301号井戸跡曲物検出状況(4)
	2	第108・115号土壌
	3・4	第112号～114号土壌
	5・6	第116号・第117号土壌
	7・8	第117号土壌遺物出土状況 (1)・(2)
図版24	1～3	第118・121・122号土壌
	4・5	第129・130号土壌、 第101号掘立柱建物跡P5
	6～8	第143・145・147号土壌
	1～3	第157～159号土壌
図版25	4・5	第162号土壌・断面
	6	第165号土壌
	7・8	第170号土壌・遺物出土状況
	1～3	第171～173号土壌
図版26	4	第1号墓跡(円形区画墓)
	5・6	第1号墓跡周溝・断面
	7	第1号墓跡主体部検出状況
	8	第1号墓跡主体部遺物出土状況 (1)
	1～2	第1号墓跡主体部・土層断面
図版27	3～8	第1号墓跡主体部遺物出土状況 (2)～(7)
	1	第1号墓跡歯出土状況
図版28	2	第2・3号墓跡(南から)
	3	第2号墓跡炭化物出土状況
	4	第3号墓跡(南から)
	5・6	第3号墓跡人骨検出状況(1)・ (2)
	7	第4号墓跡
	8	第1号墓跡

図版29	1・2	第2・3号墓跡(北から)
	3	第4号墓跡(南西から)
	4・5	第4号墓跡(南から)(南東から)
	6	C・D-6・7グリッド谷部火 山灰検出状況(南から)
図版30	7	C・D-6グリッド谷部 (南から)
	8	第101号道路跡(1)(西から)
図版31	1	第101号道路跡(2)(東から)
	2	第101号道路跡(3)(西から)
	3	第101号道路跡確認状況 (南東から)
	4	C-7グリッド南壁断面
図版32	5～8	C-7～11グリッド北壁断面
	1～4	第18号住居跡
	5	第101号住居跡
図版33	6	第102号住居跡
	1～5	第102号住居跡
図版34	1・2	第104号住居跡
	3	第105号住居跡
	4～6	第109号住居跡
	1・2	第109号住居跡
図版35	3	第110号住居跡
	4・5	第111号住居跡
	1～3	第111号住居跡
図版36	4	第113号住居跡
	1	第113号住居跡
	2	第120号住居跡
図版37	3～5	第122号住居跡
	1・2	第122号住居跡
図版38	3・4	第123号住居跡
	5	第124号住居跡
図版39	1～6	第124号住居跡
	1～5	第124号住居跡
図版40	6	第125号住居跡
	7・8	第126号住居跡
図版41	1～4	第126号住居跡

図版41	1～7	第126号住居跡	図版56	1	第105号井戸跡
図版42	1～4	第130号住居跡		2	第4号墓跡
図版43	1・2	第130号住居跡		3	第117号土壇
	3	第131号住居跡		4・5	第158号土壇
	4～6	第133号住居跡	図版57	1・2	第158号土壇
	7	第137号住居跡		3	第170号土壇
図版44	1～5	第138号住居跡		4	第173号土壇
図版45	1～4	第138号住居跡		5	第1号墓跡
	5	第140号住居跡	図版58	1～4	第1号墓跡
	6・7	第141号住居跡	図版59	1・2	第1号墓跡
図版46	1～4	第141号住居跡		3	T-14 P11
図版47	1～5	第141号住居跡		4	表採
図版48	1～4	第141号住居跡	図版60	1・2	第1号墓跡
	5	第142号住居跡		3・4	グリッド
図版49	1～6	第148号住居跡	図版61	1	第1号墓跡
図版50	1	第158号住居跡		2～5	グリッド
	2	第101号掘立柱建物跡	図版62	1～6	グリッド
	3	第104号掘立柱建物跡		7	第101号土壇
	4	第3号溝跡	図版63	1	第124号住居跡・櫛羽口
図版51	1・2	第3号溝跡		2・3	第102号住居跡・土鍾
	3～6	第6号溝跡		4	第122号住居跡・土鍾
図版52	1・2	第6号溝跡		5	第101・120・130号住居跡・白玉
	3	第103号溝跡		6～8	第101・102・104号住居跡・石製品
	4・5	第105号溝跡	図版64	1～8	第104・126・130・141号住居跡・第118号溝跡・石製品
	6	第109号溝跡	図版65	1	第155号住居跡・石製品
	7	第110号溝跡		2	第102号井戸跡・石製品
図版53	1～4	第110号溝跡		3	第170号土壇・石製品
	5	第117号溝跡		4～6	第108・121号溝跡・石製品
	6	第118号溝跡		7～9	第3号溝跡・第117号土壇・第1号墓跡・鉄製品
図版54	1	第121号溝跡		10	グリッド・石製品
	2・3	第122号溝跡	図版66	1～7	第102・107号井戸跡・木製品
	4～6	第125号溝跡		8	第1号墓跡・木製品
図版55	1	第305号溝跡		9・10	モモ核・他
	2・3	第102号井戸跡			
	4	第103号井戸跡			
	5・6	第105号井戸跡			

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では平成29年度からの新5か年計画『埼玉県5か年計画－希望・活躍・うるおいの埼玉－』を策定し、「3. ラグビーワールドカップ2019TM及び東京2020オリンピック・パラリンピックの開催」を重点推進課題とし、ハード・ソフト両面の充実を図っている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、これらの施策に伴う文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

ラグビーワールドカップ2019TM会場整備に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、公園スタジアム課長から平成28年4月18日付け公スタ第16号、平成29年4月28日付け公スタ第48号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

照会箇所の周辺は熊谷スポーツ文化公園建設に伴い、昭和60、61年度に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時）を調査主体として発掘調査が実施されていることから、遺構、遺物の所在の可能性が極めて高いと予想された。

当該箇所については、平成28年5月12、13日、6月20、22、23日、11月15、16日に試掘調査を実施し、遺構、遺物が検出された。

これらの試掘結果をもとに、平成28年5月25日付け教生文第405-1号、同年7月29日付け教生文第1191-1号、同年11月21日付け教生文第1810-1号、平成29年5月2日付け教生文第279-1号で、北島遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
北島遺跡 (No.59-050)	集落跡 墓	弥生・古墳 奈良・平安 中世	熊谷市大字 上川上地内

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

「発掘調査を要する区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

調査にあたっては、実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と公園スタジアム課、生涯学習文化財課（当時）の三者で、工事日程との調整、調査方法、調査期間等について協議を行った。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨の指示通知は下記のとおりである。

平成28年6月3日付け教生文第4-248号

また同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

平成29年2月9日付け教生文第2-50号

平成29年4月14日付け教生文第2-2号

平成29年5月31日付け教生文第2-13号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

北島遺跡第26～28次の発掘調査は、ラグビーワールドカップ2019TM会場整備事業に伴い、平成28・29年度に実施した。今回の調査は会場南サイドスタンド（大階段含む）・北サイドスタンド（第26・27次）及び照明灯設置場所（第28次）の3箇所である。調査面積は第26・27次が2,890㎡、第28次が100㎡、合計2,990㎡である。

第26・27次調査は第25次（新メインスタンド）に引き続き、平成29年2月1日から平成29年6月30日まで実施した。なお、平成29年4月以降を第27次調査として発掘調査届を提出した（契約期間は平成29年2月1日から平成29年7月31日まで）。

重機による表土掘削作業は、平成29年2月1日から大階段・南サイドスタンド部分より開始した。表土掘削終了後、大階段調査地点の基準点測量と方眼杭打設作業を2月17日、南サイドスタンド調査地点のそれを3月17日に実施した。

補助員による作業は、平成29年2月9日から開始した。表土掘削終了後、それぞれの地点の遺構確認作業を行った。大階段・南サイドスタンド調査区からは、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壇・溝跡・畠跡など多数の遺構が確認された。第26次調査分の発見届・保管証は3月29日に提出した。

第27次調査のうち、南サイドスタンド・大階段調査区は4月9日に補助員作業を再開した。南サイドスタンド調査区東側から大階段にかけては、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡が激しく重複して検出された。全身人骨が発見された土壇墓の蓆状繊維の年代測定を委託し、10世紀末～11世紀初頭との測定値を得た。

南サイドスタンド西側からは、両側側溝を持つ道路跡や円形区画墓という特殊な埋葬施設が1基検出された。大階段調査箇所を先行して引き渡す

ために、5月17日空中写真撮影を実施した。

新たに加わった北サイドスタンド調査区は、4月9日に重機による表土掘削作業を開始した。表土掘削終了後、遺構確認作業を開始し、5月9日には基準点測量を実施した。

北サイドスタンド調査区から検出された遺構は、溝跡・畠跡・井戸跡などである。住居跡はなく、生産域として土地利用されていたことが判明した。

北サイドスタンドと南サイドスタンドは6月14日に空中写真撮影を実施した。

第28次調査は平成29年5月22日に発掘調査届を提出し、6月1日から6月30日まで調査を実施した。6月5日から表土掘削を開始し、6月7日から掘削工事、6月9日には基準点測量を実施した。集落域から外れるために、遺構数は少ないが土壇・畠跡・柱穴などが発見された。

3箇所の調査区は平行して順次遺構調査を実施し、土層断面図、遺構平面図、写真撮影を行い、記録作成作業を実施した。

平成29年6月28日までにすべての調査を終了し、事務所の撤去を完了した。平成29年6月29日、発見届（熊谷警察署宛て）と保管証（埼玉県教育委員会宛て）を提出した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成30年4月2日から平成31年3月29日まで実施した。作業は出土遺物の水洗・注記から開始し、順次接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺物は実測・トレース・拓本採取を行った。実測には三次元位置計測装置、正射投影画像撮影機を活用した。これらの図面をもとに、パソコンに取り込み、印刷用の挿図を作成した。

平成30年10月・11月には図版用の遺物写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

発掘調査で記録した遺構の平面図や断面図は修

正を加え、遺構の第二原図を作成した。第二原図はスキャナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレース、土層説明などを組み込んで、印刷用の版下を作成した。

発掘調査で撮影した遺構写真は、整理・選択して写真図版用版下データを作成した。

平成30年11月から作成した遺構・遺物のデータ、および自然科学分析結果をもとに、原稿執筆を開始した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成28年度（発掘調査）

理 事 長	塩野谷 孝 志
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭
総務部	
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二
総 務 課 長	曾 川 浩 二

執筆した原稿と、遺構・遺物の挿図・写真図版などを組み合わせて報告書の割付・編集を行った。平成31年1月に原稿を印刷業者に入稿した。

報告書は平成31年2月から3月中旬にかけて3回の校正を経て印刷を行い、3月22日事業団報告書第453集『北島遺跡XV』として刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は3月までに整理・分類の上、埼玉県文化財収蔵施設に仮収納した。

調査部	
調 査 部 長	金 子 直 行
調査部副部長兼調査第二課長	瀧 瀬 芳 之
主 事	渡 邊 理伊知
主 事	砂 生 智 江
主 事	木 戸 春 夫
主 事	久 永 雅 宏

平成29年度（発掘調査）

理 事 長	塩野谷 孝 志
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久
総務部	
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二
総 務 課 長	曾 川 浩 二

調査部	
調 査 部 長	赤 熊 浩 一
調 査 部 副 部 長	田 中 広 明
主幹兼調査第二課長	上 野 真由美
主 任	古 谷 渉
主 任	加 藤 隆 則
主 任 専 門 員	木 戸 春 夫
主 事	砂 生 智 江
主 事	入 江 直 毅
主 事	近 藤 洋
主 事	久 永 雅 宏

平成30年度（整理・報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久
総務部	
総 務 部 副 部 長	田 中 広 明
総 務 課 長	新 井 了 悟

調査部	
調 査 部 長	瀧 瀬 芳 之
調 査 部 副 部 長	山 本 靖
主幹兼整理第一課長	福 田 聖
主 任	渡 邊 理伊知
主 任 専 門 員	富 田 和 夫

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

北島遺跡は、熊谷市大字上川上777番地他に所在する（第1図）。遺跡は、J R高崎線熊谷駅の北東約3.5kmの熊谷スポーツ文化公園を含む周辺一帯に位置し、南北約1.2km、東西約1.6kmの範囲に広がっている。

熊谷駅には、J R高崎線・秩父鉄道・上越新幹線が乗り入れている。国道17号が東西に横断し、国道407号が南北に縦断している。このように、熊谷市は主要な国道や鉄道が通過する交通の要衝であり、県北地域において中心的役割を担っている。平成17年度、熊谷市は妻沼町・大里町と、平成19年度には江南町と合併し、北は利根川左岸の妻沼小島地区から、南は荒川を越えて一部が比企丘陵に位置する江南地域にまで市域が拡大した。

北島遺跡の所在する上川上周辺は、熊谷扇状地上の荒川によって形成された自然堤防にあたり、

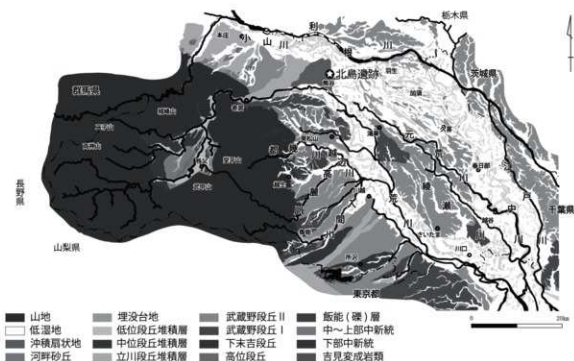
水田の中に住宅地が混在する景観が広がっている（第1図）。

埼玉県は、おおまかに秩父山地を中心とする山地、それに連なる台地・丘陵からなる西部地域と、荒川低地を中心とする日本最大の平野である関東平野の多くを占める東部地域の埼玉平野に分けられる。

熊谷扇状地は、埼玉平野の北に位置し、利根川中流域低地の西半である妻沼低地の西側、荒川低地の北側に当たる。東側を加須低地、西側を妻沼低地と接し、北側には利根川が、南側には荒川が流れ、両河川が最も近接する箇所である（第2図）。また、扇状地の南西側は、櫛引台地・江南台地となる。

現在の熊谷市周辺の地形は、丘陵・台地・低地に分けられる。

丘陵は南西の江南地域に比企丘陵がある。比企



第1図 北島遺跡の位置

丘陵は、西方の外鉄父山地から半島状に突き出た形であるが、山地との境界があまり明瞭ではない。

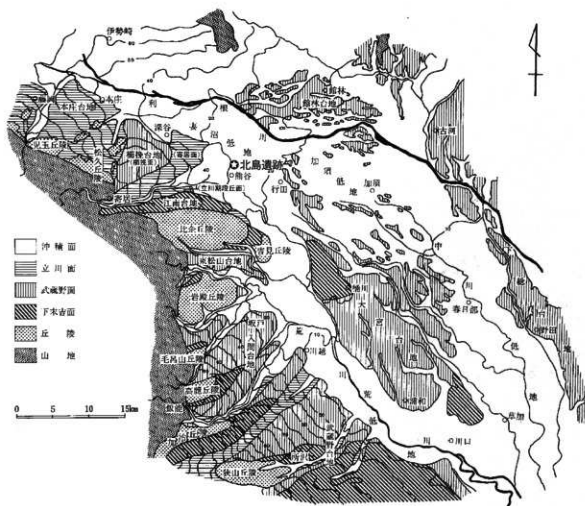
荒川の左岸地域には櫛挽台地、右岸地域には江南台地がある。櫛挽台地は形成時期の異なる二つの段丘面に分けられる。段丘面の境界は、寄居町大字桜沢から深谷市下郷、同市秋元町へと続く屋線である。西側の高い段丘面は櫛挽面と呼ばれ、武蔵野面に対比される。一方、南東側の低い面は寄居面と呼ばれ、立川期後期に形成された段丘面である。寄居面に相当すると考えられる段丘面は江南台地の北側にもあり、立川期段丘面と呼ばれている。江南台地は下末吉面に相当する。

この二つの台地は、荒川が形成した荒川扇状地

が台地化したもので、旧石器時代に形成された。

当初の荒川扇状地は寄居町に扇頂があるが、縄文時代以降に下流の深谷市川本明戸付近へ移動したと考えられている。扇頂が移動して新たに形成された扇状地は、熊谷扇状地と呼ばれている。

低地は北半部に妻沼低地がある。妻沼低地は、利根川によって形成された低地で、熊谷扇状地と、扇状地よりも下流に形成された自然堤防・後背湿地とに分けられる（第3図）。縄文時代後期後半以降には自然堤防上に遺跡が確認されるため、この頃までには、自然堤防や後背湿地が形成されていたと考えられる。熊谷扇状地には、利根川や荒川の旧河道が発達し、自然堤防や後背湿地が多



第2図 埼玉平野の地形区分図（堀口1980より引用 一部加筆）



第3図 利根川中流域の地形分布図（大森ほか1991より引用 一部加筆）

数形成され、中小河川が幾筋も流れている。

北島遺跡の東側は、羽生市、加須市、行田市にわたって広がる広大な加須低地となっている。この加須低地は関東造盆地運動によって、現在の景観となったもので、本来は館林—大宮台地として連続する台地が形成されていた。下水工事によって地下3 mの深さから発見された羽生市小松1号墳の例から、その沈降の度合いを窺うことができる。現在も行田市街付近を中心に多くの箇所で埋没台地が認められる。

その沈降に伴い、利根川、荒川の支流となる中小河川が乱流し、多くの自然堤防が形成され、現

在の景観が生みだされたのである。

北島遺跡の周辺は、熊谷扇状地の扇端部にあたる。北島遺跡は、熊谷扇状地の扇端部と妻沼低地との境界付近を東西に延びる星川左岸の自然堤防上に立地している。現在は地盤改良が進み、平坦な地形となっている。かつて、遺跡の周辺には旧河道跡の小さな谷状の湿地が点在し、湧水の豊富な地である。

水田経営に適した地域である一方、荒川や利根川の洪水による被害をたびたび被っていた。北島遺跡第17～19地点でも、洪水の痕跡が確認されている。

2. 歴史的環境

北島遺跡周辺では、近年、低地や自然堤防上に立地する多くの遺跡が調査され、従来から行われてきた台地の調査とあわせて、地域の遺跡の様相が徐々に明らかになってきた。

北島遺跡は昭和60（1985）年から30年以上に亘って、断続的に発掘調査が実施されてきた。その結果、弥生時代中期後半に本格的な集落が営まれ、その後多少の空白期間はあるものの、古墳時代前期・後期・古代と大規模な集落が継続していたことが分かっていく。

（1）旧石器時代

北島遺跡に本格的な集落が営まれる以前の旧石器時代は、遺跡の数が極めて少ない。熊谷市内の大里地域の東山遺跡・大境遺跡、江南地域の鹿嶋遺跡、塩西遺跡では、ナイフ形石器や礫群が検出されている。いずれも今から約2万年から1万7000年前の石器群である。

中でも、東山遺跡は吉野川に面した台地上に立地し、ナイフ形石器や削器のほかにも石核や石器製作時に生じた剥片が発見されている。このほか、櫛挽台地上に立地する籠原裏遺跡からは、黒曜石製の尖頭器が出土している。

（2）縄文時代

縄文時代草創期から後期前半にかけての遺跡は、その多くが荒川右岸の江南台地及び左岸の櫛挽台地上に立地する。少数ながらも、加須低地西部の埋没台地上にも分布している。

草創期の遺跡は江南台地上に立地する熊谷市原谷遺跡があり、押圧縄文系の土器が出土している。一方、研究史でも著名な深谷市宮林遺跡は、荒川左岸の櫛挽台地上に立地している。今後、両台地上からこの時期の遺跡が発見される可能性がある。続く早期では、撚糸文期の熊谷市萩山遺跡・上杉館跡・宮脇遺跡・四反歩遺跡など、荒川右岸の江南台地に集中する傾向がある。萩山遺跡では集落（堅穴住居跡）が発見されている。

一方、撚糸文期に続く沈線文期や条痕文期の遺跡は少ない。江南地域の熊谷市萩山遺跡において沈線文期や条痕文期の遺物が報告されているが、堅穴住居跡は確認されていない。また、同じ江南台地上に立地する熊谷市桜山遺跡では、支谷に面した斜面部から平坦地にかけて集石が発見されている。

早期末から前期前半にかけて、関東地方では縄文海進と呼ばれる海水面上昇があり、荒川や利根川の下流域では盛んに貝塚が形成された。しかし、熊谷市内にまで海水面が達することはなかった。

前期前半の遺跡は少ないが、櫛挽台地上に立地する寺東遺跡から関山式土器が出土している。続く黒浜式期になると、櫛挽台地上に立地する熊谷市三ヶ尻（林）遺跡では12軒の住居跡が調査されている。

前期以降、加須低地の埋没台地上にも遺跡が認められるようになる。行田市馬場裏遺跡（29）では、前期前半の関山式の住居跡13軒が調査されている。馬場裏遺跡では中期以降の住居跡も検出されており、縄文時代の中核的な集落と考えられる。

中期では、勝坂式期中葉から加曾利E式期にかけて遺跡数が増加し、大規模な集落が営まれるようになる。代表的な遺跡として、櫛挽台地上に立地する寺東遺跡、江南台地上に立地する西原遺跡・上原前遺跡が知られている。加須低地の馬場裏遺跡南側の行田市船郷・内郷通遺跡、陣場遺跡（34）、原遺跡、諏訪山遺跡（D）でも中期の遺物が出土している。諏訪山遺跡では7次の調査が実施され、縄文時代中期の住居跡7軒が検出されている。

後期後半になると、それまで遺跡が形成されることのなかった自然堤防上に集落が営まれるようになる。熊谷扇状地の自然堤防上には諏訪木遺跡

(2)・中西遺跡(3)・西城切通遺跡(4)などから遺構や遺物が発見されている。特に諏訪木遺跡では安行Ⅱ式期から安行Ⅲa式期の遺物が最も多く、豊富な土器とともに土偶・耳飾・土版・石棒などの遺物が出土している。また、加曽利B式期の土器集中遺構も確認されている。加須低地では高畑遺跡(31)で後期中葉の住居跡2軒が検出されている。

晩期では、江南台地の南端部に立地する中磨遺跡で竪穴住居跡や土壇などが発見されている。熊谷扇状地の自然堤防上に立地する古宮遺跡(5)では竪穴住居跡は未検出であるが、遺物集中区から有段口縁の粗製深鉢や北関東に分布する天神原式土器が出土している。晩期後半から弥生前期までの間の遺跡は極端に少なく、空白の時期となっている。前中西遺跡(6)では、包含層中や他時期の遺構の中から晩期終末の浮線文土器が出土している。

(3) 弥生時代

北島遺跡では、第4次調査で前期末葉から中期初頭と思われる再葬墓が確認されている。

櫛挽台地崖線下の自然堤防上に立地する熊谷市横間栗遺跡からも、前期終末から中期中葉にかけての再葬墓群が発見されている。第1号再葬墓は、長管骨5本が縦に並べられて壺の内部に納められていた。

中期前半では、妻沼低地の利根川沿いに熊谷市妻沼地域の飯塚北遺跡があり、再葬墓のほか、焼土と骨片を大量に含む土壇や、墓壇と推測される楕円形の土壇など、一次葬から再葬までの工程を窺うことができる。中期中葉の遺跡は、飯塚北遺跡に近接する飯塚遺跡や飯塚南遺跡がある。飯塚南遺跡は、再葬墓から土壇墓、土器棺墓への変換期に位置付けられ、その両者が検出されている。竪穴住居跡も確認され、それまでの墓域のみの遺跡から集落と墓域とが共存し、注目されている(熊谷市教委編2015)。

中期中葉の後半から中期後半にかけては、熊谷扇状地扇端部の湧水点及び湧水点を起点とする小河川に沿った自然堤防上に、水稲農耕を基盤とした本格的な集落が営まれるようになる。特に熊谷市と行田市に跨る位置に所在する池上遺跡(7)・小敷田遺跡(8)は、この地域において最も早く営まれた開拓村落として学史的にも著名である。

池上遺跡からは関東地方では最古級の3基の方形周溝墓が発見されている。また、竪穴住居跡内から炭化米が出土し、さらに調査区西側の低地からブラントオパールも検出され、稲作農耕が行われていた可能性が高い(熊谷市教委編2015)。出土土器の中には北陸系の小松式土器や信州系の栗林式土器、南東北系の南御山Ⅱ式土器・龍門寺式土器などもあり、他地域との交流が盛んに行われていたことがわかる。

この遺跡を端緒として、北島遺跡や古宮遺跡・前中西遺跡・諏訪木遺跡など、中期中葉から後期初頭に多くの遺跡が熊谷扇状地に営まれるようになる。これらの中期後葉の集落遺跡は、大規模集落を形成しながらも環濠は設けられていない。

前中西遺跡は、遺跡範囲のほぼ中央で確認された旧河川跡を境として、北側に集落域、南側に方形周溝墓による墓域が広がる。集落は中期中葉から後期前半までの長きにわたって継続するが、中期後半に最も発展する。墓域は方形周溝墓を主体とするが、礎床木棺墓の存在が特筆される。礎床木棺墓は4基検出され、多数の赤玉石と緑色凝灰岩製管玉が副葬されていた。長野県中・北信地域を中心に分布する栗林土器分布圏に特徴的な墓制が、中期後半段階に新たに導入された意義は大きい。また、中期後半の住居跡から、全国初となる複合鋸歯文の刻まれた石戈が出土した。長野県柳沢遺跡からは複合鋸歯文の付いた銅戈が出土しており、中部高地(栗林式土器文化圏)との強い関わりが想定されている(松田2016)。

諏訪木遺跡からは完形の土偶型容器が、栗林式

土器に伴って出土した。近接する前中西遺跡から5点の土偶型容器が、池上遺跡から土偶が1点出土している。

後期前半段階までには、熊谷扇状地の周辺で営まれていた集落は姿を消す。その一方で、江南台地・比企丘陵の末端部に、多くの遺跡が営まれるようになる。熊谷市大里地域の円山遺跡・北廓遺跡、江南地域の富士山遺跡・姥ヶ沢遺跡などが例として挙げられる。

再び北島遺跡周辺の自然堤防上に遺跡が展開するようになるのは、弥生時代の終末期から古墳時代前期にかけてである。

北島遺跡のほかに熊谷扇状地の諏訪木遺跡、妻沼低地の熊谷市一本木前遺跡、荒川低地北端の大里地域の下田町遺跡(39)などが挙げられ、その多くは古墳時代前期に継続する。

(4) 古墳時代

北島遺跡周辺における前期の遺跡は、熊谷扇状地の扇端部や妻沼低地に分布する自然堤防上に立地している。

北島遺跡の西側に隣接する天神遺跡からは集落や墓域は検出されていないが、堅穴状遺構から前期～中期の土器が一括で出土している。

北島遺跡の北東に隣接する田谷遺跡(10)では、弥生時代末から古墳時代前期の住居跡31軒をはじめ、堅穴状遺構・溝跡・土壇が発見されている。この遺跡は、第三遺構面と第二遺構面とが、層厚約0.2mの洪水砂層によって区切られ、水害を被りながらも連綿と集落が営まれていた様子を窺い知ることができる。

北島遺跡の東側に隣接する天神東遺跡(11)からは、前期の住居跡5軒・掘立柱建物跡1棟が発見されている。住居跡から多量の炭化物が確認されていることから、火災に見舞われた集落跡と推定されている。東側に隣接する中条条里遺跡(12)からは、住居跡17軒・方形周溝墓2基・土壇6基などが確認されている。

北島遺跡の東約1kmに位置する東沢遺跡(13)では、前期～中期の土器とともに、各種の木製農具類が多く出土している。その北約1kmに位置する雷電遺跡では、甕・台付甕・高坏・器台などが一括出土している。

このように、北島遺跡を含む上中条・大塚・今井一帯は、当該期の集落遺跡、古墳が集中し、中条遺跡群と呼ばれている。

中条遺跡群のほかにも、熊谷扇状地の扇端部に前期の遺跡が集中して営まれている。前中西遺跡からは堅穴住居跡とともに前期～後期の堅穴状祭祀遺構が、中西遺跡(3)からは前方後方形周溝墓が検出されている。藤之宮遺跡(14)からは堅穴住居跡8軒とともに前期～中期の河川に関わる祭祀跡が検出されている。

小敷田遺跡からは、堅穴住居跡1軒、周溝持建物跡18軒、掘立柱建物跡3棟などが発見されている。遺物は、畿内地方や東海地方などの外来系土器が多数出土している。また、河川跡からは鋤や鍬などの木製品が多量に出土している。

一方、下田町遺跡からは堅穴住居跡46軒、方形周溝墓17基と、碧玉製石釧、滑石製腕輪、卜骨といった特殊な遺物が出土し、注目される。

台地に眼を移すと、江南台地の東端部の熊谷市瀬戸山遺跡や船木遺跡などは数十軒単位の住居で構成された中規模の集落である。

中期になると、大規模な集落は見られなくなる。妻沼低地では北島遺跡の北東に位置する古宮遺跡から和泉期の住居跡が2軒検出されている。利根川右岸の弥藤吾新田遺跡からは初期カマドを持つ和泉期後半の住居跡が検出されたが、沖積低地には大規模な集落が減少する傾向が顕著になる。

一方、江南台地では本田・東台遺跡などが存続し、台地上に集落が展開する現象が認められる。その背景には水害や河川の流路変更など自然環境の変化により、低地の耕作地を放棄せざるを得ないような状況があった可能性が指摘されている

(関2015)。

中期の断絶期間を経て、5世紀末から6世紀の初頭に、再び集落が妻沼低地に進出する。この集落動向は、妻沼低地に留まらず、その東の埼玉古墳群を取り巻く加須低地、笠原低地においても同様で、急激に遺跡が増加する。

妻沼低地では、一本木前遺跡・深谷市上敷免遺跡・深谷市城北遺跡などで堅穴住居跡が100軒を超えるような大規模集落が展開する。一本木前遺跡では、300軒以上の重複の著しい堅穴住居跡が調査されている。当該期の河川跡も複数確認され、堅穴住居跡との重複関係から、流路の変遷を迎えることができる。これらの集落では、数多くの堅穴住居跡が確認されている一方で、掘立柱建物跡は発見されていないのが特徴である。

北島遺跡東側の自然堤防上には、小敷田遺跡、行田市池守遺跡(26)が継続して展開する。池守遺跡では、住居跡は未発見であるが、遺物溜まりから大量の土師器壺と木製品が出土している。全国で初めて出土した地機織機の中筒受けは、本格的な布生産を具体的に示すものとして注目される(中島2008)。現在の行田市域の東側に当たる加須低地の埋没ローム台地上の埼玉古墳群周辺には、神明遺跡、林遺跡、馬場裏遺跡、屋敷通北遺跡、陣場遺跡、船原・内郷通遺跡など後期の集落跡が多く分布している。「小針型杯」の提唱から、地域を代表する遺跡として知られている小針遺跡は、後期から平安時代まで継続して営まれ、160軒以上の住居跡が調査されている。

南側の忍川の自然堤防上には、行田市武良内・中通遺跡、高畑遺跡が知られている。高畑遺跡では、方形の大規模な区画溝が検出されており、豪族居館との関係が推定されている(金子1998)。

埼玉古墳群の造営とほぼ時を同じくして始まった行田市築道下遺跡は、元荒川を利用した水運の拠点と考えられる大集落遺跡である。幅の狭い自然堤防上に、6世紀初頭から8世紀前半の住居跡

789軒、掘立柱建物跡239棟、井戸跡606基、溝跡429条等、多数の遺構が激しく重複している。特に7世紀後半から建てられ始めた掘立柱建物群は、県内でも最多の棟数とともに、元荒川を意識した規則的な配置が複数見られ、遺跡の性格をよく示すものとして注目される。北島遺跡においても、規則的に配置された掘立柱建物群の造営が開始される時期でもあり、両者の関係が問題となるであろう。

一方、和田吉野川、現荒川を超えた大里地区の低地には、住居跡300軒余りの集落、下田町遺跡がある。碧玉製石剣、滑石製腕輪、子持勾玉、紡錘車、白玉、石製模造品などの多くの石製品が出土し、未成品もみられるため、石製品の製作が行われていたと推定されている。特に溝跡から大量の土器や木製品、ハマグリ、カキなどの海産の貝やイルカなどの海獣の骨が廃棄された状態で発見され、舟運による東京湾岸との直接交易が推定されている。

諏訪木遺跡では、後期の河川祭祀跡が調査されている。雌馬の馬頭骨や木製蓋罐、管玉・切子玉・勾玉といった玉類、滑石製模造品とともに、土師器・須恵器が出土し、地域首長の関与が窺える大規模な水辺の祭祀の具体的な様相が明らかになっている。

北島遺跡周辺の古墳時代は、埼玉古墳群を除いては語れない。埼玉古墳群は、5世紀後半の金錯銘鉄剣を出土した稲荷山古墳を嚆矢に、6世紀末までの山古墳まで、墳長100mを超える大前方後円墳が造営され続けた。当時の武蔵国造の奥津城と考えられ、古墳群に埋葬された首長の動向が地域全体に多大な影響を与えた。周辺の集落、古墳群の隆盛は、ほぼ埼玉古墳群の造営時期と重なる。埼玉古墳群の成立期である5世紀後半から6世紀初頭になると、それと軌を一にして、東側の北島遺跡周辺の妻沼低地、埼玉古墳群の北側に当たる加須低地の利根川沿いに多くの古墳が築造される

ようになる。

北島遺跡の北側には中条古墳群が造営されている。墳長43.8mの帆立貝形前方後円墳の鍔塚古墳(16)では、後円部の北東側と南東側から須恵器の大型器台を用いた墓前祭祀跡が検出されている。周溝底直上から榛名山二ツ岳噴出テフラ(HR-FA)の純層が堆積していること、定型的な模倣坏が出現していることから須恵器TK23～47型式に平行する段階で、5世紀代の築造と思われる。女塚1号墳(17)も同様の帆立貝形前方後円墳である。

埼玉古墳群の北側には、行田市斎条(C)、犬塚(B)、酒巻(A)、大稲荷、新郷、小見、若小玉などの多くの古墳群が知られている。

埼玉古墳群最後の戸場口山古墳(方墳)が築造される7世紀前半にも、小見、若小玉の古墳群では引き続き古墳の造営が続く。漆塗木棺・銅鉤が出土し、「関東の石舞台」ともいわれる八幡山古墳、線刻古墳の地蔵塚古墳(円墳)がその代表である。埼玉古墳群の終焉とともに、隆盛を見せていた周辺の集落も減少し、7世紀後半から古代へと移行していく。併せて8世紀にまで継続する新たな集落が登場する。

(5) 古墳時代末から古代初頭

現在の熊谷市は、幡羅郡・男会郡・大里郡・埼玉郡・横見郡に跨る広大な地域で、北島遺跡の周辺は幡羅郡に属すると考えられている。幡羅郡の郡家所在地は、深谷市幡羅遺跡から熊谷市西別府祭祀遺跡・西別府廃寺周辺に比定されている。

『北島遺跡V』で述べられたように、7世紀後半のある段階に、北島遺跡周辺も国郡制に先行する国評制に編成されていたと推定できる。奈良県日高山瓦窯から「前玉評 大里評」という刻書のある文字瓦が出土している。日高山瓦窯は藤原京の建設に伴って操業を停止した瓦窯であり、遅くとも天武・持統朝段階には、前玉評と大里評が存在していたことを示す。

幡羅郡に関しては「評」の設置に関わる文字資料はないが、周辺地域の状況を鑑みると、北島遺跡の周辺も地方行政単位の一つ「評」に編成されていた可能性は大きい。

櫛挽台地の突端では、三ヶ尻(天王)遺跡が終焉を迎える。その一方で、樋の上遺跡・在家遺跡・上辻遺跡・下辻遺跡・東方遺跡などが新たに登場する。

中でも東方遺跡では、大型の掘立柱建物跡が確認されている。隣接する西別府廃寺は幡羅郡家に関わる伽藍を伴う寺院跡で、区画溝や基壇、瓦溜まり遺構、掘立柱建物跡、住居跡などが調査されている。出土瓦や土器から8世紀初頭の創建と考えられている。

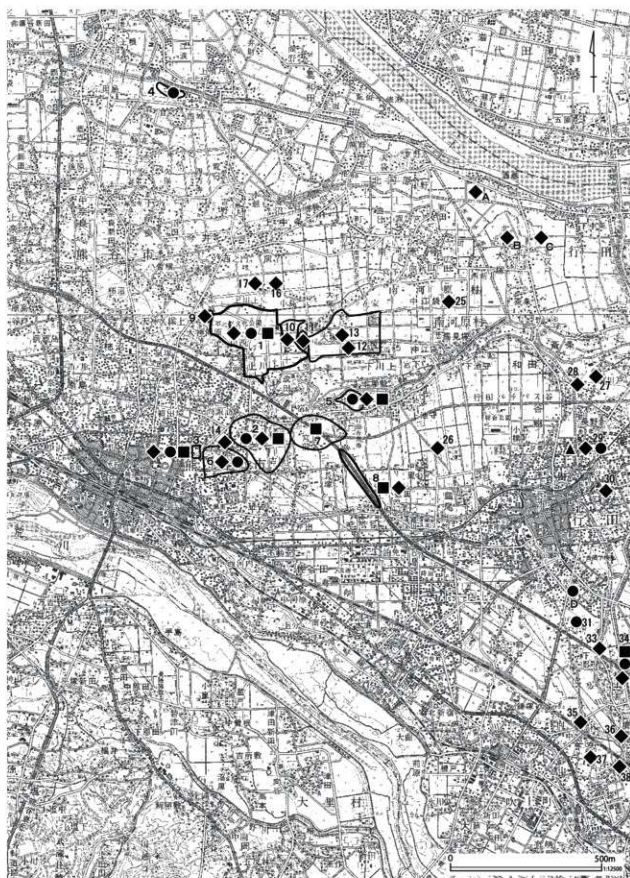
東方遺跡に隣接する西別府祭祀遺跡は、湧泉に対する祭祀遺跡である。7世紀代では、人形・馬形・櫛(横櫛)形・勾玉形・剣形などを模した石製模造品を用いた祭祀が行われていた。8世紀以降になると、石製模造品に替わって坏・埴・皿といった土器を用いて祭祀が行われるようになり、幡羅郡家に関わる祭祀場として機能したと思われる。

北島遺跡周辺では、光屋敷遺跡(18)・中条遺跡群などが姿を消し、北島遺跡をはじめとして、前中西遺跡・中島遺跡・肥塚中島遺跡(19)などで集落が継続的に営まれている。

これらの遺跡群の東側になる小敷田遺跡からは、著名な公出挙を示す木簡が出土している。池上遺跡からは整然と配置された掘立柱建物群とともに、北島遺跡と並んで多量の墨書土器が出土しており、両遺跡付近を郡家とする説もある(宮瀧2002)。

加須低地には、古墳時代から継続する北大竹、高畑遺跡・小針遺跡・馬場裏遺跡・築道下遺跡が古代にも継続して分布している。

堅穴建物跡789軒、掘立柱建物跡146棟が調査された築道下遺跡は、北島遺跡と並ぶ県内屈指の集落遺跡である。幅の狭い自然堤防上に著しい重



第4図 周辺の遺跡（旧石器～古墳時代）

（▲旧石器 ●縄文 ■弥生 ◆古墳）

複関係をもって造営され続けた様相は、この遺跡が地域にとっていかに重要な位置にあったのかよく示している。小針遺跡からは掘立柱建物跡十数棟とともに、「丈部島麻呂」の銘のある紡錘車や円面硯が出土している。

北島遺跡とその周辺、小敷田遺跡から築道下遺跡にかけては、元荒川と当時複雑に流路を変えていた利根川が最も隣接する箇所である。幡羅郡と埼玉郡が接する北島遺跡周辺は、河川交通の上からも、両郡にとって重要な地域であったと推定される。

7世紀後半から8世紀にかけては、畿内と地方とを結ぶ官道が整備された時期でもある。埼玉県を南北に縦断する東山道武蔵路も例外ではない。推定ルートは、北島遺跡の西側を通過し、河川交通と合わせて北島遺跡周辺の隆盛を支える一つの要因と考えられる。

(6) 古代

8世紀になると妻沼低地では、熊谷市別府条里・中条条里(12)・行田市南河原条里(25)・道ヶ谷戸条里など、武蔵国最大の条里地帯が形成される。北島遺跡でも第17地点及び第18地点で条里跡が発見されている。こうした広大で肥沃な水田域も北島遺跡周辺の隆盛を支えたと考えられる。

7世紀後半に、新たに開始した各集落は、9世紀後半に再編され、遺跡の数や規模が縮小していく。櫛挽台地の突端では、樋の上遺跡、在家遺跡、上辻遺跡、下辻遺跡が終焉を迎え、幡羅遺跡のみが継続する。

熊谷扇状地の扇端部でも、前代から継続して集落が営まれていた前中西遺跡・中島遺跡・肥塚中島遺跡などが姿を消す。

一方、諏訪木遺跡では、古墳時代後期～平安時代の遺物を多量に含む河川跡が発見された。古墳時代の白玉、石製模造品、勾玉・切子玉などの玉類、須恵器・土師器などの土器類、馬の頭骨、木製品などの祭祀具とともに、7世紀から平安時代

の律令祭祀に関わる遺物が出土している。その中には斎串・人形や馬形といった形代の木製品等祭祀遺物がある。斎串・人形・馬形は7世紀以降出現した形代といわれ、県内での類例はほとんどない。奈良・平安時代、「祓え」に関わる河川祭祀が執り行われていたと推定されている。

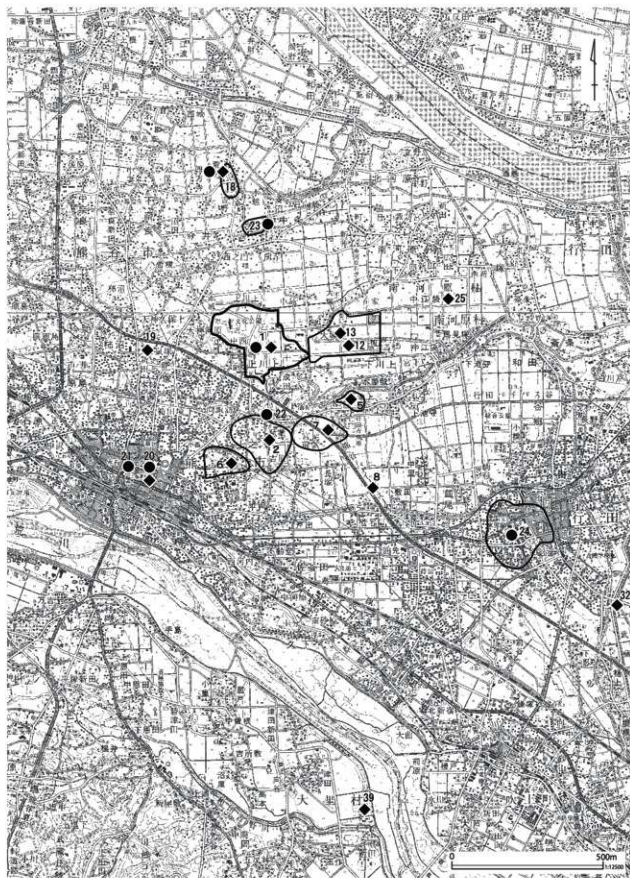
諏訪木遺跡は、7～8世紀代はまだ集落が形成されていなかったが、9世紀前半から突如として溝で区画された区域に掘立柱建物が建ち並び、10世紀後半まで継続する。3棟の四面廂建物を中心として合計31棟もの掘立柱建物が、中央に広場の空間を形成しながら計画的に配置されている。また、多数の灰釉陶器・緑釉陶器・皇朝十二銭の一つである「長年大寶」が出土している。こうした点から、官衙に関わる集落であると考えられている(熊谷市教委編2005)。その内容からも、北島遺跡とともに、地域の中核となる遺跡と考えられる。ただし、幡羅郡なのか、大里郡、あるいは埼玉郡なのか、帰属する郡は不明確である。

池上遺跡では、新たにこの時期の掘立柱建物跡群が確認されている。

古宮遺跡では9世紀代を中心に、竪穴建物跡90軒余りが調査されている。

また、北島遺跡北側に隣接する女塚遺跡からは、「大倉寺」と記された墨書土器が出土した。女塚遺跡は区画溝内区から掘立柱建物跡・住居跡が計画的に配置され、村落内寺院と考えられる。北島遺跡で居館が機能していた9世紀後半から末葉の段階に属することから、居館と関連する仏教施設の可能性もある。

一方、加須低地には、埼玉古墳群の浅間塚古墳の墳頂に延喜式内社に比定されている前玉神社があり、その南側から区画溝の可能性のある溝跡が検出されている。周辺の埋没台地上には古墳時代からの継続的な集落の陣場遺跡や小針遺跡、9世紀後半から10世紀初頭を中心とする原遺跡、8世紀後半から9世紀前半の野合遺跡(32)が知ら



第5図 周辺の遺跡（古代～中近世）
 (◆ 古代 ● 中・近世)

れている

分布図の東側には大同年間(806～809)に創建されたと伝えられる盛徳寺があり、奈良時代末から鎌倉時代の瓦が採集されている(行田市1975)。

また、荒川右岸の下田町遺跡では、8世紀に集落が急速に縮小するが、総漆塗りの木製壺甕が出土するなど官人との密接な関係も想定される。

他にも熊谷市街の宮町遺跡(20)からは、平安時代の四面廂付建物、完形の坏類を一括廃棄した土城、「上家」「楊井」の墨書土器が出土し、隣接する延喜式内社の高城神社との関わりが想定されている。

10世紀後半には集落の縮小傾向が顕著なものとなり、掘立柱建物は激減し、住居のみの小規模な集落が点在する程度となる。

(7) 中世

遺跡の減少傾向は、12世紀まで続き、再び遺跡数が増加するようになるのは13世紀以降のことである。この間、天仁元年(1108)に浅間山が噴火し、上野と武蔵の両国には、大量の火山灰が降り注いだ。この火山灰は多くの田畠を覆い、甚大な被害をもたらした。12世紀における遺跡の減少に拍車をかけた。

北島遺跡では、12世紀後半～13世紀と思われる渥美焼や常滑焼が、「コ」の字状に屈曲する二重溝から発見された。在地領主(武士)の屋敷或いは、館跡の区画溝となる可能性はあるが、現状では明確ではない。古代の拠点集落を背景に成長した在地領主との関わりが、将来的に明らかになることを期待したい。周辺には諏訪木遺跡、飯塚北遺跡、下田町遺跡等、古代の拠点集落から発展した12世紀～13世紀の中世館跡が発見されている。飯塚北遺跡は長井斎藤氏、諏訪木遺跡は成田氏、中条氏関連遺跡群は中条氏というように、武士層に関連する遺跡ではないかとの指摘がある(浅野2015)。また、下田町遺跡・諏訪木遺跡・

北島遺跡・中条館跡は、南から北へほぼ一直線上に並び、古代の街道によって繋がっていた可能性が想定されている。北島遺跡第19地点で南に屈曲することが確認された道路跡は、諏訪木遺跡に延びていたのかもしれない。

中条氏館跡は、熊谷扇状地の扇端部外側の自然堤防上に立地し、中条氏に所縁の常光院を中心として広がっている。中条氏館跡は、中条家長(1165～1236)の館で、12世紀後半に建立されたといわれている。常光院は、祖父である常光の菩提を弔うため、建久3年(1192)に家長によって、館内に建立されたのが始まりと伝えられている。

常光院東遺跡・権現山遺跡などからは、13世紀から14世紀のかわかけなどが出土している。

光屋敷遺跡(18)には、中条常光の館跡があったと考えられている。北島遺跡の南には成田氏館跡(22)と、菩提寺である龍潭寺がある。龍潭寺は、応永18年(1411)、成田左京亮家時が和庵清順を招聘して開山したとされている。15世紀後半以降、成田氏は居館を現在の行田市の忍城(24)に移す。忍城は「忍の浮城」という異名をもつように周囲を河川・沼沢に囲われている。天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原征伐に伴い、石田三成を総大将とする豊臣方によって、城の北側を流れる利根川を利用した水攻めを受けるも、落城しなかった。その際、豊臣方によって築堤された総延長28kmに及ぶ石田堤(36)は、行田市から鴻巣市にかけてその一部が残存している。

熊谷氏館跡(21)は、現在の熊谷寺の地に位置していたといわれており、熊谷寺は、熊谷直実(1141～1208)が建立した庵の跡地に建てられたと伝えられている。

熊谷氏館跡の東側には、宮町遺跡が隣接し、調査区の西側に集中する7条の溝跡が確認された。東側には中世の遺構が存在せず、溝跡は調査区の西側に続くことから、隣接する熊谷氏館跡との関連が想定されている。

(8) 近世

近世において、熊谷一帯は、中山道の重要な宿駅として発展していった。熊谷宿は現在の熊谷市中央部に位置し、宿を中心に中山道から熊谷秩父道・熊谷大田道・行田道・熊谷川越道などが分岐する交通の要衝であった。

熊谷宿及び北島遺跡の所在する上川上は忍領に

属していた。

熊谷市内には、多くの用水路がかつては存在していた。特に、慶長7年(1602)から伊奈忠次によって設置された荒川六堰は、市域に所在した村々の貴重な水源になった。北島遺跡周辺はその供給を受け、広大な水田が広がっていたと考えられる。

第1表 遺跡地図に掲載した遺跡の一覧

1 北島遺跡	10 田谷遺跡	19 肥塚中島遺跡	28 柳坪遺跡	36 石田堤遺跡
2 諏訪木遺跡	11 天神東遺跡	20 宮町遺跡	29 馬場裏遺跡	37 宝養寺古墳
3 中西遺跡	12 中条条里遺跡	21 熊谷氏館跡	30 林遺跡	38 袋・台遺跡
4 西城切通遺跡	13 東沢遺跡	22 成田氏館跡	31 高畑遺跡	39 下田町遺跡
5 古宮遺跡	14 藤之宮遺跡	23 中条氏館跡	32 野合遺跡	A 酒巻古墳群
6 前中西遺跡	15 瀬戸山遺跡	24 忍城	33 武良内遺跡	B 大塚古墳群
7 池上遺跡	16 錦塚古墳	25 南河原条里遺跡	(鴻池遺跡)	C 斎条古墳群
8 小敷田遺跡	17 女塚1号墳	26 池守遺跡	34 陣場遺跡	D 佐間古墳群
9 天神遺跡	18 光屋敷遺跡	27 文殊前遺跡	35 愛宕神社古墳	(諏訪山遺跡)

III 遺跡の概要

1. 北島遺跡の概要

北島遺跡は、荒川によって形成された自然堤防上に立地し、熊谷扇状地の扇端部と妻沼低地との境界付近に位置している。

北島遺跡は、昭和60年(1985)熊谷スポーツ文化公園建設と埼玉博覧会開催に伴う発掘調査を嚆矢とし、以来30年以上もの間、埼玉国体等各種の開発事業に伴い、断続的に発掘調査が実施されてきた。その結果、縄文時代晩期から近世に至るまでの膨大な量の各種遺構・遺物が検出されている。

なお、北島遺跡では当事業団の調査区を地点名で呼んでいたが、市教育委員会の調査と合わせた回数との混同を避けるため、第25次調査から回数による呼称へ変更した。

縄文時代晩期は遺物のみが検出され、第14地点及び第15地点で晩期終末の浮線文土器が出土している。

弥生時代の遺構は、第14地点～第17地点・第19地点に集中している。また第4地点からは前期末葉～中期初頭と思われる再葬墓が確認されている。

第17地点・第19地点では関東地方で最古級の水田跡が、いわゆる合掌造りの堰跡から分水路用水路跡を伴って検出されている。第19地点の集落跡・土壇墓群と合わせて、関東地方における初期農耕集落の様相を具体的に示すものである。古墳時代の遺構は、第12地点・第14地点～第17地点・第19地点・第20地点と、遺跡の東側にまとまっている。

第19地点の古墳時代前期の集落は、幅3m前後の「方形環濠」によって区画されている。この環濠は集落の成立段階から存在し、住居域と墓域を明瞭に区別する計画的な集落形成が窺える。溝の東側クランク部分付近からは加工された木材が

大量に出土し、区画内への進入路となる木橋の存在を想起させるが、柵列や門などの痕跡は明確ではない。この方形環濠の北側には方形周溝墓群が展開し、集落と墓域の全体の様相が明らかになっている。

第19地点からは、古墳時代後期の円墳2基が検出されており、墳丘は削平されているものの、人物埴輪、馬形埴輪等多くの埴輪が出土した。

古代の遺構は、遺跡の全面に広がっており、埋没河川と集落域との関係によって集落の変遷を窺い知ることができる。北島遺跡は、時代によって盛衰はあるものの、7世紀後半から11世紀まで古代の全期間を通じて継続して集落が営まれている。

7世紀後半になると、それまで住居で構成されていた集落に、4×2間や2×2間の掘立柱建物群が出現し、集落の規模も拡大する。さらに8世紀では、掘立柱建物が増加すると共に、掘立柱建物の配置に規則性が見られるようになる。約400m南に位置する諏訪木遺跡とともに中核的な集落として機能していた可能性が高い。

特に第19地点では、奈良時代には区画溝によって区画された倉庫と居住施設が、平安時代には築地塀によって区画された5間の四面廂建物が建てられ、大量に出土した灰釉陶器・緑釉陶器とともに郡司層が関わる居宅であったと推定される。

さらに、東側の古墳群中の第2号墳では土壇墓が1基確認されている。墓底面の北側でヒトの骨片と歯がまとめて発見され、西壁際からは山吹双鳥鏡と短刀片も出土している。鏡は、その特徴から、平安時代後期の12世紀中頃の製作とされているが土壇墓の造営年代については、和鏡を副葬する土壇墓が流行した平安時代後期から鎌倉時代初期と幅をもたせるのが妥当とされている。土

墳墓は、墳丘を意識して選地が行われたと考えられる。

また、広大な遺跡内ではこれまでに8条の道路跡が検出されている。特に第19地点で検出された第4号道路跡は6m幅で、波板状の凹凸面が認められた。この道路跡は北西から南東方向に延び、調査区の南端付近で南にほぼ直角に曲がっていた。東山道武蔵路との具体的な関係は不明だが、前述の築地塀を伴う四面廂建物と合わせて、北島遺跡と古代の道路交通との関係を具体的に示す遺構として評価できる。さらに言えば、今回報告する第26・27次調査区から発見された第101号道路跡は東側に辿ると、第19地点4号道路跡に連続する可能性が非常に高く、直線道路がさらに西側に続くものと推定される。

中世・近世の遺構は、第19地点で検出された。第200号溝跡からは、近世の灰桶の痕跡が確認された。この溝跡は東西に走り、上川上村の用水路、松川堀を介して、上中条・大塚村方面へ流れていたと推定されている。この灰桶からは、天保通寶や嘉永3年(1850)の護摩札が出土した。この護摩札には、「醫王薬師」という墨書があり、北島遺跡から西に500m程に位置していた上川上村の醫王寺とも考えられる。現在は廃寺になっているものの、醫王寺には薬師堂があり、薬師如来が本尊だったという。

既に調査を行った各地点の概要は、次のとおりである(第6・7図、第2表)。

第1地点 熊谷スポーツ文化公園内のラグビー場(Aグラウンド)建設に伴い調査を実施した。遺跡西方に位置する。

遺構の大半は、調査区の西半分から検出された。8～10世紀前半までの堅穴住居跡21軒と掘立柱建物跡9棟、井戸跡5基などから構成された集落である。東半では、溝跡群と浅間B軽石層によって覆われた平安時代の水田跡が確認されている。溝の一部には溜池状の施設が見つかっている。

第2地点 スポーツ文化公園内のソフトボール場建設に伴う調査である。遺跡中央西寄りに位置する。堅穴住居跡9軒、掘立柱建物跡13棟、井戸跡2基などが、狭い調査区から検出された。遺構の密集度は高い。

特筆すべきは9世紀前半から中頃の大型の掘立柱建物跡(8×2間、二面廂)と大型堅穴住居跡(12.5m×9.5m)がセットで検出されたことである。両遺構は軸を揃えて並んだ状態で位置し、遺跡の西半部の中心的建物群と推定される。

第3地点 スポーツ文化公園内の道路建設に伴う調査である。第2地点の南側に位置する。堅穴住居跡54軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡9基などが検出された。遺構は調査区全面に展開し、7～9世紀の堅穴住居跡がある。東側で多い傾向にある。ほかに、中世の溝跡や水田跡にかかる溝跡も確認されている。

第4地点 スポーツ文化公園内の道路建設に伴う調査である。第3地点の西側、第1地点の南側に位置する。堅穴住居跡が45軒、掘立柱建物跡7棟、井戸跡3基、土壇17基等が検出された。

調査区の東半では、7～9世紀の堅穴住居跡と掘立柱建物跡が、第3地点から続いている。西半では、浅間B軽石層で覆われた平安時代の水田跡が第1地点から続き、生産域として土地利用されている。

住居跡は古墳時代中期と泉期後半に属するものが1軒含まれている。そのほかは7世紀前半～8世紀前半が主体を占め、10世紀前半～中頃まで集落として営まれていた。第10号土壇は土壇墓と考えられ、土師器坏、須恵器坏・長頸瓶、灰釉陶器高台碗が副葬されていた。区画施設は伴っていないが、今回報告の円形区画墓主体部とはほぼ同一形態の木棺墓と推定される。

第5地点 さいたま博覧会シンボルタワーの建設に伴う円形の調査区である。第1地点と第2地点との間に位置し、第25次調査区が西側に隣接す

る。住居跡37軒、掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基などが検出された。

住居跡は古墳時代前期が1軒ある。それ以外は7～9世紀に属し、7世紀前半～8世紀初頭頃のもの为主体を占める。遺構の密集度は極めて高い。調査区の北側からは、東西に延びる2条の平行した溝跡が確認され、第25～27次調査で検出された第3・6号溝跡の延長部と考えられる。

第6地点 スポーツ文化公園内の道路建設に伴う調査である。第1地点の西側、北島遺跡の西端部に位置する。

調査区全面から7～9世紀の集落跡が検出されている。第6地点の西側には天神遺跡が位置する。天神遺跡東側と第6地点の間は礫層が広がり、河川跡と考えられている。ほぼ集落域の限界を形成するものであろう。検出された遺構は住居跡29軒、掘立柱建物跡6棟、井戸跡5基、墓壇1基などである。7世紀～9世紀後半の集落と考えられ、7世紀後半～8世紀代を主体とするようである。須恵器甕を蔵骨器とした火葬墓跡が検出されている。

第7地点 スポーツ文化公園内の調節池建設に伴う調査である。遺跡の中央付近、第2地点の南方に位置する。住居跡4軒、掘立柱建物跡15棟などが検出された。地形は北側が高く、南東に向かって傾斜していた。南端部は急激に落ち込み、河川流路に移行するようである。

調査区の北半では、住居跡と掘立柱建物跡を中心とする集落が展開し、小規模な堅穴住居跡群とピット群が併存している。時期的には7世紀前半～9世紀にかけて営まれた集落で、河川流路から大量の土師器坏類を中心とした土器が出土した。土器の主体は7世紀前半～8世紀初頭頃である。坏類を中心とした大量の土器の出土が河川祭祀の表れなのか検討を要する問題であろう。

第8地点 水路建設に伴う調査である。遺跡の中央、第2地点の東側に位置する。

河川跡に向かう傾斜部に当たり、堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟などが検出された。遺構密度は低い。8世紀前半と9世紀前半の堅穴住居跡から構成される。

第9地点 水路建設に伴う調査である。遺跡の東側に位置する。

多数の溝跡のほか、7世紀と9世紀後半頃の堅穴住居跡、掘立柱建物跡が少数ながら検出されている。また、中世の井戸跡からは常滑焼の甕と弥生時代の甕が出土した。

第10地点 スポーツ文化公園内の調節池建設に伴う調査である。北島遺跡の中では東南部、第9地点の南側に位置する。条里地割に関わると推測される古代の大型溝跡が検出されている。調査区の南側では、3×2間程度の小規模な掘立柱建物跡群が数棟、「コ」の字状に配置されている。時期は9世紀を主体とするようである。

第11地点 水路建設に伴う調査である。第10地点の南側、北島遺跡最南端に位置する。南北方向の狭長な調査区で、複数の溝跡群と土壌が検出されたが、住居跡はなく、居住域からは外れるようである。

第12地点 第11地点同様水路建設に伴う調査である。遺跡の東側に当たり、第11地点の北側延長上、第19地点の西側に沿った箇所位置する。第19地点から連続する弥生時代中期の土器、古墳時代前期・8～10世紀の堅穴住居跡・区画溝・土壌群が調査されている。推定直径5mほどの円形周溝状遺構が検出されているが、時期は特定できない。

第13地点 水路建設に伴う調査である。遺跡の南東部に当たり、第10地点の南側、第16地点の北側に位置する。東西に延びる細長い調査区である。

第10地点から広がる8世紀後半から9世紀前半の掘立柱建物跡群と墓壇群、幅6mの大溝跡が検出され、10世紀前半頃の遺物が多量に検出さ

れた。第14地点に続く河川跡が検出されている。
第14地点 上之調節池建設に伴う調査である。遺跡最南端の調査区の一つである。

縄文時代晩期終末の浮線網状文、弥生時代中期初頭の再葬墓、8世紀後半～10世紀前半の竪穴住居跡と掘立柱建物跡・溝跡が多く検出されている。住居跡と掘立柱建物跡はそれぞれ一定区画にまとまる傾向があり、宅地として固定化するようにも見える。また、南北方向に延びる道路跡が検出されている。側溝の有無は判然としないが、波板状土痕が認められている。見ようによっては第65・68号溝跡を側溝と考えることも可能かもしれない。

第1号溝跡からは10世紀代の多量の坏類と青銅製八稜鏡が出土している。この大溝跡は北上して第16地点西側を経由して第13地点の大溝跡に連続すると思われる。

第15地点 上之調節池建設に伴う調査である。遺跡の南側に当たり、第14地点の西側に隣接する。調査区南半では、8世紀～9世紀の掘立柱建物跡・竪穴住居跡群が、ほぼ同一地点で軸を揃えて建て替えた様子が見てとれる。道路跡は掘立柱建物跡と大溝を迂回するかのようになり、直角に屈曲し、西に延びている。いわゆる波板状土痕を伴っている。一方、北半では、やや疎らではあるものの、同時期の竪穴住居跡群が認められる。

第16地点 上之調節池建設に伴う調査である。遺跡の南側に当たり、第13地点と第14地点に隣接する。

8世紀後半～9世紀の小規模な竪穴住居跡と掘立柱建物跡、9～10世紀の多数の溝跡群が検出されている。

第17地点 スポーツ文化公園のメインスタジアム建設に伴う調査である。第10地点の東側に位置する。

第19地点から延びる用水路から取水した、弥生時代中期の水田跡、古墳時代前期の竪穴住居跡

と水田跡・畠跡、河川と堰跡、8・9世紀の大型掘立柱建物跡を伴う集落跡が重層的に検出されている。

第18地点 スポーツ文化公園の調節池建設に伴う調査である。遺跡の南東側に当たり、第17地点の南東側に位置する。

調査区全面から浅間B軽石に覆われた水田跡が検出されている。また、東側は、堆積層の状況から近世には大きな河川あるいは沼地であったと推定されている。

第19地点 スポーツ文化公園の屋内競技場建設に伴う調査である。遺跡の東側に当たり、第12地点の東側に隣接する。

弥生時代中期後半の集落跡、古墳時代前期の集落跡・墓域、古墳時代後期の古墳跡、古代の集落跡、中・近世の数多くの遺構が検出されている。弥生時代から平安時代まで、調査区の北側を東流する河川から合掌型の堰によって分水された用水が、南北に調査区を貫いて第17地点の水田に供給されている。

第19地点では古墳時代後期から集落が確認できるが、9世紀前半になると、一辺90mの方形溝で区画された「居宅」が成立する。それに伴い、それ以前の建物は撤去されたようである。東辺には、四脚門が設置され、内部には5×2間四面廂の主屋が設けられ、100年間維持されたこととされている。官衙というよりも有力豪族の居宅と推定されている。

古代の道路跡は5条検出され、西に辿ると第26・27次南サイドスタンドで検出された道路跡に連続するようである。

第20地点 スポーツ文化公園の外周道路建設に伴う調査である。遺跡の東側に当たる。第19地点の北側に位置する。西側からは第19地点に続く河川跡が検出されている。

古墳時代前期の集落跡・畠跡、8・9世紀の集落跡が調査されている。

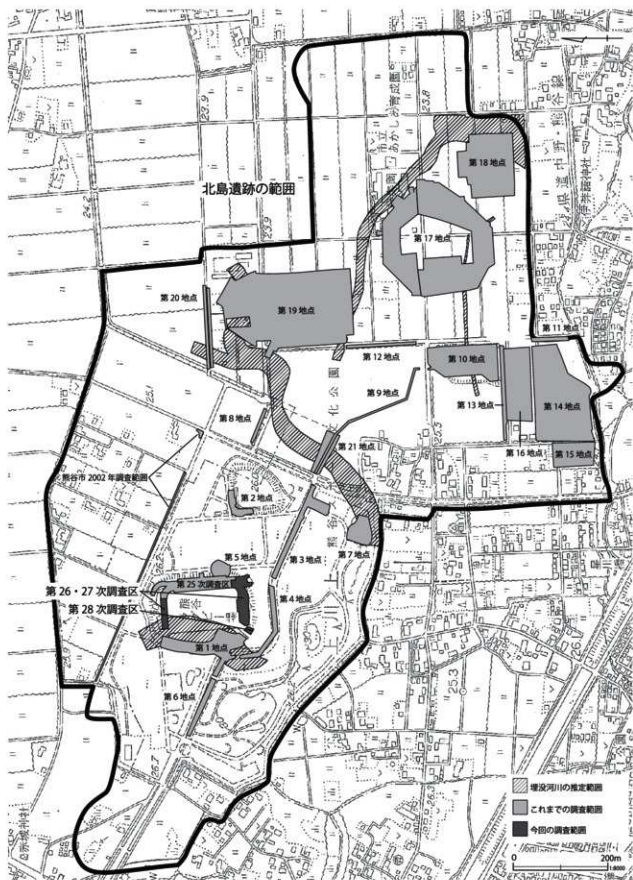
第2表 これまでの北島遺跡の調査概要

地点名	調査面積	竪穴 住居跡	竪立柱 建物跡	井戸跡	土 壇	溝 跡	櫓 列	道路跡	水田跡	その他	文 献
第1地点	5,800	21	9	5	24	17			○		i
第2地点	1,300	9	13	2	13	24					i
第3地点	2,900	54	1	9	34	65					i
第4地点	1,800	45	7	3	17	17					i
第5地点	1,600	37	2	2	44	25					i
第6地点	1,000	29	6	5	38	14				火葬墓1	i
第7地点	2,200	4	15	1	18	20					i
第8地点	300	2	3		4	3					i
第9地点	900	4	1	1	7	35					ii
第10地点	10,000	2	8		15	35				火葬墓(?) 1 火葬墓1	ii
第11地点	150				7	15					ii
第12地点	1,250	21	2	2	114	30				円形周溝状遺構1	iii
第13地点	1,400	0	3	1	19	31					iii
第14地点	19,100	72	43	15	78	102	6	1		再葬墓1	iv
第15地点	4,200	34	9		28	29		1	○		iv
第16地点	8,480	11	15	20	48	119	2		○		iv
第17地点	10,000	20	6		114	4	1		○	河川跡1 竪穴状遺構42	vii xi xii
第18地点	13,000					5			○		xii
第19地点	10,000	423	78	95	790	537		5	○	※	v vi vii ix x xi xiii
第20地点	1,780	45	4	1	21	44			○	島跡1 河川跡1	vii
第21地点	2,250	4			30	35				島跡1 河川跡1	xi
第25次	4,480	81	5	6	67	63				円形周溝状遺構2 島跡7	xiv
第26・27次	2,890	48	7	7	43	36		1		※※墓跡4 島跡4	xv
第28次	100				6	5				島跡1	xv
熊谷市 (22～24次)	1,175	16		1	16	56				竪穴1 島跡3	xvi
合計	108,055	982	237	176	1595	1366	9	8			

※ 地鎮跡1 古墳跡8 水路1 堀跡4 河川跡 集石遺構1 木器集積遺構1 木棺墓1 方形周溝墓27

※※ 円形区画墓1 土壇墓2 火葬墓(蔵骨器) 1

i	『北島遺跡』	1989	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集
ii	『北島遺跡II』	1989	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集
iii	『北島遺跡III』	1991	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集
iv	『北島遺跡IV』	1998	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集
v	『北島遺跡V』	2002	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第260集
vi	『北島遺跡VI』	2003	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
vii	『北島遺跡VII』	2004	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第291集
viii	『北島遺跡VIII/田谷』	2004	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集
ix	『北島遺跡IX』	2004	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第293集
x	『北島遺跡X』	2005	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第302集
xi	『北島遺跡XI』	2005	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第303集
xii	『北島遺跡XII』	2005	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第304集
xiii	『北島遺跡XIII』	2005	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第305集
xiv	『北島遺跡XIV』	2018	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第446集
xv	『北島遺跡XV』	2019	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第453集(本書)
xvi	『北島遺跡』	2002	埼玉県熊谷市教育委員会



第6図 北島遺跡のこれまでの調査地点

第21地点 スポーツ文化公園のオーバープリッジ建設に伴う発掘調査である。遺跡の中心付近に当たる。第3地点の東側に位置し、中央を第9地点が横断している。

調査区の中央には第7地点に続く河川跡が南北方向に認められ、両岸に古墳時代前期から8・9世紀の集落跡、畠跡が検出されている。

第25次調査 ラグビーワールドカップ2019に伴う会場整備に伴って調査された。新メインスタンド部分に相当し、第1地点の東側、第5地点の西側に位置する。

古墳時代中期から平安時代の集落跡で、81軒の住居跡など多数の遺構が検出された。集落の一角から多数の土器を投棄した「遺物集中区」が発見された。古墳時代後期から平安時代まで維持されたようで、長期にわたって行われた祭祀行為が想定される。

第26・27次調査 第25次調査同様ラグビーワールドカップ2019会場整備に伴って調査が実施された。北サイドスタンド・南サイドスタンドと大階段部分に相当する。南サイドスタンドと大階段は第25次調査区（新メインスタンド）とほぼ同様に古墳時代後期から平安時代の集落が濃密に分布していた。

南サイドスタンド西端から1軒のみ古墳時代前期の住居跡が発見されている。南サイドスタンドからは円形の区画溝を伴う平安時代の木棺墓（円形区画墓と仮称）が検出され、灰軸陶器長頸瓶や碗皿類など豊富な副葬品が伴っていた。類例に乏

しい墓跡である。

南サイドスタンドでは平安時代の両側側溝を伴う幅6mの道路跡が検出された。いわゆる波板状圧痕を伴うもので、第19地点で検出された道路跡の延長部と見做され、遺跡内で直角に曲がるメインストリートと考えられる。

北サイドスタンドからは住居跡は検出されず、畠跡や溝跡、井戸跡が発見された。集落域よりも生産域としての性格が強い。西端部は傾斜しており、河川跡に繋がると考えられる。

第28次調査 第26次・27次調査と並行して実施された。南サイドスタンド西南側に設置する照明灯建設に伴う調査である。

7世紀後半と思われる土壌や畠跡、ピットと時期不明の溝跡が発見された。集落域からは外れ、生産域に移行することが判明した。

熊谷市教育委員会による発掘調査 市教育委員会による調査は、スポーツ文化公園の北側にある道路整備に伴うものである。回数としては第22～24次（地点）に当たる。調査区は、第20地点の西側及び第1地点・第5地点の北側に位置し、Ⅰ～Ⅷ地点に分かれる。古墳時代前期、古代の堅穴住居跡・畠跡などが検出されている。

これまでに当事業団と熊谷市教育委員会によって発掘調査された遺構の総数は、堅穴住居跡982軒、掘立柱建物跡237棟、井戸跡176基、土壌1,595基、溝跡1,366条、柵列9条、道路跡8条などである。県内最大級の複合遺跡と考えられる。

2. 第26～28次調査の概要

本報告に関わる調査地点は、熊谷スポーツ文化公園ラグビー場Aグラウンドのラグビーワールドカップ開催に伴う改修工事によるもので、北サイドスタンド、南サイドスタンドと大階段、照明灯建設場所である。調査面積は2,990㎡である。

北サイドスタンド・南サイドスタンド・大階段は第26・27次調査、照明灯調査区は第28次調査になる。第25次調査はラグビーワールドカップ開催に伴う改修工事の一環として実施された新メインスタンド建設によるもので、事業団報告書第446集『北島遺跡XIV』として報告済みである。現行ラグビー場メインスタンドは、昭和60年(1985)、最初に北島遺跡の調査が行われた第1地点に相当する(第6・7図)。

第26・27次調査区内の基本土層(第13図)は、Ⅰ：灰色土、Ⅱ：灰色土・褐灰色土、Ⅲ：黒褐色土、Ⅳ：褐灰色土、Ⅴ：褐灰色土・にぶい黄褐色土、Ⅵ：灰白色土、Ⅶ：褐灰色土、Ⅷ：褐灰色土、Ⅸ：褐灰色土、Ⅹ：褐灰色土、Ⅺ：にぶい黄褐色土で構成されていた。

第1層には天明三年(1783)に浅間山が噴火した浅間A火山灰(As-A)が多量に含まれている。第2層と第3層には天仁元年(1108)に噴火した浅間山火山灰(As-B)が含まれており、それぞれを鍵層として、調査に臨んだ。

第Ⅲ層上面が近世の確認面、第Ⅳ層が古代(奈良・平安時代)の確認面、第Ⅴ層が古墳時代の確認面となるが、古墳時代から古代の遺構は連続して営まれており、遺構確認時に明瞭に分層することは難しかった。

標高は25～26mであるが、調査区内は盛土や公園整備などで、改変を受けており、当時の微地形を窺うのは難しい。遺構確認面の標高は23.6～24.3mで、平坦な地形が展開する。全体的には、西から東に向かって緩やかに傾斜している。北サイドスタンドでは、その西側に河川跡が想定され、

調査区西半部は西に向かって傾斜している。第25次調査区(新メインスタンド)南半から南サイドスタンド北東部は、微高地を利用して集落域に選択されており、住居跡が激しく重複していた。

第25次調査区(新メインスタンド)中央から北半と北サイドスタンド東半にかけては、やや北に向かって傾斜している。南サイドスタンド西域から第28次調査区は、居住域としてよりも、畠(生産域)として主に土地利用されていたようである。

第26～28次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡48軒、掘立柱建物跡7(2)棟、井戸跡7基、土壇49基、溝跡41条、道路跡1条、畠跡5箇所、墓跡4基、河川跡1箇所、その他340基のビッドがある。

弥生時代の遺構はなく、中期末～後期の土器片が検出されたにとどまる。

古墳時代前期は住居跡が1軒検出された。

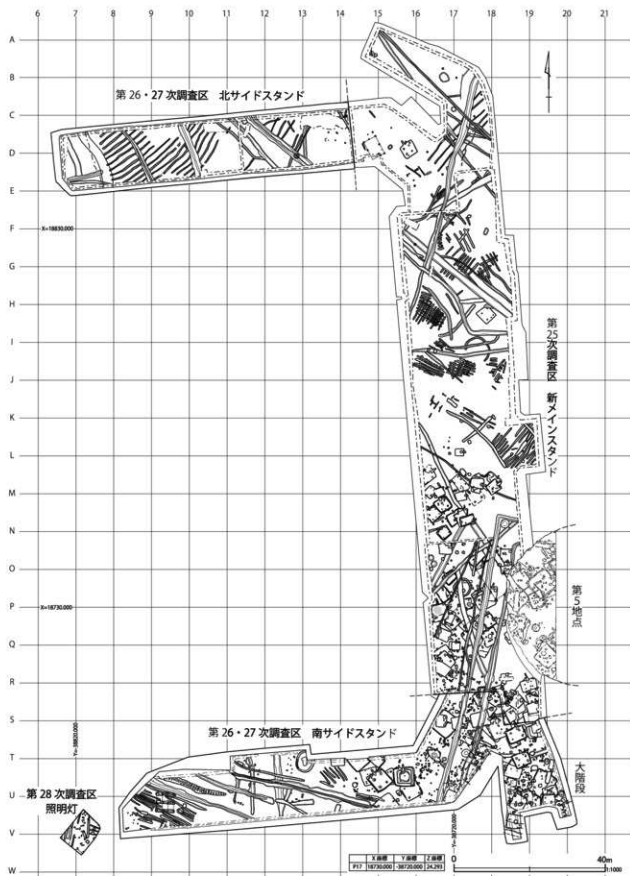
古墳時代後期は竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡3(2)棟、井戸跡3基、土壇20基、溝跡7条、畠跡3箇所、河川跡1箇所がある。

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡4棟、井戸跡4基、土壇27基、溝跡34(2)条、畠跡2箇所、墓跡4基、道路跡1条がある。その他に、時期不明の住居跡が2軒ある。

中・近世の遺構は土壇が2基検出された。

なお、括弧内の数字は第25次で調査したものと同一遺構の数を示す。遺構番号は南サイドスタンドと照明灯調査区は第101番以降、北サイドスタンドは第301番以降のナンバーを振っている。第25次調査(新メインスタンド)と同一遺構延長部は1～99までの遺構番号を踏襲した。

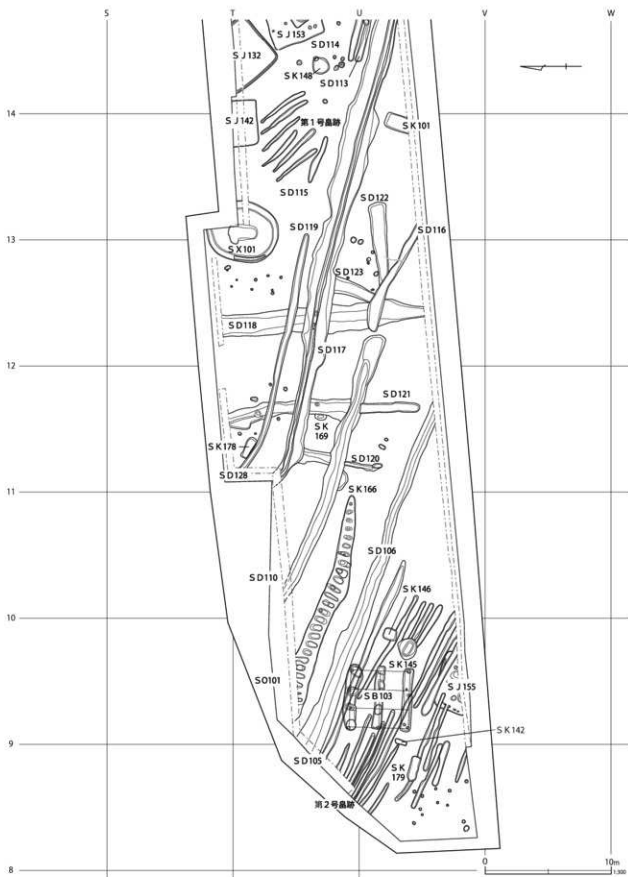
混乱を避けるため、基本的に調査時の遺構番号を可能な限り尊重した。欠番が多く生じたことはご容赦願いたい。第25～28次調査に掛かる遺構番号の変更については、巻末に新旧対照表を付した。



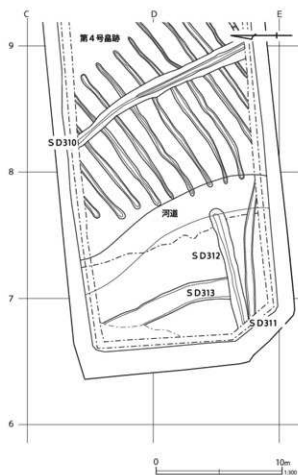
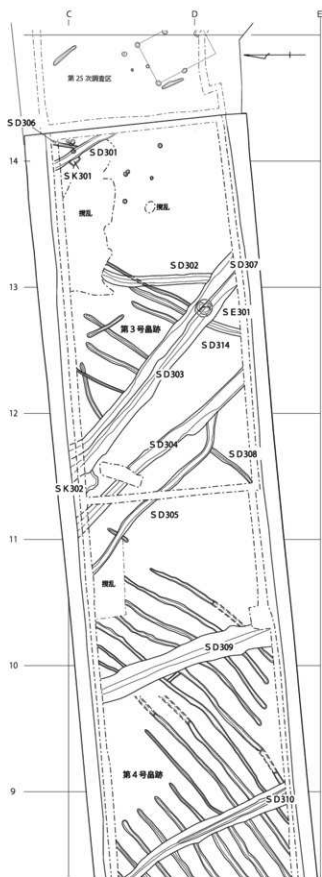
第8図 北島遺跡第26～28次全体図



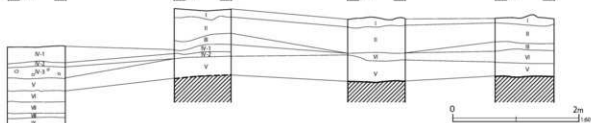
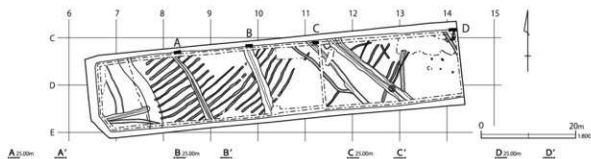
第9図 北島遺跡第26・27次全体図(1)



第10図 北島遺跡第26・27次全体図(2)



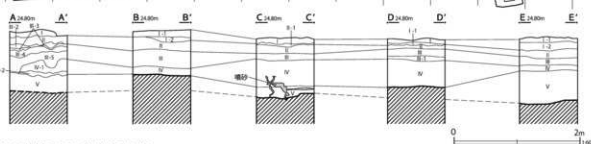
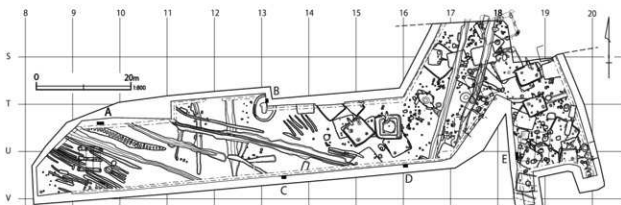
第11図 北島遺跡第26・27次全体図(3)



第26・27地点基本土層（北サイドスタンド）

- I 灰色土 全体に浅間A火山灰を多量含む しまり・粘性強
 II 褐灰色土 しまり良い 粘性弱 シルト層
 白色粒子（φ1mm程度）（浅間A軽石か）を多く含む
 （1層よりは少ない）
 III 黒褐色土 浅間Bを含む しまり・粘性強
 IV-1 褐灰色土 シルト しまりあり 粘性弱
 IV-2 褐灰色土 しまり良い 粘性強 粘土層
 IV-3 褐色土 所々に上層のV層が混じる
 V 褐色土 しまり悪い 粘性弱 砂礫層
 VI 灰白色土 しまり悪い 粘性弱 砂礫層
 VII 褐灰色土 しまり良い 粘性強 粘土層
 VIII 褐灰色土 しまり良い 粘性強 シルト層
 IX 褐灰色土 しまり良い 粘性強 粘土層
 X 褐灰色土 しまり悪い 粘性弱 シルト層
 XI にぶい黄褐色土 しまり悪い 粘性弱 砂礫層

- 砂礫が液状化現象で上がってきたものか
 しまり悪い 粘性弱 砂礫層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層
 しまり悪い 粘性弱 粘土層

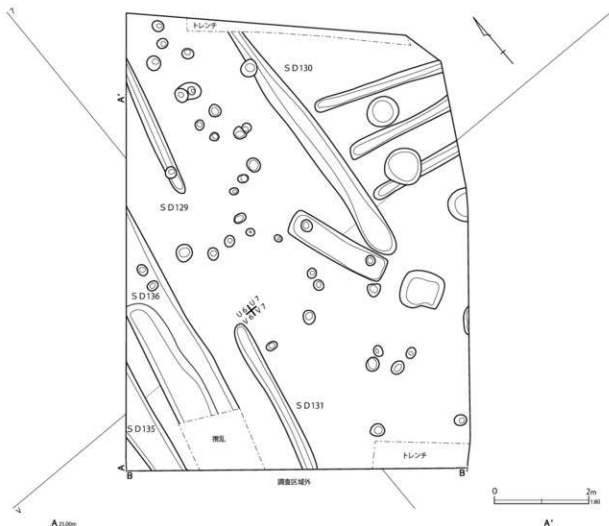


第26・27地点基本土層（南サイドスタンド）

- I 灰色土 全体に浅間A火山灰を多量含む しまり・粘性強
 I-1 褐灰色土 浅間A多量 層全体に散在する しまり強 粘性あり
 I-2 灰白色土 浅間A少量 層全体に散在するが下にやや多い しまり強 粘性あり
 II 灰白色土 鉄分含む 1層と2層の中間層 しまり・粘性強
 白色粒状物を含む（浅間Bか）
 II-1 II層に類似しているがII層よりやや青みが強い
 III 黒褐色土 浅間Bを含む しまり・粘性強
 III-1 黒褐色土 IV層ブロックを多量含む しまり・粘性強
 III-2 黒褐色土 粘性シルト 浅間B微量 黒色腐植質と白色粉状土の互層
 （ラミナ）を形成 しまり・粘性強

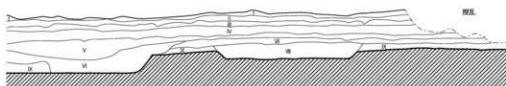
- III-3 浅間B火山灰層 砂粒状（φ1mm未満）とピンクの細粒混入
 III-4 灰褐色土 にくい黄褐色土粒（φ3～5mm）（III-5由来か）含む
 III-5 灰黄褐色土 シルト～部分的に砂質多量 層下部は砂質多くなる
 しまり強 粘性ややあり
 IV 褐灰色土 シルト しまりあり 粘性弱
 IV-1 灰黄色土 砂質 鉄分多量 しまりややあり 粘性なし
 IV-2 褐灰色土 砂質 細砂を主体とし、やや粘質土が混じる
 しまり・粘性ややあり
 V 褐灰色土 シルト質 砂多量に含む しまり・粘性弱

第13図 第26・27次調査区基本土層



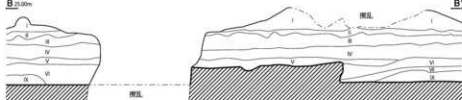
A' 20.00m

A'



B 20.00m

B'



基本土層

- I 褐灰色土 耕作土（表土） 粘性強 粒子粗い
- II 褐灰色土 粘性強 鉄分あり 浅間A軽石粒子含む
- III にぶい黄褐色土 粘性強 水田の耕土マンガン含む 浅間A軽石なし
- IV 灰褐色土 粘性強 粒子細かい シルト質 粘土
- V 褐灰色土 粘性強 粒子細かい 粘土 浅間B軽石粒子混じる
- VI 灰色土 粘性強 粒子細かい 粘土 浅間B軽石粒子混じる
- VII にぶい褐色土 粘性強 粒子粗い 鉄粒子含む

- VIII にぶい褐色土 VII層よりも暗い 炭化物・焼土粒子含む
- IX 褐灰色土 粘性強 炭化物なし 粒子細かい



第14図 第28次調査区基本土層

IV 第26・27次調査の遺構と遺物

1. 弥生時代の遺物

弥生時代の遺構・遺物は、第26～28次調査区よりも東側の、第2・7・9・10・14～17・19地点などから検出されている。

特に第19地点からは弥生中期後半の大規模な集落跡、第17地点からは弥生時代以降の水田跡が検出され、集落域と生産域が構造的に把握されたことは重要である。本調査区から約200m東に位置する第2地点からは、中期後半の壺と甕が1点ずつ出土したが、砂層中から検出され、遺構に伴うものではなかった。

今のところ、第7地点→第21地点→第20地点を結ぶラインに想定されている埋没河川（第6図）の東側に弥生時代の遺構がまとまる傾向がある。水田可耕地とその周囲の微高地が、生活空間として意識的に選地されたことを意味するものと考えられる。

本書で報告する第26～28次調査区からは土器片が3点、第25次調査区からは土器片が2点出土したが、いずれも他遺構や遺構外から出土したものである。

（1）弥生時代の出土遺物（第15図）

1は第141号住居跡覆土中から出土した甕口縁部の破片である。口唇部には刻み目（4本/cm）、外面は細かい刷毛目が斜位から縦方向に施文されている。内面は太い櫛歯状工具により、3～4本一組の櫛描波状文が施文されている。下端部にも

沈線が見えるため、2段に施文された可能性がある。焼成は良好で、色調は暗褐色～黒褐色である。胎土に角閃石・黒色粒子を含む。

口縁部内面に波状文を巡らす甕は秩父市下ツ原遺跡に類例があるが、北島遺跡の中では見いだせない。櫛描波状文が太いことも含め、後期岩鼻系櫛描文というよりも、中期後半～末葉段階に相当すると考えておきたい（図版45～6）。

2は第117号溝跡から出土した。甕胴部上位の破片である。外面は横位の刷毛目、内面も外面と同一工具による刷毛目が横位に施文される。

焼成は普通で、色調は外面淡褐色、内面黒褐色である。胎土に角閃石・長石・白色粒子を含む。

時期は、後期前半の岩鼻式とを考えておきたい（図版53～5）。

3はT-17グリッドから出土した。寸胴形の甕頭部片と思われる。外面上端に等間隔止めの簾状文、その下に刷毛目が斜位に施文される。簾状文の条数は不明だが、間隔は1.4cm前後である。

内面は、横位から斜位の刷毛目がやや雑に施文されている。

焼成は普通で、色調は外面が暗褐色で、内面は淡褐色である。胎土に片岩・長石・白色粒子・チャートを含む。

時期は後期前半の岩鼻式と推定される（図版60～4）。



第15図 弥生時代出土遺物

2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第101号住居跡 (第16図)

第101号住居跡はU-19グリッドに位置する。調査区の南東隅にあり、調査区外に延びている。重複するU-19グリッドP5よりも新しく、P3にコーナー部を壊されているため、遺構の遺存状態は良くない。

平面形は不明確だが、方形系と推定される。北壁は明瞭には検出できなかった。残存規模は長軸長3.20m、短軸長1.00m、深さ0.15～0.20mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。

覆土は焼土粒子を少量含む黄褐色土が基調となるが、大きな土層変化は認められなかった。床面は部分的に凹凸があり、一定しない。

カマドは東壁に設置され、煙道部先端は調査区外に延びていた。残存規模は長さ1.16m、幅

1.08m、深さ0.15mである。

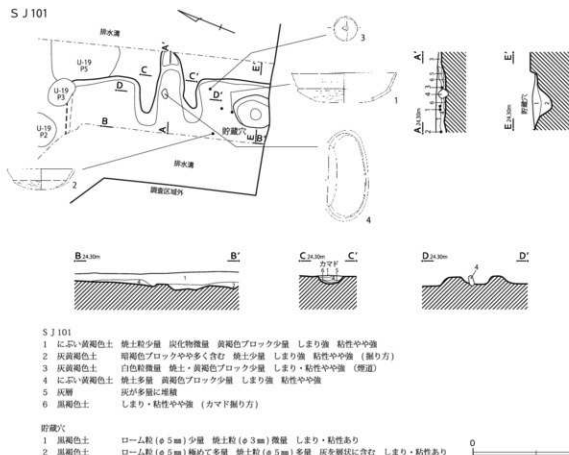
燃烧部は長さ1.38m、幅0.50mで、壁ラインを約0.30m掘り込んで造られていた。焚口部から約0.50m入った底面の中心から左に寄った場所には、石製支脚が据え付けられていた。

燃烧部底面からカマド前面にかけては灰が多量に堆積していた。底面は概ね平坦で床面との段差はない。袖部の状況は不明である。

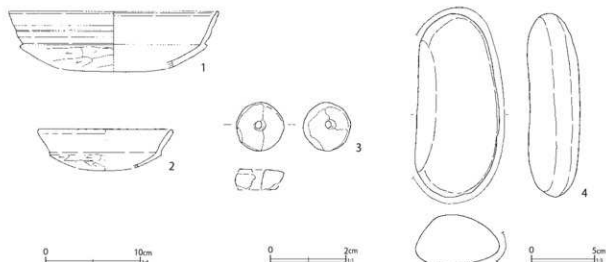
貯蔵穴はカマドに向かって右側に位置する。平面形態は楕円形と推定され、残存長径0.58m、短径0.50m、深さ0.23mである。下層には、カマド由来と思われる灰が層状に堆積していた。

ピット・壁溝は検出されなかった。

遺物は土師器杯・鉢、石製支脚、白玉が検出されている (第17図)。図化したもの以外には土師器杯身模倣杯と土師器甕がある。



第16図 第101号住居跡・遺物出土状況



第17図 第101号住居跡出土遺物

第3表 第101号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	鉢	(22.0)	[6.0]	—	CDI	20	良好	赤褐	№3・4 一括 SK126 内面に黒色処理の痕跡あり (漆か)	31-5
2	土師器	坏	(14.0)	[4.1]	—	AGH	40	不良	褐	野 粗砂粒多 坏蓋模倣坏	
3	石製品	白玉	長さ1.3	幅1.4	厚さ [0.7]	重さ1.4				№1 滑石 平面円形 断面楕円形 孔は斜めに貫通する 孔径約0.35cm	63-5
4	石製品	支脚	長さ14.4	幅6.7	厚さ4.2	重さ587.4				カマド 砂岩 上下と一側縁が強く摩滅	63-6

第17図1は土師器鉢である。形態的には有段口縁緑の大型品で、推定口径は22cmとなる。2はいわゆる坏蓋模倣坏で、皿状、浅身である。3は滑石製の白玉。カマド脇から単独で出土した。4は石製支脚である。砂岩製で、上下両端と側縁の一部が摩滅している。

時期は古墳時代後期、6世紀後半～7世紀初頭(Ⅱ-3期古段階)頃と考えられる。

第103号住居跡 (欠番)

第108号住居跡 (欠番)

第111号住居跡 (第18図)

第111号住居跡はT-19グリッドに位置する。重複する第141号住居跡よりも新しく、第102号住居跡・第132号土壇より古い。第151号住居跡・T-19グリッドP14は本住居跡の下部から検出され、本住居跡よりも古いことが判明した。第103号井戸跡は、本住居跡の東側に接する位置から検出された。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.91m、短軸長2.84m、深さ0.22mである。主軸方位はN-74°-Eを指す。

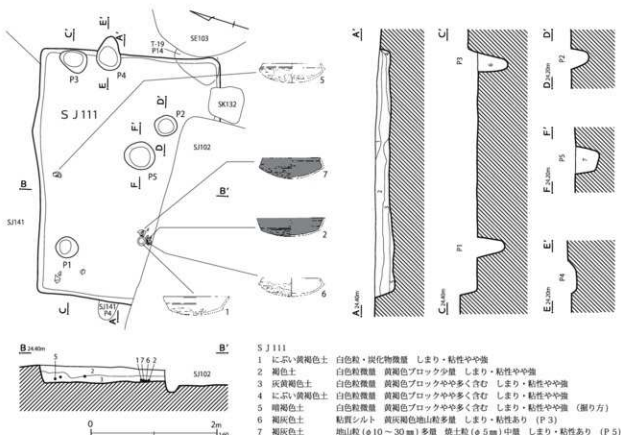
覆土は5層に分層された。第5層は掘り方覆土である。覆土下層(第3～5層)には白色粒子と黄褐色土がブロック状に含まれていた。

カマドは検出されなかった。ピットは5基検出された。P1は深さ0.42m、P3は深さ0.45mで、主軸に沿った2本主柱穴とみることも可能であるが、柱痕は観察されなかった。P2・P4・P5は深さが浅く配置も不規則であり、住居跡に伴う柱穴ではないであろう。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は住居西半にまとまっていた。土師器坏(坏身模倣坏・有段口縁坏)・甕・壺、須恵器坏が検出されている(第19図)。

1～3は土師器有段口縁坏である。1・2は大振り、扁平な皿状の坏で、口径14cm前後、高さ



第18図 第111号住居跡・遺物出土状況

4 cm前後で、床面から出土している。口縁部の段の少ない1と多段構成をとる2の両者がある。3は一回り口径が小さく、覆土から出土している。

4～7は須恵器坏身を模倣した坏(坏身模倣坏)である。口径は12.2～13.0 cmにまとまる。口縁部が短く内傾する5・6と、長く内傾する7がある。

8は土師器長胴甕である。器壁は厚く、胴部は直線的に延びる。9は土師器壺である。10は須恵器坏H身である。口縁部の立ち上がりは高く、口唇部内面に段差を作り出している。口唇部と受け部は丸く、端部の鋭さはない。焼きはやや甘く、砂っぽい胎土である。非陶邑産、口縁部の立ち上がりが高い点は東海産の特徴ともいえるが、端部のつくりが甘い。在地産の可能性もあろう。時期的にはMT 15～TK 10型式に併行しようか。伴出する土師器とは時期差があると思われる。

土師器坏類を基準に、住居跡の時期は6世紀後

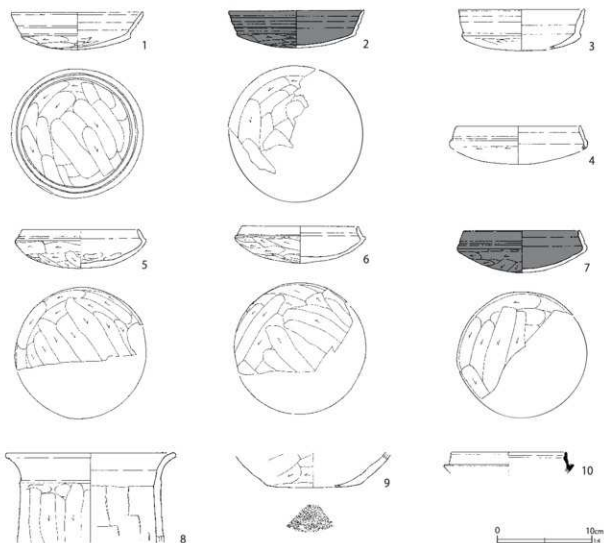
半(Ⅱ-3期古段階)と考えられる。重複する第141号住居跡とほぼ同一時期と考えられる。

第112号住居跡(第20図)

第112号住居跡はT-17グリッドに位置する。西壁は重複する第3号溝跡に壊されていた。また、第105号掘立柱建物跡とも重複し、掘立柱建物跡の方が新しい可能性が高い。東壁側は調査区外に延びており、遺構の遺存状態は良くない。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長5.10 m、短軸長2.55 m、深さ0.10 mである。比較的大型の住居跡になるものと推定される。第3号溝跡の西側には延びていないことから、概ね推定線で西壁は収まっていたと思われる。主軸方位はN-34°-Eを指す。

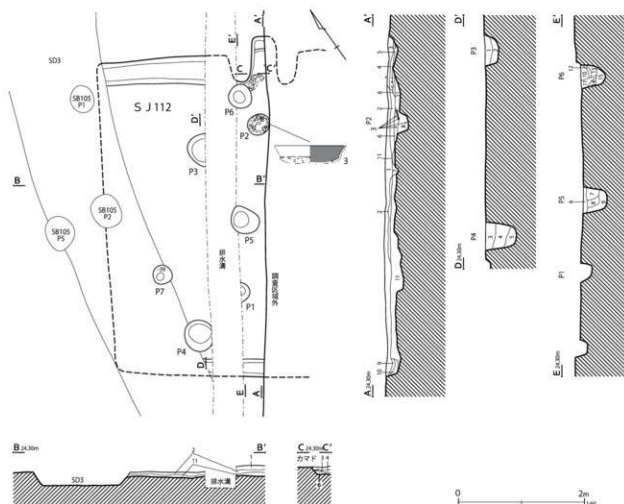
覆土は11層に分層された。第11層は掘り方覆土で、褐灰色粘土ブロックが層状に含まれていた。第1・2層が住居覆土で、褐灰色土を主体に構成されていた。



第19図 第111号住居跡出土遺物

第4表 第111号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	13.8	4.0	—	CDG1K	100	良好	橙褐	Na.1 有段口縁坏 無彩	34-4
2	土師器	坏	(14.2)	3.9	—	CDI	40	良好	褐	Na.2 有段口縁坏 黒色処理 (漆か)	34-5
3	土師器	坏	(13.2)	[4.2]	—	H	10	良好	橙褐	D区 胎土精良 有段口縁坏	
4	土師器	坏	(13.0)	[2.6]	—	CDI	20	普通	褐	D区 坏身模倣坏 黒色処理の有無不明瞭	
5	土師器	坏	(12.3)	4.1	—	CGI	50	良好	褐	Na.7 坏身模倣坏 底部黒斑 黒色処理有無不明	35-1
6	土師器	坏	(12.3)	[3.9]	—	CGI	75	良好	橙褐	Na.3 坏身模倣坏 黒色処理なし	35-2
7	土師器	坏	(12.2)	4.4	—	CGI	50	良好	黒褐	Na.4 坏身模倣坏 内外面黒色処理 (漆か)	35-3
8	土師器	甕	(17.6)	[9.5]	—	DHI	20	良好	淡褐	A区	
9	土師器	壺	—	—	(10.0)	DI	15	普通	茶褐	B区 底部木葉痕	
10	須恵器	坏	(12.0)	[2.3]	—	I	5	普通	明灰	D区 産地不明 口唇部内面に段差付く 端部は丸く鋭さはない MT15～TK10併行か	



- SJ112**
- 1 褐灰色土 炭化物(φ2~3mm) 微量 しまり・粘性弱
 - 2 褐灰色土 粘質シルト 炭化物(φ2~3mm)・焼土(φ2mm) 微量 地山ブロック(φ1~2cm) 含む しまり・粘性あり
 - 3 黄灰色土 粘質シルト 炭化物(φ1~2mm) 微量 しまり・粘性あり(カマド)
 - 4 褐灰色土 粘質シルト 焼土(φ1~2cm)・黄灰色土(φ4~5mm)・炭化物(φ3~4mm) 含む しまり・粘性あり(カマド)
 - 5 黒色土 炭化物屑 灰黄褐色土・焼土粒(5~6mm) を全体に含む しまり・粘性なし(カマド)
 - 6 灰黄褐色土 粘土質 黄灰色土(φ4~5mm) を含む 炭化物(φ3~4mm) 微量 しまり・粘性あり
 - 7 褐灰色土 粘土質 炭化物(φ1mm)・地山粒(φ1~2mm) を極微量含む しまり・粘性あり
 - 8 褐灰色土 粘土質 炭化物(φ0.5~1cm)・焼土(φ1~3cm)・灰(φ1mm)・黄灰色ブロック土(φ2~3cm) を全体に含む 灰面ビツカ しまり・粘性あり
 - 9 褐灰色土 粘土質 炭化物(φ2~4mm) 少量 地山粒(φ3~10mm) 炭灰を含む しまり・粘性あり
 - 10 褐灰色土 粘土質 炭化物(φ2~5mm)・焼土(φ1~2mm)・地山粒(φ1~2cm) 少量 しまり・粘性あり
 - 11 黄灰色土 シルト質 褐灰色粘土のブロック(φ1~10cm) 層状に含む しまり・粘性なし(掘り方)

- SJ112 P3~6**
- 1 褐灰色土 炭化物粒(φ1cm) 少量 しまり・粘性あり
 - 2 褐灰色土 地山ブロック状(φ1~2cm) 含む 炭化物(φ2~3mm) 少量 しまり・粘性あり
 - 3 灰黄褐色土 炭化物粒(φ3mm) 微量 地山粒(φ5~10cm) 少量 しまり・粘性あり
 - 4 黒褐色土 地山粒(φ5~15mm) 多量 しまり・粘性あり
 - 5 黒褐色土 黒褐色粘土ブロックと地山ブロックの混層 しまり・粘性あり
 - 6 褐灰色土 地山ブロック土を塊状に含む(φ1cm) しまり・粘性あり
 - 7 褐灰色土 地山ブロック土(φ2~3mm)・炭化物(φ1~2mm) 微量 しまり・粘性ややあり
 - 8 褐灰色土 粘質シルト 炭化物(φ4~5mm) 少量 土器片出土 しまり・粘性あり
 - 9 褐灰色土 粘土質 地山ブロック土(φ1~2cm) 少量 土器片出土 掘り方か しまり・粘性強
 - 10 褐灰色土 炭化物・焼土(φ2~3mm) 黄褐色土含む しまり・粘性あり
 - 11 褐灰色土 炭化物多量 黄褐色土少量含む 住居内履土か しまり・粘性ややあり
 - 12 にぶい黄褐色土 炭化物(φ6~7mm) 少量 褐灰色土少量含む 抜き取り痕か しまり・粘性あり
 - 13 灰黄褐色土 黄褐色土少量含む 炭化物(φ1mm) 少量 しまり・粘性あり
 - 14 褐灰色土 黄褐色土少量含む 炭化物(φ1cm) 少量 しまり・粘性強
 - 15 褐灰色土 黄褐色土少量含む しまり・粘性強(14層以上)

第20図 第112号住居跡・遺物出土状況

カマドは北壁に設置されていた。東半は調査区外に位置するため、遺存状態は悪い。残存規模は長さ1.70m、燃焼部の残存幅は0.25m、深さは0.20mである。袖部はP 6で壊されたと思われる、本来の袖部は住居内に長く延びていた可能性がある。先端は段差があるため、一部は煙道部が残存しているのであろう。燃焼部の大半は壁ラインの内側に収まり、煙道部先端は削平されたと考えられる。カマド手前にはP 2（深さ0.22m）があり、内部には焼土・灰・炭化物粒子が多量に含まれていた（第8層）。灰溜ビットと思われる。

ビットは7基検出された。P 2は前述したように灰溜ビットとおもわれる。P 3とP 4は位置的には主柱穴の可能性があるが、P 3の深さが浅く断定できない。

貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝は南壁と北壁で確認された。規模は幅0.30～0.44m、深さ0.05～0.11mである。

出土遺物には、土師器坏類と土師器壺がある（第21図）が、いずれも小片で量的にも少ない。

第21図1～3は土師器坏である。1はいわゆる坏身模倣坏である。やや深身で、口縁部は短く内傾気味に立ち上がる。P 6出土。住居跡と同時

期か新しいものであろう。2は土師器坏口縁部小片である。口縁部は短く立ち上がる。3は同じく土師器坏で坏蓋模倣坏である。口径は大きく、体部は浅身、扁平な器形で口縁部は大きく外反する。P 2の灰溜ビットから出土しており、住居跡に伴う遺物と考えられる。

4は土師器壺である。P 5出土。図化した以外には須恵器蓋細片があるが、8世紀代の所産と推定される。時期を特定するのは難しいが、3の坏を基準に6世紀後半（Ⅱ-3期古段階）頃と考えておきたい。

第116号住居跡（欠番）

第117号住居跡（欠番）

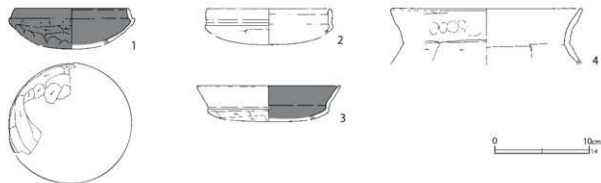
第118号住居跡（欠番）

第119号住居跡（欠番）

第120号住居跡（第22図）

第120号住居跡はT-18グリッドに位置する。重複する第121・150号住居跡より新しく、第109号住居跡よりも古い。また、第147号土壌は本住居跡よりも新しいと考えられる。

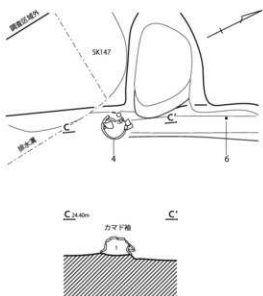
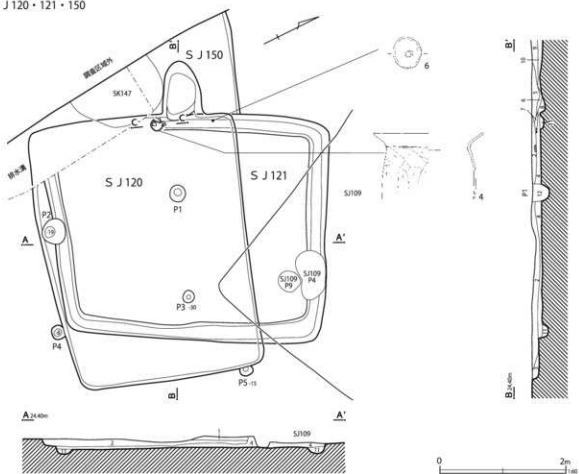
平面形は長方形で、規模は長軸長4.19m、短軸長3.30m、深さ0.10mである。主軸方位はN-70°-Wを指す。



第21図 第112号住居跡出土遺物

第5表 第112号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	[3.8]	—	G1	25	良好	茶褐色	P 6 坏身模倣坏 内外面黒色処理（漆か）	
2	土師器	坏	(13.0)	[2.7]	—	D1	15	良好	橙褐色	A区	
3	土師器	坏	(15.0)	[3.6]	—	C	15	良好	褐色	No.2 内面黒色処理（漆か） 外面不明瞭	
4	土師器	壺	(20.0)	[5.9]	—	ACH	10	良好	茶褐色	P 5	



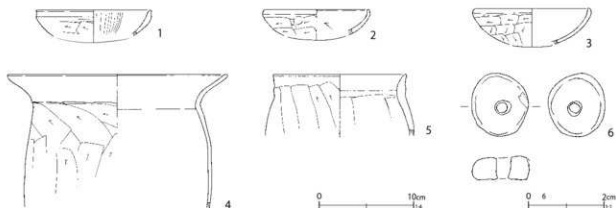
S J 120・121・150

- 1 褐灰色土 地山粒 (φ 3 mm) 多量 しまり・粘性あり
- 2 褐灰色土 地山粒 (φ 3~5 mm)・炭化物粒 (φ 5 mm)・焼土粒 (φ 5 mm) 多量 しまり・粘性あり
- 3 黒褐色土 地山粒 (φ 5~10 mm) 多量 硬の崩落土 しまり・粘性あり
- 4 灰黄褐色土 地山粒 (φ 3~10 mm) 多量 2層との境に一部固くなる部分 (厚 5~10 mm) あり S J 120 床面か しまり・粘性あり (S J 121)
- 5 黒褐色土 焼土粒 (φ 5~10 mm) 多量 炭化物粒 (φ 5 mm) 微量 灰少量 しまり・粘性あり (カマド)
- 6 褐灰色土 灰多量 炭化物粒 (φ 5 mm) 少量 しまり・粘性やや弱 (カマド)
- 7 褐灰色土 灰多量 焼土粒 (φ 5 mm) 多量 炭化物粒 (φ 5 mm) 少量 しまり・粘性やや弱 (カマド)
- 8 黒色土 炭化物粒 (φ 5 mm)・灰多量 しまり・粘性やや弱 (カマド)
- 9 褐灰色土 地山粒 (φ 10 mm) 少量 しまり・粘性あり
- 10 褐灰色土 地山粒 (φ 10 mm) 多量 しまり・粘性あり
- 11 黒褐色土 地山粒 (φ 10 mm) 地山ブロック (φ 20~30 mm) 少量 しまり・粘性あり (S J 121 壁溝)
- 12 黒褐色土 白色粘土ブロック (φ 10~20 mm) 中量 しまりあり 粘性強 (P 1)

S J 120 カマド軸

- 1 黒褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 中量 しまり・粘性あり

第22図 第120・121・150号住居跡・遺物出土状況



第23図 第120・121号住居跡出土遺物

第6表 第120・121号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	暗文杯	(12.0)	[2.7]	—	CHI	10	良好	橙褐色	SJ120・121 B区 北武蔵型暗文杯 内面放射状暗文	36-2
2	土師器	杯	(11.0)	[2.6]	—	CHI	10	良好	褐色	SJ120・121 B区 北武蔵型杯	
3	土師器	杯	(12.0)	[3.8]	—	C	20	普通	橙褐色	SJ120・121 C区 北武蔵型杯	
4	土師器	甕	23.0	[14.1]	—	CGH	60	普通	明褐色	SJ120 カマドNo.2 武蔵型甕プロトタイプ	
5	土師器	小型甕	(14.0)	[6.5]	—	AGI	30	普通	褐色	SJ120・121 B区	63-5
6	石製品	白玉	長さ1.7 幅1.5 厚さ0.8 重さ2.9							SJ120 No.1 滑石 平面・断面楕円形 ほぼ完形 孔径約0.4 表裏・周縁部平滑 片面穿孔	

覆土は炭化物粒子・焼土粒子を多量に含む褐灰色土を基調に構成されていた(第2層)。

床面はやや起伏があるが、第2層下面に硬化面が認められた。

カマドは西壁北寄りに設置され、規模は長さ1.10m、幅0.64m、深さ0.20mである。壁外には約0.80m延びていた。カマド左袖部には土師器甕が口縁部を伏せた状態で据え置かれていた。周囲に白色粘土は確認されていないが、袖部の補強材として使用されたと推定される。

カマド覆土は第5層が天井部崩落土、第6～8層が灰層に相当すると考えられる。

ピットは5基検出されたが、いずれも住居跡に伴うものではない。

貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、重複する第121号住居跡と分離できないものが多いため、同じ挿図に掲載した(第23図)。

第120号住居跡からは土師器杯(北武蔵型杯・杯身模倣杯・有段口縁杯・北武蔵型暗文杯)、土師器甕(武蔵型甕)、須恵器杯・蓋・甕、白玉、第120・121号住居跡からは、土師器の北武蔵型杯・北武蔵型暗文杯・小型甕が検出されている。

第23図1は小振りの北武蔵型暗文杯である。内面に放射状暗文が施文されている。2は小振り、3は大振りの北武蔵型杯で、いずれも口縁部が短く内屈し、ケズリは口縁直下から施されている。深身の器形である。4は第120号住居跡カマドから出土した土師器甕である。胴部器壁はかなり薄く削り込まれ、武蔵型甕の系譜に連なる特徴が認められる。5は小型甕である。6は白玉で、第120号住居跡から出土した。

時期は、北武蔵型杯が深身の器形であること、ケズリが口縁直下まで及んでいるという特徴から7世紀後半～末(Ⅱ-3期新段階)と考えておきたい。

第121号住居跡（第22図）

第121号住居跡はT-18グリッドに位置する。重複する第150号住居跡よりも新しく、第120・109号住居跡よりも古い。西壁と南壁は第120号住居跡と一致するか平行しており、連続的な建て替えを想定することもできる。

平面形は不整形長方形で、規模は長軸長4.40m、短軸長3.60m、深さ0.04～0.06mである。主軸方位はN-29°-Eを指す。

覆土は地山粒子を多量に含む灰黄褐色土の単層で、上面に第120号住居跡床面が形成されているため詳細は不明である。床面は概ね平坦であった。カマドは検出されなかった。第120号住居跡のそれとほぼ同一場所か、西壁南側に存在したと推定される。

ビット・貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝は残存部では全周する。規模は、幅0.20～0.36m、深さ0.06mである。覆土は地山ブロックを多量に含む黒褐色土であった。

出土遺物は第23図に示した。第120号住居跡で記したとおり、本住居跡に伴う遺物を分離できなかったが、北武蔵型環と暗文環が主体となる点で、第120号住居跡とほぼ同時期と考えられる。

時期は7世紀末（Ⅱ-3期新段階）頃と考えておきたい。

第125号住居跡（第24図）

第125号住居跡はS・T-16グリッドに位置する。第125号溝跡・第105号井戸跡と重複する。重複遺構に気づかず掘削したため、新旧関係は不明な点があるが、第105号井戸跡・第125号溝跡よりも古いと考えられる。第105号井戸跡と第125号溝跡の新旧関係は、第105号井戸跡の方が新しいと思われる。

平面形態は不整形長方形で、長軸長3.90m、短軸長3.30m、深さ0.10mである。主軸方位は西壁を基準にするとN-25°-Eを指す。

住居跡の大半は別遺構の攪乱を受け、遺存状態

は良くない。残存する床面は概ね平坦である。覆土については、十分な観察ができなかったため、詳細は不明確である。

当初、カマドは北壁に位置すると考えたが、単独のビットであることが判明したため、カマドの有無は不明である。住居跡内に6基のビットが検出されたが、遺構に伴うビットではないであろう。

出土遺物は土師器環・壺、須恵器甕がある（第26図）。第26図1は土師器有段口縁環である。推定口径は15.4cmと大振りである。2は小振りの有段口縁環、3は口縁部が内湾する北武蔵型環である。4は須恵器甕口縁部片、5は土師器壺底部である。

遺物は時期差があり住居跡に帰属するものを特定するのは難しいが、1の土師器環と5の土師器壺が6世紀後半頃のもので、最も古く位置付けられよう。2は7世紀中頃から後半、3・4は7世紀末～8世紀初頭頃と推定される。他遺構との重複関係を考慮して6世紀後半（Ⅱ-3期古段階）頃と考えておきたい。

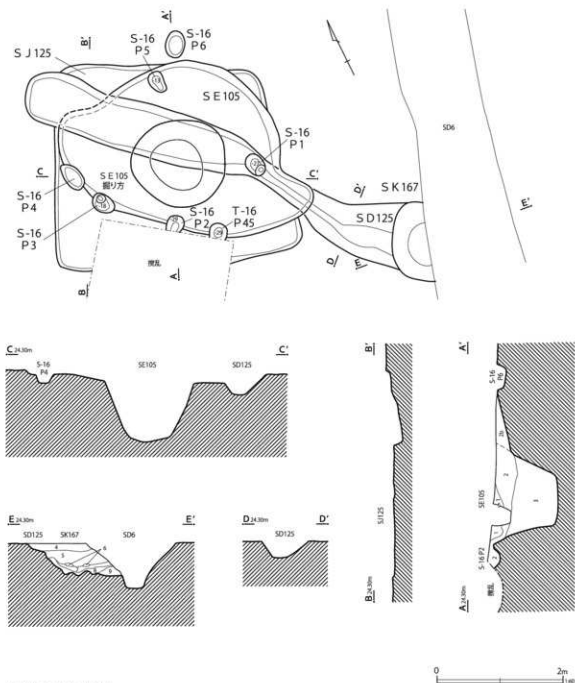
第126・152号住居跡（第27図）

第126号住居跡はT-15グリッドに位置する。重複する第127・129・152号住居跡よりも新しい。

平面形はほぼ正方形であるが、南西コーナー部はやや丸みをもつ。規模は長軸長5.49m、短軸長5.15m、深さ0.14mである。主軸方位はN-2°-Wを指す。

覆土は20層に分層された。遺物の出土状態などから第12層は地山土であることが判明した。調査時点で床面の判別が難しかったための掘り過ぎである。覆土はシルト質の褐灰色土がベースとなっていた。

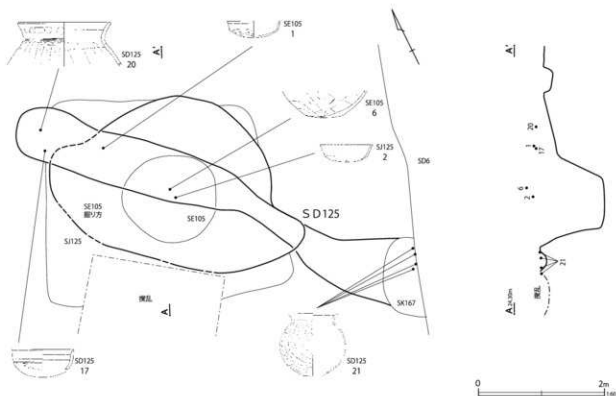
カマドは北壁に設置され、規模は全長1.88m、幅0.48m、深さ0.26mである。燃焼部は壁ラインを約0.50m切り込んで構築されていた。袖部から燃焼部先端までの長さは1.02m、煙道部は0.30mである。袖部の状況は不明確であるが、地



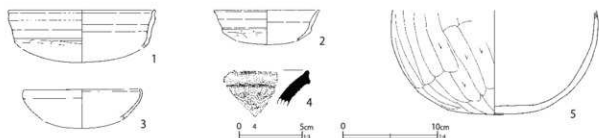
S E105・S D125・S K167

- 1 暗褐色土 粘土質 鉄分少量 炭化物多量 しまり・粘性あり (S E105)
- 2 暗褐色土 粘土質 鉄分多量 炭化物ブロック・焼土ブロック微量 しまり・粘性あり 大型の礫を含む (S E105)
- 2b 暗褐色土 2層に類似 (S E105)
- 3 暗褐色土 粘土質 鉄分・地山ブロック多量 炭化物ブロック・焼土ブロック少量 しまり・粘性あり 砂礫多く含む (S E105)
- 4 灰黄褐色土 シルト 地山粒 (φ 1~2 cm) を含む しまり・粘性ややあり (S D125)
- 5 褐灰色土 粘土質 地山ブロック (φ 1~60 mm) を含む しまり・粘性あり (S K167)
- 6 灰白色土 シルト 地山のブロック土 しまり・粘性ややあり (S K167)
- 7 褐灰色土 粘土質 地山ブロック土 (φ 1~3 cm)・炭化物 (φ 1~2 cm) 微量 しまり・粘性あり (S K167)
- 8 灰白色土 シルト 地山ブロック土 (φ 1~4 cm) を含む しまり・粘性ややあり (S K167)
- 9 黄灰色土 粘質シルト 炭化物 (φ 1~2 mm) 極微量 しまり・粘性あり 地山 (S K167)

第24図 第125号住居跡・第105号井戸跡・第125号溝跡・第167号土壌



第25図 第125号住居跡・第125号溝跡・第105号井戸跡遺物出土状況



第26図 第125号住居跡出土遺物

第7表 第125号住居跡出土遺物観察表（第26図）

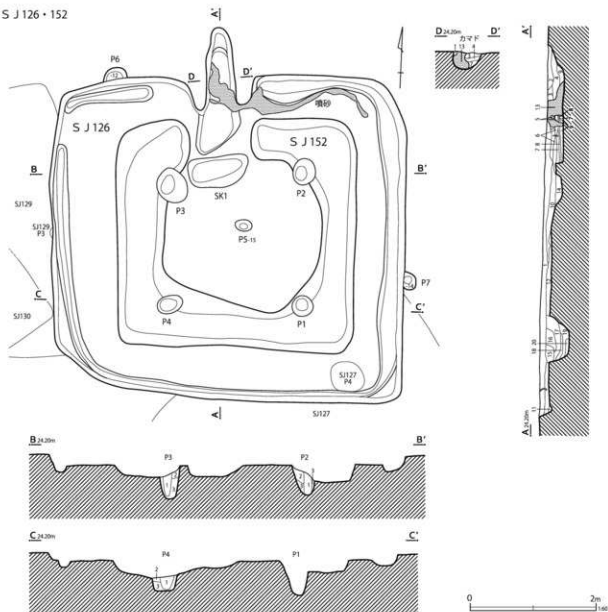
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(15.4)	[4.0]	—	DEGI	15	普通	褐	SJ125A区 有段口縁坏	39-6
2	土師器	坏	(11.0)	[3.2]	—	CDI	15	普通	暗褐	SJ125B区 有段口縁坏	
3	土師器	坏	(12.3)	[3.2]	—	IK	15	良好	橙褐	SJ125B区 北武藏型坏 器面風化著しく調整不明	
4	須恵器	甕	—	[2.8]	—	EI	—	良好	紫灰	SJ125D区 末野産か 頸部に櫛櫛波状文（4条か） 歪る	
5	土師器	甕	—	[11.0]	—	DEGI	20	普通	赤褐	SJ125No.7 外面黒斑 内面黒褐色	

山掘り残しではなく、白色粘土を積んで構築されたと推定される。カマド覆土は、第4・6層が天井部崩落土、第7層が灰層と考えられる。

ピットは7基検出された。P1～P4は主柱穴である。P2～P4は柱痕が観察された。P5は住居中央部に位置するが、伴うか否か不明である。

P6・P7は住居に伴うものではない。

土壇は1基、カマド前面から検出された。平面形は楕円形で、規模は長径0.96m、短径0.48m、深さ0.12mである。地山ブロックを多量に含むしまりの強い土質である（第14層）ことから、床面下の掘り込み（床下土壇か）と推定される。



S J 126

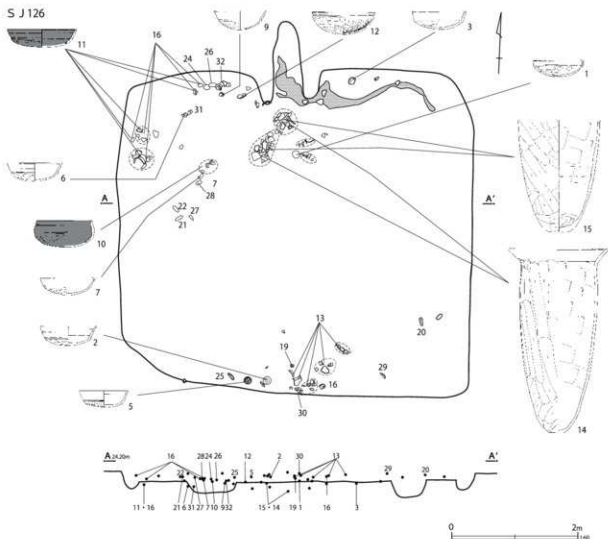
- 1 褐灰色土 シルト質 炭化物(φ1~2cm)少量 しまり・粘性ややあり
- 2 灰黄褐色土 シルト質 焼土(φ1~3cm)大量 しまり・粘性ややあり
- 3 褐灰色土 粘質シルト 炭化物(φ1cm)少量 焼土含まない
しまり・粘性あり
- 4 黄灰色土 粘土質 焼土ブロック(φ1~3cm)全体に含む
しまり・粘性あり
- 5 黄灰色土 粘質シルト 焼土ブロック(φ2~3cm)少量
炭化物(φ4~5mm)微量 しまり・粘性ややあり
- 6 褐灰色土 粘質シルト 地山ブロック(φ2~3cm)・焼土ブロック
(φ1~2cm)・炭化物(φ1cm)含む しまり・粘性あり
灰層 しまり・粘性なし
- 7 灰白色土 粘質シルト 炭化物層 しまり・粘性ややあり
- 8 黒褐色土 粘土質 炭化物(φ3~5mm)含む しまり・粘性強め
- 9 褐灰色土 粘質シルト 地山ブロック(φ2~5cm)斑状に含む 焼土粒
(φ0.5~1cm)・炭化物(φ2~3mm)少量 しまり・粘性あり
- 10 褐灰色土 粘質シルト 炭化物(φ1~3mm)微量
地山ブロック(φ5~6cm)含む しまり・粘性あり
- 11 褐灰色土 シルト質 しまり・粘質なし 地山
- 12 黄灰色土
- 13 噴砂

- 14 褐灰色土 粘土質 地山ブロック(φ4~10cm)多量炭化物(φ2~5mm)少量
しまり・粘性あり (SK1)
- 15 褐灰色土 粘質シルト 炭化物(φ1~2mm)・地山粒(φ2~4mm)微量
しまり・粘性あり (掘り方)
- 16 灰白色土 シルト質 炭化物(φ1mm)極微量 地山の土によく似る
しまり・粘性弱 (掘り方)
- 17 褐灰色土 粘土質 炭化物(φ1~3mm)・地山粒(φ0.5~1cm)少量
しまり・粘性強め (掘り方)
- 18 灰白色土 粘土質・炭化物(φ2~3mm)・地山粒
(φ1~2mm)少量 しまり・粘性弱 (掘り方)
- 20 灰白色土 しまり・粘性が16・18層より強い (掘り方)

S J 126 P2~4

- 1 褐灰色土 粘土質 炭化物(φ1mm)・地山粒(φ3~5mm)微量
しまり・粘性あり (柱穴か)
- 2 褐灰色土 粘質シルト 炭化物(φ1~2mm)・地山粒(φ1~3mm)少量
しまり・粘性あり
- 3 黄灰色土 粘質シルト 地山粒(φ2~3mm)を塊状に含む しまり・粘性あり

第27図 第126・152号住居跡



第28図 第126号住居跡遺物出土状況

貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝は一部途切れる箇所があるが、概ね全周する。幅は0.17～0.44m、深さは0.05mと浅い。

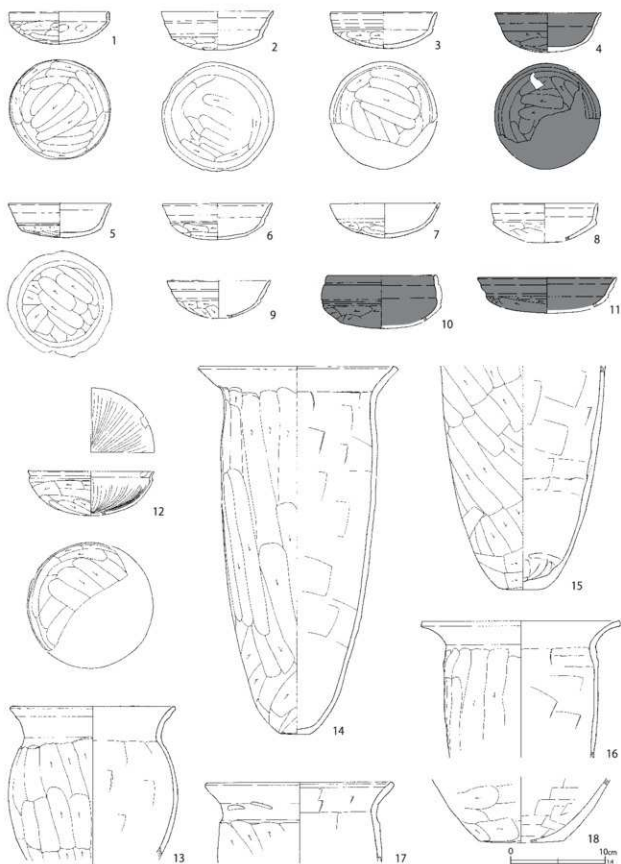
出土遺物が多い。土師器坏（坏蓋模倣坏・有段口縁坏）・北武蔵型暗文坏・甕・壺、軽石、編物石が検出されている（第29・30図）。カマド周辺と南壁際の主に2箇所からまとまって出土した。本来の床面と思われる高さで出土したものが多い。

第29図1・8は土師器坏蓋模倣坏である。1はカマド前面から伏せた状態で出土した。完存する。口縁下の稜はケズリで表出している。口径10.5cmと小振り、で、坏蓋模倣坏としても最新タイプである。8は口縁下にはしっかりした段を持つ。1

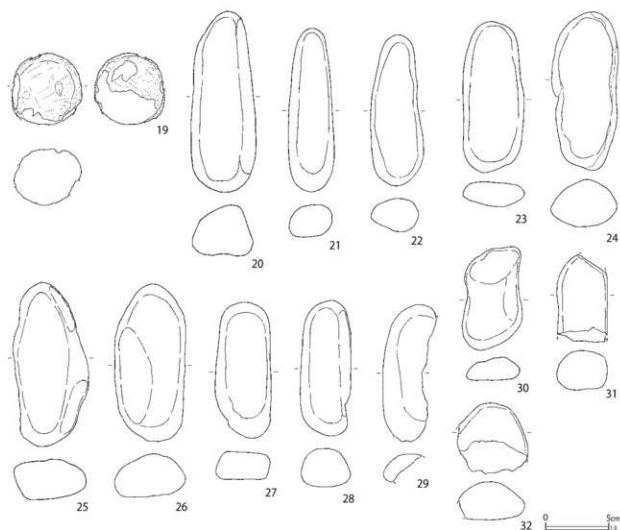
よりも古いタイプの模倣坏である。

2～6・9・11は有段口縁坏である。11は口径が大きく、混入と考えられる。それ以外は口径11cm前後にまとまり、住居に伴う遺物とみて良からう。有段口縁坏としても最終形態であり、口縁部の開きが大きく、段の表現も弱いものが目立つ。2と5は南壁際から並んだ状態で出土した。いずれも風化しているが、特に2は、器面の剥落が目立つ。3はカマド右脇から出土した。10は内湾するタイプの坏（鉢か）である。

12は北武蔵型暗文坏である。深身の丸底形態で、内面に放射状暗文が施文される。ケズリは口縁直下まで及んでいる。北武蔵型暗文坏としては



第29図 第126号住居跡出土遺物 (1)



第30図 第126号住居跡出土遺物（2）

第8表 第126号住居跡出土遺物観察表（第29・30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	10.5	3.4	—	CEI	100	良好	橙褐	No.1 坏蓋模倣坏	39-7
2	土師器	坏	11.6	4.1	—	OGI	98	良好	明褐	No.41 有段口縁坏 黒色処理不明 器面剥落	40-1
3	土師器	坏	11.2	3.8	—	CGHI	60	普通	褐	No.56 有段口縁坏 無影 底部円形の黒底	40-2
4	土師器	坏	11.0	4.2	—	CI	50	普通	茶褐	No.15 有段口縁坏 黒色処理（黒漆か）全体に風化	40-3
5	土師器	坏	10.8	3.6	—	CGIK	95	普通	褐	No.38 有段口縁坏 内外面黒色処理の可能性あり	40-4
6	土師器	坏	(11.6)	3.8	—	OGI	70	良好	明褐	No.21 C区 SJ129 有段口縁坏	41-1
7	土師器	坏	—	[3.5]	—	OGI	40	普通	橙褐	No.29 SJ126・129C区 SJ152D区 風化著しく調整不明瞭 口縁欠失	41-1
8	土師器	坏	(11.2)	[4.0]	—	CEIK	15	良好	褐	No.13 坏蓋模倣坏	41-2
9	土師器	坏	(10.8)	[4.0]	—	HI	25	良好	茶褐	No.12 有段口縁坏 本来黒色処理だったと思われる	41-3
10	土師器	坏	(11.5)	[4.9]	—	GI	40	良好	暗褐	No.28 SJ129 黒色処理（漆か）	41-4
11	土師器	坏	(14.6)	[3.2]	—	OGI	25	良好	赤褐	No.27 有段口縁坏 内外面黒色処理の痕跡残る	41-5
12	土師器	暗文坏	(13.2)	[4.6]	—	CEIK	45	良好	赤褐	No.10 SJ129 北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
13	土師器	甕	(17.0)	[16.2]	—	ADEG IK	50	良好	褐	№45・46・50～52 胴部外面二次被熱を受ける	41-6
14	土師器	甕	(20.5)	38.9	(3.4)	AGH	85	良好	褐	№5・6 カマド 長胴甕	41-7
15	土師器	甕	—	[23.7]	(4.4)	CDEGI	25	良好	褐	№3・6 長胴甕 底部歪む 復元して実測	
16	土師器	甕	(20.6)	[14.6]	—	ACD1	60	普通	褐	№19・20・25～27	39-8
17	土師器	甕	19.4	[8.5]	—	ADH1	15	良好	褐	№49	
18	土師器	壺	—	[6.8]	(9.0)	ADI	20	良好	茶褐	D区 外面二次被熱か	
19	石製品	軽石	長さ[5.7]	幅[5.5]	厚さ[4.5]	重さ63.9				№44 角閃石デイサイト(多孔質) 球形	64-7
20	石製品	編物石	長さ14.2	幅5.2	厚さ4.3	重さ458.7				№54 砂岩 断面三角形 完形	
21	石製品	編物石	長さ12.9	幅3.6	厚さ2.6	重さ198.8				№32 砂岩 完形	
22	石製品	編物石	長さ11.9	幅4.2	厚さ2.8	重さ192.8				№33 砂岩 平面棒状 断面楕円形 完形	
23	石製品	編物石	長さ12.0	幅4.9	厚さ2.2	重さ203.2				ホルンフェルス 完形	
24	石製品	編物石	長さ12.5	幅5.3	厚さ4.1	重さ361.4				№18 頁岩 平面・断面楕円形 完形 被熱し、黒色化	
25	石製品	編物石	長さ13.0	幅6.0	厚さ3.3	重さ354.5				№37 チャート 完形	
26	石製品	編物石	長さ12.4	幅5.7	厚さ4.1	重さ354.6				№17 砂岩 完形	
27	石製品	編物石	長さ10.7	幅4.4	厚さ2.7	重さ197.5				№31 砂岩 平面楕円形 断面隅丸長方形 完形	
28	石製品	編物石	長さ10.7	幅4.0	厚さ3.4	重さ211.5				№30 砂岩 完形	
29	石製品	編物石	長さ[10.8]	幅[4.3]	厚さ[2.3]	重さ92.2				№53 砂岩 欠損 一部残存	
30	石製品	編物石	長さ8.2	幅4.8	厚さ2.4	重さ110.3				№48 砂岩 紐ズレ痕あり 完形	
31	石製品	編物石	長さ[6.9]	幅[4.0]	厚さ[3.5]	重さ146.8				№22 砂岩 欠損 一部残存	
32	石製品	編物石	長さ[5.6]	幅[5.6]	厚さ[3.0]	重さ113.8				№16 砂岩 欠損 一部残存	

古段階の特徴がみられる。

13～17は土師器甕である。13は胴部の丸みが強く、混入品の疑いがある。14～17は本住居跡に伴う遺物と考えられる。14・17はカマド前面の床面に相当する高さから検出された長胴甕である。14の器高は38.9cm、胴部は砲弾形である。18は壺、第30図19は軽石である。

20～32は編物石である。カマド左脇と西壁付近、南壁から東壁にかけての3箇所から出土している。長楕円形で、長さは全体の大きさが判明する資料でみると、8.2～14.2cm、重量は92.2～458.7gである。

北武蔵型坏が明確には器種組成に加わらず、有段口縁坏が主体を占めること、北武蔵型暗文坏が出現していることから、本住居跡の時期は7世紀第3四半期中心(Ⅱ-3期新段階)と考えられる。

第152号住居跡は、第126号住居跡の内側に入れ子状に収まる形で検出された。断面観察から第126号住居跡よりも古いことは確実である。カマ

ドは検出されなかった。第126号住居跡と相似形であることから、第126号住居跡建て替え前の住居跡掘り方と考えるのが妥当である。

形態は正方形で、方形周溝状に溝が巡る。規模は長軸長3.72m、短軸長3.70m、溝の深さは0.30mである。主軸方位はN-4°-Wを指す。

覆土は第15層～第20層が対応する。人為的な埋め戻し土と考えられる。

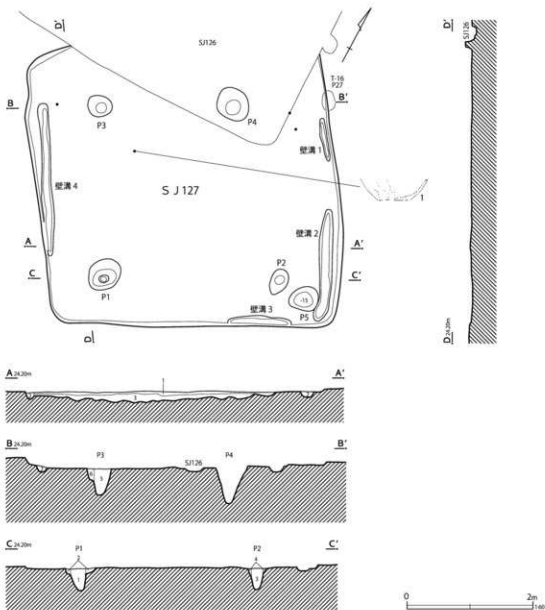
時期については第126号住居跡と同一時期と捉えておきたい。

第127号住居跡 (第31図)

第127号住居跡はT・U-15・16グリッドに位置し、重複する第126号住居跡よりも古い。

平面形は正方形で、規模は長軸長4.75m、短軸長4.45m、深さ0.08mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

確認面で床面が露出しており、覆土の詳細は不明である。第1層は褐灰色シルト質土で、貼床面であった。第3層が掘り方覆土である。掘り方は



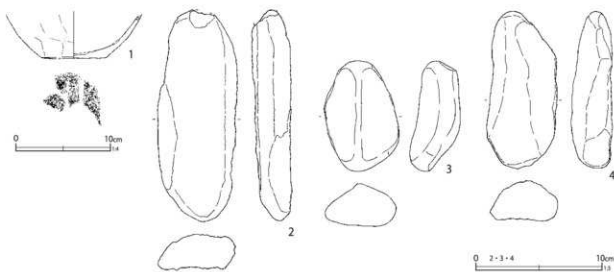
SJ 127

- 1 黄灰色土 粘質シルト 地山粒 (φ 4~5mm)・炭化物 (φ 2~4mm)・焼土粒 (φ 2~4mm) を含む しまり・粘性あり (貼床)
 2 黄灰色土 粘質シルト 地山粒 (φ 2~3mm) を含む しまり・粘性あり (壁溝)
 3 黄灰色土 粘質シルト 地山ブロック (φ 2~10cm) 多量
 炭化物 (φ 5~6mm) 微量 しまり・粘性あり (掘り方)

P1~3

- 1 黄灰色土 粘土質 地山粒 (φ 2~5mm) 炭状を含む 炭化物 (φ 1~2mm) 微量 (柱痕)
 2 黄灰色土 粘土質 地山ブロック (φ 1~3cm) 多量 (掘り方)
 3 黄灰色土 粘土質 地山粒 (φ 3~10mm) 炭状を含む 炭化物 (φ 1~2mm) 少量 (柱痕)
 4 黄灰色土 粘土質 地山ブロック (φ 1~4cm) 多量 (掘り方)
 5 黄灰色土 粘土質 黄灰色粘土のブロック (φ 1~20cm) 多量 炭化物 (φ 1mm) 微量 (柱痕)
 6 黄灰色土 シルト質 黄灰色粘土のブロック (φ 1~3cm) 少量 (掘り方)

第31図 第127号住居跡・遺物出土状況



第32図 第127号住居跡出土遺物

第9表 第127号住居跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版
1	土師器	壺	—	[4.7]	(6.8)	DEGK	35	良好	赤褐	No.4 SJ126・128 内外面被熱し器面剥落 底部木葉痕		
2	石製品	編物石か	長さ16.6	幅6.3	厚さ3.1	重さ448.0					No.1 片岩	
3	石製品	編物石	長さ8.8	幅5.9	厚さ4.0	重さ214.3					No.2 チャート 平面楕円形 断面隅丸三角形 完形	
4	石製品	編物石	長さ12.3	幅5.5	厚さ3.3	重さ277.4					No.3 チャート 完形	



第33図 第126・127・129号住居跡出土遺物

第10表 第126・127・129号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.4)	[2.9]	—	EIK	5	不良	淡黄褐	SJ126・129 有段口縁坏	
2	土師器	坏	(12.7)	[2.5]	—	CEI	20	普通	黄灰褐	SJ126・129 有段口縁坏	
3	土師器	坏	(12.5)	[2.8]	—	CHI	10	普通	褐	SJ126・127・129 有段口縁坏	

床面下全面を不定形に掘り下げていた。

カマドは検出されなかった。本来北西壁に設置されたのであろう。

ピットは5基検出された。P1～P4が主柱穴と考えられる。P1～P3からは柱痕が確認された。

貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝は途切れながら検出された。規模は、幅0.07～0.20m、深さ0.04～0.08mである。

出土遺物は少ない。土師器壺、石製品がある(第32図)。1は土師器壺である。内面は器面が剥落

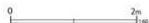
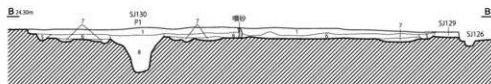
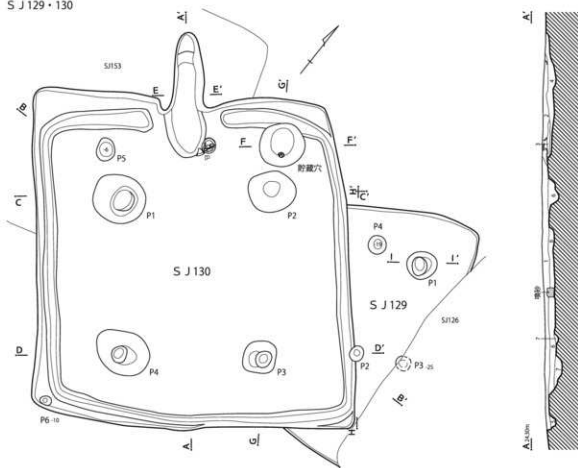
し遺存状態は悪い。底部には木葉痕が残る。2～4は長楕円形の石製品で編物石の可能性はある。

時期は不明確であるが、重複関係から7世紀後半以前となる。また、第126・127・129号住居跡出土遺物は、後述するように本住居跡に帰属する可能性があることから、7世紀前半頃に位置付けられる可能性がある。

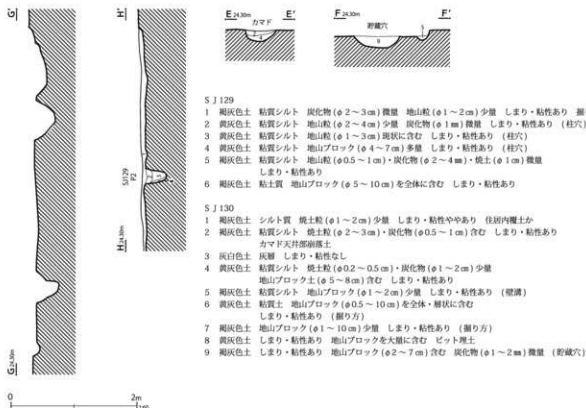
第126・127・129号住居跡出土遺物 (第33図)

第33図1～3は第126・127・129号住居跡から出土したが、帰属を特定できなかった資料である。すべて土師器有段口縁坏で、口径12cm前後の小片

S J 129・130



第34图 第129・130号住居跡 (1)



第35図 第129・130号住居跡（2）

である。口縁部の段はまだしっかりしている。第126号住居跡の有段口縁部と比較すると、口径が少し大きく、段がしっかりしている点で、本資料の方がやや古相を示すものと考えられる。7世紀第2四半期（Ⅱ-3期中段階）頃の土器様相であろう。

第129号住居跡は遺構の重複関係より7世紀第1四半期以前と考えられることから、本資料は第127号住居跡に帰属する可能性が最も高いと考えられる。

第128号住居跡（欠番）

第129号住居跡（第34・35図）

第129号住居跡はT-15グリッドに位置する。第126・130号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。

平面形は不整形で、残存規模は長軸長4.24m、短軸長2.11m、深さ0.11mである。南壁は削平されたと思われる。北壁に直交する向きを主軸方位とすると、主軸方位はN-15°-Wを指す。

カマドは検出されなかった。ビットは4基検出された。主柱穴配置は不明である。

貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は非常に少ない。土師器杯・甕小片が検出されたが、詳細な時期は不明である。

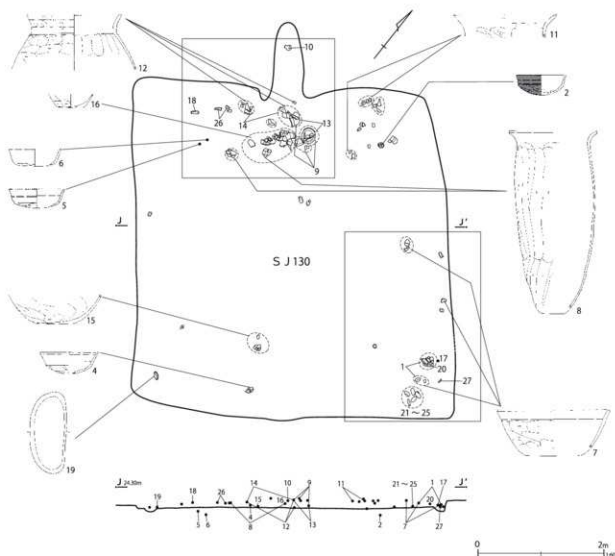
第130号住居跡（第34・35図）

第130号住居跡はT-14・15グリッドに位置する。第129・153号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。また、第126号住居跡と接している。

平面形は正方形で、規模は長さ5.20m、幅5.00m、深さ0.08～0.10mである。主軸方位はN-39°-Wを指す。

深度が浅いため大きな土層変化は観察されず、覆土はシルト質の褐灰色土単層で構成されていた（第1層）。第1層下に堆積する黄灰色土の第6層は掘り方覆土と考えられる。

カマドは北西壁に設置され、規模は全長2.00m、焚口部幅0.50m、深さ0.18mである。燃烧部と煙道部は明確に分かれない。手前1.10m程



第36図 第130号住居跡遺物出土状況(1)

度が燃焼部に対応すると推定される。煙道部は大きな段差なく水平方向に延びていた。第2層が天井部崩落土、第3層が灰層である。第4層は掘り方と推定される。

袖は明確には検出されなかったが、カマド右袖部に対応する位置から土師器甕(第37・38図9)が伏せた状態で検出された。土師器甕を芯にした袖部が存在した可能性がある。

ピットは6基検出された。P1～P4は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。深さは0.37～0.60m、覆土は黄灰色土で、柱痕は確認されなかった。地山土が多量に含まれていたため、柱は抜き取られたと考えられる。P5・P6は遺構

に伴うものではない。

貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に位置する。

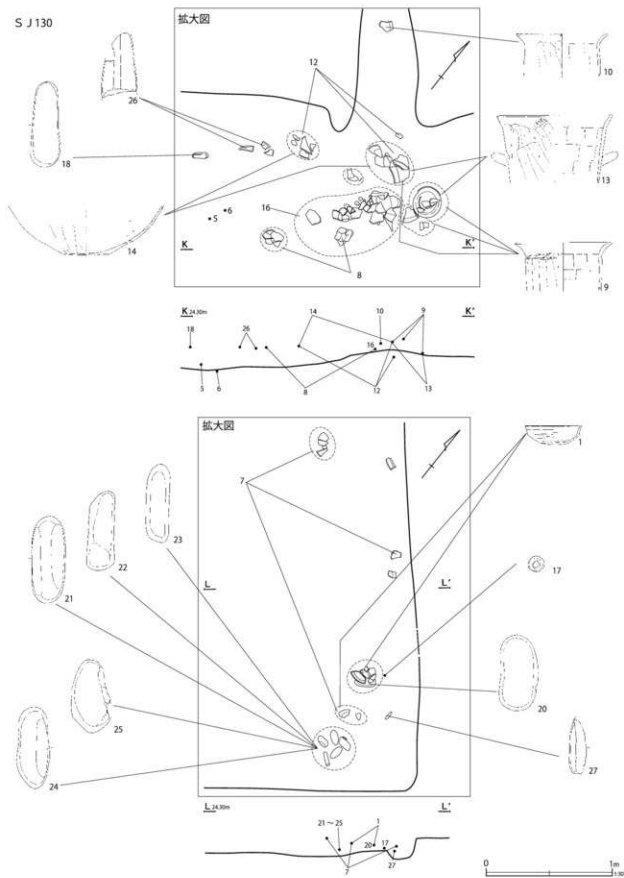
平面形は円形で、直径0.73×0.69m、深さ0.18mである。

覆土は地山ブロックを含む褐灰色土で構成されていた。ほぼ完形の土師器甕が出土した。

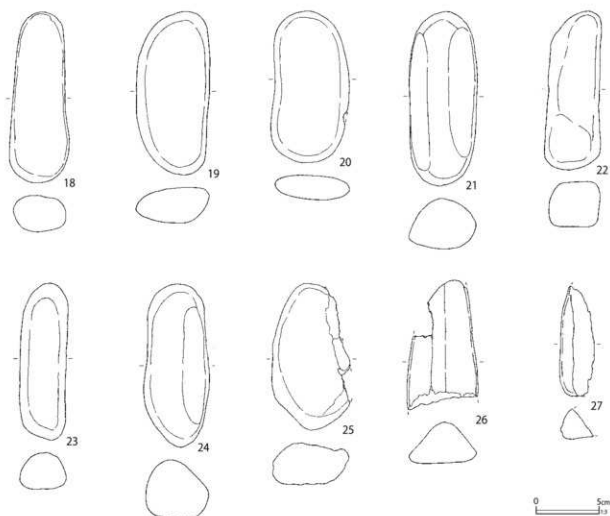
壁溝はカマドを除いて全周する。カマドの位置する北西壁と南西壁側では、壁からやや内側に巡っていた。規模は、幅0.16～0.30m、深さ0.07～0.10mである。

出土物は比較的まとまっている。カマド周辺と北東壁際から多く出土した。土師器甕(坏蓋模倣坏・有段口縁坏)・甕・壺・鉢・瓶、須恵器甕、

S J 130



第37図 第130号住居跡遺物出土状況（2）



第39図 第130号住居跡出土遺物（2）

第11表 第130号住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.7	4.0	—	CH1	95	良好	橙褐	№28・29 坏蓋模倣坏 全体に粉っぽい風化	42-1
2	土師器	坏	10.3	4.2	—	CH1	98	良好	橙褐	野 有段口縁坏 黒色処理 内面は風化により不明	42-2
3	土師器	坏	(11.1)	[3.9]	—	CH1	20	良好	茶褐	有段口縁坏 内外面黒色処理（漆か）	42-3
4	土師器	坏	(12.2)	4.5	—	HI	30	普通	灰白	№33 坏蓋模倣坏 歪みあり	
5	土師器	坏	(11.6)	[3.7]	—	CH1	20	良好	橙褐	№2 P 5 有段口縁坏	42-4
6	土師器	坏	(10.8)	[3.5]	—	CI	30	普通	褐	№4 P 5	
7	土師器	鉢	(23.2)	[8.2]	—	GI	20	普通	赤褐	№24・26・29 外面二次被熱	43-1
8	土師器	甕	18.4	[38.6]	—	EGHK	75	良好	褐	№7・8 P 1 長胴甕 外面被熱 内面ナゲカ	
9	土師器	甕	19.5	[10.3]	—	GHK	60	良好	淡黄灰	№3・5・6 P 2 B区	43-2
10	土師器	甕	(19.0)	[9.0]	—	DEHK	15	普通	褐	№1	
11	土師器	甕	(21.4)	[5.0]	—	ADGT	15	普通	淡褐	№14・21 P 2	43-3
12	土師器	甕	(19.4)	[11.9]	—	ACGH1	35	普通	暗褐	№2・3・9	
13	土師器	甕	(23.8)	[14.4]	—	DEH1	40	良好	黄褐	№3・6 把手欠失	43-4
14	土師器	甕	—	[10.4]	(10.0)	GH1	15	良好	暗褐	№3・4・9・23 風化により調整不明脱	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
15	土師器	甕	—	[6.2]	8.0	G1	40	良好	黄灰	№34 外面風化	
16	土師器	甕	—	[2.9]	6.0	BG1	45	良好	暗褐	№7 武蔵型甕	
17	石製品	白玉	長さ0.9	幅0.9	厚さ0.7	重さ0.7				滑石 平面円形 断面楕円形 黒っぽい はば完形	63-5
18	石製品	編物石	長さ13.5	幅4.8	厚さ3.4	重さ307.3				№13 断面楕円形	64-3
19	石製品	編物石	長さ12.9	幅5.8	厚さ2.8	重さ340.9				№36 平面楕円形 断面不定形 完形	64-3
20	石製品	編物石	長さ12.0	幅6.3	厚さ2.0	重さ234.3				№28 断面楕円形 完形	64-3
21	石製品	編物石	長さ13.8	幅5.4	厚さ4.5	重さ496.1				№30 平面楕円形 断面三角形 完形	64-4
22	石製品	編物石	長さ12.6	幅4.5	厚さ3.7	重さ336.0				№30 平面棒状 断面隅丸長方形 完形	64-4
23	石製品	編物石	長さ12.5	幅3.8	厚さ3.3	重さ284.0				№30 礫石の転用か 平面棒状 断面円形 完形	64-4
24	石製品	編物石	長さ12.9	幅5.2	厚さ5.0	重さ494.3				№30 平面楕円形 断面三角形 完形	64-5
25	石製品	編物石	長さ11.6	幅[6.2]	厚さ3.7	重さ352.6				№30 平面・断面不定形 欠損	64-5
26	石製品	編物石	長さ[10.2]	幅5.7	厚さ3.8	重さ196.2				№11・12 砂岩 断面三角形 欠損	64-5
27	石製品	編物石	長さ[8.7]	幅[2.8]	厚さ[2.5]	重さ67.0				№31 欠損 一部残存	64-5

白玉、編物石が検出されている(第36・37図)。

第38・39図1～6は土師器甕である。1・4は模倣甕である。1は口径11.7cm、4は推定口径12.2cmと最も大振りである。口縁部は長く大きく開いている。6は器表面が風化して不明瞭であるが、有段口縁部かもしれない。2・3・5は有段口縁部である。口径は小さく、2は口径10.3cmである。

7は土師器鉢で、外面は二次被熱を受けている。8～11・16は土師器甕である。8はカマド前面から出土した長胴甕で、底部を欠く。残存高は38.6cmである。12・14・15は土師器壺、13は土師器瓶である。

17は白玉である。

18～27は編物石と推定される。長楕円形の形態で、全容のわかる資料では長さ11.6～13.8cm、重量234.3～496.1gである。

時期は7世紀第2四半期中心(Ⅱ-3期中段階)と考えられる。

第132号住居跡(第40図)

第132号住居跡はT-14グリッドに位置する。第131・142・153号住居跡が近接して構築されている。北側は排水溝の掘削を受け、調査区外に延びているため遺構の全体像は不明である。

平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長

4.74m、短軸長3.90m、深さ0.09mである。主軸方位はN-39°-Wを指す。

覆土は6層に分層された。第1～3層が住居覆土、第4層が壁溝覆土、第5・6層は掘り方覆土である。

床面は緩やかな凹凸があり一定しない。

カマド・ピット・貯蔵穴などの付属施設は検出されなかった。

壁溝は残存部では全周する。規模は幅0.13～0.20m、深さ0.10～0.15mである。

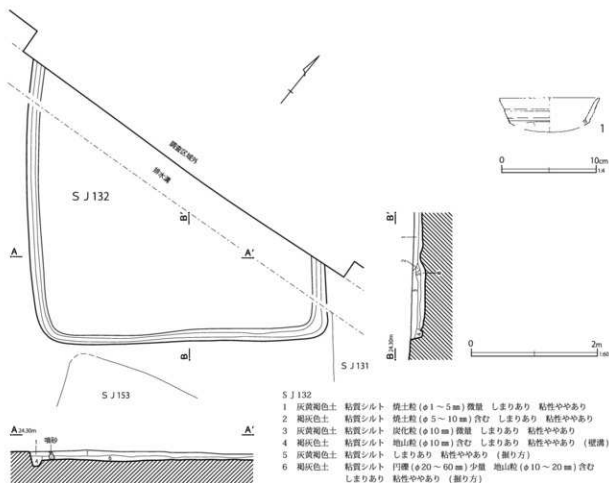
出土遺物はごく少ない。土師器有段口縁部と土師器甕の小片が検出されている。

第40図1は土師器有段口縁部の口縁部片である。推定口径は10.4cmで、5%残存する。黒褐色で、黒色処理された可能性がある。焼成は普通、長石・砂粒子・白色粒子を含む。A区から出土した。

時期は、7世紀前半代(Ⅱ-3期中段階)と思われる。

第133号住居跡(第41図)

第133号住居跡はT・U-18・19グリッドに位置する。重複する第109号溝跡よりも新しく、第104・110号住居跡・第101号掘立柱建物跡・第127号土壌よりも古い。南壁部は調査区外に延びている。



第40図 第132号住居跡・出土遺物

平面形は長方形または方形の比較的大型の住居跡になると推定される。残存規模は長軸長5.30m、短軸長2.78m、深さ0.05mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

確認面ではほぼ床面が露出しており、床面及び覆土の詳細は不明である。第1・2層は掘り方で、地山ブロックが多量に含まれていた。

カマドは北西壁に設置され、規模は長さ2.46m、残存幅0.84m、深さ0.13mである。燃烧部は長さ約1.50mで、壁内に約1mの袖部が構築されていた。右袖部には土師器甕が逆位に据えられた状態で出土した。袖の芯材として使用されたものと考えられる。袖には灰黄褐色粘土が積まれていた。

ピットは9基検出された。P 1・P 2は4本主柱穴を構成するピットと考えられる。P 7も主柱

穴の可能性がある。P 1は深さ0.34m、P 2は深さ0.32m、P 7は深さ0.26mである。

貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に位置する。

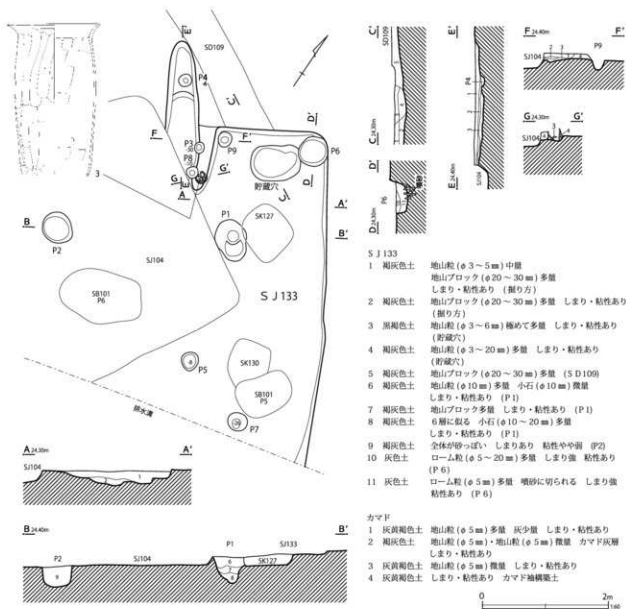
平面形は楕円形で長径0.77m、短径0.55m、深さ0.18mである。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器杯・甕・壺・甔が出土した(第42図)。

第42図1・2は土師器杯である。1は有段口縁杯であるが、口縁部が長く直立するタイプである。2は口縁部が短く直立する丸底形態の北武藏型杯である。第104号住居跡からの混入品の可能性がある。

3~5・7~9は土師器甕である。いわゆる長胴甕で、最大径は口縁部にある。3はカマド右袖の芯材に使用された甕で、胴部はやや膨らみを持



第41図 第133号住居跡・遺物出土状況

ち長く延びる。9は甕底部で、3と同一個体の可能性がある。6は甕と思われる。P 6から出土し、住居跡に直接伴うものではない可能性もある。

時期は土師器甕の特徴から7世紀前半(Ⅱ-3期中段階)を中心とした年代と思われる。

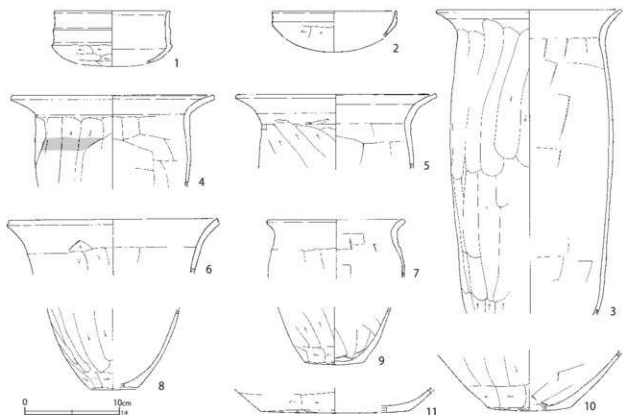
第134号住居跡(第43図)

第134号住居跡はT-16・17グリッドに位置する。重複する第135号住居跡よりも古い。また、第103号土城、第3・6号溝跡とも重複するものと考えられ、本住居跡の方が古いと推定される。

カマドと住居跡掘り方が遺存するのみで、平

面形は不明である。残存規模は長さ2.68m、幅2.26m、深さ0.05mである。主軸方位はカマドを基準にするとN-0°(座標北)を指す。床面は削平され、床面の状況、覆土の状況は明らかでない。

カマドは北壁に設置されている。不整楕円形で、規模は長径1.20m、短径0.62m、深さ0.15mである。第4層が天井部崩落土、第5層が灰層に相当すると考えられる。第6層は掘り方であろう。燃烧部は壁ラインを跨ぐようであるが、詳細は不明である。



第42図 第133号住居跡出土遺物

第12表 第133号住居跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	杯	12.0	[5.9]	—	CGIK	10	良好	黄灰白	カマド 有段口縁杯	43-4
2	土師器	杯	(13.0)	[2.8]	—	DI	15	良好	明褐	SJ108B区 北武蔵型杯 全体に風化	
3	土師器	甕	19.4	[32.2]	—	AGH	35	良好	褐	カマド№1 長胴甕	43-5
4	土師器	甕	(21.2)	[9.7]	—	AHI	10	良好	灰白色	貯 胴部に白色粘土帯状に付着 カマド掛口固定用か	43-6
5	土師器	甕	(21.0)	[8.0]	—	ACGIK	15	普通	暗褐	貯 外面風化著しい	
6	土師器	瓶	(22.0)	[5.8]	—	GHIK	5	良好	淡橙褐	T-18P6 瓶と思われる	
7	土師器	小型甕	—	[6.2]	—	GIK	5	良好	黒褐	貯 外面被熱か 灰が被ったように変色	
8	土師器	甕	—	[8.4]	(4.8)	DGIK	40	普通	暗褐	貯 底部剥落	
9	土師器	甕	—	[6.1]	(6.2)	AGH	45	普通	褐	カマド№1	
10	土師器	壺	—	[6.4]	(9.0)	DEHI	20	良好	暗褐	掘り方	
11	土師器	鉢か	—	[2.7]	(17.6)	CGHIK	15	良好	赤褐	掘り方	

ピットは3基検出された。P1は深さ0.34mで位置的にも、主柱穴の可能性はあるが、P2の帰属は不明確である。P3は住居跡よりも新しい時期の所産である。

貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、器壁の厚い土師器甕小片が4点検出されたのみである。武蔵型甕の破片は含まれない。

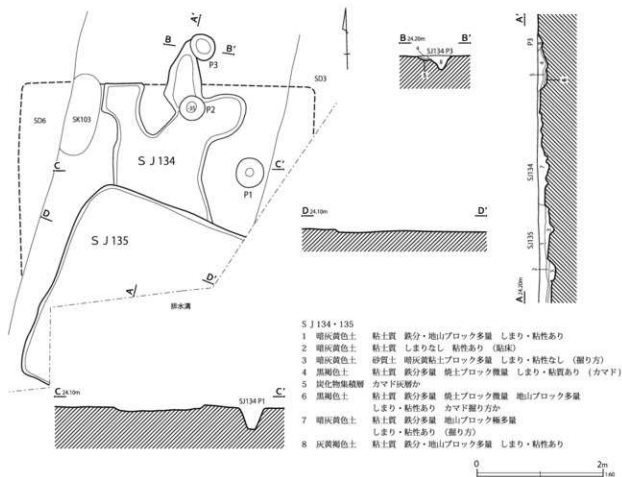
時期は不明確であるが、おそらく6世紀後半か

ら7世紀代と思われる。

第135号住居跡 (第43図)

第135号住居跡はT-16・17グリッドに位置する。重複する第134号住居跡より新しい。また、第3号溝跡とは直接重複しないが、本住居跡の方が古いと考えられる。調査区外に掛かり、遺構の遺存状態は良くない。

平面形は正方形または長方形と推定され、規模は長軸長3.30m、短軸長2.45m、深さ0.10mで



第43図 第134・135号住居跡

ある。主軸方位はN-27°-Eを指す。

覆土は地山ブロックを多量に含む暗灰黄色土が基調となり、大きな土層変化は観察されなかった。故意に埋め戻された可能性がある。

床面はやや起伏があり一定しない。床面下には貼床と掘り方が形成されていた。

カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は非常に少ない。器種的には土師器・甕がある。北武蔵型埴文環の口縁部片が含まれていた。

時期は不明確であるが、北武蔵型埴文環の特徴から、7世紀後半～8世紀初頭(Ⅱ-3期新段階)頃と考えておきたい。

第136号住居跡(欠番)

第137号住居跡(第44図)

第137号住居跡はR-17グリッドに位置する。

重複するR-17P14よりも新しく、第158号住居跡、第25次第11号住居跡、第1号掘立柱建物跡P8・P9、第2号掘立柱建物跡P8・P9、第3号溝跡よりも古い。

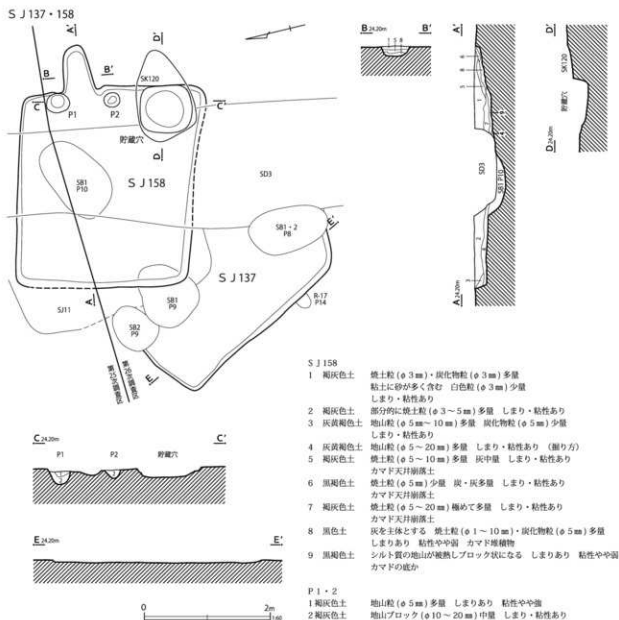
平面形は不整形な正方形と思われ、残存規模は長軸長3.54m、短軸長1.80m、深さ0.05mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

確認面がほぼ床面であったため、床面の状況は不明確である。覆土の詳細も不明である。

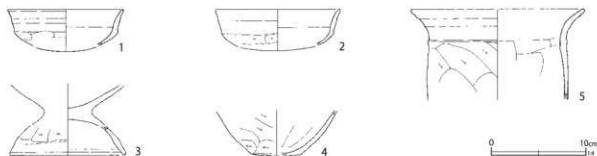
カマド・柱穴・貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器・甕・台付甕が検出されているが、量的には少なく、すべて小片である(第45図)。

第45図1は有段口縁環である。2は模倣坏で、



第44図 第137・158号住居跡



第45図 第137号住居跡出土遺物

第13表 第137号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	杯	(12.0)	[3.8]	—	DGI	35	普通	褐色	A区 有段口縁杯 内面煤付着 全体に風化	43-7
2	土師器	杯	(13.0)	[3.8]	—	CEI	10	不良	黄褐色	A区 坏蓋模倣杯 風化著しい	
3	土師器	台付甕	—	[3.0]	(12.0)	GIM	5	普通	淡褐色	脚部のみ残 甕含む	
4	土師器	甕	—	[4.8]	(5.2)	DGI	25	普通	黒褐色	A区	
5	土師器	甕	(18.0)	[9.6]	—	OGI	20	良好	褐色	A区	

口径は13cm前後となろう。3は台付甕、4・5は甕である。

時期は不明確であるが、6世紀後半～7世紀前半(Ⅱ-3期古～中段階)頃と推定される。

第138号住居跡 (第46・47図)

第138号住居跡はR・S-17・18グリッドに位置する。重複する第139号住居跡よりも新しく、第18・124・140号住居跡、第104号掘立柱建物跡P1よりも古い。第25次第25号住居跡は本住居跡の上面に重複していたが、削平により明確には検出できなかった。

平面形はやや歪んだ正方形で、規模は長軸長6.26m、短軸長6.11m、深さ0.18mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

覆土は、地山土を含む褐灰色土を基本に構成され、大きく上下層の2層に分かれる(第1・2層)。第4層は掘り方覆土で、底面は凹凸が激しい。床面は全面貼床が施され、緩やかな起伏がある。南壁近くの床面には、0.90×0.80mの範囲に炭化物が広がっていた。

カマドは北壁に設置され、煙道部先端は第140号住居跡に壊されていた。規模は長さ1.80m、燃焼部内壁幅0.78m、深さ0.27mである。燃焼部と煙道部は明確には分けられないが、概ね壁ラインの内側が燃焼部、壁ラインの外側が煙道部と考えられる。煙道部は緩やかに外方に立ち上がっている。

袖は約0.90m壁内に延び、先端(焚口部)左右には土師器甕が補強材として据えられていた。土師器甕は底部を下にした正位の状態で、約0.30m埋め込まれていた。口縁部片は発見されなかつ

たので、口縁部の欠けた長胴甕を利用した可能性がある。袖部は地山ブロックを含む粘質土を積んで構築されていた。

カマド覆土は第2・3層が天井部崩落土、その下面が灰層=火床面、第4層は掘り方である。

土壌は1基、カマド前面から検出された。平面形は楕円形で、規模は径1.35×1.02m、深さは0.20mである。覆土は粘土ブロックと地山ブロックの混土层で、人為的に埋め戻された状況が認められた。上面には床面が形成され、いわゆる床下土壌と考えられる。

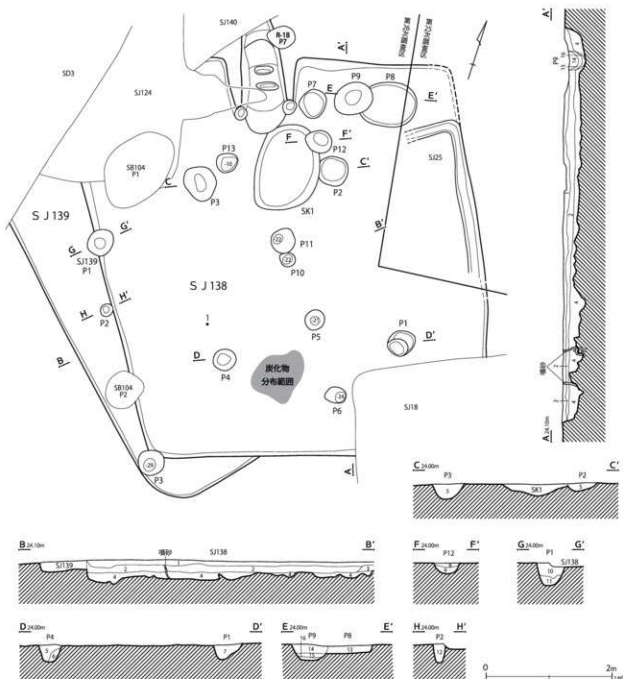
ピットは13基検出された。深さは全体に浅い。P1～P4を主柱穴に想定すると、P2は特に浅く、配置的にもややずれるため、P1・P3・P4を主柱穴と考えておきたい。P8は位置的には貯蔵穴だが、床面レベルで遺物が広がっており、貯蔵穴とはならない可能性が高い。壁溝は検出されなかった。

遺物はカマド周辺から比較的多く出土した。土師器杯・甕がある(第48図)。図示資料以外に土師器高杯、須恵器杯小片がある。

第48図1～4は土師器有段口縁杯である。口径10.0～11.6cmと小振りである。1はP4近くの床面より約10cm浮いた位置から出土した。ほぼ完形品で、黒色処理された可能性がある。口径は10.7cm。2・3はP9、4はP8から出土した。

5～11は土師器長胴甕である。8・9はカマド補強材として袖の先端に埋め込まれたものである。

時期は土師器供膳器が小振りの有段口縁杯のみで構成され、北武蔵型杯や北武蔵型暗文杯がセットに加わっていないことから7世紀前半～中頃

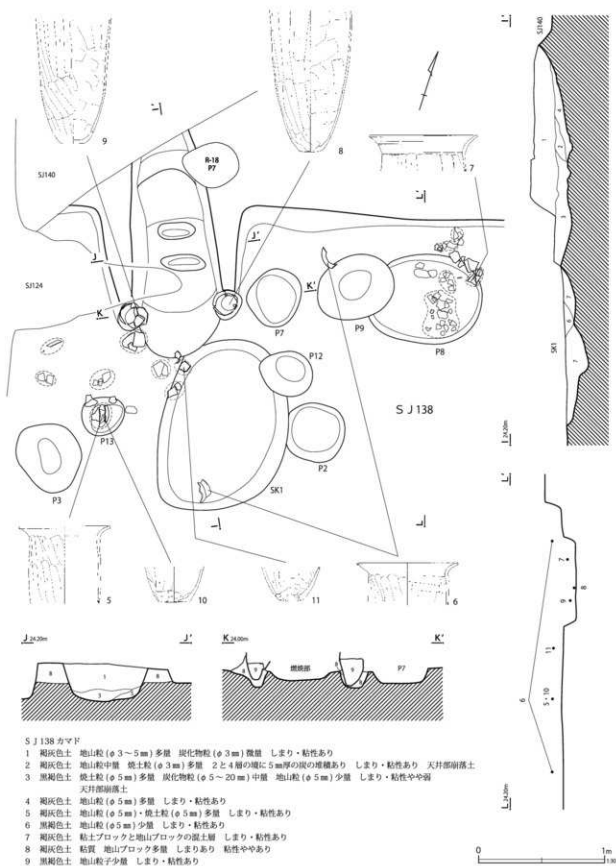


S J 138・139

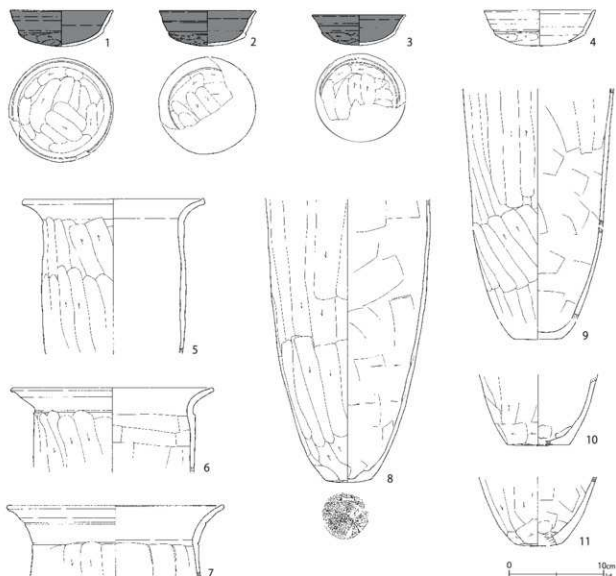
- 1 褐灰色土 地山粒 (φ 5 mm) 中量 炭土粒 (φ 5 mm) 炭化物粒 (φ 5 mm) 微量
しまり・粘性あり
- 2 褐灰色土 地山粒 (φ 3～5 mm) 極めて多量 地山ブロック (φ 50 mm) 少量
炭土粒 (φ 5 mm)・炭化物粒 (φ 5 mm) 中量 しまり・粘性あり
- 3 黒褐色土 炭土粒 (φ 3 mm)・炭化物粒 (φ 3 mm) 微量 しまり・粘性あり
- 4 褐灰色土 地山ブロック (φ 30～50 mm) 多量 しまり・粘性あり (掘り方)
- 5 黒褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 中量 炭土粒 (φ 3 mm) 微量 しまり・粘性あり
- 6 褐灰色土 地山に似る 全体が砂っぽい 炭化物粒 (φ 3 mm) 微量
しまり・粘性やや弱
- 7 黒褐色土 地山粒 (φ 5～20 mm) 多量 しまり・粘性あり

- 8 暗褐色土 白色粒微量 しまり・粘性やや強
- 9 灰黄褐色土 白色粒・赤褐色粒・炭化物微量 しまり・粘性やや強
- 10 灰黄褐色土 シルト 地山ブロック多量 鉄分少量 しまり・粘性あり
- 11 地山ブロック集積層 灰黄褐色土 灰黄褐色シルトブロック少量
鉄分多量
- 12 灰黄褐色土 シルト 地山ブロック少量 鉄分多量
- 13 褐灰色土 地山粒 (φ 5～10 mm) 多量 しまり・粘性あり
- 14 黒褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 少量 しまり・粘性あり
- 15 黒褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 多量 しまり・粘性あり
- 16 灰黄褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 微量 しまり・粘性あり

第46図 第138・139号住居跡



第47図 第138号住居跡遺物出土状況



第48図 第138号住居跡出土遺物

第14表 第138号住居跡出土遺物観察表 (第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	10.7	3.9	—	CDEGI	95	普通	淡褐	№16 有段口縁坏 黒色処理の可能性あり 内面風化	44-1
2	土師器	坏	(10.0)	3.7	—	CDI	35	良好	褐	P 9 有段口縁坏 内外面黒色処理 (漆か)	44-2
3	土師器	坏	11.6	3.8	—	AGI	50	良好	黒褐	P 9 有段口縁坏 内外面黒色処理 (漆か)	44-3
4	土師器	坏	(11.6)	[3.4]	—	ACDI	25	良好	褐	P 8 有段口縁坏	44-4
5	土師器	甕	(19.0)	[16.4]	—	ACGI	20	普通	褐	№21 長胴甕	44-5
6	土師器	甕	21.2	[9.0]	—	DEI	70	良好	褐	№29・30 A区 D区	45-1
7	土師器	甕	(22.6)	[7.7]	—	ADEG	35	良好	明褐	№9 A区 長胴甕 同一固体あり	45-2
8	土師器	甕	—	[30.0]	4.8	EGHI	80	良好	暗褐	№32 長胴甕	45-3
9	土師器	甕	—	[24.3]	—	CDGI	50	普通	褐	№31 長胴甕 胴部片 外面二次被熱シケ ズリや不明瞭 煤付着	45-4
10	土師器	甕	—	[7.5]	6.6	ADGI	60	良好	褐	№21 A区 長胴甕 全体に風化	
11	土師器	甕	—	[7.3]	(5.0)	AHIK	20	良好	褐	№28 長胴甕	

(Ⅱ-3 期中段階)に位置付けられる。

第139号住居跡 (第46図)

第139号住居跡はS-17・18グリッドに位置する。重複する第124・138号住居跡、第104号掘立柱建物跡、第3号溝跡よりも古い。遺構の遺存状態は悪く、西壁から南壁の一部が検出されたにとどまる。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長5.54m、短軸長1.21m、深さ0.16mである。主軸方位はN-47°-Wを指す。覆土の詳細は不明である。

カマドは検出されなかった。

ピットは3基検出されたが、主柱穴は不明である。貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物はない。時期は不明であるが、遺構の重複関係から7世紀中頃以前という限定は可能である。

第141号住居跡 (第49図)

第141号住居跡はT-U-18・19グリッドに位置する。重複するT-19P7よりも新しく、第102・111号住居跡、第101号掘立柱建物跡P3・P4、第108・115・116・123号土壌、T-19グリッドP5よりも古い。

平面形は正方形の大型住居跡で、規模は長軸長6.58m、短軸長5.93m、深さ0.20mである。主軸方位はN-32°-Eを指す。

覆土は黒褐色土を基調としていた(第1・2層)。第7層が掘り方覆土で、その上面に床面が形成されていた。床面は概ね平坦である。P8南側の床面には炭化材が少量残されていた。

カマドは北壁に設置されているが、燃焼部の大半を第123号土壌に壊されており、詳細は不明である。残存規模は、長さ1.44m、煙道部幅0.27m、深さ0.10mである。煙道部長は約0.80mとなる。燃焼部は壁ラインを0.35m切り込んで造られている。壁内側の袖部は存在したと思われるが、調査時では明確に検出することはできなかった。

第4～6層は煙道部堆積土である。焼土の堆積はあまり目立たなかった。

ピットは10基検出された。P1～P4は規則的に配置され、主柱穴の可能性が高い。深さは0.28～0.35mと比較的浅い。他のピットについては深さ30cmに満たないもので、直接伴うか不明である。

貯蔵穴はカマドに向かって右側の北東コーナーに位置する。平面形は隅丸方形で、長さ0.62m、幅0.61m、深さ0.28mである。覆土は4層に分かれ、第1層と第2層の境と第2層と第4層の間(第3層)に薄い炭化物層(灰層か)が堆積していた。

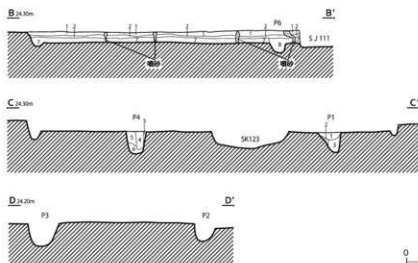
壁溝はカマドの周囲と南壁・東壁の一部に欠ける部分がある。規模は、幅0.13～0.22m、深さ0.06～0.10mである。

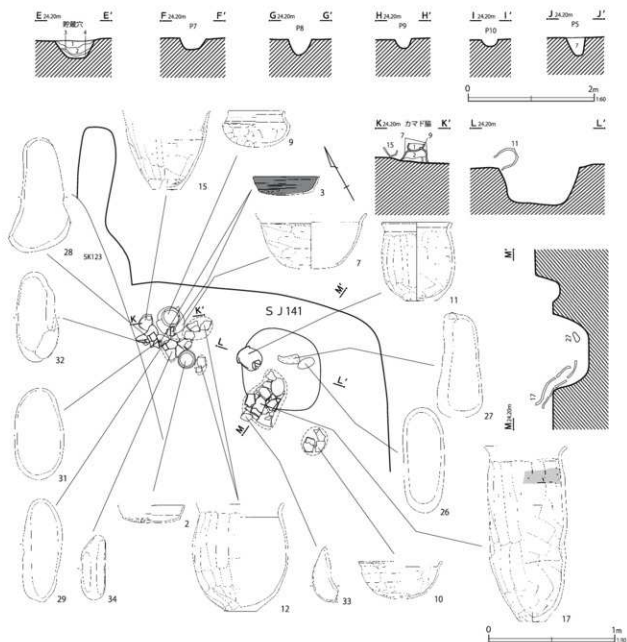
出土遺物は非常に多い。土師器(坏身模倣坏・有段口縁坏)・甕・小型甕・鉢・甔、須恵器蓋、弥生土器甕が検出されている(第51～53図)。

特にカマド右側と貯蔵穴周辺からまとまって遺物が出土した。カマド右側からは底部を欠いた鉢(第51図7)を台として逆位に据え、その上に別のやや小振りの鉢(第51図9)が正位に置かれた状態で出土した。その横の床面からは完形の土師器坏(第51図2)が出土した。

貯蔵穴からは、土師器長胴甕が中に流れ込むような状態で検出された。また、貯蔵穴横に伏せた状態で置かれた小型甕が、貯蔵穴が埋没した段階に、貯蔵穴側に倒れ掛かるかのような状態で検出されている(第51図11)。

第51図1は須恵器蓋である。正確な出土位置は不明だが、カマド右側の覆土(B区)から出土した破片とT-19グリッドから出土した破片が接合した。胎土は緻密で、硬質な焼き上がりである。口縁部は比較的長く直立し、弱い稜(沈線)で天井部と区画される。天井部はヘラ切り後回転ヘラケズリ。産地は不明だが、東海産の可能性が





S J 141

- 1 黒褐色土 地山粒 (φ 3 ~ 5 mm) 少量 しまり・粘性あり
- 2 黒褐色土 地山粒 (φ 3 ~ 5 mm) 多量 炭化物粒 (φ 5 mm)・焼土粒 (φ 5 mm) 中量 しまり・粘性あり
- 3 灰黄褐色土 地山粒・ブロック主体 しまり・粘性あり
- 4 灰黄褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 多量 しまり・粘性あり (カマド煙道)
- 5 黒褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 多量 焼土粒 (φ 2 ~ 5 mm)・炭化物粒 (φ 3 mm) 微量 しまり・粘性あり (カマド煙道)
- 6 灰黄褐色土 地山ブロック (φ 10 ~ 20 mm) 主体 しまり・粘性あり
- 7 灰黄褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 少量 しまり・粘性あり (P 6)

貯蔵穴

- 1 褐灰色土 地山粒 (φ 10 mm) 少量 2層との境にうすく炭増積 しまりあり 粘性強
- 2 褐灰色土 地山粒 (φ 5 ~ 10 mm) 多量 炭化物粒 (φ 5 mm) 少量 しまりあり 粘性強
- 3 灰黄褐色土 地山粒 (φ 5 ~ 10 mm)・炭 (φ 5 mm) 多量 しまりあり 粘性強
- 4 灰黄褐色土 全体が砂っぽい 地山粒 (φ 5 ~ 10 mm) 少量 しまり・粘性あり

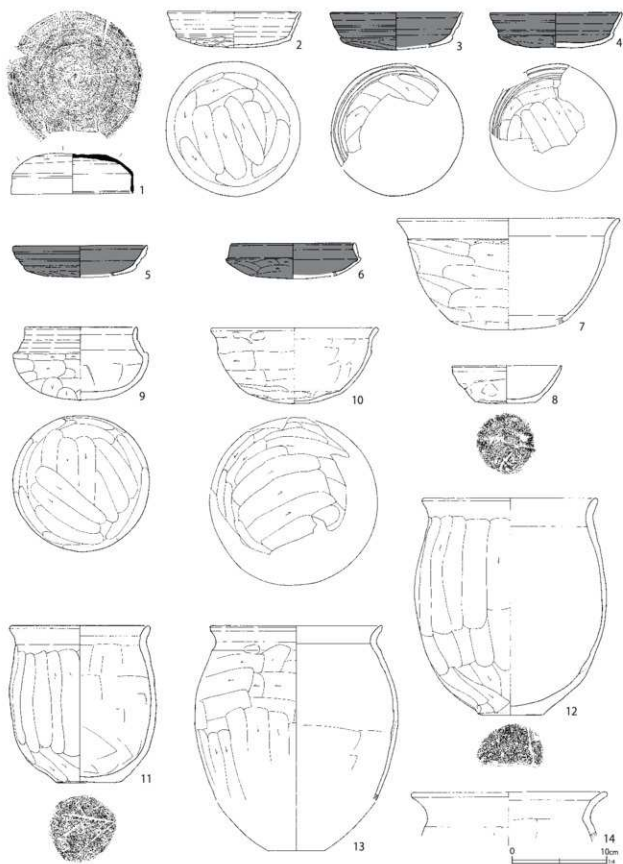
P 1・4・5

- 1 褐灰色土 地山粒 (φ 5 mm) 多量 焼土粒 (φ 5 mm) 微量 しまりあり 粘性強
- 2 褐灰色土 地山に近く全体に砂っぽい しまり・粘性あり
- 3 褐灰色土 地山粒 (φ 5 mm)・炭化物粒 (φ 5 mm) 多量 しまりあり 粘性強
- 4 灰白色土 地山ブロック主体 褐灰色粘質土との混土層 小石 (φ 10 ~ 20 mm) 少量 しまりあり 粘性やや弱
- 5 灰白色土 全体に砂を含む 小石 (φ 3 ~ 10 mm) 少量 しまりあり 粘性やや弱
- 6 褐灰色土 地山粒 (φ 3 ~ 5 mm) 多量 地山粒 (φ 5 ~ 10 mm) 中量 しまり・粘性あり
- 7 暗褐色土 白色粒微層 確少量 しまり・粘性やや強

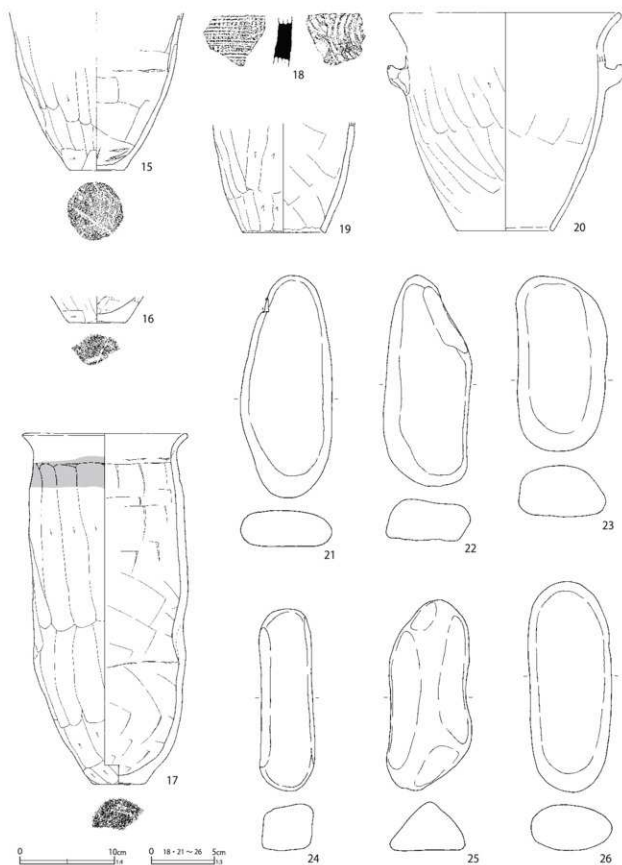
カマド脇

- 1 灰黄褐色土 土師器断片 (φ 10 ~ 15 mm) 少量 炭化した有機物か しまり・粘性あり
- 2 黒色土 焼土粒 (φ 5 mm) 微量 しまり・粘性あり
- 3 灰黄褐色土 地山ブロック (φ 10 ~ 20 mm) 主体 しまり・粘性あり

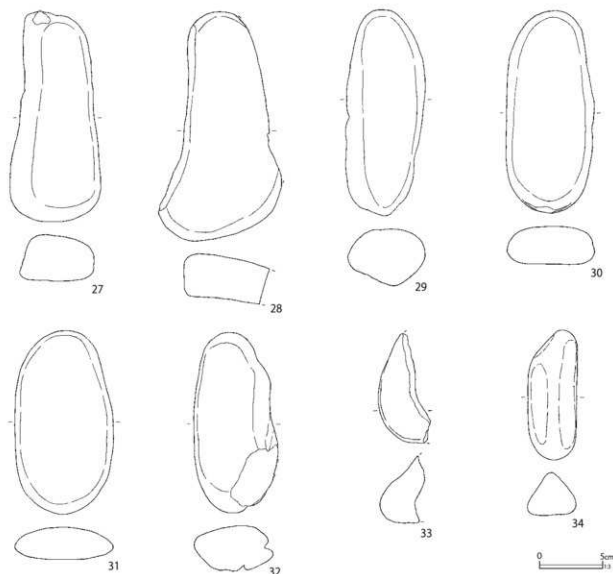
第50図 第141号住居跡・遺物出土状況 (2)



第51図 第141号住居跡出土遺物（1）



第52図 第141号住居跡出土遺物（2）



第53図 第141号住居跡出土遺物（3）

第15表 第141号住居跡出土遺物観察表（第51～53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	11.8	4.2	—	G	95	良好	灰	B区 T-19 産地不明（東南海か） MT-15 ～TK10併行か 胎土精良 弱い沈線（横） により口縁区画する 天井部ヘラ切り後回 転ヘラケズリ 胎土緻密 硬質	45-7
2	土師器	坏	14.6	3.8	—	CEH	100	良好	褐	№1 有段口縁坏	46-1
3	土師器	坏	(14.0)	[3.7]	—	CDGI	30	良好	茶褐	№8・12 有段口縁坏 内外面黒色処理 (漆か)	46-2
4	土師器	坏	(13.8)	3.7	—	CI	25	普通	黒褐	C区 D区 有段口縁坏 内外面黒色処理 (漆か) 口縁浅い沈線2条	46-3
5	土師器	坏	(14.0)	[3.2]	—	CEI	25	良好	茶褐	B区 有段口縁坏 内外面黒色処理	
6	土師器	坏	(13.0)	[3.5]	—	CGI	25	普通	褐	B区 坏身模倣坏 黒漆 内外面黒色処理 (漆か)	
7	土師器	鉢	23.2	[11.2]	—	DEGH	80	良好	淡褐	№13 粗い砂礫多 二次被熱により器表面 脆い 底部欠失	47-4
8	土師器	坏	11.5	4.0	6.2	GHI	95	良好	橙褐	C区 粉っぽい胎土 調整不明瞭 粉っぽ い胎土で指に付く	46-4
9	土師器	鉢	11.7	7.7	—	CDGHI	90	良好	明褐	№11・カマド	47-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
10	土師器	鉢	(17.4)	8.0	—	DEGH	50	良好	赤褐	№10・19 粗い砂粒多 内外面二次被熱	47-2
11	土師器	小型甕	14.4	16.5	7.0	ADEGI	100	良好	赤褐	№16 底部木葉痕 外面二次被熱	47-3
12	土師器	小型甕	(18.0)	23.0	(7.0)	ADGI	60	普通	褐	№2・3・5・15・21 B区 D区 カマド 胴部下半二次被熱	47-5
13	土師器	甕	(18.0)	[18.4]	—	GHI	25	良好	明褐～灰白	C区 胴り方 武蔵型甕の退化形態 器壁厚い ケズリ甕	48-1
14	土師器	甕	(20.0)	[5.4]	—	DEHI	20	良好	明褐		
15	土師器	甕	—	[16.6]	5.8	DHI	25	良好	淡褐	№10 B区 底部木葉痕後ケズリ	48-2
16	土師器	甕	—	[2.8]	(6.0)	DEIM	25	普通	褐	A区 底部木葉痕 縦含む	
17	土師器	甕	17.0	37.0	(5.5)	AGI	95	不良	暗褐	№15 貯 B区 底部木葉痕か 胴部は槽内形に歪む 口縁直下に帯状の変色帯(煤付着しない部分)あり カマドに掛けたときの粘土充填痕か	48-4
18	須恵器	甕	—	[4.0]	—	DEI	5	良好	青灰	C区 産地不明 甕胴部片 外面カキ目 内面同心円文当具 断面中心部に還元面、その周囲に酸化面 外周還元面	
19	土師器	甕	—	[11.6]	(8.6)	EGHI	20	普通	淡褐褐	№21	
20	土師器	甕	—	[18.6]	10.0	CEGHIK	30	良好	淡褐	№20・21 A区 把手付 胎土に砂粒多	48-3
21	石製品	編物石	長さ17.6	幅7.2	厚さ3.1	重さ559.4				№22 砂岩 平面・断面槽内形 完形	64-6
22	石製品	編物石	長さ16.6	幅7.0	厚さ4.0	重さ535.0				№23 砂岩 断面隅丸長方形 以前使用した敲打板か 完形	64-6
23	石製品	編物石	長さ13.9	幅7.2	厚さ4.4	重さ686.9				№26 砂岩 完形	64-6
24	石製品	編物石	長さ14.4	幅4.4	厚さ4.2	重さ406.6				№24 砂岩 完形	
25	石製品	編物石	長さ15.1	幅6.7	厚さ4.4	重さ572.5				№25 ホルンフェルス 断面三角形	
26	石製品	編物石	長さ16.7	幅6.6	厚さ3.9	重さ614.0				№17 砂岩 完形	
27	石製品	編物石	長さ16.6	幅7.2	厚さ3.7	重さ679.1				№18 花崗閃緑岩 完形	
28	石製品	編物石	長さ18.1	幅9.7	厚さ4.3	重さ890.2				№9 砂岩 欠損 打弁を転用か	
29	石製品	編物石	長さ16.3	幅6.4	厚さ4.7	重さ686.9				№6 砂岩 完形	
30	石製品	編物石	長さ15.9	幅7.0	厚さ3.2	重さ566.6				一括 砂岩 平面・断面槽内形 完形	
31	石製品	編物石	長さ14.5	幅7.8	厚さ2.7	重さ459.8				№8 砂岩 完形	
32	石製品	編物石	長さ14.2	幅[6.7]	厚さ[3.9]	重さ476.6				№29 砂岩 欠損 一部欠損	
33	石製品	編物石	長さ[8.7]	幅[4.2]	厚さ[5.6]	重さ152.0				№14 流紋岩 欠損 一部残存	
34	石製品	編物石	長さ10.3	幅3.9	厚さ3.8	重さ212.2				№2 砂岩 完形	

あろうか。MT15～TK10併行期と考えておきたい。2～5は土師器有段口縁坏である。いずれも大振りで口径14cm前後にまとまる。2は完形品で、カマド周辺の床面から出土した。2は不明確だが、3～5は黒色処理が施されている。6は須恵器坏身を模倣した坏で、口縁部は内傾する。口径13.0cmである。8は平底風の土師器坏である。9世紀末～10世紀初頭頃のもので、混入品と思われる。

7・9・10は土師器鉢である。9はカマド右脇から台の上に乗った状態で出土した。有段口縁形態で、口縁部は内傾して立ち上がる。7は9の台として逆位の状態で出土した。底部は欠失している。内外面ともに二次被熱を受けている。10

も内外面に二次被熱を受けているようである。

11・12は小型甕である。11は貯蔵穴上部から出土した完形品。底部には木葉痕が残る。12は11の小型甕の横から出土した。

第51図13～第52図17は土師器甕である。13は10世紀前半に位置付けられる土師器甕で、混入品である。重複する第102号住居跡に帰属する可能性がある。17は貯蔵穴に流れ込むような状態で出土した。口縁部直下から胴部上端にかけて煤が抜けた白色の変色帯が見られる。カマド器設部と甕の隙間を埋めるために貼った、粘土の痕跡と思われる。口縁部は短く上方に立ち上がり、胴部はやや下膨れである。最大径は胴部にある。

18は須恵器甕胴部片、19・20は土師器甕であ

る。21～34は石製品。棒状の石製品が多く、大半は編物石と考えられる。カマド左脇の壁際、第123号土壌下面、貯蔵穴から数個ずつ出土した。

時期は土師器有段口縁坏と甕の様相から6世紀後半(Ⅱ-3期古段階)に位置付けられる。

第142号住居跡 (第54図)

第142号住居跡はS・T-13・14グリッドに位置する。遺構相互の重複はないが、東側に第132号住居跡が近接する。西側約7mには第1号墓跡(円形区画墓)が位置する。住居北側は調査区外に延びている。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長3.62m、短軸長1.95m、深さ0.10mである。主軸方位はN-0°(座標北)を指す。

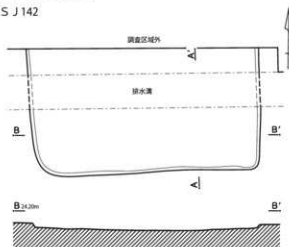
覆土は褐灰色の粘質シルトで構成され、土層変化は観察されなかった。また、噴砂が住居跡を壊していた。

カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器坏蓋模倣坏が検出されたにとどまる。

第54図1は土師器坏蓋模倣坏である。口唇部を欠くが、推定口径10.6cmと小振りで浅身である。口縁と体部を画する段はまだしっかりしている。25%残存する。褐色で焼成は普通である。B区から出土した。

S J 142



第54図 第142号住居跡・出土遺物

時期は7世紀前半～中葉(Ⅱ-3期中段階)頃と考えておきたい。

第143号住居跡 (欠番)

第144号住居跡 (欠番)

第146号住居跡 (欠番)

第150号住居跡 (第22図)

第150号住居跡はT-18グリッドに位置する。重複する第120・121号住居跡、第147号土壌に壊されていた。また、西側は調査区外に延び、遺構の遺存状態は良くなかった。

平面形は方形系と推定されるが、詳細は不明である。規模は北辺長1.63m、南北長3.00m以上、深さ0.17mである。主軸方位はN-109°-Eを指す。

カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

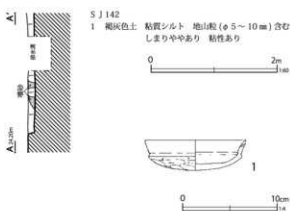
出土遺物は土師器坏蓋模倣坏・甕の小片が検出されている。

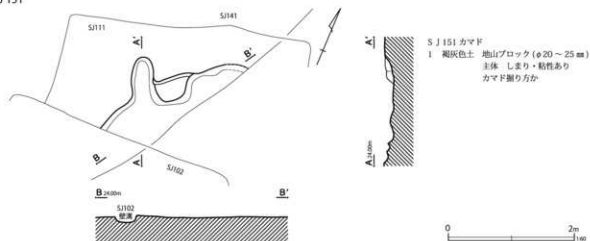
正確な時期は不明であるが、遺構の重複関係と出土遺物から6世紀～7世紀代と推定される。

第151号住居跡 (第55図)

第151号住居跡はT-19グリッドに位置する。重複する第102・111・141号住居跡に壊され、本住居跡が最も古い。

遺存状態は極めて悪く、詳細は不明である。平面形は不整形で、規模は長さ1.20m、幅0.45m、





第55図 第151号住居跡

深さ0.09mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

カマドは北西壁に設置され、規模は長さ0.74m、幅0.36m、深さ0.14mである。覆土は地山ブロックを多量に含む褐色土で充填されており、カマド掘り方と思われる。焼土や灰層は検出されなかった。右袖部には地山が高く残されていたが、確実に袖部とは言えない状況であった。

ピット・貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物はなかった。

時期は不明であるが、遺構の重複関係から6世紀後半、またはそれ以前となる。

第152号住居跡→第126号住居跡

第153号住居跡 (第56図)

第153号住居跡はT-14グリッドに位置する。重複する第130号住居跡よりも古い。

平面形は正方形で、規模は長軸長4.40m、短軸長4.22m、深さ0.07mである。主軸方位はN-73°-Eを指す。

確認面で床面が露出しており、覆土及び床面の詳細は不明である。

カマドは検出されなかった。東壁に設置された可能性が高い。

ピットは6基検出された。P2は深さ0.22m

で、柱痕が残されていた。住居に伴う柱穴の可能性はあるが、他のピットはすべて深度が浅く住居の主柱穴とはならないと思われる。

貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器甕小片が検出されているが、図化可能な遺物はない。

時期は第130号住居跡との重複関係から7世紀前半以前である。

第154号住居跡 (第57図)

第154号住居跡はT・U-19・20グリッドに位置する。調査区南東部の壁面から発見され、詳細は不明とせざるを得ない。排水溝の西側には第103・106号井戸跡があるが、重複するか否かも明確にできなかった。断面観察でU-19グリッドP6を壊していることは確認できた。

平面形・規模等の詳細は不明、深さは0.20mである。主軸方位も不明である。

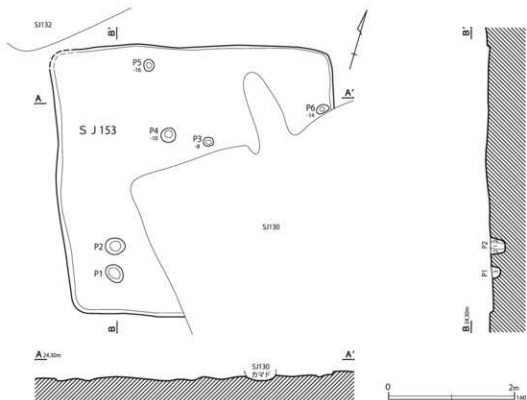
カマドや炉跡の有無も不明である。

出土遺物はなかった。時期も不明である。

第155号住居跡 (第58図)

第155号住居跡は調査区南西端部のU-9グリッドに位置する。重複する第2号畠跡が上面に乗っていた。住居南側は調査区外に延びていた。

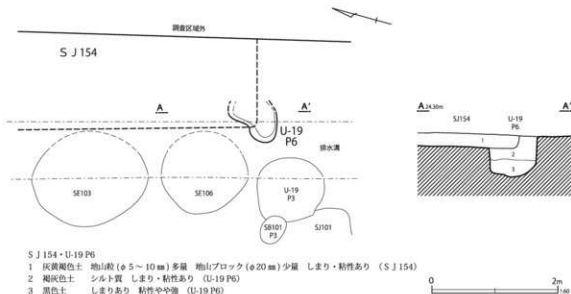
平面形は隅丸方形と推定され、残存規模は長軸長4.55m、短軸長2.25m、深さ0.17mである。



S J 153 P1・2

- 1 褐灰色土 粘土質 炭化物粒 (φ 1 mm)・地山粒 (φ 2〜3 mm) 微量 しまり・粘性あり
- 2 褐灰色土 粘土質 地山粒 (φ 5〜10 mm) 塊状に含む しまり・粘性あり
- 3 褐灰色土 粘質シルト 地山粒 (φ 3〜4 mm) 少量 しまり・粘性あり

第56図 第153号住居跡



S J 154・U-19 P6

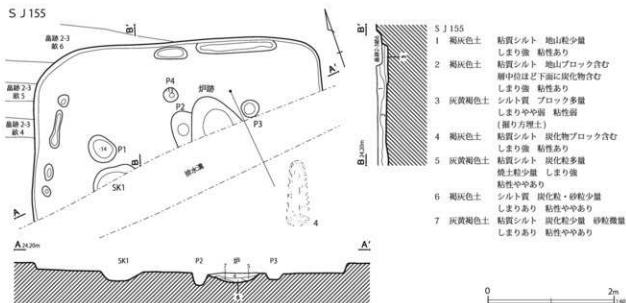
- 1 灰黄褐色土 地山粒 (φ 5〜10 mm) 多量 地山ブロック (φ 20 mm) 少量 しまり・粘性あり (S J 154)
- 2 褐灰色土 シルト質 しまり・粘性あり (U-19 P6)
- 3 黒色土 しまりあり 粘性やや強 (U-19 P6)

第57図 第154号住居跡

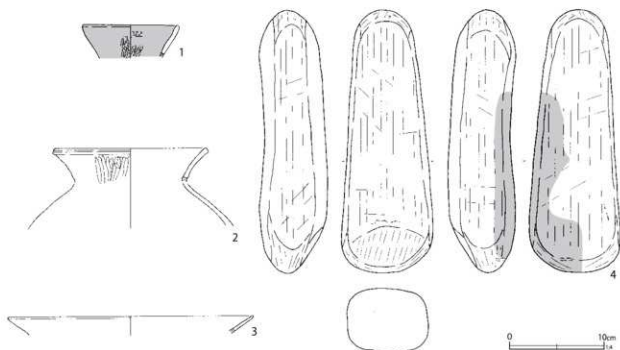
主軸方位はN-15°-Eを指す。

炉跡は排水溝際の床面に設置されるが、南側半分は削平されていた。残存規模は長径0.86m、短径0.62m、深さ0.18mである。

覆土は炭化物粒子と炭化物ブロックを含む褐灰色土を基調としていたが、焼土はあまり多く含まれなかった。全体に鉄分の含有が多く、底面の被熱の有無は明らかではない。



第58図 第155号住居跡・遺物出土状況



第59図 第155号住居跡出土遺物

第16表 第155号住居跡出土遺物観察表 (第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	埴	(10.0)	[3.4]	—	AH1	40	良好	黄褐	赤彩 内外面ミガキ後赤彩	65-1
2	土師器	甕	(16.0)	[3.6]	—	GH1	5	良好	淡褐	頸部 外面ヘラミガキ 五領	
3	土師器	高坏	(26.0)	[1.9]	—	GI	5	普通	淡褐	風化により調整不明瞭 ミガキか 五領	
4	石製品	不明	長さ27.8	幅9.7	厚さ7.2	重さ2874.0				N.1 凝灰岩 全体に摩滅 一部に被熱痕あり	

ピットは4基検出されたが、明確な主柱穴は確認できなかった。

第1号土壙（SK1）は長さ0.74m、幅0.25m、深さ0.15mである。性格は不明だが、炉跡の可能性がある。

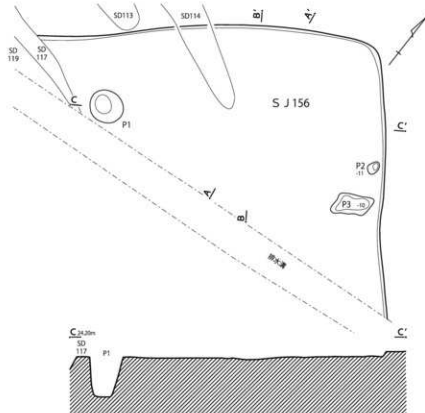
壁溝は北壁部では壁際に検出されたが、西壁部では壁から約0.30m内側から点々と検出された。規模は、幅0.10～0.20m、深さ約0.05mである。

出土遺物はごく少ない。土師器高坏・壺・埴、石製品が検出されている（第59図）。

第59図1は赤彩された埴口縁部片である。内外面ヘラミガキ。2は土師器壺である。外面ヘラミガキ調整される。3は土師器高坏である。口縁部は薄く仕上げられる。4は炉跡の横から出土した石製品。凝灰岩製で一部に被熱痕が確認される。長さ27.8cm、重量2874.0g。全体に摩滅している。炉跡の枕石であろうか。

時期は古墳時代前期と考えられる。

第156号住居跡（第60図）



第60図 第156号住居跡

第156号住居跡はT-15、U-14・15グリッドに位置する。住居南半は調査区外に延びていた。重複する第114・117・119号溝跡よりも古い。

平面形は正方形と推定され、残存規模は長軸長5.40m、短軸長4.32m、深さ0.15mである。主軸方位はN-54°-Eを指す。

覆土は黄灰色土であったが、深度が浅いために土層変化は観察されなかった。床面は概ね平坦である。第1層は掘り方覆土と思われる。

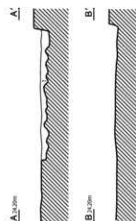
カマドは検出されなかった。

ピットは3基検出された。P1は直径0.55×0.49m、深さは0.64mで、主柱穴を構成する柱穴と考えられる。他の2本は主柱穴と考えるのは難しい。

貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、土師器甕細片が2点検出された。

時期は不明だが、大型住居であり、第130号住居跡とほぼ軸が揃うことから7世紀前半前後と考えておきたい。



S J 156

1 黄灰色土 粘土質 炭化物（φ1～2mm）微量
地山ブロック（φ1～10mm）多量
しまり・粘性強 掘り方

0 2m

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第61図)

第1号掘立柱建物跡は、遺構密集箇所のR-17・18グリッドに位置する。第25次調査区と第26次調査区に跨っており、第25次分は既報告であるが、ここではそれも含めて報告する。

重複する第25次第32・39号住居跡・第2号掘立柱建物跡、第26次第137・140号住居跡よりも新しく、第158号住居跡・第3号溝跡・第120号土壌よりも古い。また、第1号掘立柱建物跡は第2号掘立柱建物跡と僅かにずれて位置し、第2号掘立柱建物跡から第1号掘立柱建物跡に連続的に建て替えられたと考えられる。

第1号掘立柱建物跡は3×2間、東西棟の側柱建物跡である。主軸方位はN-74° -Eを指す。

規模は桁行6.51m、梁行4.20mである。柱間距離は桁行が2.17m、梁行が2.10m等間に戻元できるが、柱の当たりが外れる箇所があり、きれいな等間には揃わない。梁行も中間柱は柱筋にきれいに乗らず、棟持柱風にやや外側に突出する。

柱穴は大きく、長径1m前後のものが多く、また、P1~P4ではいずれも北側に張り出し状の浅い掘り込みが存在し、柱抜き取り痕の可能性がある。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯が少量出土した。第61図1は須恵器杯で、P10から出土した。重複する第158号住居跡に伴うものであろう。推定口径は12.0cmで、旧SK138から出土した。5%残存する。焼成は良好で、黄灰褐色。胎土に石英・白色粒子を含む。木野産である。

第25次報告では遺構の重複関係と第2号掘立柱建物跡から出土した遺物(北武蔵型杯)との関係から7世紀という年代観を与えている。第26次調査の成果からは、7世紀後半以降9世紀末~10世紀初頭までということになる。第25次調査で示された年代観を少し下方修正し、7世紀後半~末葉(II-3期新段階)頃と考えておきたい。

第2号掘立柱建物跡 (第62図)

第2号掘立柱建物跡は、遺構密集地域のR-17・18グリッドに位置する。第25次調査区と第26次調査区に跨っており、第25次分は既報告であるが、ここではそれも含めて報告する。

第1号掘立柱建物跡と重複し、本建物跡の方が古い。柱穴がほぼ重なる位置にあることから、第2号掘立柱建物跡から第1号掘立柱建物跡に連続的に建て替えられたと考えられる。

第2号掘立柱建物跡は3×2間、東西棟の側柱建物である。主軸方位はN-66° -Eを指す。P5・P6・P8は第1号掘立柱建物跡柱穴と同一場所に位置すると考えられる。また、P7・P10は第3号溝跡に削平され検出できず、全体に遺構の遺存状態は良くなかった。

規模は桁行7.20m、梁行4.80mである。柱間距離は桁行・梁行ともに2.40mに戻元できるが、柱筋はややずれ気味で、柱間も等間隔には揃わない。

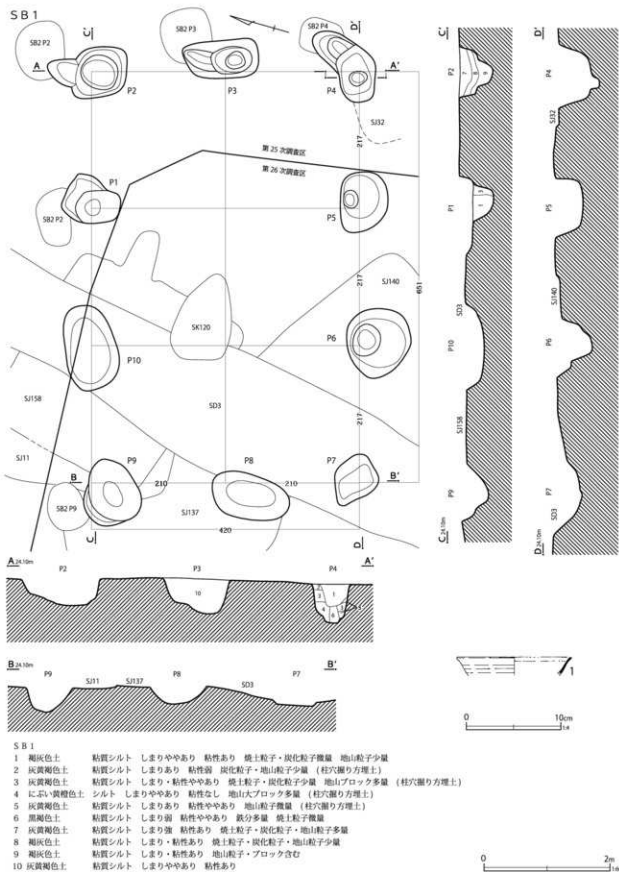
柱穴規模は比較的大きく、P1~P3は長径0.90~0.96m、最も小さいP4で長径0.68mである。P5・P6・P8は第1号掘立柱建物跡と重なっており本来の柱穴規模は不明確である。

覆土はシルト質の灰褐色土を基調としている(第1~4層)が、明確な柱痕は確認できなかった。

出土遺物は、P2から土師器北武蔵型杯が検出されている。既に第25次分で報告済であるが、ここで再録しておく(第62図1)。

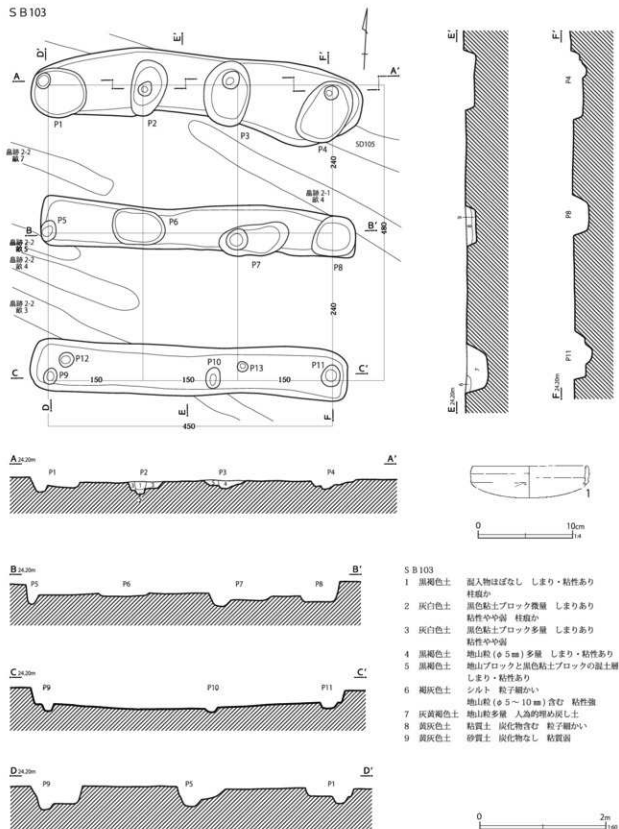
第62図1は土師器杯である。口縁部が小さく内屈し、底部は丸底になる北武蔵型杯と推定される。口縁部直下から下位はヘラケズリ調整されている。推定口径11.6cm、残存高3.0cmである。胎土に角閃石・砂粒・赤色粒子を含む。20%残存する。焼成は普通で、色調は橙褐色である。P2から出土した。遺物の時期は7世紀後半頃と考えられる。

時期は、同一時期の建て替えとすれば7世紀後



第61図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物

S B 103



第63図 第103号掘立柱建物跡・出土遺物

半〜末葉（Ⅱ-3期新段階）頃と考えておきたい。

第103号掘立柱建物跡（第63図）

第103号掘立柱建物跡は、調査区西端部のT・U-9グリッドに位置する。第105号溝跡と第2号畠跡に上面を削平されていた。

2×2間の布掘り建物跡で、東西方向の桁行柱穴間を溝で連結する構造である。規模は桁行4.80m、梁行4.50m、面積21.60㎡である。主軸方位はN-0°（座標北）を指す。

柱間距離は北側桁行で1.50m等間、西側梁行間で2.40m等間となるが、南側桁行では隅柱を繋ぐ柱穴が確認できなかった。柱痕はP2で確認できた（第1・2層）が、他の柱穴では明確に検出できなかった。柱穴自体は小さく、直径0.15m程度である。

布掘り溝の覆土は、粘質の黄灰色から灰黄褐色土を基調としていた。人為的に埋め戻された土である。

出土遺物は南側桁行布掘り溝跡から土師器模倣坏口縁部小片（第63図1）と坏底部小片が、中間の桁行布掘り溝跡から古墳時代前期から中期と推定される土師器埴の肩部小片と壺類胴部細片が検出されたのみである。

第63図1は土師器模倣坏である。口縁部は短く直立する。口径は不安定であるが、推定口径12.0cm、残存高2.2cmである。胎土に長石と白色粒子を含む。焼成は普通で、色調は暗褐色である。5%残存する。南桁行布掘り溝出土であるが、上面を畠跡に壊されており、どちらに属するかは確定できない。

時期は平安時代の第105号溝跡よりも古い。古墳時代に帰属することは確実と思われるが、重複する畠跡は第155号住居跡よりも新しい。古墳時代後期、7世紀頃と考えておきたい。

（3）溝跡

第102号溝跡（欠番）

第104号溝跡（欠番）

第107号溝跡（欠番）

第109号溝跡（第68図）

第109号溝跡は南サイドスタンドのT-18グリッドに位置する。走向方向は西南西から東南東に延びている。第106・133号住居跡、第121号土壇と重複し、第106号住居跡の下層にかろうじて残存していた。第133号住居跡と第121号土壇に壊されていた。

規模は長さ4.70m、幅0.62～0.86m、深さ0.05～0.09mで、断面形は皿形である。覆土は地山ブロックを多量に含む褐灰色土である。

出土遺物は土師器甕・壺がある。第70図1は土師器甕。長胴甕で、口縁部は小さく上方に立ち上がる。6世紀後半頃のものとして推定される。

溝跡の時期も同時期と考えておきたい。

第111号溝跡（欠番）

第112号溝跡（欠番）

第118号溝跡（第67～69図）

第118号溝跡は南サイドスタンドのS・T・U-12グリッドに位置する。走向方向は北から南に延びており、第120・121・123号溝跡とともに南北方位を指向する溝跡群のひとつである。

第123号溝跡との新旧関係は不明確であるが、本溝跡の方が新しい可能性がある。第101号道路跡北側溝の第116号溝跡、第117・119・128号溝跡との新旧関係は本溝跡の方が古い。

規模は長さ16.20m、幅0.84～2.30m、深さ0.18～0.46mで、断面形は皿形である。

覆土は地山粒子を多量に含む褐灰色～黒褐色土を基調としていた。堆積環境は不明確であるが、第1層は水性堆積の可能性はある。

出土遺物は土師器坏、円筒埴輪が検出されている。土師器坏は模倣坏口縁部と丸底の坏底部が出土しているが、北武蔵型坏か模倣坏か不明である。第70図2は円筒埴輪基部片。外面は縦方向の刷毛目、8本/2cm、内面は指ナデ調整である。

時期は第101号道路跡との関係から9世紀以前

で、遺物を考えると6世紀～8世紀前半には収まると推定される。性格は不明である。

第120号溝跡（第66・68図）

第120号溝跡は南サイドスタンド調査区西端のT・U-11グリッドに位置する。重複する第101号道路跡とその北側溝（第110号溝跡）、第117・119号溝跡よりも古い。溝跡は概ね南北方向に延びている。

北側は第117・119号溝跡までで止まり、南は第101号道路跡の中で消失していた。規模は長さ6.34m、幅0.28～0.57m、深さ0.09～0.16mで、断面形は浅い皿状である。覆土はシルト質の褐灰色土であった。

出土遺物は土師器坏底部または壺片・甕が検出されている。第70図4は土師器甕口縁部である。武蔵型甕と思われるが、頸部の屈曲は弱い。8世紀前半から中頃のものと思われる。土師器坏また

は壺は、7世紀から8世紀前半の所産と思われる。

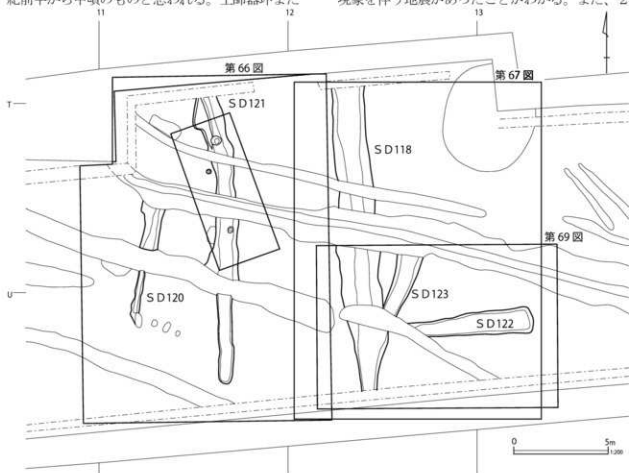
時期は不明確だが、7世紀～8世紀中頃の間には収まると推定される。

第121号溝跡（第66・68図）

第121号溝跡は南サイドスタンドのS・T・U-11グリッドに位置する。南北方向に延びる溝跡で、北側は調査区外に延びていた。南側は第101号道路跡の内部で消失していた。西側約2mには第120号溝跡が位置する。重複する第169号土壇よりも新しく、第101号道路跡とその北側溝SD110、第117・119・128号溝跡よりも古い。

規模は長さ15.13m、幅0.70～1.61m、深さ0.14～0.37mで、断面形は浅い皿状である。

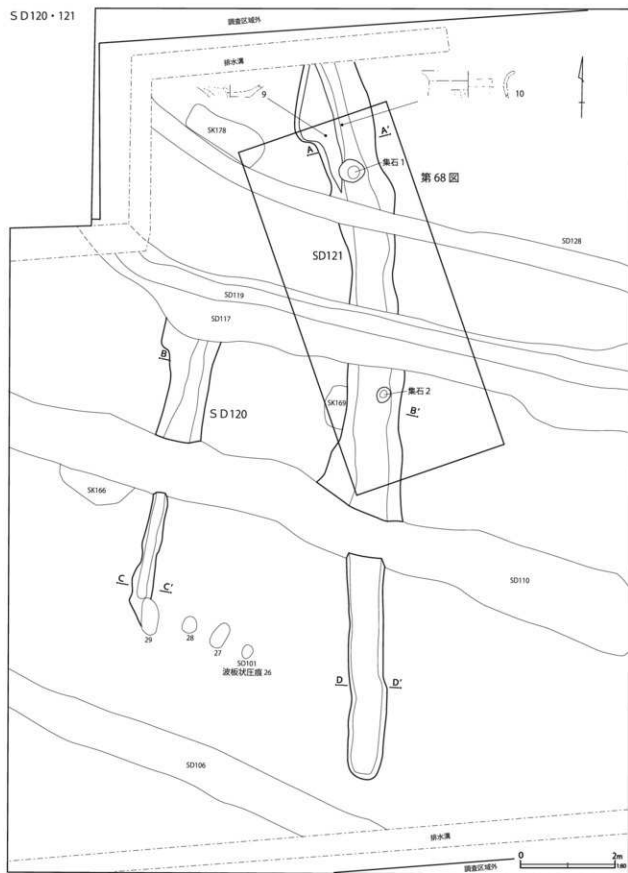
覆土はシルト質の褐灰色土であった。下層の第10層で検出された噴砂が、上層の第8層には延びていないことが確認され、第8層堆積前に液化化現象を伴う地震があったことがわかる。また、2



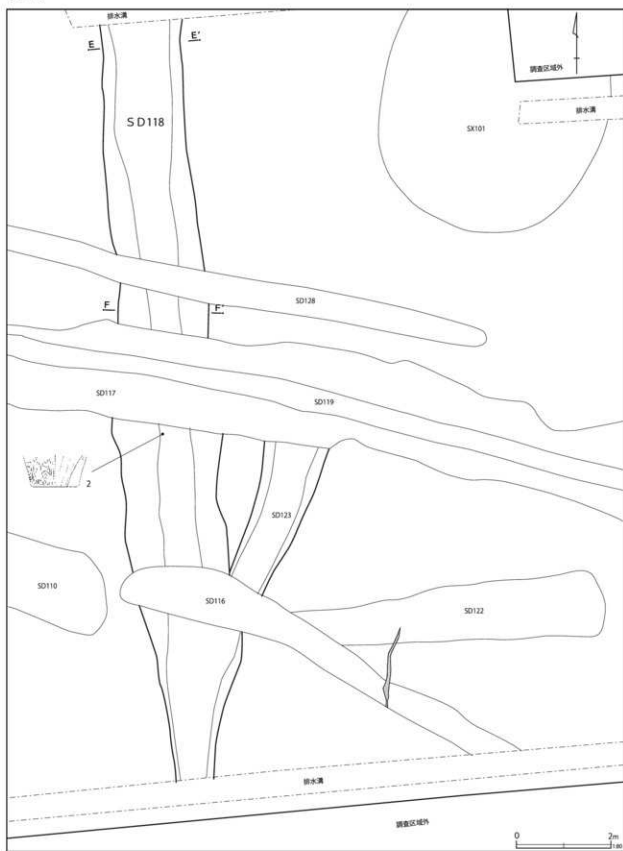
第64図 溝跡全体図(1)



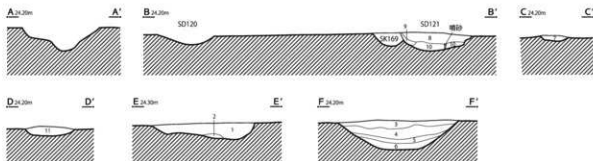
第65図 溝跡全体図 (2)



第66図 第120・121号溝跡・遺物出土状況



第67図 第118号溝跡・遺物出土状況

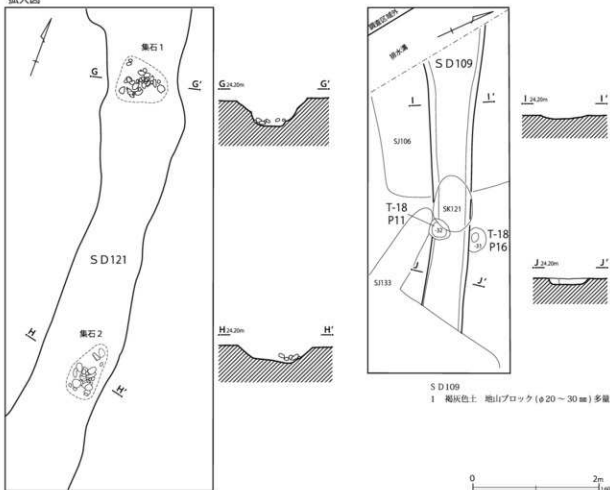


SD118・120・121

- 1 褐灰色土 シルト 地山粒 (φ 5 mm) 多量 しまりあり 粘性ややあり (SD118)
- 2 褐灰色土 粘質シルト 地山ブロック含む しまり・粘性あり (SD118)
- 3 黒褐色土 白色粒 (φ 1~3 mm) 中量 しまり・粘性あり (SD118)
- 4 褐灰色土 地山粒 (φ 5 mm) 中量 しまり・粘性あり 水の影響ありか (SD118)
- 5 褐灰色土 地山粒 (φ 5 mm) 多量 しまり・粘性あり 水の影響ありか (SD118)
- 6 褐灰色土 地山ブロック (φ 20~30 mm) 極めて多量 しまり・粘性あり 水の影響ありか (SD118)
- 7 褐灰色土 シルト 地山粒 (φ 5 mm) 含む しまりあり 粘性ややあり (SD120)

- 8 褐灰色土 粘質シルト 地山粒 (φ 5 mm) 含む しまり・粘性あり (SD121)
- 9 褐灰色土 粘質シルト 地山粒 (φ 5 mm) 少量 しまり・粘性あり (SD121)
- 10 褐灰色土 粘質シルト 地山粒 (φ 5 mm) 多量 粘性あり (SD121)
- 11 褐灰色土 シルト 地山粒 (φ 5 mm) 含む しまりあり 粘性ややあり (SD121)

拡大図



SD109

- 1 褐灰色土 地山ブロック (φ 20~30 mm) 多量

第68図 第109・118・120・121号溝跡・遺物出土状況

地点から集石が検出されたが、性格は明らかにできなかった。

出土遺物は土師器杯（坏蓋模倣坏・有段口縁杯）・甕・鉢か、須恵器長頸瓶胴部・甕、磨石、砥石が検出されている（第70図5～14）。5は土師器模倣坏、6は有段口縁坏である。7は鉢か。8・9は土師器壺、10は土師器長胴甕である。12は不整形の砥石、13・14は磨石である。

遺物の時期は7世紀前半中心と考えられる。

第122号溝跡（第69図）

第122号溝跡は南サイドスタンドのU-12・13グリッドに位置する。東西方向に延びる溝跡で、西側は第101号道路跡北側溝のSD116に壊されていた。その西側は南北溝SD118があるが、接続関係は明らかでなく、その手前で途切れている可能性が高い。また、東側も途切れているので、溝跡というより土壌とすべきかもしれない。

東端寄りの溝底から土師器壺と須恵器瓶が出土した。いずれも口縁部を欠く。壺は大型品である。削平されたものか、故意に欠かれたものかは明らかにできなかった。

規模は長さ4.98m、幅0.82～1.18m、深さ0.17～0.19mで、断面形は扁平な逆台形である。

覆土はシルト質の褐灰色土であった。

出土遺物は土師器壺、須恵器瓶が検出された。第71図15は須恵器瓶としたが、平瓶の可能性もある。口縁部を欠き、胴部はカキ目が巡る。胴部下端から底部は手持ちヘラケズリ調整で、内面は同心円文当具痕と雑なナデが施される。産地は不明である。7世紀から8世紀初頭頃までのものであろう。16は土師器壺で、胴部は薄手で作りは良い。武蔵型甕につながる薄さで、7世紀末～8世紀前半頃のものと考えられる。時期は7世紀代～8世紀前半と推定しておきたい。

第123号溝跡（第69図）

第123号溝跡は南サイドスタンドのT・U-12グリッドに位置する。北北東から南南西方向に延

びる溝跡で、北側は第117・119号溝跡で止まっている。南側は第116号溝跡に壊されていた。第119号溝との新旧関係は本溝跡の方が古い。第118号溝跡との関係はよく掴めなかった。一体のものか、本溝跡の方が古い可能性がある。

規模は長さ3.36m、幅0.90～1.20m、深さ0.06～0.10mで、断面形は皿形である。

出土遺物はなかった。

時期は不明とせざるを得ないが、第101号道路跡との関係から9世紀後半以前であることは疑いない。7世紀～8世紀前半頃と推定される。

第124号溝跡（欠番）

第125号溝跡（第24・25図）

第125号溝跡はS・T-16グリッドに位置する。第125号住居跡・第105号井戸跡・第167号土壇・第6号溝跡と重複する。第125号住居跡・第167号土壇よりも新しく、第6号溝跡よりも古い。第105号井戸跡との新旧関係は、第105号井戸跡の方が新しい。第167号土壇は第125号溝跡下層に位置する。

規模は全長6.80m、幅0.33～0.99m、深さ0.11～0.24mである。走向方向は北西から南東方向で、第6号溝跡の東側からは検出されなかった。

覆土はシルト質の灰黄褐色土を基調としていた。

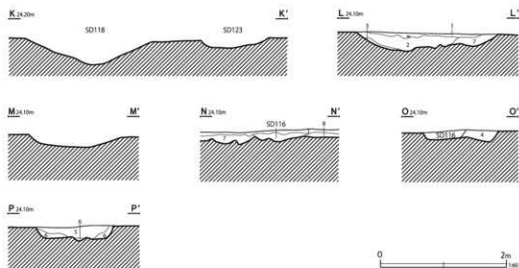
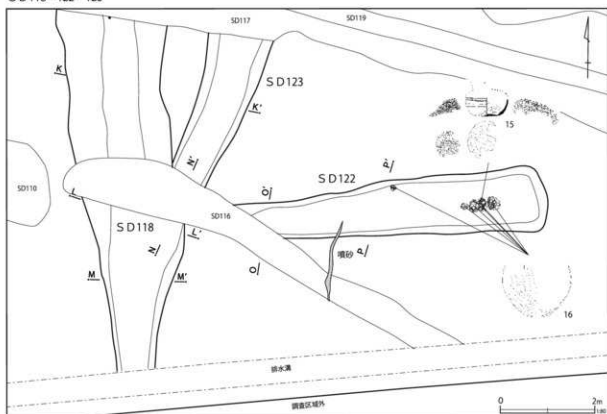
出土遺物は土師器杯と土師器甕・壺がある（第71図）。

第71図17は土師器模倣坏である。6世紀初頭前後のものであろう。18は北武蔵型坏である。小振り、深身・丸底形態、口縁部が小さく内湾するタイプで7世紀後半のものと考えられる。19は土師器甕、20・21は土師器壺で、6世紀から7世紀代のものである。

時期の特定は難しいが、7世紀後半と考えておきたい。

第126号溝跡（欠番）

第127号溝跡（欠番）

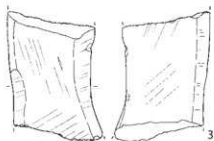


SD118・122・123

- 1 褐灰色土 白色粒 (φ 1～2 mm) 多量 しまり・粘性あり 水性堆積と思われる
- 2 黒褐色土 地山粒 (φ 5～15 mm) 多量 炭化粒 (φ 5 mm) 少量 しまり・粘性あり (SD118)
- 3 褐灰色土 地山ブロックと褐灰粘土ブロックの混土層 しまり・粘性あり (SD118)
- 4 黒褐色土 地山粒 (φ 2～5 mm) 中量 しまり・粘性あり (SD122)
- 5 褐灰色土 粘質シルト 地山粒 (φ 5 mm) 含む しまり・粘性あり (SD122)
- 6 褐灰色土 シルト 地山ブロック含む しまりあり 粘性ややあり (SD122)
- 7 黒褐色土 地山ブロック中量 しまり・粘性あり (SD118)
- 8 黒褐色土 地山粒 (φ 3～5 mm) 多量 地山ブロック (φ 20～30 mm) 多量 しまり・粘性あり (SD123)

第69図 第118・122・123号溝跡・遺物出土状況

SD109



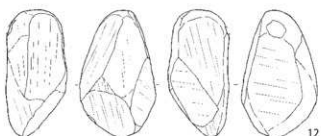
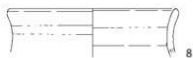
SD118



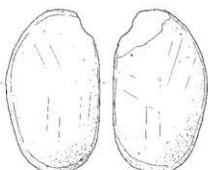
SD120



SD121



13

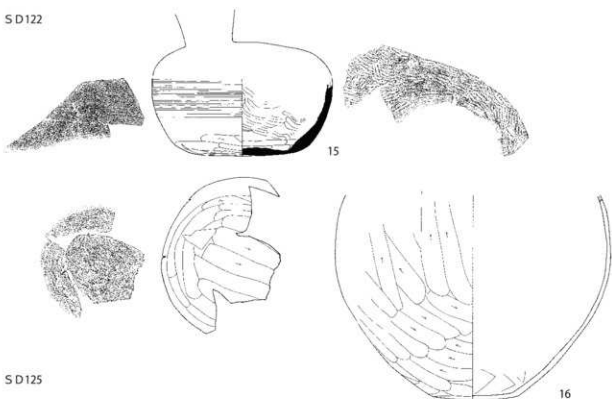


14

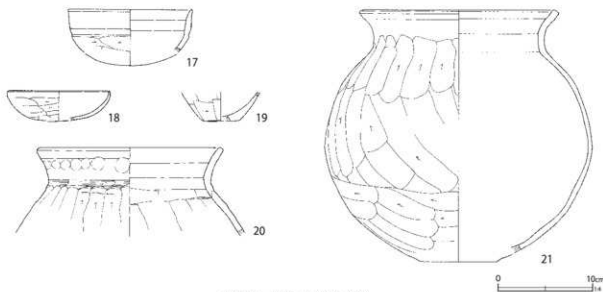


第70図 溝跡出土遺物 (1)

SD122



SD125



第71図 溝跡出土遺物(2)

第17表 溝跡出土遺物観察表(第70・71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(21.0)	[8.5]	—	AH1	20	良好	黒褐	SD109	52-6
2	土製品	円筒埴輪	—	[6.8]	(10.0)	CDG1	25	良好	淡褐	SD118 No.1 基部片 外面タテ刷毛目 8本/2cm 内面指ナデ	53-6
3	石製品	砥石	長さ[10.2]	幅[7.5]	厚さ[2.9]	重さ292.4				SD118 砂岩 欠損	64-8
4	土師器	甕	(20.5)	[3.9]	—	DEG1	10	普通	淡褐	SD120	
5	土師器	坏	(13.0)	[3.5]	—	GH1	10	普通	淡橙褐	SD121 坏蓋模倣坏 器壁厚い	
6	土師器	坏	—	[2.1]	—	CG1	10	普通	褐	SD121 有段口縁坏か	
7	土師器	鉢か	(14.8)	[4.4]	—	ACH1K	15	良好	淡橙褐	SD121 器形不明瞭	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
8	土師器	壺	(17.6)	[5.1]	—	DEGH	15	普通	褐	SD121 器形不明確	
9	土師器	壺	—	[2.6]	8.4	DEGHI	60	良好	淡褐	SD121 №1・2	
10	土師器	甕	(19.4)	[5.8]	—	DEGHI	5	普通	淡褐	SD121 №2	
11	須恵器	甕	—	[4.0]	—	I	—	良好	暗青灰	SD121 T-11 産地不明	54-1
12	石製品	砥石	長さ10.9 幅6.0 厚さ4.8 重さ377.0							SD121 T-11 流紋岩 不整五角柱状 破面にも擦痕残る 各面を良く使用しており平滑 全体に黄色味を帯びた灰白色	65-6
13	石製品	磨石	長さ7.6 幅5.1 厚さ2.7 重さ159.0							SD121 T-11 砂岩 平面・断面楕円形 全面磨痕残る 完形	65-4
14	石製品	磨石	長さ12.9 幅7.4 厚さ2.3 重さ329.1							SD121 T-11 砂岩 平面・断面楕円形 平面・周縁に擦痕	65-4
15	須恵器	平瓶か	—	[8.2]	(12.0)	I	35	良好	灰	SD122 №4・6 金山窯産か 厚手で重量感あり カキ目+手持ちヘラケズリ	54-2
16	土師器	壺	—	[21.6]	8.8	ADEGH	50	良好	淡褐	SD122 №3・5・7	54-3
17	土師器	坏	(13.0)	[4.5]	—	CGHI	10	良好	淡褐	SD125 掘り方№1 坏蓋模倣坏	
18	土師器	坏	(10.8)	[3.1]	—	CI	20	良好	橙褐・青灰	SD125 SD 6・125 SK167 北武蔵型坏 堅緻 外面と器内は還元している	54-4
19	土師器	甕	—	[3.1]	(4.0)	GHI	40	良好	褐	SD125 T-16 武蔵型甕か	
20	土師器	壺	(19.0)	[9.3]	—	DEGHI	25	良好	褐	SD125 掘り方№1	54-5
21	土師器	壺	(20.2)	[25.6]	—	CDEGI	40	良好	淡褐	SD125 SD 6・125 SK167№1～4	54-6

(4) 井戸跡

第103号井戸跡 (第72図)

第103号井戸跡は、調査区南東部のT・U-19グリッドに位置する。西側には第111号住居跡がほぼ接する位置にあり、南側には第106号井戸跡が近接する。

また、第111号住居跡と第103号井戸跡との間にはT-19グリッドP14があり、この3遺構の中では最も古い。第103号井戸跡の東半は排水溝に壊され、さらに調査区外に延びている。

平面形態は楕円形と推定され、残存規模は長径1.83m、短径1.22m、深さ1.04mである。

覆土は4層に分かれる。最下層に黒褐色土が堆積していた。第1層に礫が含まれていたが、第2層以下に砂礫層は見られなかった。

出土遺物は土師器坏・甕、須恵器甕が検出されている (第73図)。

第73図1は土師器坏蓋模倣坏で、推定口径は13.6cmと大振りの坏である。黒色処理された可能性がある。2は土師器坏身模倣坏である。やはり大振りの坏となろう。3は須恵器甕口縁部片で、外面に平行叩き調整がなされている。

3の須恵器甕の帰属は不明確であるが、土師器

坏は6世紀後半頃と考えられる。西側に接する第111号住居跡とほぼ同一時期となっており、第111号住居跡廃絶直後に掘削された可能性がある。

時期は6世紀後半 (Ⅱ-3期古段階) と考えておきたい。

第104号井戸跡 (欠番)

第107号井戸跡 (第72図)

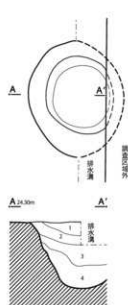
第107号井戸跡はS-17グリッドに位置する。重複する第102号井戸跡・第3号溝跡よりも古い。平面形態は概ね円形で、規模は長径1.43m、短径1.32m、深さ1.05mである。井筒部分の直径は0.65mである。

覆土は5層に分層され、第1～3層が井筒堆積土、第4・5層が掘り方覆土である。第3層と第4・5層との境は縦に分層されており、曲物を設置した井筒が本来もっと高くまで据えられていたと推定される。掘り方部分には砂質土が多く堆積していた。

底面には底板を嵌めた状態の曲物桶が設置され、水溜としていたと考えられる。また、曲物側板の内側には直径2～3cmの丸木杭を打ち込み、崩落防止の土止め支保工としていた。

出土遺物は土師坏片が1点検出されているが図

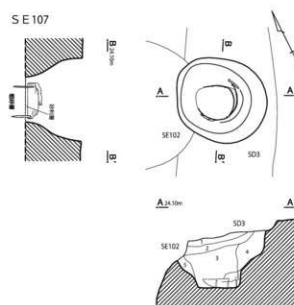
SE 103



SE 103

- 1 灰黄褐色土 白色粒微量 漆を含む しまり・粘性やや強
 2 暗褐色土 黄褐色ブロック少量 赤褐色ブロック微量
 しまり・粘性やや強
 3 にぶい黄褐色土 炭化物・黄褐色ブロック少量 しまり・粘性やや強
 4 黒褐色土 炭化物・黄褐色ブロック少量 白色粒微量
 しまり・粘性強

SE 107

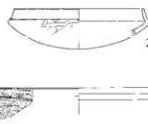
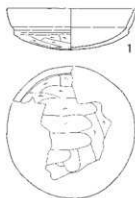


SE 107

- 1 褐灰色土 暗褐色粒土(φ 5~20 mm)少量 しまり・粘性あり
 2 褐灰色土 暗褐色粒土(φ 10~20 mm)と地山ブロックの混土層
 しまり・粘性あり
 3 黒色土 砂を部分的に含む しまりあり 粘性強
 4 黒褐色土 砂を全体に含む しまり・粘性あり
 5 黒褐色土 地山粒(φ 10 mm)微量 しまりあり 粘性強

第72図 第103・107号井戸跡

0 2m 100

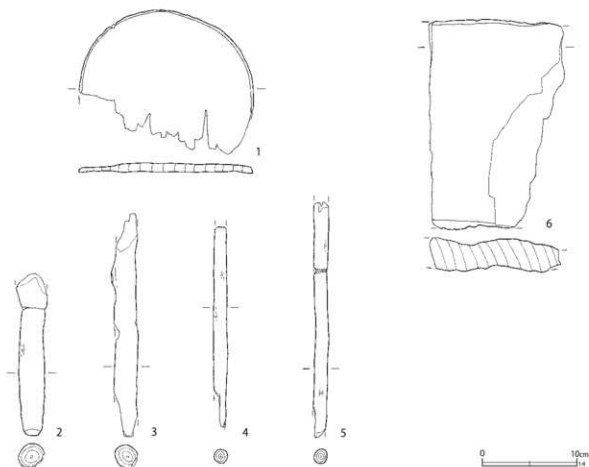


0 10cm 10

第73図 第103号井戸跡出土遺物

第18表 第103号井戸跡出土遺物観察表(第73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.6)	4.4	—	HI	40	良好	赤褐	坏直模倣坏 黒色処理の可能性ある 底部黒斑あり	55-4
2	土師器	坏	(13.5)	[2.9]	—	CIK	5	良好	茶褐	坏身模倣坏 黒色処理なし	
3	須恵器	甕	(28.0)	[2.8]	—	DEI	5	良好	灰	末野産か、外面平行引き後ロクロナデか	



第74図 第107号井戸跡出土土遺物

第19表 第107号井戸跡出土遺物観察表 (第74図)

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	木製品	曲物	径18.4 厚さ0.9 木取り 板目	底板 土圧により変形	66-2
2	木製品	杭	長さ [17.2] 直径2.5~2.7 木取り 芯持材	先端尖る	66-3
3	木製品	杭	長さ [23.6] 直径2.4~2.6 木取り 芯持材 樹皮残存		66-4
4	木製品	杭	長さ [21.2] 径1.5 木取り 芯持材	先端尖る	66-5
5	木製品	杭	長さ [24.9] 径1.5 木取り 芯持材		66-6
6	木製品	板材	長さ22.2 幅 [13.9] 厚さ3.3 木取り 柾目	全体的にもろくなっている	66-7

化できない。他には曲物桶・板材・丸木杭がある(第74図)。

第74図1は曲物底板である。全体の1/3ほどが欠失している。直径は18.4cm、厚さは0.9cmである。木取りは板目である。

第74図2～5は曲物桶を支えた丸木杭である。芯持ち材である。すべて破片で、残存長は17.2

～24.9cm、直径は1.5～2.7cm。樹種は不明である。

第74図6は不明板材である。大きさは長さ22.2cm、残存幅13.9cm、厚さ3.3cmで、柾目取りである。樹種は不明である。

時期は不明確であるが、第102号井戸跡との関係から8世紀前半以前となる。7世紀代と考えておきたい。

(5) 土壇

第108号土壇 (第75図)

第108号土壇はT-18・19グリッドに位置する。第141号住居跡・第115号土壇と重複し、本土壇が最も新しい。

平面形態は不整楕円形で、規模は長径1.21m、短径1.02m、深さ0.39mである。底面は中央付近が一段窪んでいる。

出土遺物は土師器甕、土師器北武蔵型坏が検出されている。第77図1は北武蔵型坏である。口縁部が内屈し、深い丸底形態である。口縁部直下からヘラゲズリが施され、古相を留めている。

土壇の時期は、出土土器から7世紀後半(Ⅱ-3期新段階)と考えられる。

第113号土壇 (第75図)

第113号土壇は、T-18グリッドに単独で位置する。

平面形態は方形で、規模は長さ0.84m、幅0.74m、深さ0.11mである。底面は平坦である。主軸方位はN-17°-Wを指す。

出土遺物は土師器模倣坏・甕、東海産の須恵器瓶小片が検出されているが、図化可能な遺物はない。

時期は7世紀後半～8世紀前半である。

第115号土壇 (第75図)

第115号土壇はT-18・19グリッドに位置し、第141号住居跡よりも新しく、第108号土壇よりも古かった。

平面形態は不整形で、北西側に浅い突出部がある。規模は長径1.16m、短径0.53m、深さ0.36mである。

覆土には地山粒子や地山ブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物はなかった。

時期は、遺構の重複関係から6世紀後半以降7世紀後半以前である。

第118号土壇 (第75図)

第118号土壇はS-17グリッドに位置する。重複する第104号掘立柱建物跡P5(9世紀後半)よりも古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.06m、短径0.99m、深さ0.16mである。主軸方位はN-82°-Wを指す。

出土遺物は土師器坏・甕の小片が検出されている。

時期は7世紀～8世紀と推定される。

第129号土壇 (第75図)

第129号土壇はU-18グリッドに位置する。第104号住居跡と重複し、本土壇の方が古い。

平面形態は円形で、規模は直径0.67×0.64m、深さ0.21mである。

出土遺物は土師器坏・甕小片が検出されている。

時期は第104号住居跡との新旧関係から7世紀代と考えられる。

第146号土壇 (第75図)

第146号土壇はU-9グリッドに位置する。第2号畠跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は方形で、規模は長さ1.05m、幅0.95m、深さ0.13mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。

出土遺物は土師器有段口縁坏・埴が検出されている(第77図2・3)。

時期は6世紀後半と思われる。

第148号土壇 (第75図)

第148号土壇はT-14グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は直径1.32×1.30m、深さ0.17mである。T-14グリッドP11と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物は土師器坏・甕が検出された。第77図4は土師器北武蔵型坏である。口縁部が内屈する深い丸底形態である。7世紀後半のものと考えられる。

第158号土壌 (第75図)

第158号土壌はS・T-16グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.12m、短径0.94m、深さ0.75mである。

出土遺物は土師器北武蔵型坏・坏蓋模倣坏・北武蔵型暗文坏・甕・甕が検出されている(第77図5～12)。第77図5～7は北武蔵型坏である。8は模倣坏、9は北武蔵型暗文坏である。

時期は7世紀後半代と推定される。

第159号土壌 (第75図)

第159号土壌はU-18グリッドに位置する。第105号住居跡床面下から検出され、第105号住居跡よりも古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.13m、短径0.99m、深さ0.18mである。

覆土は地山ブロックを多量に含む褐色灰色土で、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物は土師器甕胴部片が検出されている。

時期は不明確であるが、7世紀～8世紀前半代と推定される。第105号住居跡の床下土壌の可能性もある。

第161号土壌 (第75図)

第161号土壌はT-16グリッドに位置する。T-16グリッドP33・P53・P54と重複し、本土壌の方が古い可能性がある。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.03m、短径0.68m、深さ0.21mである。主軸方位はN-67°-Eを指す。

出土遺物は、大振りの土師器有段口縁坏口縁部片が検出されている。時期は不明確であるが、6世紀後半と考えておきたい。

第162号土壌 (第76図)

第162号土壌はU-15グリッドに位置する。第156号住居跡の東側に隣接する。

平面形態は円形で、規模は直径0.81×0.77m、深さ1.01mである。円筒状に掘り込まれている。

覆土は7層に分かれ、下層からは木の皮などの

有機質遺体が含まれ、粘性が強い。第1・2層は縦に分層され、井筒状の堆積である。小規模ではあるが、溜井等井戸として使用された可能性があらう。

出土遺物は土師器坏・鉢・甕、須恵器甕が検出されている。土師器坏には模倣坏と有段口縁坏の口縁部小片が含まれ、6世紀後半～7世紀前半のものと考えられる。

時期は6世紀後半～7世紀前半と推定しておきたい。

第164号土壌 (第76図)

第164号土壌はT-18グリッドに位置する。重複する第106号住居跡よりも古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.68m、短径0.58m、深さ0.26mである。

出土遺物は土師器甕胴部片が検出されている。

時期は不明確ではあるが、7世紀～8世紀と推定される。

第167号土壌 (第24図)

第167号土壌はT-16グリッドに位置する。東半を第6号溝跡、上面を第125号溝跡に削平されていた。

平面形態は楕円形と推定され、規模は長径1.26m、短径0.61m、深さ0.55mである。

出土遺物は土師器壺が検出されているが、上層から出土しており、第125号溝跡に帰属する可能性が高い。

時期は8世紀またはそれ以前となる。

7世紀頃と考えておきたい。

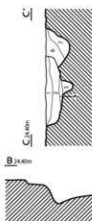
第169号土壌 (第76図)

第169号土壌はT-11グリッドに位置する。第121号溝跡と重複し、本土壌の方が古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.60m、短径0.55m、深さ0.21mである。主軸方位はN-8°-Eを指す。出土遺物はなかった。

時期は第121号溝跡との関係から7世紀前半またはそれ以前と考えられる。

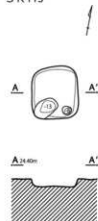
S K 108・115



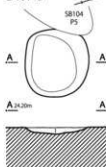
S K 108・115

- 1 黒褐色土 粘質シルト 粘土粒微細 しまり強 粘性あり (S K 108)
- 2 黒褐色土 粘質シルト 粘土粒多量 炭化粒微細 しまり強 粘性あり (S K 108)
- 3 灰黄褐色土 粘質シルト 地山ブロック (φ 30 mm) 多量 しまりあり 粘性ややあり (S K 108)
- 4 暗褐色土 粘質シルト 地山粒多量 粘土粒微細 しまり・粘性ややあり (S K 108)
- 5 暗褐色土 粘質シルト 地山粒多量 粘性ややあり (埋め戻し) (S K 115)
- 6 黒褐色土 粘質シルト しまりあり (埋め戻し) (S K 115)
- 7 にぶい黄褐色土 粘質シルト しまりあり 粘性やや弱 (埋め戻し) (S K 115)

S K 113



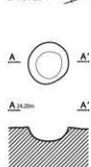
S K 118



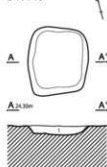
S K 118

- 1 褐色土 シルト質 地山粒 (φ 1~2 mm) を全体に含む しまり・粘性あり

S K 129



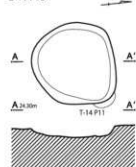
S K 146



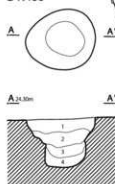
S K 146

- 1 褐色土 シルト質 地山粒 (φ 5 mm) を含む しまり・粘性あり

S K 148



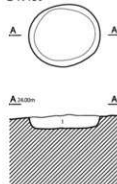
S K 158



S K 158

- 1 灰黄褐色土 シルト質 マンガン・鉄分多量 しまりあり 粘性あまりなし
- 2 暗灰黄色土 粘土質 鉄分多量 しまり・粘性あり
- 3 暗灰黄色土 粘土質 鉄分少量 地山ブロック多量 しまり・粘性あり
- 4 暗オリーブ褐色土 鉄分少量 しまり・粘性あり

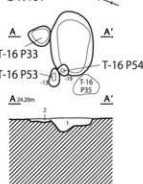
S K 159



S K 159

- 1 褐色土 地山ブロック (φ 20~30 mm) 多量 しまり・粘性あり

S K 161



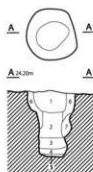
S K 161

- 1 黒褐色土 シルト質 鉄分多量 しまり・粘性あり
- 2 灰黄褐色土 シルト質 鉄分多量 地山ブロック少量 しまり・粘性あり (T-16 P 33)



第75図 第108・113・115・118・129・146・148・158・159・161号土坑

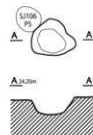
SK 162



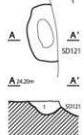
SK 162

- 1 褐灰色土 粘土質 (若干シルトを含む)
炭化物 (φ1~2cm) 小石 (φ1cm) 土器片
地山粒 (φ2~3cm) 少量 しまり・粘性あり
- 2 褐灰色土 粘土 炭化物 (φ1~4cm) 少量 土器片 地山粒
(φ4~10mm) 少量 しまり・粘性強 (粘板)
- 3 灰白色土 粘土質 褐灰色土をブロック状 (φ2~10mm)
に含む 木の皮 (4×10cm) 検出
地山粒 (φ3~5mm) 炭化物 (φ1~3mm) 少量
しまり・粘性強
- 4 黒褐色土 粘土質 炭化物 (φ1~2mm) 微細 しまり・粘性強
- 5 黄灰色土 黒褐色土ブロック (φ1~5cm) を全体に含む
しまり・粘性強
- 6 褐灰色土 粘土質 地山ブロック (φ2~10cm) を大量に含む
しまり・粘性あり
- 7 灰白色土 しまり・粘性強

SK 164



SK 169



SK 169

- 1 黒褐色土 粘質シルト
地山ブロック含む
しまり・粘性あり

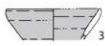


第76図 第162・164・169号土壕

SK108



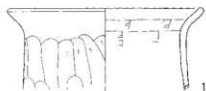
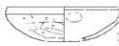
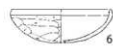
SK146



SK148



SK158



SK162



第77図 土壕出土遺物

第20表 土壇出土遺物観察表 (第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	杯	(11.0)	[3.5]	—	GI	10	良好	明黄褐	SK108 北武蔵型杯	56-4
2	土師器	杯	(15.0)	[3.2]	—	CGI	5	良好	明褐	SK146 有段口縁杯 内面風化	
3	土師器	埴	(10.0)	[3.3]	—	DHI	30	良好	褐	SK146 内外面赤彩	
4	土師器	杯	(10.0)	[3.7]	—	CDGI	10	良好	橙褐	SK148 北武蔵型杯 粉っぽい胎土	
5	土師器	杯	(10.0)	[3.0]	—	GI	20	良好	褐	SK158 北武蔵型杯	56-5
6	土師器	杯	(10.4)	3.5	—	GI	35	良好	橙褐	SK158 北武蔵型杯	
7	土師器	杯	(12.0)	[3.6]	—	IK	10	良好	橙褐	SK158 北武蔵型杯	57-1
8	土師器	杯	9.5	3.6	—	CGI	75	良好	茶褐	SK158 杯蓋模倣杯	
9	土師器	暗文杯	(13.3)	5.2	—	CHI	45	良好	橙褐	SK158 北武蔵型暗文杯 放射暗文風化により未確認	57-2
10	土師器	甕	—	[3.1]	(5.8)	GHIK	20	良好	暗褐	SK158	57-2
11	土師器	甕	(20.0)	[8.8]	—	GIK	25	良好	淡褐	SK158	
12	土師器	甕	(17.0)	[6.2]	—	CHIK	20	良好	明褐	小型甕と思われる	
13	土師器	鉢	(20.4)	[5.3]	—	CDGHIK	15	良好	明褐	SK162 口縁内面に有機質の被膜付着	
14	土師器	甕	(23.0)	[4.2]	—	ADEGIK	5	良好	暗褐	SK162	

(6) 畝跡

第1号畝跡 (第79図)

第1号畝跡はT-13・14グリッドに位置する。第142号住居跡の南側に隣接する。南側には第115号溝跡が至近距離にある。

畝跡は6条検出された。北西から南東方向に延び、長さは3.90～4.68mで、幅0.30m前後である。深さは0.06～0.20mと浅い。

出土遺物は土師器甕小片が検出されたが、図化できるものはない。

時期は不明確であるが、古墳時代後期（7世紀後半頃か）と推定しておきたい。

第2号畝跡 (第80図)

第2号畝跡は南サイドスタンド調査区の西端、T-8・9、U-8～10グリッドに位置する。重複する第155号住居跡と第103号掘立柱建物跡よりも新しい。また、第142・145・146・179号土壇とも重複するが、新旧関係は不明である。

第2号畝跡は19条の畝跡から構成される。概ね

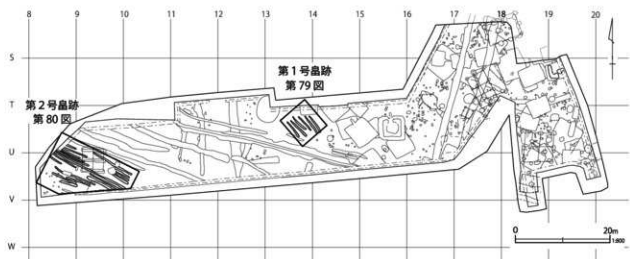
西北西から東南東方向に平行して延びている。便宜的に図に示した3ブロックに分割した。

第1ブロックは北東寄りの一群で、4条の畝からなる。畝4が最も長く、長さ9.4m、他は3.18～3.68mである。幅は0.40～0.48m、深さは0.03～0.10mである。

第2ブロックは8条の畝から構成される。畝3が最も長く、長さ16.82m、他は2.66～7.64mである。幅は0.28～0.40m、深さは0.04～0.11mである。

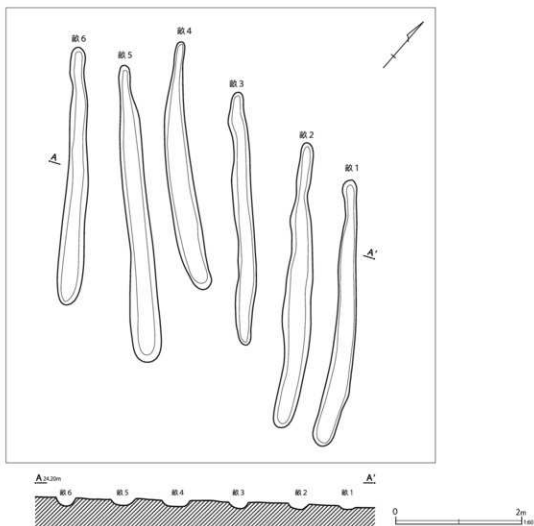
第3ブロックは南寄りの一群で、7条の畝から構成される。畝5が最も長く、長さ9.36m、他は2.7～6.9mである。幅は0.36～0.66m、深さは0.04～0.10mである。

出土遺物は土師器小片が微量検出されたのみで、時期は不明である。第155号住居跡との関係から古墳時代前期よりも新しく、第101号道路跡側溝との関係から9世紀以前という限定はできる。7世紀頃と推定しておきたい。



第78图 第1・2号畠跡全体图

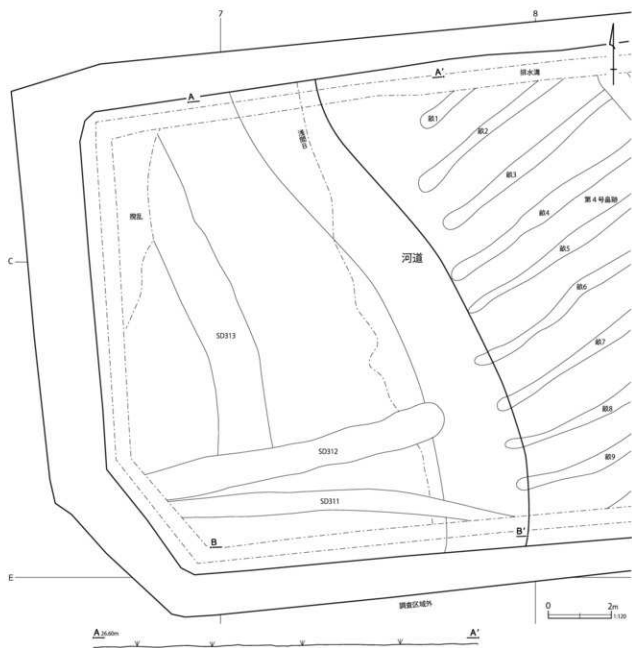
第1号畠跡



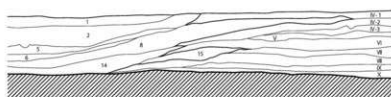
第79图 第1号畠跡

第80图 第2号晶跡

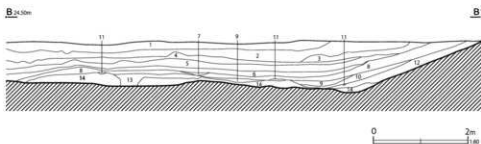
(7) 河川跡 (第81・82図)



横断



第81図 河川跡 (1)



河川				
1	褐灰色土	しまり良	粘性やや強	粘土層 上部に浅間B軽石が堆積している
2	褐灰色土	しまり良	粘性やや強	粘土層 粘土粒・炭化物(φ1~3mm程度)を多く含む 平安時代の遺物を含む
3	褐灰色土	しまり良	粘性やや強	粘土層
4	褐灰色土	しまり良	粘性強	粘土層 炭化物(φ1~3mm程度)を少し含む 黒褐色土、灰白色土をラミナ状に含む 水性堆積
5	灰白色土	しまり良	粘性強	粘土層
6	灰白色土	しまり良	粘性強	炭化物(φ1~3mm程度)を少し含む 黒褐色土をラミナ状に含む 水性堆積
7	灰白色土	しまり良	粘性強	粘土層 炭化物(φ1~3mm程度)を少し含む 黒褐色土をラミナ状に含む 水性堆積
8	灰白色土	しまり良	粘性強	粘土層 炭化物(φ1~3mm程度)を多く含む
9	褐灰色土	しまり良	粘性強	粘土層 炭化物(φ1~3mm程度)を少し含む 黒褐色土をラミナ状に含む 水性堆積 混水時の流路跡か
10	褐灰色土	しまり良	粘性強	粘土層 炭化物(φ1~3mm程度)を少し含む
11	灰黄褐色土	しまり悪	粘性弱	砂層 テフラか
12	灰白色土	しまり良	粘性強	粘土層 炭化物(φ1~3mm程度)を少し含む
13	灰黄褐色土	しまり悪	粘性弱	砂層 15層が流状現象で上がったきたものか 礫(φ5~100mm程度)で構成される
14	黒褐色土	しまり良	粘性強	粘土層 炭化物(φ1~3mm程度)を少し含む 礫(φ5~100mm程度)を少し含む
15	灰黄褐色土	しまり良	粘性強	粘土層 下面に礫層が堆積している

第82図 河川跡(2)

河川跡は北サイドスタンドの西端付近から検出された。調査区北壁部の断面では、西端部から東に約7.5m付近から西側に向かって低く傾斜することが確認され、第1地点の東側で検出された河川跡の東岸部と推定される。

覆土は15層に分かれる。北壁部では地表面から2.5mの厚さで攪乱土が堆積していた。西端部の攪乱土直下から浅間B軽石の堆積層が検出された(第1層)。第1層は基本土層第III層に対応すると考えられ、河道最終堆積が天仁元年(1108)の浅間B軽石降灰直後、平安時代末期であったこ

とを示している。第2層には平安時代の土師器・須恵器片が含まれていた。第IV-1層は概ね水平堆積に移行していた。

基本土層第VII層と第VI層の堆積間には、河川跡の可能性のある谷状地形が形成されたようである(第15層)。

また、第11層にテフラ状の砂層が確認されたが、浅間由来か、榛名由来かは確認できなかった。

河川跡の形成年代がいつまで遡るのかは確定できなかったが、古墳時代またはそれ以前に遡ると推定される。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第18号住居跡 (第83・84図)

第18号住居跡はS-18グリッドに位置する。第25次調査区を跨ぐ住居跡である。重複する第115・138・149号住居跡よりも新しい。第115号住居跡は本住居跡と北壁と南壁がほぼ一致することから、第115号住居跡から本住居跡に建て替えられた可能性がある。

平面形はカマドに対して横長の長方形で、規模は長軸長5.55m、短軸長3.95m、床面までの深さは0.24mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

覆土は大きく5層に分層された。全体に地山由来の土が多く含まれていたが、特に床面を覆う第4層に地山ブロックが多量に含まれており、住居廃棄後早い時点で人為的に埋め戻された可能性がある。また、覆土中に噴砂が検出された。住居廃棄後に液状化現象を伴う地震に見舞われたことが判明した。

床面は緩やかな凹凸が見られた。

カマドは北壁に設置され、規模は長さ2.45m、幅0.70m、深さ0.25mである。カマド燃焼部の大部分は壁外に突出しており、その先の一段高い位置に煙道部が水平に延びている。煙道部東壁はオーバーハングしており、両側壁は強く被熱していた。カマド左右に粘土を使用した、いわゆる袖部は検出されなかった。壁ラインが概ね焚口部に相当したと考えられ、袖部は当初から存在しなかった可能性が高い。

カマド覆土は第7層に焼土と灰が含まれ、灰層に相当する。第7層下面が火床面である。

ピットは5基検出された。P1～P4は直径0.30～0.50m、規則的に配置されることから4本主柱穴と考えてもよいが、深さが0.10～0.30mと浅く、柱痕も確認できなかったため、主柱穴となるか否か不明確である。

貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝はカマドの左右とコーナー部に途切れる箇所がある。規模は、幅0.10～0.30m、深さ0.05～0.10mである。

出土遺物は土師器杯・甕・壺、須恵器杯・高台杯・(高台) 埴・長頸瓶・フラスコ形瓶がある(第85図)。住居跡南壁近くの床面及び覆土下層から出土したものが多く、図化遺物以外では南壁際の床面から馬の歯が検出されている。

土師器杯はすべて北武蔵型杯である(1～4)。1・2は浅身で、皿形に近い。底部は弱い平底でヘラケズリされる。床面から出土した。3は前者よりも深身ではあるが、扁平な箱形の器形である。床面から出土した。4は大振りで、体部と底部はヘラケズリ調整される。

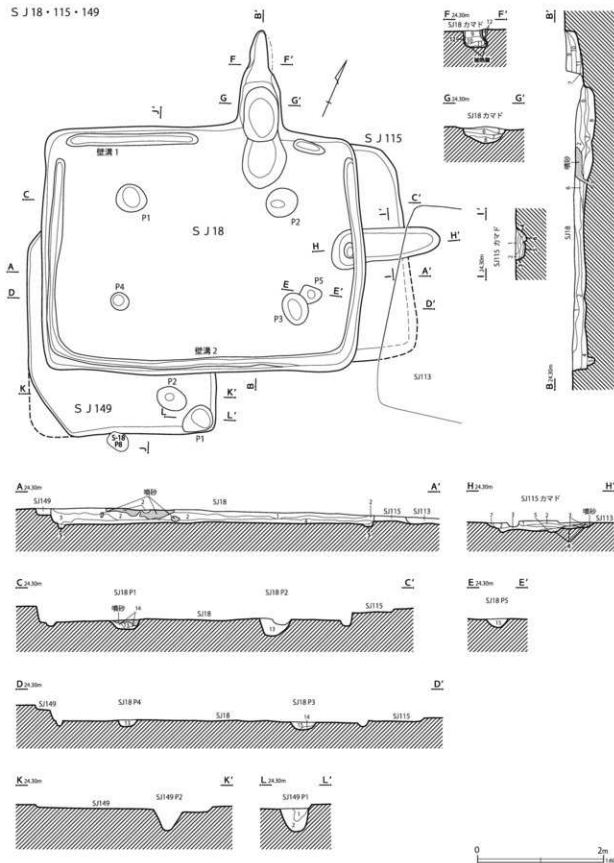
5～8は須恵器杯である。5は全体の器形が窺える資料である。やや扁平気味の器形で、底部は回転糸切り調整され、底径は口径の1/2を超える。末野産で床面から出土した。6はやや深身の器形で南比企産である。7・8は末野産である。

9は高台杯で、底部は回転糸切り離しである。末野産である。10は高台埴に復元したが、無台埴の可能性もある。末野産である。

11はフラスコ形瓶と思われる。湖西産か。器壁が厚く、胎土がやや粗い印象を受ける。12はフラスコ形瓶または長頸瓶である。湖西産と思われるが、11よりも胎土が精良・薄手で、別個体であろう。7世紀代の混入品と思われる。

13～18は土師器甕である。13は長胴甕で7世紀代の混入資料と思われる。14～18は武蔵型甕である。「コ」の字の口縁部形態をもつ16と弓状の口縁部をなす14・15がある。

本住居跡の時期は、平底浅身の北武蔵型杯、弓状口縁と「コ」の字甕、口径の1/2を超える底径をもつ須恵器杯の共存関係は概ね整合的で、9世紀前半(IV期古段階)頃と考えられる。

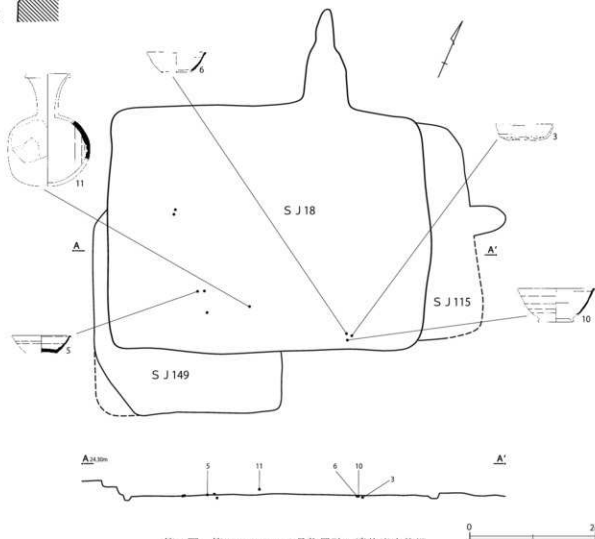


第83図 第18・115・149号住居跡

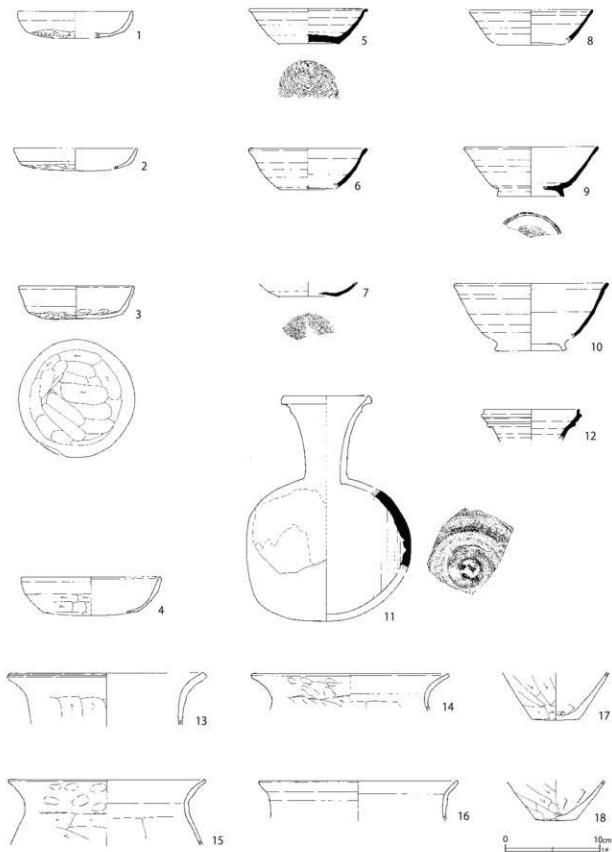
2.4m		SJ18	S J 18	
			1 灰黄褐色土	粘質シルト 炭化粒・焼土粒微量 しまりあり 粘性ややあり
			2 灰黄褐色土	粘質シルト 炭化粒・焼土粒微量 地山粒多量 しまりあり 粘性ややあり
			3 灰黄褐色土	粘質シルト 炭化粒・地山粒多量 焼土粒少量 しまりあり 粘性ややあり
			4 褐灰色土	粘質シルト 炭化粒・地山ブロック(φ1cm)・ 地山ブロック(φ1~2cm)多量 しまり強 粘性あり
			5 褐灰色土	粘質シルト 地山ブロック(φ2~4cm)・地山粒多量 しまり、粘性あり 硬質埋土
			6 黒褐色土	粘質シルト 炭化粒極多量 焼土粒少量 灰含む しまり弱 粘性やや弱
			7 黒褐色土	炭・灰層 焼土ブロック(φ1cm)少量
			8 褐灰色土	粘質シルト 炭・焼土・地山粒多量 しまり、粘性やや弱
			9 褐灰色土	粘質シルト 焼土ブロック・炭化粒あり しまりあり 粘性ややあり
			10 灰黄褐色土	粘質シルト 焼土粒・炭化少量 しまり強 粘性ややあり
			11 灰黄褐色土	粘質シルト 焼土ブロック少量 しまり、粘性あり
			12 褐灰色土	焼土粒(φ5mm)中量 炭化物粒(φ5mm)少量 しまり、粘性あり
			13 褐灰色土	粘質シルト 炭化粒・焼土粒含む 地山ブロック少量 しまり、粘性ややあり
			14 灰黄褐色土	粘質シルト 地山ブロック(φ3~5cm)多量 しまりややあり 粘性やや弱
			15 黒褐色土	粘質シルト 炭化粒・焼土・灰含む しまり、粘性やや弱

SJ115	1 褐灰色土	地山粒(φ5mm)・焼土粒(φ5mm)微量 しまり、粘性あり
	2 褐灰色土	灰多量 焼土粒(φ5mm)多量 しまり弱 粘性あり カマド堆積物
	3 褐灰色土	灰多量 焼土粒(φ5mm)中量 焼土ブロック(φ30mm) しまり弱 粘性あり カマド堆積物
	4 褐灰色土	地山粒(φ20mm)多量 しまり、粘性あり カマド堆積物
	5 灰黄褐色土	焼土粒(φ5mm)少量 しまりあり 粘性強 カマド堆積物
	6 褐灰色土	焼土粒(φ5mm)・地山粒(φ5mm)・ 炭化物粒(φ5mm)多量 しまりあり 粘性強 カマド堆積物
	7 褐灰色土	地山粒(φ5mm)少量 しまりあり 粘性強

SJ149 P1	1 暗灰黄色土	シルト質 炭分少量 しまり、粘性あり
	2 黒褐色土	粘土質 炭分少量 しまり、粘性あり



第84図 第18・115・149号住居跡・遺物出土状況



第85图 第18号住居跡出土遺物

第21表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	2.9	(10.1)	ADI	30	普通	褐	D区 北武蔵型坏 摩滅のため調整不明瞭	31-1
2	土師器	坏	(13.0)	[2.2]	—	CI	30	普通	橙褐	D区 北武蔵型坏 皿タイプ	
3	土師器	坏	12.0	3.5	9.8	ACDI	98	普通	褐	No.7 北武蔵型坏 口縁下に無調整部	
4	土師器	坏	(14.5)	[3.8]	(10.0)	ACI	10	普通	褐	B区 北武蔵型坏 内面摩滅	
5	須恵器	坏	(12.3)	3.7	6.4	BE	45	良好	暗青灰	No.3 D区 末野産 底部回転糸切り	31-2
6	須恵器	坏	(12.3)	[4.2]	—	DJ	30	普通	灰	No.6 南比企産 底部欠失	31-3
7	須恵器	坏	—	[1.5]	(6.2)	BDEI	40	不良	灰	D区 末野産 底部回転糸切り 風化	31-4
8	須恵器	坏	(12.7)	[3.5]	—	BDE	25	普通	明灰	A区 末野産 底部欠失	
9	須恵器	高台坏	(14.0)	5.2	(6.8)	BDE	20	普通	灰	末野産 底部回転糸切り	
10	須恵器	高台坏	(16.0)	[5.7]	—	BDE	20	普通	明灰	No.8 末野産	
11	須恵器	フラスコ瓶	—	[8.9]	—	GIK	35	良好	灰白	No.5 湖西産か 胎土がやや粗い 混入	31-4
12	須恵器	長頸瓶	(10.0)	[3.3]	—	G	15	良好	明灰	B区 東海(湖西か)産 混入か	
13	土師器	甕	(20.5)	[5.5]	—	DGHI	20	普通	明褐	掘り方 長胴甕 混入か	
14	土師器	甕	(20.6)	[4.0]	—	CHI	15	普通	褐	C区 武蔵型甕	
15	土師器	甕	(20.7)	[6.9]	—	ACDHI	30	普通	褐	D区 武蔵型甕	31-4
16	土師器	甕	(20.7)	[4.3]	—	ACHI	20	普通	褐	D区 武蔵型甕	
17	土師器	甕	—	[5.0]	5.0	CGI	50	普通	褐	A区 武蔵型甕	
18	土師器	甕	—	[3.7]	4.4	CGI	40	普通	暗褐	B区 武蔵型甕	

第102号住居跡 (第86図)

第102号住居跡は調査区東南部のT・U-19グリッドに位置する。重複する第111・141・151号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

南壁が調査区外に延びるため正確な形態は不明だが、平面形は長方形または方形で、残存規模は長軸長4.05m、短軸長3.34m、深さ0.24mである。西壁の状況から2回拡張されたと考えられる。主軸方位はN-90°-Eを指す。

住居覆土は黄褐色系土を主体とし(第1層)、下層に焼土ブロックが少量含まれていた(第4層)。堆積環境は不明である。

床面はやや凹凸がある。カマドは東壁に設置され、規模は全長1.57m、幅0.70m、深さ0.28mである。燃焼部は長さ0.84mで壁外にその大半が突出する。粘土を使用した袖部は存在せず、壁ラインが焚口部に相当する。カマド右手前の床面には灰が広がっていた。燃焼部側壁と先端部は強く被熱していた。燃焼部底面は緩やかに窪むが、掘り方底面は細かい凹凸が顕著であった。その先は一段高い位置に煙道部があり水平方向に約0.70m延びていた。

カマド堆積土中、第2・3・5〜7層は天井部及び側壁の崩落土と思われ、焼土の混入が目立った。また、燃焼部には住居埋没後に形成された噴砂の痕跡が認められた。

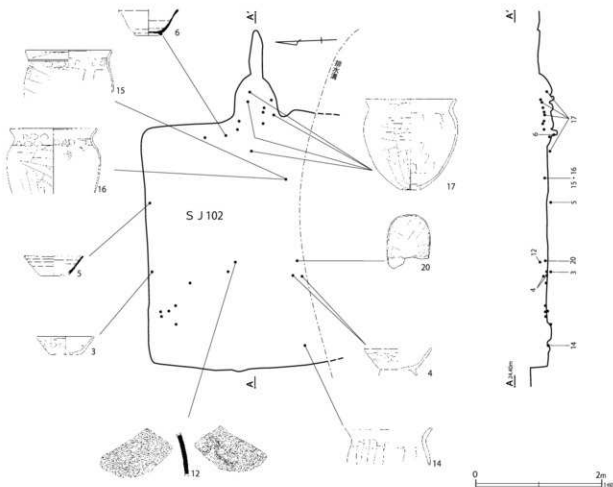
ピットは4基検出されたが、いずれも住居に伴う柱穴にはならないであろう。P1・P2は深度が浅すぎる。P3・P4は床面を除去して確認され、住居跡よりも古いと考えられる。P4は深さ0.60mと深く、掘立柱建物跡を想定したが、対応する柱穴が確認できなかった。

貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝は西側で2条検出され、壁直下には存在しなかった。西壁部のみ1回建て替え(拡張)されたと考えられる。壁溝1の規模は、幅0.22〜0.43m、深さ0.08〜0.15m、壁溝2は幅0.08〜0.10m、深さ0.05mである。

出土遺物は土師器坏・高台坏・甕、灰釉陶器長頸瓶、土鍾、磨石がある(第88図)。全体に小破片が多い。

土師器坏は平底で体部に指頭痕を残す(第88図2・3)。1は古墳時代後期の坏身模倣坏で混入品である。4は高台坏で、体部に指頭圧痕を残す



第87図 第102号住居跡遺物出土状況

が、全体に風化しており調整は不明瞭である。底部調整も不明である。ロクロの使用は確認できず、非ロクロ土師器と考えておきたい。

5～8は須恵器の坏・埴類で、いずれも末野産と推定される。5は深身の坏で、底部を欠く。6は全体の器形が判明する高台埴である。口縁部は肥厚して外反する。焼きが甘く歪みがある。底部は回転糸切り離しと考えられるが、不明瞭である。カマド脇の床面から出土した。7・8も6と同様な高台埴となろう。

9～11はロクロ土師器である。9は器壁が厚く口縁部が肥厚する。高台が付くと思われる。11は浅身の皿形に近い。底部調整は不明瞭だが、手持ちヘラケズリの可能性がある。

12は末野産の須恵器甕胴部片で、外面平行叩き、内面無文当具整形である。13は灰釉陶器長

頸瓶の胴部片である。2片あり、同一個体と思われるが接合しない。胴部下位は回転ヘラケズリ調整される。産地は不明である。

14～19は土師器甕である。14は胴部が厚く縦方向のヘラケズリ調整が加えられている。古墳時代後期の混入品であろう。15・16は「コ」の字状口縁甕である。頸部は直立するもの(15)と、内傾するもの(16)がある。器壁は薄く、胴部ヘラケズリ方法も規範に沿っている。17～19は「コ」の字状口縁甕の退化形態である。17はカマド燃焼部から焚口部にかけて出土した。口縁部は「く」の字に屈曲し、器壁は厚くなっている。器高も短小化しているが、胴部上位の横ケズリは「コ」の字状口縁甕のそれを承継している。

20は砂岩製の磨石で、側縁の摩滅が著しい。21・22は土埴片である。



第88图 第102号住居跡出土遺物

第22表 第102号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.9)	[3.2]	—	CI	15	良好	明褐	A区 坏身模倣 黒色処理なし 混入	31-6
2	土師器	坏	12.3	4.8	6.9	HI	85	良好	橙褐	掘方 全体に風化 体部指押え 底部手持ちケズリ	
3	土師器	坏	(12.0)	3.9	(6.5)	HI	30	良好	明褐	Na23 風化 底部中心部砂付着	32-1
4	土師器	高台埴	(14.0)	5.9	7.8	GHI	30	良好	明褐	Na12・13 風化により調整不明瞭 非ロク口整形か	32-2
5	須恵器	坏	(12.4)	[4.1]	—	BDEI	25	良好	灰	Na26 末野産 底部欠失	32-3
6	須恵器	高台埴	12.4	5.5	5.2	BEGI	80	不良	暗灰	カマドNa1 末野産 焼き甘く歪みあり 底部調整不明	
7	須恵器	(高台)埴	(12.4)	[3.1]	—	BEI	10	不良	褐	B区 末野産 内外面炭素吸着し黒ずむ 軟質肌思か	32-4
8	須恵器	高台埴	—	[2.5]	(5.0)	BDE	50	不良	灰	B区 末野産 底部回転糸切り	
9	ロクロ土師器	(高台)埴	(14.4)	[4.5]	—	CHIK	5	普通	黄灰褐	C区 口唇部肥厚 高台が付くか	32-5
10	ロクロ土師器	高台坏	—	[2.0]	(5.6)	ACHI	45	不良	淡褐	A区 底部回転糸切りと思われるが摩滅により不明瞭	
11	ロクロ土師器	皿	—	[1.6]	(5.8)	CHIK	15	普通	橙白	B区 底部外周手持ちヘラケズリか	32-4
12	須恵器	甕	—	[6.2]	—	BDI	—	良好	暗灰	Na21 外面平行叩き 内面無文当具	
13	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	IK	5	良好	灰白	A・C区 産地不明 肩部黄緑色の灰釉施 軸 胴部下位回転ヘラケズリ 2片あり接合しない	32-5
14	土師器	甕	(18.0)	[8.1]	—	CG	15	良好	暗褐	Na14 長胴甕 混入	
15	土師器	甕	(18.0)	[9.0]	—	CDH	30	普通	褐	Na24 武蔵型甕 内面木口ナゲカ	63-7
16	土師器	甕	(18.2)	[13.7]	—	CDH	15	良好	褐	Na24 武蔵型甕 内面木口ナゲカ	
17	土師器	甕	(19.0)	(19.2)	(4.4)	CHI	15	普通	淡褐	Na2・5・6・7 カマド 武蔵型甕 胴部と底部は接合しない 国土復元	63-2
18	土師器	甕	(19.8)	[5.8]	—	CHI	15	良好	淡褐	A区 D区 武蔵型甕 胴部厚い SJ102-19と同一か	
19	土師器	甕	(19.8)	[5.1]	—	CDHI	10	普通	淡褐	A区 武蔵型甕 SJ102-18と同一か	63-3
20	石製品	磨石	長さ[9.0]	幅7.2	厚さ[2.3]	重さ200.3					Na11 砂岩 平面、断面槽内形 表裏・周縁部スリ 特に側縁の摩滅著しい
21	土製品	土鍾	残存長1.1 最大径0.9 孔径0.3 重量0.6			I	—	普通	黒褐	C区	63-2
22	土製品	土鍾	残存長1.5 最大径1.0 孔径0.2～0.3 重量1.4			I	—	普通	暗褐	C区	63-3

図化した以外に、P4から口縁部が小さく内屈した北武蔵型坏が検出されている。7世紀後半頃のものとは推定され、P4に伴う遺物と考えられる。

住居跡の時期は9世紀末～10世紀前半(IV期新段階)と考えられる。

第104号住居跡 (第89図)

第104号住居跡はT・U-18グリッドに位置する。南東コーナーは調査区外に延びている。重複する第133号住居跡・第129号土壌・U-18グリッドP2よりも新しく、第101号掘立柱建物跡に壊されていた。第110号住居跡とは直接重複しな

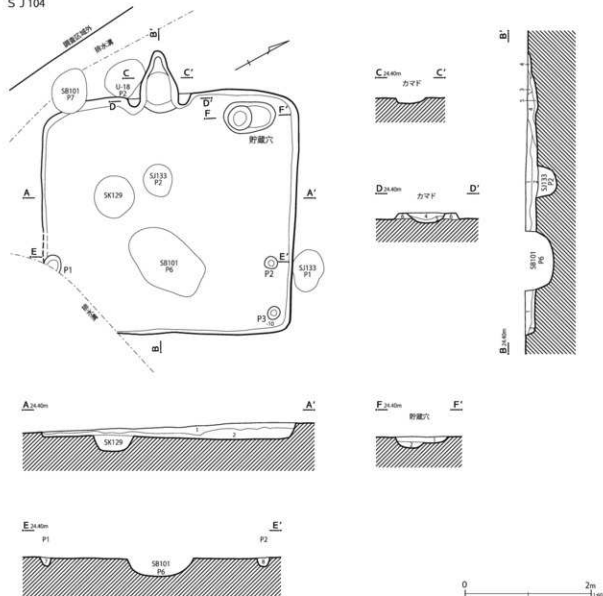
いが、本住居跡の方が古いと考えられる。

平面形は概ね正方形で、規模は長軸長4.05m、短軸長3.86m、深さ0.08～0.25mである。主軸方位はN-62°-Wを指す。

覆土は大きく上下の2層に分層され、ロームブロック混じりの褐灰色土で構成されていた(第1・2層)。堆積環境は不明確であるが、下層にロームブロックが多量に含まれることから、人為的に埋め戻された可能性がある。

床面は緩やかな起伏があり、東に向かって傾斜していた。

S J 104



S J 104

- | | | | |
|-----------|-----------------------|-----------------------|--------------------|
| 1 褐色土 | 炭化物・焼土粒 (φ3~5mm) 微量 | ロームブロック (φ10~15mm) 中量 | しまり・粘性あり |
| 2 褐色土 | 炭化物・焼土粒 (φ3~5mm) 微量 | ロームブロック (φ10~15mm) 多量 | しまり・粘性あり |
| 3 褐色土 | 焼土粒 (φ5mm) 多量 | ローム粒 (φ5mm) 少量 | しまりあり 粘性強 カマド天井崩落土 |
| 4 褐色土 | ローム粒 (φ5mm) 多量 | ローム粒 (φ5mm) 少量 | しまりあり 粘性強 カマド天井崩落土 |
| 5 褐色土 | 灰と炭の互層 | しまり・粘性弱 | カマド壁硝子 |
| 6 灰黄褐色土 | ロームブロック (φ5~10mm) 極多量 | しまり・粘性強 | カマド軸 |
| 7 にぶい黄褐色土 | 白色粒・赤褐色粒微量 | しまり・粘性やや強 | |
| 8 黒褐色土 | 白色粒・黄褐色ブロック微量 | しまり・粘性やや強 | |

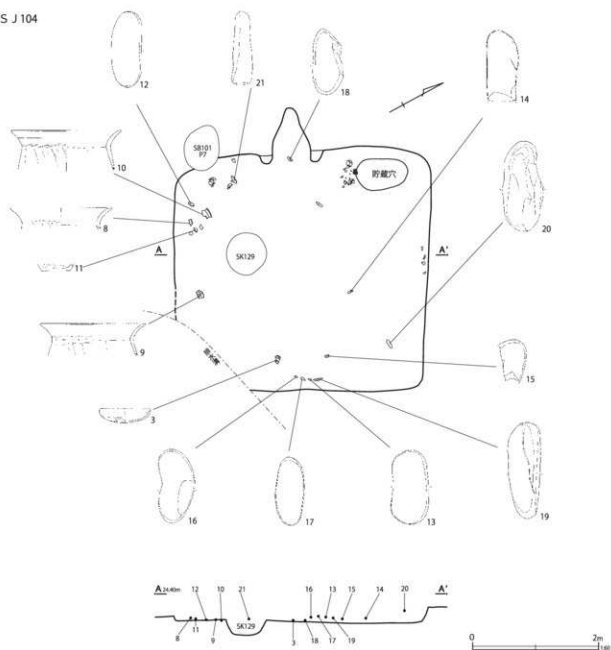
貯蔵穴

- | | | | |
|---------|-------------------|----------------|----------|
| 1 黒褐色土 | ロームブロック (φ5mm) 中量 | 炭化物粒 (φ3mm) 微量 | しまり・粘性あり |
| 2 灰黄褐色土 | ロームブロック主体 | しまり・粘性あり | |

第89図 第104号住居跡

カマドは西壁中央付近に設置され、規模は長さ0.94m、燃焼部幅0.60m、深さ0.15mである。

燃焼部は長さ0.60m、壁ラインを大きく掘り込んで造られていた。壁ライン内側の袖部は、ロー



第90図 第104号住居跡遺物出土状況

ムブロック混じりの灰黄褐色土を積んで構築されていた（第6層）。燃烧部の先には煙道部が約0.30m緩やかに延びていた。カマド覆土は褐灰色土を基調にしており、第3・4層が天井部崩落土、第5層が灰層に相当すると考えられる。

ピットは3基検出された。いずれのピットも深さが浅く、配置に規則性がないため、主柱穴には該当しないと思われる。

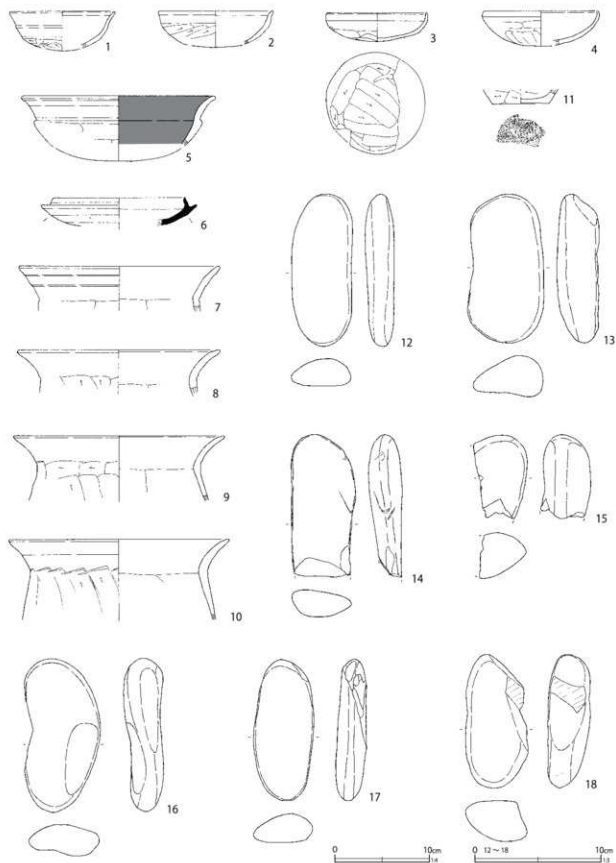
貯蔵穴はカマドに向かって右側の北コーナー

に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.82m、短径0.49m、深さ0.19mである。底面は二段に掘り込まれていた。

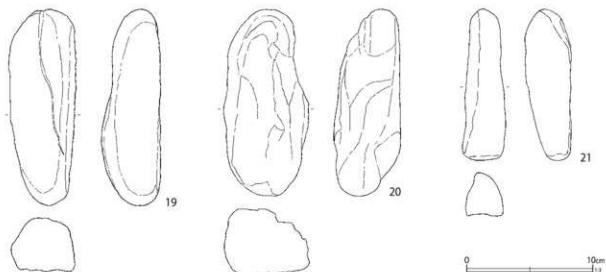
壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、土師器杯・鉢・甕、須恵器高坏、編物石がある（第91・92図）。図化した以外に土師器壺と須恵器杯の小片がある。全体に遺物量は少ない。

土師器杯は有段口縁杯（第91図1）、北武蔵



第91図 第104号住居跡出土遺物（1）



第92図 第104号住居跡出土遺物（2）

第23表 第104号住居跡出土遺物観察表（第91・92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	[3.9]	—	CI	15	良好	褐	C区 有段口縁坏	33-1
2	土師器	坏	(12.0)	[3.5]	—	CI	15	普通	褐	C区 北武蔵型暗文坏か 風化著しく内面暗文確認できない	
3	土師器	坏	10.5	3.0	—	CDH	70	普通	淡褐	Na19 A区 北武蔵型坏	
4	土師器	坏	(12.0)	3.6	—	CHI	15	良好	明褐	C区 北武蔵型坏 風化 調整不明瞭	33-2
5	土師器	鉢	(20.0)	[5.3]	—	CDI	15	普通	褐	C区 内面黒ずみ 黒色処理か	
6	須恵器	坏	(14.0)	[3.0]	—	DI	10	良好	明褐	C区 坏H身か 内面青灰色に還元TK209併行か 産地不明	
7	土師器	甕	(21.0)	[4.9]	—	ACHI	15	良好	褐	C区 風化しケズリ不明瞭	64-1
8	土師器	甕	(21.0)	[4.9]	—	CHI	15	良好	橙褐	Na16 全体に風化 調整不明瞭	
9	土師器	甕	(22.0)	[6.9]	—	ACGHI	20	普通	明褐	Na18 外面ケズリ風化により不明瞭	
10	土師器	甕	(23.0)	[8.6]	—	CGHI	20	普通	明褐	Na12 全体に風化 ケズリ不明瞭	64-2
11	土師器	甕	—	[1.6]	(6.0)	GHI	35	良好	明褐	Na14 底部木葉痕	
12	石製品	編物石	長さ12.0	幅4.8	厚さ2.3	重さ233.1				Na17 砂岩	64-1
13	石製品	編物石	長さ11.7	幅6.0	厚さ3.4	重さ338.7				Na22 砂岩 完形	64-1
14	石製品	編物石	長さ[11.3]	幅5.1	厚さ2.7	重さ212.8				Na25 砂岩	64-1
15	石製品	編物石	長さ[6.6]	幅[4.3]	厚さ[4.0]	重さ131.3				Na24 砂岩 編物石の一部か	64-1
16	石製品	編物石	長さ12.1	幅5.9	厚さ3.2	重さ296.6				Na20 片岩 完形	63-8
17	石製品	編物石	長さ11.1	幅4.8	厚さ2.5	重さ175.3				Na21 砂岩	63-8
18	石製品	支脚か	長さ10.5	幅5.0	厚さ3.4	重さ238.6				Na3 砂岩	63-8
19	石製品	編物石	長さ15.4	幅5.2	厚さ4.7	重さ509.1				Na23 砂岩 完形	64-2
20	石製品	編物石	長さ[14.7]	幅6.7	厚さ5.2	重さ708.6				Na26 チャート	64-2
21	石製品	編物石	長さ11.9	幅3.4	厚さ3.7	重さ185.6				Na5 砂岩 完形	64-2

型暗文坏か（2）、北武蔵型坏（3・4）がある。1は有段口縁坏としたが、段は退化している。2は器形的には北武蔵型暗文坏でよいが、内面の暗文は摩擦により確認できない。3は丸底の北武蔵型坏で、口縁部が短く直立する。やや扁平な器形で、口縁下に無調整部を残す特徴がある。4は口

唇部が小さく内湾し、深身の丸底形態である。3よりも古相といえる。

5は口径が20cmと大きく鉢とすべきだろう。内面が黒ずみ、黒色処理された可能性がある。

6は須恵器坏身である。有蓋長脚高坏の可能性もある。口径が大きく扁平・浅身である。口唇部

と受け部は丸く収めている。内面蓋受けの立ち上がりは不明瞭で、鋭さに欠ける。ヘラケズリは受け部直下まで及んでいる。器表面は明褐色、器肉は青灰色とサンドイッチ状に焼き上がる。TK 209型式項の坏身と考えておきたい。住居跡に伴うものではないであろう。産地は不明である。

7～11は土師器甕である。口縁部に最大径を持つ長胴甕の系譜下にあり、胴部は縦方向のヘラケズリ、9は胴部上端を横方向にヘラケズリされている。

12～21は扁平・棒状の石製品で、住居南東壁周辺とカマド周辺の床面付近から出土した。12～17、19～21は編物石と思われる。大小あるが長さ約11～15cm、重量200～300g前後に比較的にまとまる傾向がある。18はカマド内燃焼部中央手前から出土し、支脚の可能性もある。

遺物の時期は7世紀末葉～8世紀前半にまとまるが、3の北武蔵型坏を基準に、奈良時代前半(Ⅲ期古段階)と考えておきたい。

第105号住居跡(第93図)

第105号住居跡は調査区南西端部のU-18グリッドに位置する。第104号住居跡の南側に隣接する。調査区の制約で遺構全体を確認することはできなかった。重複する第159号土壌は床面下から検出され、本住居跡よりも古いと考えられる。また、南半部は第101号溝跡に壊されていた。

平面形は方形系と推定されるが、北壁部が一部遺存するのみで不明瞭である。残存規模は南北長3.90m、東西長1.91m、深さ0.30mである。主軸方位は、北壁に直交する向きで測定するとN-13.5°-Eを指す。

覆土はローム粒子混じりの灰黄褐色土で構成されていた。下層にはローム粒子の混入が目立っていた。床面は緩やかな起伏を持ち、南半は第101号溝跡に削平されていた。

カマドは検出されなかった。残存部にカマドの痕跡が認められないことから、東壁に設置されて

いた可能性が高いと推定される。

ビットは2基検出されたが、いずれも主柱穴に相当するものではない。貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少ない。土師器坏・皿・甕、須恵器蓋がある(第94図)。図化した以外に湖西産と思われる須恵器瓶肩部片が含まれていた。

1・2は土師器北武蔵型坏である。1は深身で口縁部が短く内湾する。2はやや扁平な丸底で口縁部が内湾気味に直立する。3は北武蔵型の皿である。4は土師器小型甕である。台付になる可能性もある。全体に風化している。5は須恵器蓋。内面にかえりが付くもので、末野産である。重複する第159号土壌からは土師器長胴甕の胴部片が出土している。7世紀～8世紀初頭頃のものとして推定され、住居以前の土壌、あるいは住居に伴う床下土壌の可能性もあろうか。重複関係とも整合的である。

住居跡の時期は8世紀初頭～前半(Ⅲ期古段階)と考えられる。

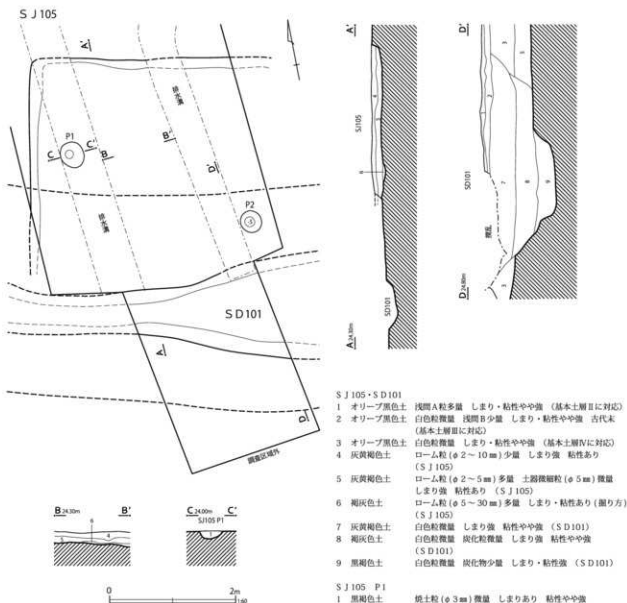
第106号住居跡(第95図)

第106号住居跡はT-18グリッドに位置する。重複する第101号掘立柱建物跡、第109号溝跡よりも新しく、第121号土壌よりも古い。

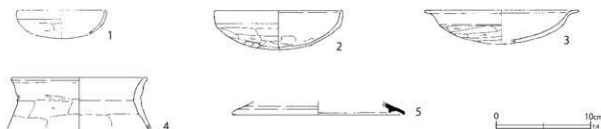
西壁から南壁の一部は調査区外に延びるため、正確な形態は不明であるが、平面形はやや歪んだ方形と推定される。規模は長軸長3.00m、短軸長2.65m、深さ0.16mである。主軸方位はN-16°-Eを指す。

覆土は6層に分層され、上層の第1～3層は赤色粒子を含む黄褐色系土で、下層の第4・5層は暗褐色土で構成されていた。住居跡中央部の床面上には、灰層が厚く堆積していた。

床面は緩やかな起伏が比較的顕著である。炉やカマドは検出されなかった。カマドの有無は不明であるが、存在したとすれば西壁に設置されたと思われる。



第93図 第105号住居跡・第101号溝跡



第94図 第105号住居跡出土遺物

ピットは5基検出された。P5は壁を切り込んで掘り込まれており、住居跡に伴うものではない。P1～P3は覆土が地山粒子を多量に含む灰黄褐色土で近似するが、規模や配置から住居の主柱穴

に相当するとは思われない。

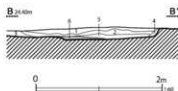
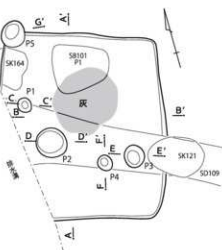
貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少ない。須恵器杯・高台杯・皿・蓋・瓶・フラスコ形瓶が検出されている(第96

第24表 第105号住居跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	[3.0]	—	CDI	15	良好	明褐	B区 北武蔵型坏 風化著しい	33-3
2	土師器	坏	(13.4)	4.2	—	CDI	30	普通	褐	B区 北武蔵型坏 全体に風化し調整不明瞭	
3	土師器	皿	(16.0)	3.6	—	CDI	20	良好	明褐	B区 北武蔵型皿 全体に風化	
4	土師器	甕	(14.0)	[5.6]	—	AH	25	普通	明褐	B区 全体に風化	
5	須恵器	蓋	(18.0)	[1.4]	—	BDI	5	良好	灰	C区 末野原 かえり蓋	

S J 106



S J 106

- 1 灰黄褐色土 白色粒微量 赤褐色ブロック少量 しまりやや強 粘性弱
 2 灰黄褐色土 白色粒・赤褐色ブロック微量 しまり・粘性やや強
 3 にぶい黄褐色土 白色粒・赤褐色粒微量 しまり・粘性やや強
 4 暗褐色土 白色粒微量 しまり・粘性やや強
 5 暗褐色土 白色粒微量 黄褐色ブロック少量 しまり・粘性やや強
 6 灰白色土 灰 しまり・粘性弱

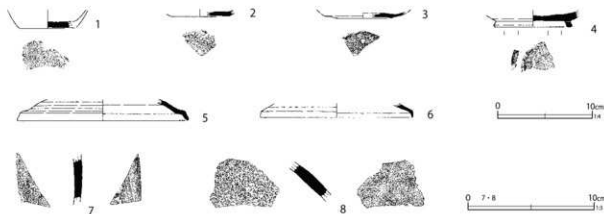
P 1～3

- 1 灰黄褐色土 粘質シルト 炭化粒微量 地山粒多量 しまりややあり 粘性やや弱

P5

- 1 黄褐色土 地山粒 (φ 5 mm) 少量 しまり・粘性あり

第95図 第106号住居跡



第96図 第106号住居跡出土遺物

第25表 第106号住居跡出土遺物観察表（第96図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	[0.8]	—	D1J	20	良好	褐	C区 南比企産 底部回転糸切り	
2	須恵器	坏	—	[0.7]	(6.0)	B1K	20	普通	灰	D区 末野産 底部回転糸切り	
3	須恵器	皿	—	[0.5]	(6.0)	IK	20	不良	灰白	A区 末野産か 器壁薄い 底部回転糸切り	
4	須恵器	高台坏	—	[1.8]	(8.0)	DJ	15	良好	灰	C区 南比企産 底部回転糸切り後回転ヘラケズリ	
5	須恵器	蓋	(18.0)	[2.2]	—	IJ	5	良好	灰	A区 南比企産 佐波理模倣塼蓋か	
6	須恵器	蓋	(16.0)	[1.5]	—	IJ	5	良好	明灰	C区 南比企産 器壁薄い 内面に自然釉付着	
7	須恵器	フラスコ形瓶か	—	[4.0]	—	I	5	良好	明灰	B区 東海産 ロック口目に沿い縦に自然釉流れる	
8	須恵器	瓶	—	[3.1]	—	E1J	5	良好	灰	D区 南比企産 瓶肩 肩部片 外面濃緑色の自然釉 内面（ロクロ）ナデ	

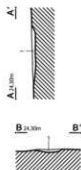
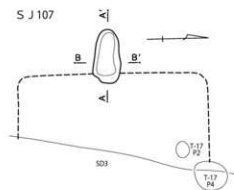
図）。図化した以外には土師器甕片が出土した。

1・2は須恵器坏、3は須恵器皿と思われる。いずれも底部は回転糸切り離し後無調整である。末野産で、時期は9世紀中頃～後半と推定される。4は高台坏である。底部は回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ調整される。南比企産で8世紀代のものであろう。5・6は須恵器蓋である。5は佐波理模倣塼の蓋と思われる。6は内面に自然釉が付く。重ね焼き時に逆位に置いたものであろう。7はフラスコ形瓶の胴部片と思われ、7世紀代と推定される。8は（長頸）瓶である。

時期は7世紀、8世紀中頃と9世紀中頃～後半のものが含まれている。新しい時期に代表させて9世紀中頃から後半（IV期中段階）と考えておきたい。

第107号住居跡（第97図）

第107号住居跡はT-17グリッドに位置する。



重複する第3号溝跡に壊されていると考えられる。また、東に位置する第112号住居跡とも重複する可能性があるが、新旧関係は不明である。

カマドのみ残存していた。床面も削平されていたため、平面形態や規模等詳細は不明である。主軸方位はカマドの主軸に平行するとすればN-88°-Wを指す。

カマドは西壁に設置されていた。形態は楕円形で、規模は長径0.84m、短径0.43m、深さ0.05mである。覆土には焼土粒子・炭化物粒子が多量に含まれていた。燃焼部に相当すると考えられた。ピットは2基検出されたが、住居に伴う確証は得られなかった。

貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第109号住居跡（第98図）

第109号住居跡は調査区東南部のS・T-18・

S J 107 カマド

1 灰黄褐色土 焼土粒（φ 5mm）・炭化物粒（φ 5mm）多量
しまり・粘性あり

第97図 第107号住居跡

19グリッドに位置する。重複する第120・121号住居跡・第103号溝跡・第155号土壌よりも新しい。

平面形はやや横長の形で、規模は長軸長4.50m、短軸長3.61m、深さ0.11mである。主軸方位はN-20° -Wを指す。

覆土は第1・2層が住居廃棄後の堆積層で、第2層に焼土・炭化物の混入が目立った。第3層は床面直上の堆積土で、炭化物が層状に堆積していた。床面は緩やかな起伏があり、住居中央部を中心に貼床されていた。

カマドは北壁中央からやや東に寄った位置に設置され、規模は長径1.10m、短径0.61m、深さ0.25mである。燃焼部は長径0.84mで、大半は壁外に突出して掘り込まれていた。煙道部は燃焼部の先に段をもって立ち上がるが、検出できたのは長さ約0.10mにとどまった。

壁内の袖部は僅かに認められたが、概ね壁ラインが焚口部に相当する状況であった。覆土は第4層が灰層に相当し、灰と焼土・炭化物粒子が堆積していた。その下層（第6層）は掘り方である。

ピットは11基検出された。P1～P4は配置的には主柱穴とみることも可能であるが、P3は深さ0.16m、P4は0.13mと浅く、住居跡に伴う柱穴か否か確認は得られなかった。P1は深さ0.35mで柱痕状の土層堆積が見られ、P1とP2（深さ0.26m）の2本柱穴を想定することも可能である。

P10からは7世紀から8世紀と推定される土師器甕の破片が出土しており、本住居跡には伴わない可能性が高い。他のピットの帰属は不明である。

P7はカマド右脇のコーナー部に位置する。形態は隅丸方形で、規模は長さ0.61m、幅0.53m、深さ0.18mである。覆土には焼土と炭化物が含まれていた。土師器環（1～3）が出土しており、配置や出土遺物から、住居に伴う貯蔵穴と考えら

れる。

壁溝はカマドとP7を除き全周する。規模は幅0.16～0.24m、深さ0.06～0.15mである。

出土遺物は、土師器環・甕・台付甕、須恵器環・埴、紡錘車がある（第100図）。遺物は量的にはやや少なく、覆土が浅いこともあり、多くは床面または、やや浮いた位置から出土した。

1～3は土師器北武蔵型環である。1・3は平底風の底部で、体部は無調整である。3は底部が小さく口縁部の開きが大きい。より深身の器形である。2は体部下端以下がヘラケズリされる。1～3はいずれもP7（貯蔵穴）から出土した。

4・5は須恵器環である。4は南比企産、5は末野産で、底部は手持ちヘラケズリ調整が施されている。6～8は須恵器無台埴で、いずれも南比企産である。6はカマド手前の床面より少し浮いた位置から出土した。底部は回転糸切りである。8は掘り方から出土した。底部側面（破面）に摩耗した痕跡があり、砥石として再利用されたと考えられる。

9～11は土師器甕である。いわゆる「コ」の字状口縁で、頸部は直立する（9・10）。12は土師器小型台付甕と思われる。

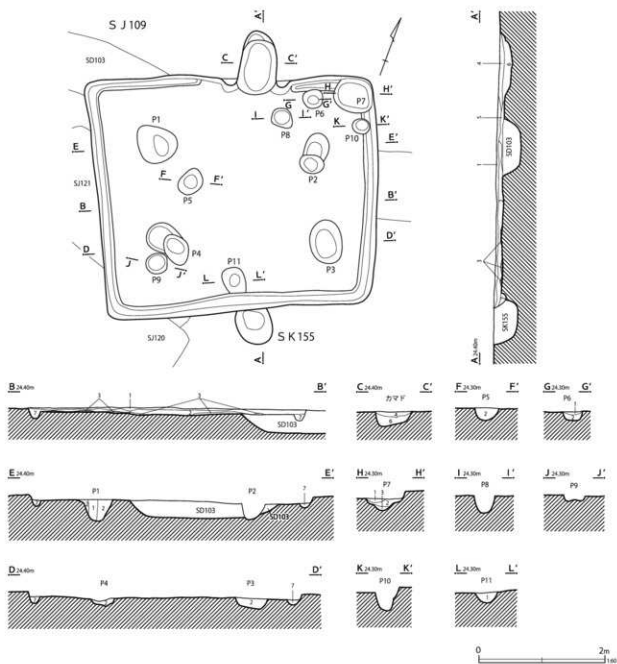
13・14は陶製紡錘車である。13はカマド左脇の床面から出土した。須恵質の焼きで、胎土から南比企産と考えられる。14は須恵器環底部を転用した紡錘車である。南比企産で、底部は回転糸切り痕が残る。

時期は9世紀中頃～後半（IV期中段階）と考えられる。

第110号住居跡（第101図）

第110号住居跡はT・U-18・19グリッドに位置する。カマドのみ残存し、遺構の遺存状態は極めて悪かった。重複する第127号土壌、第133号住居跡よりも新しい。また、第104号住居跡・第141号住居跡よりも新しいと推定される。

平面形態は方形系と推定されるが詳細は不明で



S J 109

- 1 褐色土 炭化物粒 (φ 5 mm)・焼土粒 (φ 3 mm) 微量 しまり・粘性あり
- 2 灰黄褐色土 炭化物粒 (φ 3~5 mm)・焼土粒 (φ 3~5 mm) 多量 しまり・粘性あり
- 3 黒色土 炭が層状に堆積 しまり・粘性あり
- 4 褐色土 炭化物粒 (φ 5 mm)・焼土粒 (φ 5 mm) 中量 しまり・粘性あり 灰層
- 5 黒褐色土 炭化物粒・炭化物を主体とする しまり・粘性あり
- 6 濃い黄褐色土 炭化物粒 (φ 5)・焼土粒 (φ 5 mm) 少量 ローム粒 (φ 3~10 mm) 中量 (カマド配り方)
- 7 黒褐色土 粘質シルト 地山粒・炭化粒少量 しまりややあり 粘性やや弱 (壁溝)

P1~5

- 1 黒褐色土 粘質シルト 地山粒少量 しまりあり 粘性ややあり
- 2 灰黄褐色土 粘質シルト 地山ブロック多量 しまりあり 粘性ややあり

P6

- 1 黒褐色土 炭化物・炭化粒多量 焼土粒含む
- 2 灰黄褐色土 地山ブロック多量

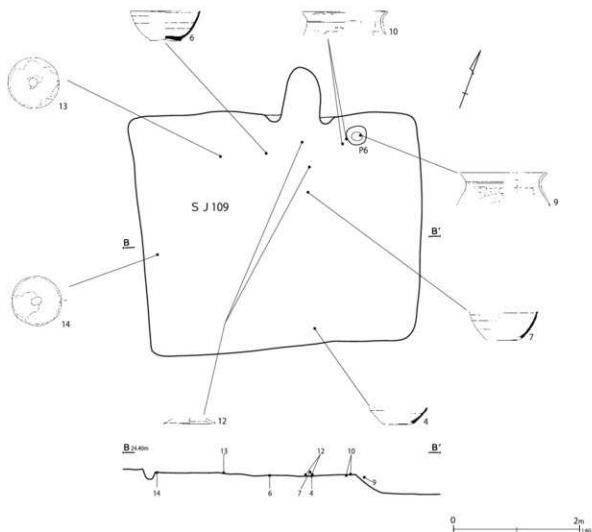
P7

- 1 黒褐色土 粘質シルト 炭化粒多量 焼土粒少量 しまりやや弱
- 2 灰黄褐色土 粘質シルト 炭化粒少量 焼土粒微量 しまりやや弱
- 3 濃い黄褐色土 粘質シルト 黒褐色土と地山ブロック混じり しまりやや弱

P11

- 1 灰黄褐色土 地山ブロック (φ 5~10 mm) 多量 しまり・粘性あり

第98図 第109号住居跡・第155号土壇



第99図 第109号住居跡遺物出土状況

ある。

カマドは東西に長い不整楕円形である。規模は長径1.28m、短径0.62m、深さ0.15mである。東側が深く、西側に向かって緩やかに立ち上がることから、西側に延びるカマドと想定した。カマドの主軸方位はN-88°-Wを指す。

覆土には炭化物と焼土粒子が多く含まれていた。第4層が灰層と思われる。

貯蔵穴・壁溝などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少ない。図化できた遺物は須恵器坏(第101図1)のみである。

1は須恵器坏で、カマド内から出土した。口縁部は内湾気味に立ち上がり、底部は回転糸切り後

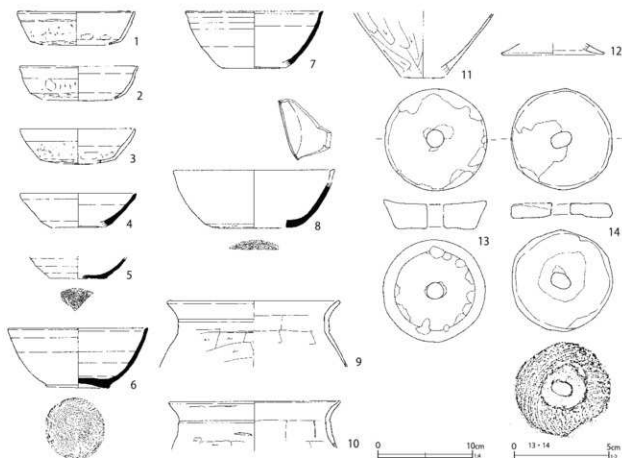
無調整である。推定口径12.0cm、器高3.6cm、底径5.8cmである。底径は口径の1/2を僅かに下回る。55%残存し、紫灰色である。注記番号はNo. 1で焼成は良好である。南比企産である(図版34-3)。

時期は9世紀中頃～後半(IV期中段階)と考えられる。

第113号住居跡(第102図)

第113号住居跡は調査区東端のS-18・19グリッドに位置する。東壁は調査区外に延びている。重複する第114・145号住居跡よりも新しい。第115号住居跡との新旧関係は不明確であったが、本住居跡の方が新しいものと判断した。

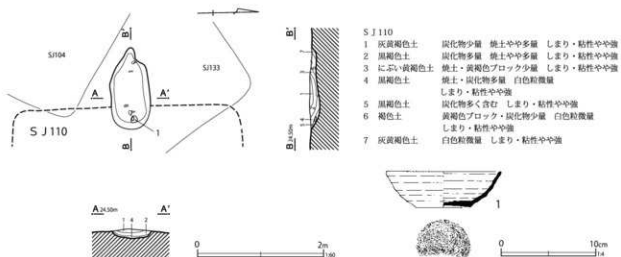
平面形は台形に近い方形系と推定される。残存



第100図 第109号住居跡出土遺物

第26表 第109号住居跡出土遺物観察表 (第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.3)	3.5	(9.5)	CI	20	良好	褐	P 7 北武蔵型坏 体部無調整	
2	土師器	坏	(12.4)	3.5	—	ACI	25	普通	褐	P 7 北武蔵型坏	
3	土師器	坏	(12.1)	3.6	(8.0)	AHI	15	良好	褐	P 7 北武蔵型坏 体部無調整 底部ケズリ	
4	須恵器	坏	(12.2)	3.6	—	DIJ	35	良好	暗青灰	Na.10 C区 南比企産 底部欠失	33-4
5	須恵器	坏	—	[2.3]	(6.0)	BD	20	良好	暗灰	B区 木野産 底部手持ちヘラケズリ	
6	須恵器	無台碗	14.7	6.3	6.3	DIJ	85	良好	灰	Na.3 南比企産 底部回転糸切り 底部厚く重感あり	33-6
7	須恵器	無台碗	(14.5)	[5.9]	—	EIJ	20	普通	暗灰	Na.6 B区 南比企産	33-5
8	須恵器	無台碗	—	[4.9]	(8.8)	J	10	良好	灰	掘り方 南比企産 底部側面を砥石として再利用している	
9	土師器	甕	(18.0)	[7.0]	—	ACI	15	良好	褐	Na.9 武蔵型甕	
10	土師器	甕	(18.0)	[5.0]	—	ACI	25	普通	褐	Na.7・8 武蔵型甕	
11	土師器	甕	—	[6.5]	(4.5)	CDI	15	普通	褐	カマド 武蔵型甕	
12	土師器	台付甕	—	[1.2]	(10.5)	ADHI	45	普通	褐	Na.4・5	
13	陶製品	紡錘車	上底径5.4 下底径4.3 厚さ1.5 孔径0.9 重さ51.4			DIJ	95	良好	灰	Na.2 須恵質 南比企産 端部に細か、割離痕がみられる	34-1
14	須恵器	紡錘車	最大径5.4 厚さ0.7 孔径0.7 ~ 1.1 重さ20.0			DJ	100	普通	灰褐	Na.1 南比企産 須恵器坏底部を転用した紡錘車 裏面には回転糸切り痕を残す孔は槽円形	34-2



第101図 第110号住居跡・出土遺物

規模は長軸長3.60m、短軸長3.35m、深さ0.09mである。主軸方位はN-76°-Eを指す。

覆土は灰黄褐色土で構成され、層厚が薄いこともあり、明確な土層変化は観察されなかった。

床面は全体に緩やかな起伏がある。カマドは検出されなかったが、東壁に設置された可能性が高い。住居西部には不整形の落ち込みが検出された。掘り方と考えられる。

ピットは南壁際に2基検出された。いずれも住居跡に伴うものではない。

貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器・甕・小型甕・壺、須恵器・皿・高台碗・蓋・甕、灰釉陶器長頸瓶がある(第103図)。いずれも小片で量的にも少ない。時期幅も大きい。

1～3は土師器である。1は北武蔵型である。大振り・平底で、体部下半は横方向のヘラケズリが施される。掘り方から出土した。2は北武蔵型で、丸底・深碗形態と予想される。7世紀後半から8世紀初頭頃の所産であろう。第114号または第115号住居跡に帰属する可能性がある。3は坏蓋模倣坏で口径は11cmと小さく、底部は扁平である。同タイプの中では最新の様相である。7世紀中頃～後半代のものであろう。掘り方から出土した。他に、坏身模倣坏と有段口縁坏の細片

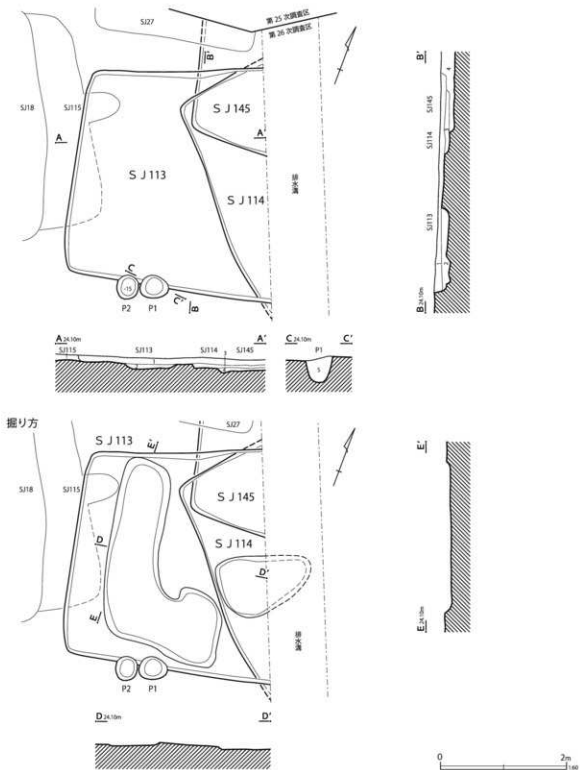
が検出されている。

4は須恵器である。推定口径は11.2cmとやや小振りで、底径は口径の1/2を超える。底部は回転糸切り後無調整である。南比企産で、南比企編年HV期に比定される。覆土出土である。5は須恵器高台碗である。底部は回転糸切り後無調整で、底径はまだ大きい。末野産で、9世紀初頭頃のものとして推定される。6は須恵器碗で、体部下端に回転ヘラケズリ調整が見える。高台が付く可能性がある。末野産である。8世紀代のもので推定される。7は高台碗の破片で、底部は回転糸切り痕を残す。内面見込み部は摩滅し、側縁が故意に打ち欠かれている。転用硯か。末野産である。8は須恵器皿で、末野産である。掘り方から出土した。9・10は須恵器蓋である。南比企産で、無台碗の蓋と思われる。

11は灰釉陶器長頸瓶の頸部片で、内面に灰釉が施される。東濃産か。掘り方から出土した。

12～16は土師器甕である。12はいわゆる「コ」の字状口縁甕で、掘り方から出土した。13は小型甕で、「コ」の字状口縁甕の前段階のものと思われる。14・15は「コ」の字状口縁甕の底部、16は小型台付甕の台部と思われる。

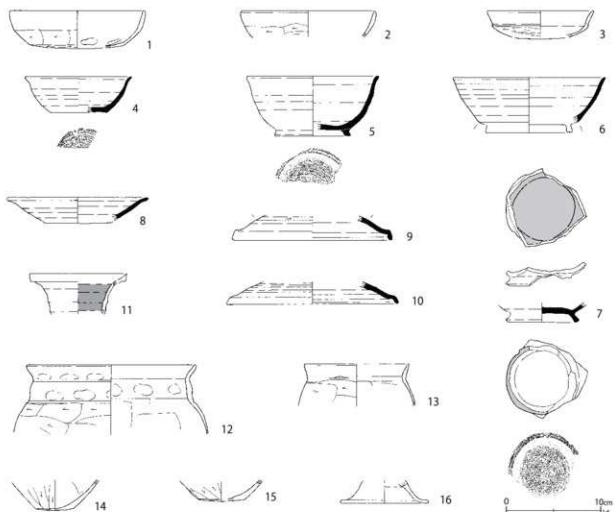
时期的には7世紀後半～8世紀初頭中心の2・3・13、8世紀後半～9世紀初頭頃の1・4～



S J 113・114・145

- 1 灰黄褐色土 焼土粒 (φ 3 mm)・炭化物粒 (φ 3 mm) 多量 地山ブロック (φ 10 ~ 20 mm) 中量 しまり・粘性あり
- 2 黒褐色土 地山粒 (φ 5 ~ 20 mm) 中量 しまり・粘性あり (住居掘り方)
- 3 褐灰色土 焼土粒 (φ 5 mm)・地山粒 (φ 10 ~ 20 mm) 中量 しまり・粘性あり (S J 114)
- 4 褐灰色土 地山粒 (φ 5 ~ 20 mm) 多量 焼土粒 (φ 10 mm) 中量 しまり・粘性あり (S J 145)
- 5 黒褐色土 シルト 地山ブロック少量 鉄分多量 焼土粒微量 しまり・粘性あり (P 1)

第102図 第113・114・145号住居跡



第103図 第113号住居跡出土遺物

第27表 第113号住居跡出土遺物観察表 (第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.2)	3.9	(10.1)	ACI	20	良好	褐	掘り方 体部・底部ヘラケズリ 北武蔵型坏	35-4
2	土師器	坏	(14.0)	[2.8]	—	ACI	10	良好	明褐	S113・114・115 北武蔵型坏	
3	土師器	坏	(11.0)	[2.8]	—	CGH	20	良好	淡褐	掘り方 坏道模倣坏	
4	須恵器	坏	(11.2)	3.8	(6.0)	EJK	15	良好	灰	南比企産 底部回転系切り	
5	須恵器	高台埴	(13.8)	6.3	(7.9)	BDEK	20	普通	灰	末野産 底部回転系切り	36-1
6	須恵器	埴	(16.0)	[4.8]	—	ABE	15	普通	灰黄褐	C区 末野産 高台埴か	
7	須恵器	高台埴	—	[2.0]	(6.6)	BDIK	80	良好	暗灰	掘り方 末野産 底部回転系切り 見込部と高台摩滅 側縁打ち欠かれる 転用破か	
8	須恵器	皿	(14.7)	[2.4]	—	BEIK	5	普通	暗灰	掘り方 末野産	
9	須恵器	蓋	(16.7)	[2.6]	—	DIJ	25	良好	暗灰	B区 南比企産 埴蓋 天井部回転ヘラケズリ	36-1
10	須恵器	蓋	(18.0)	[2.4]	—	DJ	5	良好	明灰	D区 南比企産 無台埴の蓋	
11	灰釉陶器	長頸瓶	—	[3.2]	—	K	10	良好	灰	掘り方 東濃産か 胎土精強 内面灰釉	
12	土師器	甕	(17.8)	[7.3]	—	ACH	25	良好	褐	掘り方 武蔵型甕	
13	土師器	小型甕	(11.0)	[4.4]	—	AGI	20	良好	茶褐	B区	36-1
14	土師器	甕	—	[3.2]	(4.0)	CHI	20	良好	暗褐	SJ113・114・115 武蔵型甕	
15	土師器	甕	—	[2.2]	(5.0)	CHI	35	良好	茶褐	武蔵型甕	
16	土師器	小型台付甕	—	[2.4]	(9.0)	CG	20	良好	暗褐	B区	

6・9・10、9世紀後半の7・8・11・12・14～16の大きく3群（3時期）の遺物が混在する状況である。掘り方から新しい遺物が出土する例もあり、重複遺構との関係を総合的に把握することは難しいが、最も新しい時期の遺物に代表させて、本住居跡は9世紀後半（Ⅳ期中段階）の所産と考えておきたい。

第114号住居跡（第102図）

第114号住居跡はS-19グリッドに位置する。調査区東端に位置し、遺構の大半は調査区外に延びている。

重複する第145号住居跡よりも新しく、第113号住居跡よりも古い。

平面形は方形系と推定され、残存規模は南西辺の長さ3.08m、北西辺の長さ1.34m、深さ0.09mである。主軸方位はN-42°-Wを指す。

覆土は褐灰色土で構成されていたが、上面は第113号住居跡に削平されており、埋没状況は不明確であった。

床面は概ね平坦であるが、詳しい状況は明らかにできなかった。南西壁の際には不整形の落ち込みが検出された。床下土壌または掘り方と思われる。調査区外に延びている。

カマド・ピット・貯蔵穴・壁溝などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、土師器杯・甕の細片が少量検出されているが、確実に伴う図化可能な遺物はない。重複する第113号住居跡から出土した遺物のうち、8世紀後半～9世紀初頭と思われる第103図1・4～6・9・10等が本住居跡に帰属する可能性が高い。時期は不明確ながら、8世紀後半～9世紀初頭（Ⅲ期新段階～Ⅳ期古段階）頃と考えておきたい。

第115号住居跡（第83図）

第115号住居跡はS-18グリッドに位置する。重複する第113号住居跡・第18号住居跡に壊され、遺存状態は良くない。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.40m、短軸長1.12m、深さ0.10mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

覆土は褐灰色土を基調としていたが、層厚が薄く堆積状態は明確にできなかった。

カマドは東壁に設置されていた。平面形は楕円形で、規模は長径1.75m、短径0.55m、深さ0.19mである。確認面が床面とあまり変わらなかったために、袖など上部構造の詳細は明らかにできなかった。概ね壁ラインから内側が燃焼部と思われる。覆土には灰と焼土が多量に含まれていた。第2・3層が灰層に相当すると考えられる。第3層下面が火床面となろう。

ピット・貯蔵穴・壁溝などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少量で、土師器武蔵型甕の破片がカマドから検出されている（第104図）。1は土師器武蔵型甕の口縁部片。頸部が直立するいわゆる「コ」の字状口縁甕、またはその直前段階の「弓」状口縁をもつタイプと考えられる。頸部の屈曲はやや弱いようである。推定口径は20.0cmである。色調は明褐色で、焼成は普通である。5%残存し、胎土に長石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。

重複する第18号住居跡は8世紀末～9世紀初頭頃と推定される。調査所見から本住居跡は第18号住居跡よりも古いことは明白である。遺物から見ると、両住居跡の時期差はあまり感じられない。ほぼ同時期、または連続した時期の中で建て替えられたと考えるのが妥当であろう。

時期は8世紀後半～9世紀初頭（Ⅲ期新段階～



第104図 第115号住居跡出土遺物

IV期古段階)と考えておきたい。

第122号住居跡 (第105図)

第122号住居跡はR・S-16・17グリッドに位置する。重複する第124号住居跡によってカマド先端部を、第6号溝跡によって住居跡中央部を壊されていた。第148号住居跡・第165号土壌は本住居跡よりも古い。

平面形は長方形であるが、東壁南側に段差が付く。規模は長軸長4.20m、短軸長3.30m、深さ0.30mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。

覆土はシルト質の灰黄褐色土が厚く堆積していた (第5層)。自然堆積か否かは明らかにできなかった。

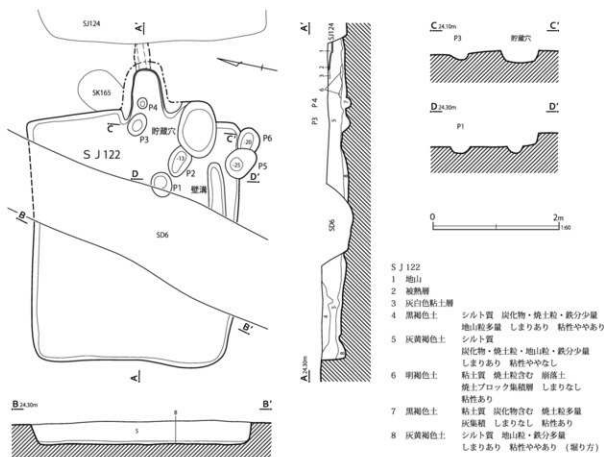
第5層下面が床面に相当する。床面は起伏が顕著で、平坦な面は形成されていなかった。

カマドは東壁に設置され、煙道部先端は第124

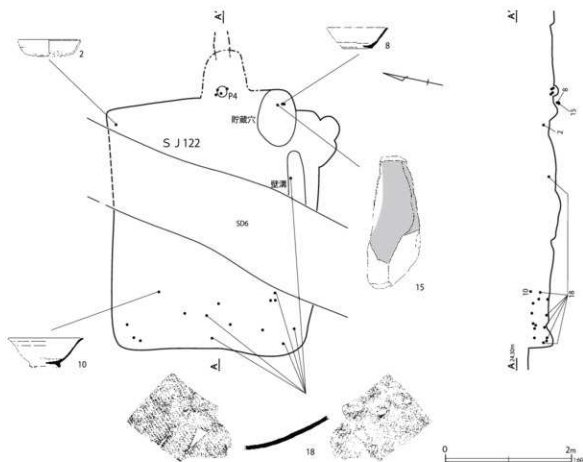
号住居跡に壊されていた。残存規模は全長1.32m、袖部幅1.08m、深さ0.22mである。燃焼部は長さ0.84m、幅0.54mで、底面は床面とほぼ同一の高さで続いていた。燃焼部の周囲には白色粘土が充填され (一点鎖線で図示した)、壁面は強く被熱していた。壁内の袖は長さ約0.25mであった。煙道部は水平に掘り抜かれており、天井部は地山が崩れずに遺存していた。煙道部内面も被熱していた。

カマド覆土は住居跡覆土とよく似ていた (第5層)。第6層が天井部崩落土、第7層が灰層と考えられる。

燃焼部中央よりもやや左に寄った位置から、直径0.17×0.15m、深さ0.09mの小ピット (P4) が検出された。周囲に割れた縁が4点出土しており、これをカマド支脚の残片と考え、P4は



第105図 第122号住居跡



第106図 第122号住居跡遺物出土状況

支脚を据えた穴の可能性がある。P 3は焚口部付近から検出された。規模は直径0.37×0.26m、深さ0.09mと浅い。覆土には灰が多量に含まれており、灰溜ビットと考えられる。

ピットは6基検出された。P 1・P 2・P 5・P 6は配置が不規則で、深さも浅い。住居跡に伴う柱穴とは考えられない。P 2からは古墳時代後期の有段口縁杯が出土している。

貯蔵穴はカマド右側のコーナー部に設けられている。平面形は楕円形で、規模は長径0.90m、短径0.62m、深さ0.19mである。覆土中層には灰が堆積していた。カマドから流入したと推定される。底面付近には角柱状の結晶片岩と須恵器坏片が出土した。

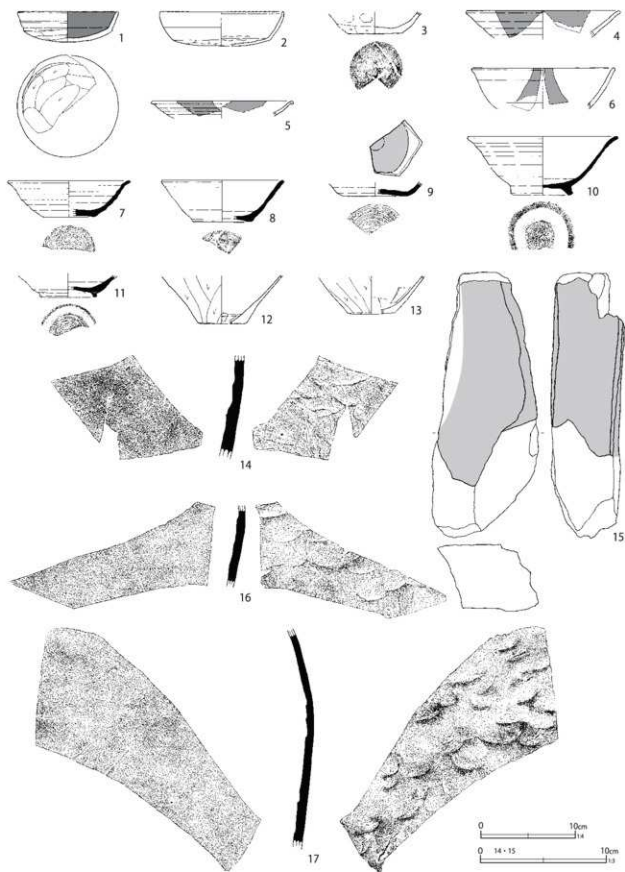
壁溝は貯蔵穴西側から検出された。規模は、幅0.25m前後、深さ0.12mである。南壁より内

側に入ること、貯蔵穴を境に東壁に段差が付くことから、一度建て替えられた可能性がある。

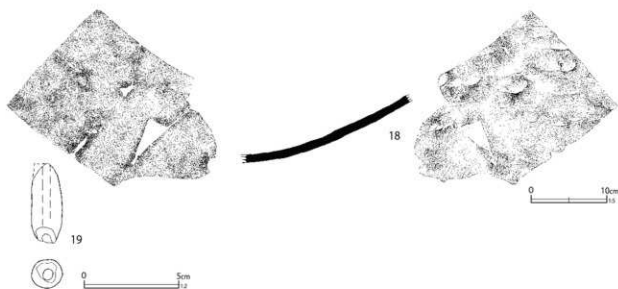
出土遺物は比較的多い。器種としては土師器坏(北武蔵型坏)・武蔵型甕、須恵器坏・高台埴・無台埴か・甕、灰釉陶器高台埴・高台皿、土鍾、石製品がある(第107・108図)。

遺物は住居跡西壁部付近からまとまって出土した。片岩の破片が多い。須恵器甕胴部片は西壁際の床面から出土した。片岩片は高い位置から出土し、西壁側から投棄されたものが多いと考えられる。

第107図1～3は土師器坏である。1はP 2出土の有段口縁杯である。7世紀前半代のもので、住居跡に伴うものではない。2は扁平・平底風の北武蔵型坏である。北東コーナー部から出土した。3は底部と体部下端がヘラケズリ調整される。平



第107图 第122号住居跡出土遺物(1)



第108図 第122号住居跡出土遺物（2）

第28表 第122号住居跡出土遺物観察表（第107・108図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(10.6)	3.2	—	AEIK	35	普通	赤褐	P 2 有段口縁 内面黒色処理（炭素吸着）	36-3
2	土師器	坏	(13.0)	3.6	(10.4)	CI	10	普通	淡褐	Na17 北武蔵型坏 口縁部歪みあり	
3	土師器	坏	—	[2.3]	(5.6)	CDI	60	良好	淡褐	A区 C区 D区 底部+体部下端手持ちヘラケズリか	
4	灰釉陶器	高台皿	(18.0)	[2.8]	—	GIK	10	良好	灰白	D区 非猿投・非東濃産か 内外面白色灰釉 胎土やや砂っぽい	
5	灰釉陶器	高台皿	(14.7)	[1.6]	—	G	5	良好	明灰	D区 猿投または二川産か K-90号窯式併行か 内外面に暗緑色の灰釉刷毛塗りと思われる	
6	灰釉陶器	（高台）碗	(14.8)	[4.3]	—	I	5	良好	明灰	C区 非猿投・非東濃産か やや粗い土灰釉刷毛塗りか	
7	須恵器	坏	(12.6)	3.8	(5.6)	IK	20	良好	明灰	C区 D区 産地不明 深身 肌目やや粗い 底部回転糸切り	36-4
8	須恵器	坏	(12.0)	4.4	(6.0)	ABI	20	不良	灰褐	Na 2 野 末野産 底部回転糸切り	
9	須恵器	坏	—	[1.5]	(6.8)	IJ	30	良好	灰	A区 南北金産 内面見込部と体部側縁摩滅 転用破か 底部回転糸切り	36-5
10	須恵器	高台埴	(15.6)	6.2	5.6	ABD	40	普通	明灰	Na12 末野産	37-1
11	須恵器	高台埴	—	[2.3]	(5.6)	BE	40	普通	灰	D区 末野産	
12	土師器	甕	—	[5.1]	(5.0)	CDIK	20	良好	淡褐	D区 武蔵型甕 外面煤付着	
13	土師器	甕	—	[4.0]	(5.0)	CEGH	50	良好	淡褐	C区 D区 武蔵型甕 胴部と底部外面煤付着	37-2
14	須恵器	甕	—	—	—	EIK	—	良好	明灰	A区 D区 外面に葉脈状の圧痕見える SJ122-16・17・18と同一個体	
15	石製品	カマド焼附材	長さ21.0 幅8.4 厚さ5.8 重さ1278.9							Na 1 野 結晶片岩 全体に被熱カマド側壁補強材か	
16	須恵器	甕	—	—	—	EIK	—	良好	明灰	Na 5・6 産地不明 SJ122-14・17・18と同一個体	
17	須恵器	甕	—	—	—	EGIK	—	良好	明灰	Na 1 産地不明 外面平行叩き 内面無文当具 大甕胴部片 砂っぽい胎土 SJ122-14・16・18と同一個体	
18	須恵器	甕	—	—	—	EIK	—	良好	明灰	Na 1・2・5・6・9・10 A区 D区 産地不明 大甕胴部片 SJ122-14・16・17と同一個体	
19	土製品	土鍾	最大径1.6 長さ4.2 孔径0.5 重さ8.8				—	普通	暗褐	A区	63-4

底風の土師器坏で、在地の土で焼かれているが、系統は不明瞭である。

4～6は灰釉陶器である。4・5は高台皿、6は高台碗と思われる。4・6は灰釉の発色はあまりよくないが、胎土は類似している。刷毛塗りと思われる。5は薄手で、口唇部を小さく外に引き延ばしている。暗緑色で、黒色粒子混じりの釉がかかり、硬質である。5は猿投産または二川産、4・6は猿投産・東濃産以外と思われる。

7～9は須恵器坏である。底部は回転糸切り後無調整で、底径は口径の1/2か、下回る。7はロクロ目がきつく、産地不明である。8は末野産、9は南比企産で、内面見込み部が摩滅しており、転用碗として再利用された可能性もある。

10・11は須恵器高台埴である。10は、大振りで口縁部が大きく外反する。内面に重ね焼き痕が残り、黒色変色部位が認められる。末野産である。

12・13は武蔵型甕の底部である。14・16～18

は須恵器大甕の破片で、同一個体の可能性がある。末野産か。15は貯蔵穴から出土した角柱状の片岩である。全体に被熱しており、カマドの補強材として使用されたのであろうか。19は土錘である。

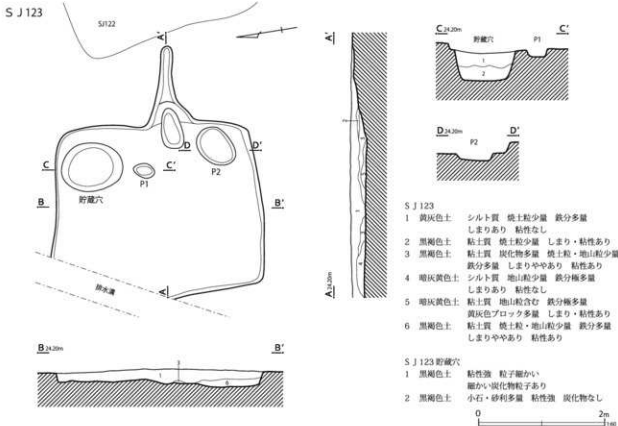
時期は、1の土師器坏を混入として除外すると、2の北武蔵型坏が9世紀中頃、それ以外の須恵器坏類は9世紀末頃、灰釉陶器は、K-90～O-53号窯式の範疇と考えられる。

時期は9世紀末～10世紀前半（IV期新段階）頃と考えておきたい。

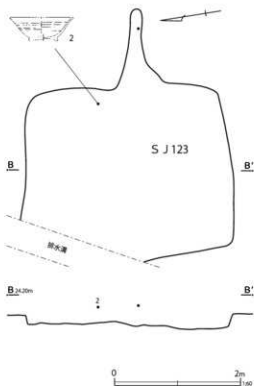
第123号住居跡（第109図）

第123号住居跡はR・S-16グリッドに位置する。第122号住居跡の西側に隣接して構築され、北西コーナー付近は調査区外に延びていた。第148号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形はやや歪んだ正方形で、規模は長軸長3.33m、短軸長2.76m、深さ0.28mである。主軸方位はN-100°-E-Eを指す。



第109図 第123号住居跡



第110図 第123号住居跡遺物出土状況

床面は凹凸があり、一定しない。南壁際が緩やかに凹んでいた。覆土は黄灰色シルト質土をベースとしており、自然堆積か否かは判断できなかった。

カマドは東壁に設置され、規模は長さ1.60m、幅0.70m、深さ0.25mである。燃焼部は壁ラインを0.30m掘り込んで構築され、その先に約0.90mの細長い煙道部が延びていた。煙道部先端は緩やかに立ち上がっていた。壁内の袖部は明確には検出できなかった。第2・3層がカマド由来の土層と考えられるが、明確な焼土や灰層は認められなかった。

貯蔵穴は住居北東コーナー部に位置する。楕円形で長径0.96m、短径0.74m、深さ0.43mである。覆土は砂利混じりの黒褐色土を主体に構成される。

ピットは2基検出された。P1は深さ0.11mと浅く、住居の柱穴にはならない。P2は重複する第148号住居跡のピットとされていたが、ロクロ土器高台壇が出土しており、本住居跡に帰属するか、住居よりも新しい可能性があると考えた。

いずれにせよ、住居跡の柱穴にはならない。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少ない。土師器北武蔵型坏・甕、ロクロ土器器坏・高台壇、灰軸陶器高台皿が検出されている（第111図）。

第111図1は灰軸陶器高台皿である。淡緑色の灰軸が内外面に刷毛塗りされている。口唇部は丸みを持ち、小さく外反する。胎土精良で硬質に焼きあがる。猿投産、K-90号窯式と思われる。時期は9世紀末～10世紀初頭と考えておきたい。

2・3はロクロ土器高台壇である。2は橙褐色に焼き上がり、ロクロ目は顕著である。底部は回転糸切り後、雑なナデ調整が施される。高台は雑なつくりである。覆土上面から出土した。3は高台が高く、底部の外面から内面に向かって、直径0.7cmほどの円孔が貫通している。内側の縁部に粘土の盛り上がりがあることから、外面から内面に向かい、焼成前に穿孔したことがわかる。内面見込み部と貫通孔には煤状の黒色有機物が厚く付着している。底部外面（高台部内面）には少し黒ずむが、内面ほどの有機物の付着はない。用途は不明である。

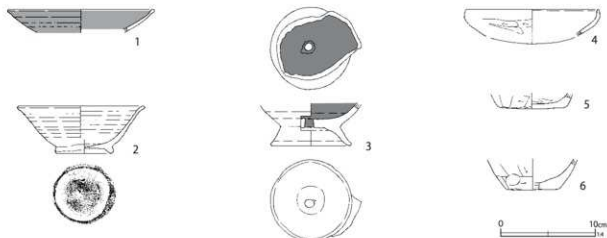
4は北武蔵型坏である。丸底形態で口縁部が短く直立する。5・6は土師器甕である。4～6は重複する第148号住居跡に帰属するものと推定される。

1・2は9世紀末～10世紀初頭頃、3は10世紀前半以降と思われる。時期判断は難しいが、1・2に代表させ、9世紀末～10世紀前半（IV期新段階）と考えておきたい。

第124号住居跡（第112図）

第124号住居跡はR・S-17・18グリッドに位置する。重複する第138・140号住居跡、第104号掘立柱建物跡よりも新しく、第3号溝跡よりも古い。

平面形は長方形で、規模は長軸長5.10m、短軸長3.65m、深さ0.20mである。主軸方位はN



第111図 第123号住居跡出土遺物

第29表 第123号住居跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	国版
1	灰釉陶器	高台皿	(15.2)	[2.5]	—	K	5	良好	灰白	B区 猿投産 残存部は全面灰釉施軸(刷毛塗りか)K-90号窯式 素地土精良	
2	ロクロ土師器	高台埴	(13.2)	5.0	5.6	C	40	普通	橙褐	No 1 C区 底部回転系切り後ナデ 高台 雑な整形	37-3
3	ロクロ土師器	高台埴	—	[4.6]	8.2	GHIK	60	良好	黄白	SJ148 P2 中心部に径0.7~1cmの孔が穿たれる(外一内に穿孔)内面に厚く煤付着 見込部孔の周囲粘土が盛り上がる焼成前穿孔	37-4
4	土師器	埴	(14.0)	[2.7]	—	CEGI	15	普通	橙褐	C区 北武蔵型埴 全体に風化	
5	土師器	甕	—	[1.6]	7.0	AEGI	50	良好	黒褐	C区 D区 外面二次被熱 煤付着	
6	土師器	甕	—	[3.2]	(5.4)	EGI	15	良好	暗黄褐	D区 調整不明瞭	

—74° —Eを指す。

覆土は焼土混じりの黒褐色土を基調としていた。第11・12層が掘り方覆土である。人為的に投棄されたと思われる遺物が多く含まれているため、すべての層が自然堆積ではない。床面は凹凸が顕著で、一定しない。

カマドは東壁に設置され、規模は全長1.92m、幅0.73m、深さ0.32mである。壁内の袖は確認されなかった。壁ラインが焚口部に相当すると思われる。燃焼部は壁ラインを1.08m掘り込んで構築され、深さは0.32mである。左右の壁は強く被熱していた。

煙道部は長さ0.84m、幅0.30m、深さ0.10mで、燃焼部よりも一段高く、水平方向に延びている。左右の側壁は強く被熱していた。

第8～10層がカマド覆土に対応する。第8層

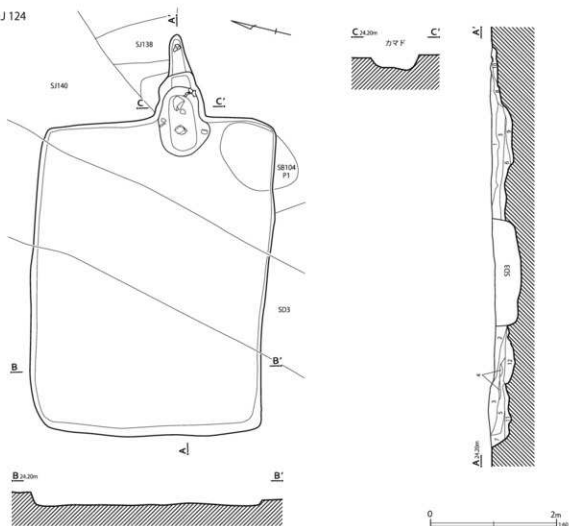
が天井部崩落土、第9層が灰層、第10層が煙道部堆積土である。

ビット・貯蔵穴・壁溝などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は比較的多い。土師器埴・甕(武蔵型甕)、ロクロ土師器埴・高台埴、須恵器埴・高台埴・埴・高台埴・蓋・甕・鉢・長頸瓶・フラスコ形瓶、灰釉陶器高台碗・高台皿・段皿、緑釉陶器稜碗、轆轤口が検出されている(第114・115図)。図化した以外には片岩が多数出土した。二次的に投棄されたものと考えられる。

第114図1は非ロクロ土師器の埴である。深身の埴で、体部は直線的に開く。口縁部は強いヨコナデ、体部は無調整で、不規則な指頭痕を顕著に残す。底部は手持ちヘラケズリ調整される。2・3はロクロ土師器である。2は高台埴で、高台割

S J 124



S J 124

- 1 黒褐色土 シルト質 焼土ブロック微量 しまりあり 粘性なし
- 2 黒褐色土 シルト質 焼土ブロック少量 しまりあり 粘性なし
- 3 黒褐色土 シルト質 焼土ブロックやや多量 炭化物ブロック少量 しまりあり 粘性なし
- 4 黒褐色土 シルト質 鉄分少量 しまりあり 粘性なし
- 5 黒色土 シルト質 炭化物ブロック・地山ブロック多量 焼土ブロック微量 しまりややあり 粘性あり
- 6 黒褐色土 炭化物ブロック少量 しまり・粘性あり

- 7 褐灰色土 粘土質 鉄分多量 しまり・粘性あり
- 8 焼土ブロック集積層 カマド天井部崩落土
- 9 炭化物集積層 カマド灰層
- 10 黒褐色土 鉄分・炭化物微量 灰を解状に含む しまり・粘性あまりなし カマド煙道部堆積土
- 11 黒褐色土 粘土質 鉄分・地山ブロック多量 炭化物ブロック微量 しまり・粘性あり (掘り方)
- 12 黒褐色土 粘土質 鉄分多量 地山ブロック極多量 (掘り方)

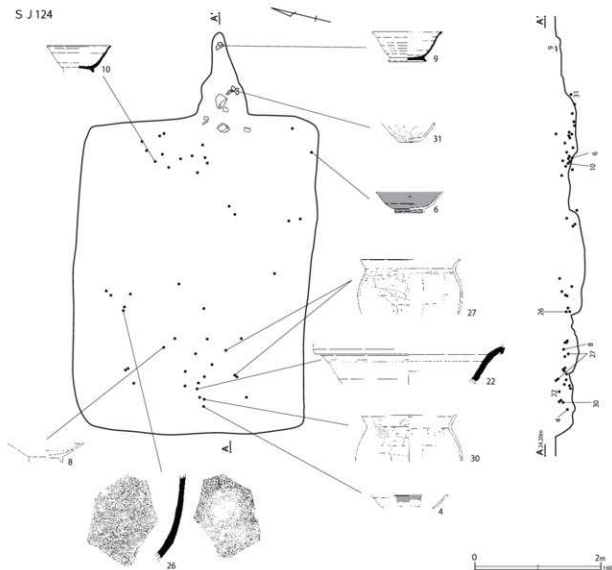
第112図 第124号住居跡

落部に回転糸切り痕がみえる。3は底部を欠く。

6は緑釉陶器後碗である。体部外面中位に稜があり、屈曲する。外面口縁部下には回転ヘラケズリ、稜の下位にはヘラ磨き痕が見える。内面には鋭い一条の沈線が走り、丁寧な横方向のヘラ磨き加えられている。底部外面は回転ヘラケズリ調整されている。また、淡緑色の緑釉が全面に施釉されている。猿投産、K-90号窯式と推定される。

4・5・7・8は灰釉陶器である。4は薄手で

硬く焼きあがる。灰釉刷毛塗りで猿投産、K-90号窯式と思われる。5は高台碗口縁部片である。灰釉刷毛塗りで猿投産と思われる。7は高台碗で底部に回転糸切り痕が見える。高台はしっかりした作りである。猿投産、O-53号窯式か。8は灰釉段皿である。内面の段はやや鋭さに欠ける。見込み部には重ね焼き痕が残る。高台は三日月高台で、底部外面は回転ヘラケズリ後ロクロナデ。灰釉は刷毛塗りである。猿投産と思われる。内面は



第113図 第124号住居跡遺物出土状況

弱く摩滅しており、周縁を故意に打ち欠いた形跡がある。転用硯かもしれない。

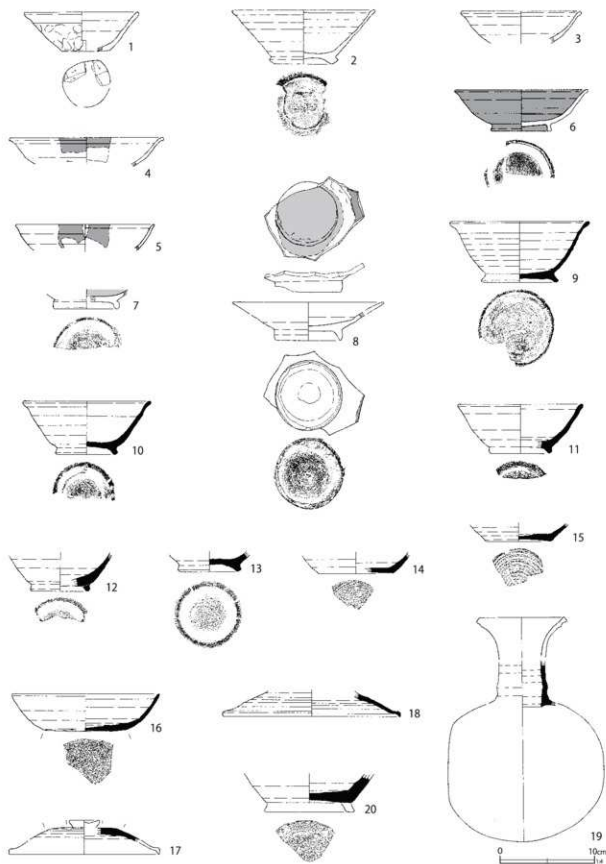
9～13は須恵器高台杯・埵である。9は体部下端に高台が付けられている。内面見込み部に変色部位があり、重ね焼きに伴う痕跡か。底部は回転糸切り後無調整である。胎土に角閃石を含み、利根川流域の土であるが、産地は不明である。10は口縁部付近が灰白色で還元焰焼成を受けたと判断して須恵器としたが、全体的には黒ずんでおり、ロクロ土師器とすべきかもしれない。高台は低く、作りは甘い。底部は不鮮明であるが、回転糸切りと思われる。全体に砂粒を多く含み焼成は良くな

い。

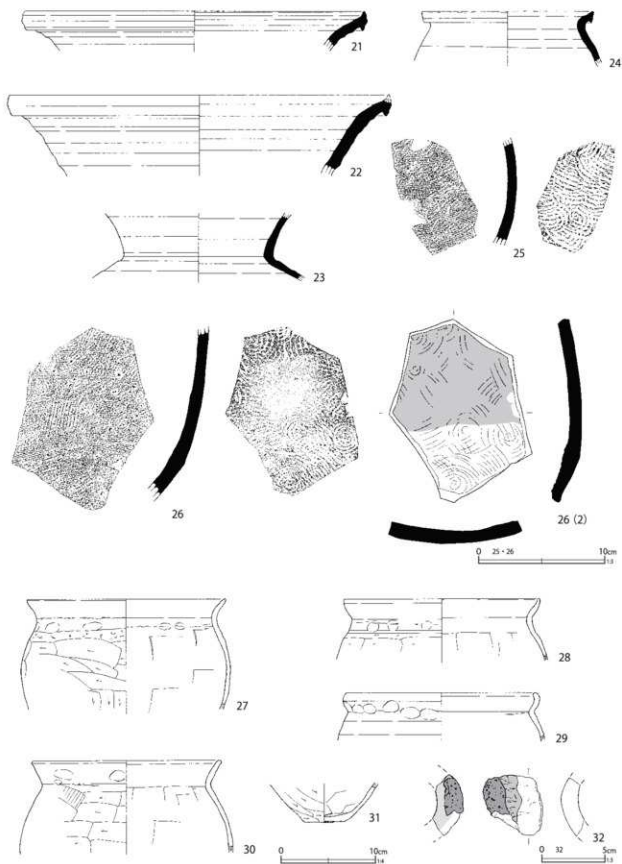
11は厚ぼったい作りで、高台も低い。黄灰色に焼き上がり、明確な還元焰焼成の痕跡は見られず、ロクロ土師器としても良いかもしれない。グレーゾーンの土器である。12は高台杯としたが、小型の長頸瓶かもしれない。胎土に片岩を多量に含み、末野産と考えられる。13も末野産の高台杯である。

14は無台埵、15は須恵器杯と思われ、いずれも末野産である。16は大振りの杯で、底部は手持ちへラケズリ調整される。8世紀初頭頃のものと思われ、混入品である。

17・18は須恵器蓋である。17は南比企産、18



第114图 第124号住居跡出土遺物(1)



第115図 第124号住居跡出土遺物（2）

第30表 第124号住居跡出土遺物観察表 (第114・115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	区	備考	図版
1	土師器	坏	12.0	4.1	5.0	CI	45	良好	淡黄褐	B区 SJ118 S-16	体部指押え 底部ヘラケズリ	37-5
2	ロクロ土師器	高台杯	(15.0)	5.7	(6.0)	CDI	35	普通	淡黄灰	D区	高台剥落部に回転糸切り痕	38-1
3	ロクロ土師器	坏	(12.6)	[3.4]	—	CGI	30	良好	黄白	SJ118D区		
4	灰軸陶器	高台皿	(16.0)	[3.0]	—	K	5	良好	明灰	№40 猿投産 灰軸刷毛塗り 胎土精選	底部欠失 K-90号窯式か	38-3
5	灰軸陶器	高台碗	(14.6)	[2.8]	—	K	5	良好	明灰	猿投産 内面は残存部全面輪軸 外面は口縁部のみ輪軸 刷毛塗り K-90号窯式か		
6	緑軸陶器	椀	(13.8)	4.4	6.2	K	40	良好	黄緑	№46 カマド SJ118 SD 3 (R-17)	猿投産か 内面鋭い沈線一条 底部回転ヘラケズリ 全面緑軸施軸	38-2
7	灰軸陶器	高台碗	—	[2.1]	(6.6)	IK	40	良好	灰白	SJ118 猿投産か 底部回転糸切り	0-53号窯式 内面摩滅著しい 転用破か	
8	灰軸陶器	段皿	—	[2.7]	6.6	G	80	良好	灰白	№25 猿投産か 周縁を打ち欠き破に転用 内面見込部は摩滅 底面に薄い墨痕がみえる 三ヶ月高台 底部は回転ヘラケズリ調整 K-90号窯式か		38-5
9	須恵器	高台埴	(14.5)	6.4	(7.8)	CG	15	普通	灰白	カマド№1 産地不明 (群馬産か) 底部回転糸切り		38-4
10	須恵器	高台杯	(13.2)	5.6	6.0	GK	50	普通	くすんだ灰	№4 底部回転糸切り	ロクロ土師器か	38-6
11	須恵器	高台杯	(13.0)	5.2	(6.0)	ABE	30	普通	黄灰褐	SJ118A区 末野産 半還元焼成 回転糸切りと思われるが風化著しく不明瞭		39-1
12	須恵器	高台杯	—	[4.1]	(5.8)	ABK	35	普通	灰	末野産 底部回転糸切りと思われるが不明瞭		
13	須恵器	高台杯	—	[2.2]	6.0	ABEI	80	不良	灰褐	№29 末野産 底部回転糸切り		
14	須恵器	埴	—	[2.3]	(8.0)	EK	20	良好	灰	末野産か 無台埴と思われる 底部回転糸切り痕		
15	須恵器	坏	—	[1.9]	(7.0)	BDEIK	30	良好	灰	SJ118 末野産 内面摩滅 底部回転糸切り		
16	須恵器	坏	(15.5)	3.9	(8.8)	EI	15	良好	灰	SJ118 産地不明 (末野産か) 底部手持ちヘラケズリ		39-2
17	須恵器	蓋	—	[8.0]	—	IJ	40	良好	灰白	D区 南北企産 つまみ欠		
18	須恵器	蓋	—	[2.7]	(18.7)	BG1K	15	不良	灰	SJ118 末野産 高台埴蓋か		
19	須恵器	フラスコ形瓶	—	[4.9]	—	GI	15	良好	明灰	SJ118C区 東海産 (湖西産) 胎土精選 やや砂っぽい ロクロ目が横(タテ) 横瓶=フラスコ瓶と思われる		
20	須恵器	長頸瓶	—	[3.1]	(9.0)	E1J	25	良好	暗青灰	B区 南北企産 胴部回転ケズリ 底面ナゲか 高台欠失 割離面には糸切り痕は見えない		
21	須恵器	甕	(35.8)	[4.3]	—	BI	5	良好	灰	SJ118 末野産		
22	須恵器	甕	(40.0)	[8.4]	—	BDEI	10	良好	灰	№36 末野産 口縁部欠失		
23	須恵器	甕	—	[7.2]	—	BDEI	20	良好	暗灰	№18 末野産		
24	須恵器	鉢	(18.0)	[5.8]	—	BOK	20	良好	暗灰	SJ118 末野産 内外面ロクロナデ		
25	須恵器	甕	—	[8.5]	—	EI	—	良好	暗青灰	SJ118 産地不明 (群馬か) 外面平行叩き後カキ目 内面目の粗か同心円文当具 須恵器甕胴部片		
26	須恵器	甕	—	[13.6]	—	DIK	—	良好	黒灰	№23 産地不明 外面平行叩き後カキ目 内面同心円文当具・摩滅強い		
26 (2)	須恵器	甕 (転用破)	—	—	—	DIK	—	良好	黒灰	№23 甕胴部片を破に転用している 内面強く摩滅 長さ14.4cm 幅10.5cm		
27	土師器	甕	(20.6)	[11.7]	—	CGI	40	良好	暗褐	№28・31 武蔵型甕 「コ」の字裏の透化形 口縁直下に無調整部 頸部内傾器壁厚い		39-3
28	土師器	甕	(20.6)	[6.6]	—	CDI	20	良好	淡黄褐	SJ118 武蔵型甕 器壁厚い		
29	土師器	甕	(20.0)	[5.2]	—	GHI	20	普通	暗褐	SJ118A区 胴部ナデ調整 (非武蔵型) 外面煤付着 器壁厚い		39-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
30	土師器	甕	(19.6)	[9.8]	—	CHI	15	良好	淡褐	№39 武蔵型退化形態 器壁厚い	
31	土師器	甕	—	[4.2]	4.2	CGHI	60	良好	橙褐	№2 カマド 武蔵型甕「コ」の字裏の退化形態 底部磨れ砂 器壁厚い	39-5
32	土製品	轆轤口	長さ4.7 厚さ1.3	幅4.7 高さ28.7		G	—	良好	淡褐	0区 羽口先端部 先端は高温にさらされ 浮化、発泡する 外面は還元酸化 部は先端近くが被熱し赤褐色に変色	63-1

は末野産である。折り返しは短く、退化的である。19はフラスコ形瓶頸部で、湖西産と思われる。混入品である。20は高台を欠く。南比企産の須恵器長頸瓶である。21～23は末野産の須恵器甕である。24は末野産の須恵器鉢である。25・26は須恵器甕の胴部片である。外面は平行引き後、カキ目、内面は細かい同心円文当具を施す。胎土・調整技法は酷似するが、産地は不明である。26は内面が摩滅著しく、転用硯と思われる。

27～31は土師器甕である。27・28は「コ」の字状口縁甕の退化形態で、器壁は厚くなっている。29は口縁部が受口状になり、胴部上端はナデられている。30の胴部ケズリは「コ」の字裏を継承しているが、口縁部が「く」の字に変化している。31はこれらの甕の底部で、器壁は厚くなってお

り、底部は砂底である。

32は轆轤口である。先端は高熱のため発砲、浮化している。

時期は9世紀末葉～10世紀前半（IV期新段階）に位置付けられる。

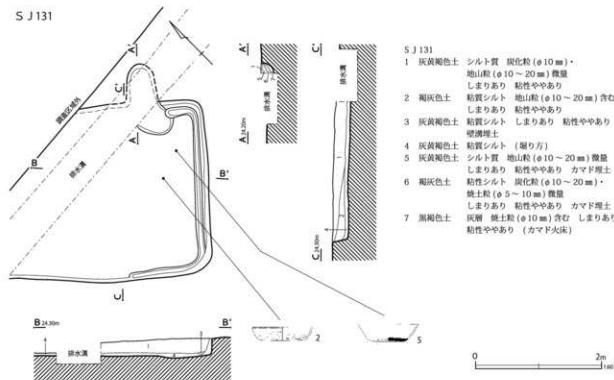
第131号住居跡（第116図）

第131号住居跡はS・T-14・15グリッドに位置する。第132号住居跡と接し、第130号住居跡と近接する。住居北側は調査区外に延び、全形は不明である。

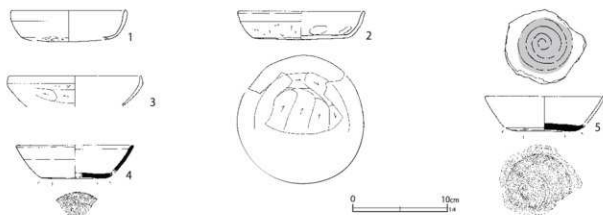
平面形は長方形と推定され、規模は長軸長3.21m、短軸長2.76m、深さ0.23mである。主軸方位はN-43° -Eを指す。

住居覆土はシルト質の褐灰色土から灰黄褐色土がベースとなっていた（第1・2層）。床面はほ

S J131



第116図 第131号住居跡・遺物出土状況



第117図 第131号住居跡出土遺物

第31表 第131号住居跡出土遺物観察表 (第117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	[3.1]	(6.0)	CGI	10	普通	褐	C区 北武蔵型坏 外面風化	43-3
2	土師器	坏	(13.2)	3.0	(10.2)	CGI	30	普通	褐	No.2 C区 北武蔵型坏	
3	土師器	坏	(14.0)	[3.2]	—	CGI	10	良好	橙褐	A区 北武蔵型坏 粉っぽい胎土	
4	須恵器	坏	(12.4)	[3.5]	(7.0)	IJ	10	良好	青灰	C区 南比企産 口縁と底部接合しない 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ	
5	須恵器	坏	—	[0.8]	6.3	DIJ	95	良好	灰	No.1 南比企産 転用硯か 底部回転糸 切り後周辺回転ヘラケズリ 見込部が摩 滅 周囲は故意に打ち欠かれる	

ば平坦で、下面と南東壁際には掘り方と思われる人為的な堆積層が見られた。

カマドは北東壁に設置されていた。排水溝の攪乱を受け遺存状態は良くない。規模は長さ1.06m、推定幅0.49m、深さ0.20mである。第5～7層がカマド覆土であるが、堆積状態の詳細は明らかにできなかった。第5・6層が天井部崩落土、第7層が灰層と思われる。

ピット・貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝は北東壁から南西壁にかけて検出された。幅は0.07～0.15m、深さ0.04mである。

出土遺物は土師器坏（北武蔵型坏）・甕、須恵器坏が検出されている（第117図）が、量的には少ない。

第117図1・2は土師器北武蔵型坏である。体部は無調整、底部は手持ちヘラケズリ調整である。1は平底風、2は浅身の平底形態である。3は丸底形態の北武蔵型坏で、混入と考えられる。

4・5は須恵器坏でいずれも南比企産である。底部は回転糸切り後、回転ヘラケズリ調整が施さ

れる。5は底部に墨痕が残る。内面は摩滅しており、転用硯として使用された可能性がある。いずれも南比企編年HIV期～HV期頭に位置付けられる。

時期は8世紀後半～9世紀初頭（Ⅲ期新段階）頃と考えられる。

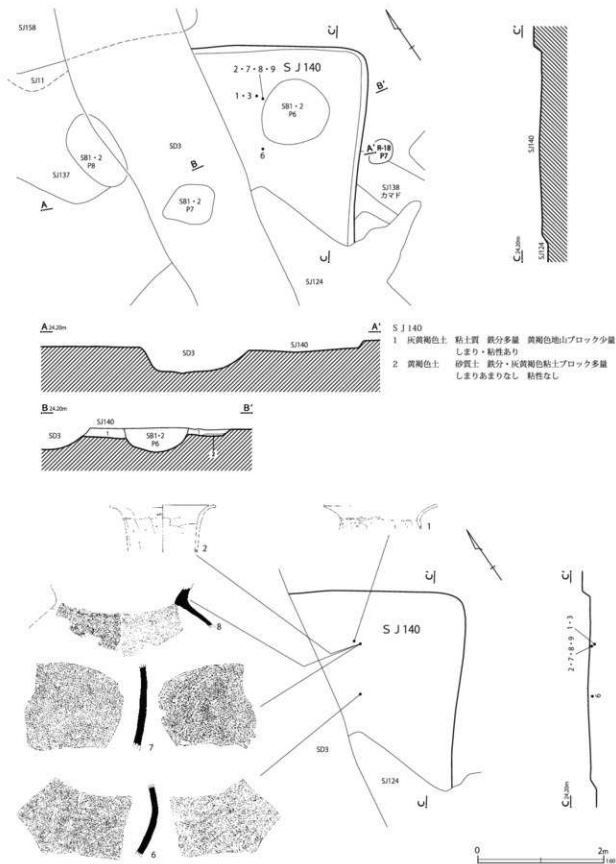
第140号住居跡（第118図）

第140号住居跡はR-17・18グリッドに位置する。重複する第138号住居跡よりも新しく、第124号住居跡、第1・2号掘立柱建物跡、第3号溝跡よりも古い。直接の重複は確認できなかったが、第137号住居跡よりも新しいと推定される。

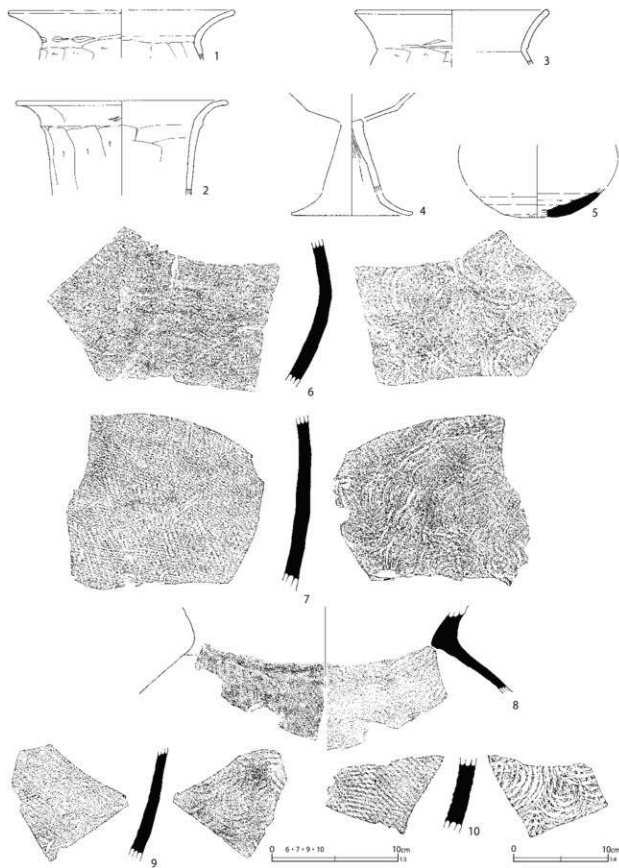
遺存状態は悪く、住居跡を貫通する第3号溝跡の西側は上面が削平され、壁の立ち上がりは検出できなかった。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長3.16m、短軸長2.75m、深さ0.10～0.15mである。主軸方位はN-34°-Eを指す。

覆土は灰黄褐色土を基調に構成されていた。床面は概ね平坦であるが、詳しい状況は不明である。



第118図 第140号住居跡・遺物出土状況



第119图 第140号住居跡出土遺物

第32表 第140号住居跡出土遺物観察表 (第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(23.0)	[5.1]	—	G1	20	良好	明褐色	Na 3	45-5
2	土師器	甕か	(21.8)	[10.0]	—	DEG1K	30	普通	褐色	Na 1 A区 D区	
3	土師器	壺	(20.0)	[5.8]	—	CE1	10	良好	明褐色	Na 3	
4	土師器	高坏	—	[7.6]	—	EG1	—	普通	淡褐色	A区 B区 脚部 内面紋目 外面ミガキか	
5	須恵器	瓶	—	[3.0]	(3.8)	DG	25	良好	灰白	A・B区 湖西産か 底部中心に自然釉が垂れる 無台の長頸壺(瓶)か 胎土精良 底部ヘラミガキか	
6	須恵器	甕	—	[11.7]	—	BE1K	5	普通	灰	Na 2 末野産 外面平行引き後口クロナゲ 内面同心円文当具	
7	須恵器	甕	—	[13.9]	—	ABDE1K	5	普通	淡黄褐色	Na 1 末野産か 転用硯か	
8	須恵器	甕	—	[9.4]	—	BDE1	30	良好	青灰	Na 1 A区 B区 末野産 外面平行引き 内面同心円文当具	
9	須恵器	甕	—	[9.0]	—	DE1	5	良好	灰	Na 1 産地不明(在地) 外面平行引き 内面同心円文当具	
10	須恵器	甕	—	[5.7]	—	E1	5	普通	灰褐色	A区 B区 産地不明 外面平行引き 内面同心円文当具	

カマド・ピット・壁溝などの付属施設は検出されなかった。

遺物は、土師器甕・壺・高坏、須恵器甕、瓶が検出されている。

第119図1は土師器甕である。口縁部は大きく開き、胴部上端は横ヘラケズリが施される。2は甕または瓶、3は壺である。4は古墳時代の高坏で混入品である。5は須恵器瓶の底部である。内面中央付近に淡緑色の釉が付着する。無台の長頸瓶または平瓶と思われる。湖西産か。6～10は須恵器甕の破片である。6は甕胴部片。7は甕胴部片で、内面が摩滅しており、転用硯として使用された可能性もある。外面には草本類の茎圧痕が付着している。8は大甕の頸部破片である。9・10も須恵器甕胴部片である。

時期は7世紀末～8世紀前半(Ⅲ期古段階)頃と考えておきたい。

第145号住居跡 (第102図)

第145号住居跡はS-19グリッドに位置する。調査区東端部に位置し、遺構の大半は調査区外に延びている。重複する第113・114号住居跡、第25次調査第27号住居跡に壊されており、遺存状態は良くない。

平面形は方形系と推定されるが、西壁と南壁の

角度は開き気味である。残存規模は長さ1.30m、幅1.15m、深さ0.06mである。主軸方位はN-43°-Wを指す。

覆土は褐色灰色土を基調としているが、詳細は不明確である。

カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

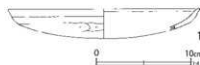
出土遺物は、土師器坏(坏蓋模倣坏)・皿・甕、須恵器坏・瓶が検出されているが、いずれも小片である。

第120図1は土師器皿である。推定口径20.2cm。内面に放射暗文が施文されてもよいが、現状では確認できない。5%残存する。色調は淡褐色で、焼成は普通である。胎土に石英・白色粒子を含む。

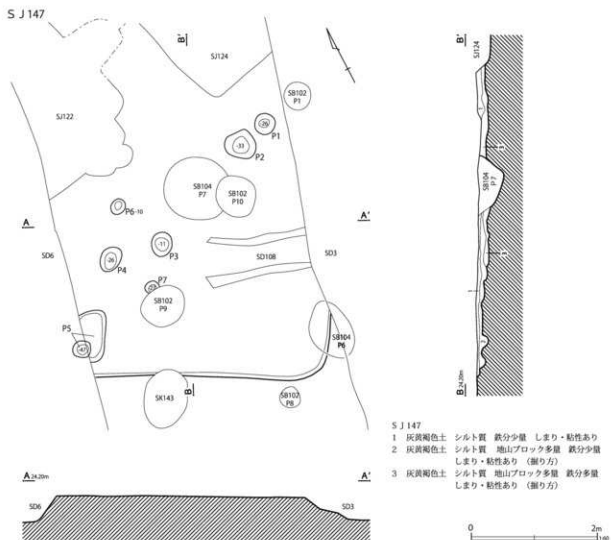
時期は8世紀前半(Ⅲ期古段階)である。

第147号住居跡 (第121図)

第147号住居跡はS-17グリッドに位置する。重複する第122・124号住居跡、第102・104号掘立柱建物跡、第3・6・108号溝跡、第143号土壇よりも古い。遺構の大半が削平され、南西壁と



第120図 第145号住居跡出土遺物



第121図 第147号住居跡

南東壁の一部が残存したのみであった。

覆土はシルト質の灰黄褐色土を基調としていたが、詳細は不明確である。第3・4層は掘り方である。

平面形は方形と推定されるが、詳細は不明で



第122図 第147号住居跡出土遺物

ある。残存規模は長軸長4.71m、短軸長4.00m、深さ0.05mである。主軸方位はN-26° - Eを指す。

カマドは検出されなかった。

ピットは7基検出されたが、主柱穴の配置は不明である。貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少ない。土師器北武蔵型坏・甕・鉢が検出されたが、いずれも小片である(第122図)。

第122図1・2は北武蔵型坏である。1は口縁部がやや長く内湾する。2は口縁部が小さく内湾

第33表 第147号住居跡出土遺物観察表(第122図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	[2.9]	—	D1	5	良好	橙褐	北武蔵型坏	
2	土師器	坏	(11.7)	[2.1]	—	C1	5	良好	橙褐	北武蔵型坏	

時期は不明確であるが、7世紀末～8世紀前半（Ⅲ期古段階）頃と考えておきたい。

第148号住居跡はR・S-16・17グリッドに位置する。重複する第122・123号住居跡、第6号溝跡よりも古い。また、北西壁は調査区外に延びていた。

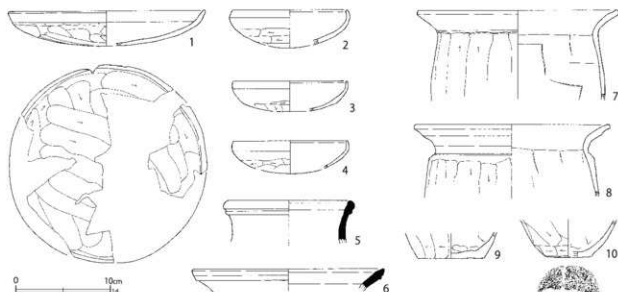
覆土は粘土質のにぶい黄褐色土の単層で、土層変化は観察されなかった(第1層)。第3層は掘

カマドは検出されなかった。北西壁に設置された可能性が高い。

壁溝は北西壁の一部を除き巡っていた。規模は、幅0.12～0.21m、深さ0.05～0.06mである。

1は土師器皿である。内面が風化しており、内面の放射暗文は確認できないが、北武蔵型暗文皿の可能性はある。2～4は北武蔵型坏である。口縁部内湾・深身の丸底形態である。





第124図 第148号住居跡出土遺物

第34表 第148号住居跡出土遺物観察表 (第124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	皿	20.6	3.7	—	CHK	70	良好	明褐	A区 北武蔵型暗文皿と思われるが内面の暗文は風化のため確認できない	49-6
2	土師器	杯	(12.0)	[3.7]	—	CDI	20	普通	橙褐	北武蔵型杯	
3	土師器	杯	(12.0)	3.2	—	I	15	良好	橙褐	北武蔵型杯 胎土精良 粉っぽい 全体に風化	
4	土師器	杯	(12.0)	[2.9]	—	DI	20	良好	褐	A区 北武蔵型杯	
5	須恵器	短頸壺	(12.8)	[4.5]	—	EI	35	良好	暗灰	A区 産地不明 横破か 3片あり接合しない	49-1
6	須恵器	広口壺	(20.0)	[2.4]	—	I	15	良好	黒灰	A区 産地不明 良く焼けている 断面に白色微粒子多くやや粗い 全体に白灰色の自然釉	
7	土師器	甕	(21.0)	[9.5]	—	CDI	30	良好	暗褐	A区	49-2
8	土師器	甕	(20.4)	[7.6]	—	BCI	20	良好	褐		49-3
9	土師器	甕	—	[2.8]	(7.0)	CHI	25	良好	明褐	底部ケズリ 外面二次被熱	49-4
10	土師器	甕	—	[4.0]	(5.0)	CEI	45	良好	暗褐	B区	49-5

5は須恵器壺の口縁部片である。3片あり、接合しない。横破か。産地不明である。6は須恵器壺である。硬質に焼き上がり、産地は不明である。

7～10は土師器甕である。7・8は胴部縦方向のヘラケズリを施す鬼高系の長胴甕である。

時期は7世紀末葉～8世紀前半(Ⅲ期古段階)頃である。奈良時代に含めておきたい。

第149号住居跡 (第83・84図)

第149号住居跡はS-18グリッドに位置する。重複する第18号住居跡に壊され、遺存状態は良くない。

平面形は長方形であるが、南西コーナー部は削

平され遺存しなかった。小型の住居跡で、規模は長軸長3.25m、短軸長3.00m、深さ0.06～0.10mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

確認面ではほぼ床面が露出しており、覆土の詳細は明らかにできなかった。床面の詳細も不明確である。

カマドは検出されなかった。

ピットは2基検出された。P1は古墳時代後期と思われる土師器甕の破片が出土しており、住居には伴わない可能性が高い。P2は土師器甕の小片が1点出土した。住居跡に伴う可能性はある。

貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、土師器甕胴部片が少量検出されているが、図化可能な遺物はない。ケズリ甕で、胴部器壁はやや薄い。

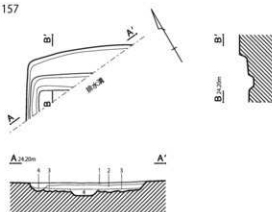
正確な時期比定は困難だが、出土遺物の特徴と重複遺構の時期から、8世紀代と考えておきたい。**第157号住居跡**（第125図）

第157号住居跡は調査区南端のU-16グリッドに位置する。住居跡の大半は調査区外に延びていた。東側に第6号溝跡が隣接するが、直接重複はしていない。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長1.20m、短軸長0.85m、深さ0.12mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

覆土は焼土粒子を微量含む黒色土を基調としているが、深度が浅く土層変化は観察されなかった。床面は概ね平坦であるが、全体の様相は不明であ

S J 157



S J 157

- 1 黒色土 地山粒 (φ 5 ~ 10 mm) 中量 焼土粒 (φ 5 mm) 微量
しまり・粘性あり
- 2 灰黄褐色土 地山ブロック多量 しまり・粘性あり
- 3 灰黄褐色土 地山ブロック主体 しまり・粘性あり (掘り方)
- 4 灰黄褐色土 地山ブロックと黒色土混じる しまり・粘性あり (壁溝)



第125図 第157号住居跡

る。

カマド・ピットは検出されなかった。

壁溝は壁ラインの内側に巡っていた。規模は、幅0.15 ~ 0.25m、深さ0.10mである。

覆土は地山ブロックと黒色土混じりの灰黄褐色土で、埋め戻された土である。上面に床面が乗っていることから一度拡張されたと考えられる。

出土遺物は、土師器武蔵型甕の器壁の薄い胴部破片が少量検出された。

時期は不明確であるが、8世紀後半 ~ 9世紀と推定される。

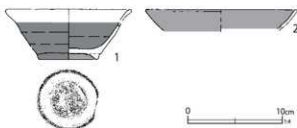
第158号住居跡（第44図）

第158号住居跡はR-17・18グリッドに位置する。重複する第25次第11号住居跡・第137号住居跡、第1号掘立柱建物跡P8 ~ P10、第2号掘立柱建物跡P8・P9よりも新しく、第3号溝跡よりも古い。第120号土壌は中世後期と思われる瓦質土器の底部小片が出土しており、本住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.14m、短軸長2.74m、深さ0.20mである。主軸方位はN-101°-Eを指す。

覆土は焼土粒子・炭化物粒子を多く含む褐灰色土を基調としていた。第4層は掘り方覆土である。貼床上面が床面で緩やかな凹凸が見られる。

カマドは東壁に設置され、燃烧部は壁ライン



第126図 第158号住居跡出土遺物

第35表 第158号住居跡出土遺物観察表（第126図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	コタロ土師器	高台埴	—	[4.0]	6.0	ABE	40	普通	黒褐	SJ11 末野産 全面黒色処理（炭素吸着） 底部回転糸切り	50-1
2	灰軸陶器	甕	(16.0)	[2.2]	—	G	5	良好	灰白	SJ11 東濃産か、灰軸は残存部全面に施 軸 胎土精良 光ヶ丘1号窯式か	

を0.80m切り込んでいた。幅は0.49m、深さは0.27mである。燃焼部の規模は、長径1.30m、短径0.49m、深さ0.27mである。壁ラインの内側には両側に小ピットがある（P1・P2）。焚口部に関わる施設の可能性がある。

貯蔵穴は南東コーナー部の内側に設置される。隅丸方形で、規模は0.72×0.66m、深さ0.32mである。上面に中世の第120号土壌が乗っていた。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少ない。クロロ土師器高台碗と灰釉陶器碗が出土した（第126図）。

第126図1はクロロ土師器高台碗である。焼きの悪い須恵器とも見える。胎土に雲母と片岩が含まれ、末野産と考えられる。2は内外面に灰釉が刷毛塗りされ、胎土は白く、滑らかである。東濃産、光ヶ丘1号窯段階の製品と推定される。9世紀末葉～10世紀前半（IV期新段階）と考えられる。

（2）掘立柱建物跡

第101号掘立柱建物跡（第127図）

第101号掘立柱建物跡はT・U-18・19グリッドに位置する。重複する第104・133・141号住居跡よりも新しく、第106号住居跡よりも古い。

2×2間の側柱建物であるが、柱穴配置は平行四辺形状に歪んでいた。規模は桁行6.00m、梁行6.00m、面積36.00㎡である。主軸方位はN-3°-E-Eを指す。

柱間距離は桁行で3.00m、梁行3.00m、10尺等間と広い。柱穴は楕円形から長方形で、長径0.90～1.30mと大型である。深さも0.36～0.67mと比較的深い。また、断面観察によりP3・P6は柱痕が確認された。

出土遺物は土師器・甕・小型甕・台付甕、須恵器・蓋が検出されている。

第130図1・2は土師器で、1は扁平・浅身の北武蔵型である。9世紀前半頃のものとして推定される。2は深身・丸底形態の北武蔵型で、7世紀末～8世紀初頭頃の所産であろう。3・4は

須恵器蓋、5・6は須恵器である。いずれも9世紀代のものである。6は焼成良好で、底径5.5cmと小さくなっている。南比企産で9世紀後半のものと思われる。

建物の時期は他遺構との重複関係から7世紀末～8世紀初頭以降、9世紀中頃～後半以前という限定はできる。出土遺物から9世紀後半と考えるべき。

第102号掘立柱建物跡（第128図）

第102号掘立柱建物跡はS・T-17グリッドに位置する。第104号掘立柱建物跡、第147号住居跡、第107号井戸跡、第108号溝跡よりも新しく、第3号溝跡よりも古い。

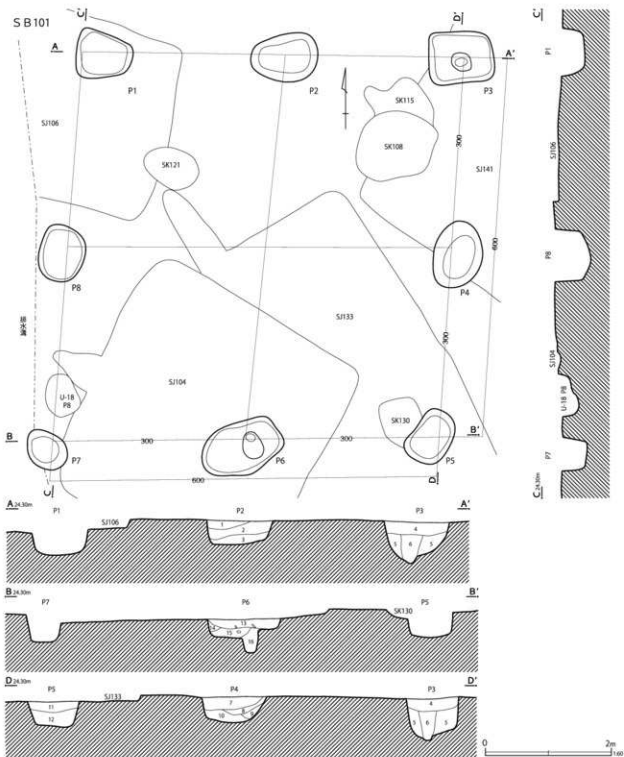
3×2間、南北棟の側柱建物と推定されるが、柱穴を組み合わせて作ったため、不確定な柱穴がある。P7は第3号溝跡の下部、第107号井戸跡の上層に位置するため、明確に検出できなかった。また、南東隅柱と南梁行の中間柱は調査区外に位置する。規模は桁行7.35m、梁行4.20m、面積は30.87㎡である。主軸方位はN-26°-Wを指す。

柱穴は円形で、直径0.35～0.65mの比較的小規模なものが多い。柱間距離は桁行1.95mと2.70m、梁行2.10mとなるが、東側桁行ではP2・P3の位置がずれ、等間にならない。柱痕はP6で確認できたのみである。

出土遺物は土師器・甕、須恵器が検出されている。土師器には有段口縁杯と北武蔵型杯が含まれている。甕は長胴甕と武蔵型甕がある。

第130図7は、P8から出土した土師器有段口縁杯である。推定口径は11.5cmであるが、小片からの復元のため不安定である。残存高は2.2cmで、胎土に長石と白色粒子を含む。焼成は不良で、暗褐色である。5%残存する。7世紀中葉から後半代のものであろう。

8は土師器北武蔵型杯である。推定口径は12.0cm、器高は3.3cmである。焼成は良好で、色調は

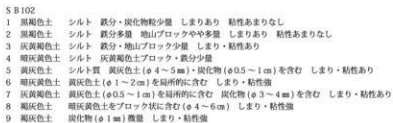


S B 101

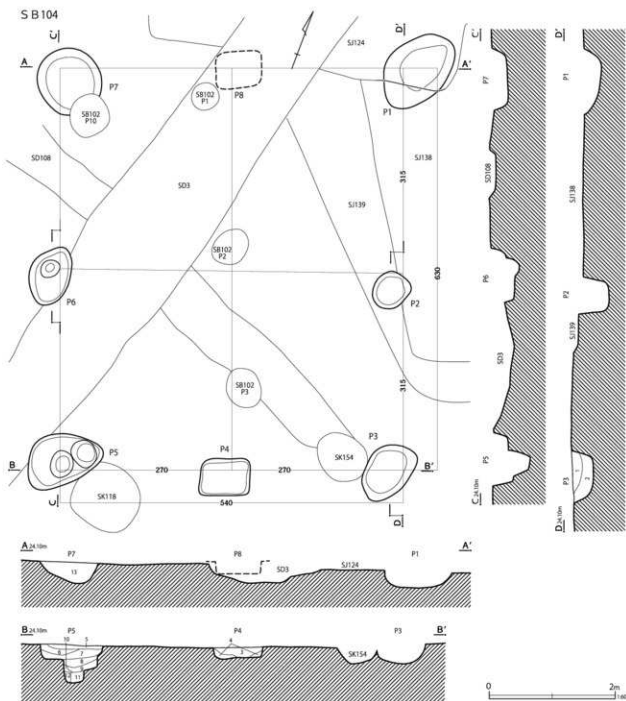
- 1 灰黄褐色土 ローム粒多量 しまり・粘性あり 埋め戻し土
- 2 褐灰色土 ローム粒多量 しまり・粘性あり 埋め戻し土
- 3 褐灰色土 ローム粒極めて多量 しまり・粘性あり 埋め戻し土
- 4 黒褐色土 粘質シルト 粘土粒少量 しまり強 粘性あり
- 5 黒褐色土 粘質シルト 粘土粒・炭化粒含む しまり強 粘性あり
- 6 黒褐色土 地山粒微量 しまりあり 粘性ややあり 柱敷か
- 7 黒色土 白色粒多量 ロームブロック中層 しまり・粘性あり
- 8 黒褐色土 ローム粒中量 しまり・粘性あり

- 9 黒褐色土 粘質土と砂利・砂の混生層 しまり弱 粘性弱
- 10 黒褐色土 砂っぽい しまりあり 粘性やや弱
- 11 褐色土 ローム粒中層 全体が砂っぽい しまり・粘性あり
- 12 黒褐色土 砂粒多量 礫 (φ50 mm) 少量 しまり・粘性あり ※下面は礫層
- 13 灰黄褐色土 炭化物粒・粘土粒微量 しまり・粘性あり
- 14 灰黄褐色土 砂粒含む しまり・粘性あり
- 15 灰黄褐色土 砂粒極めて多量 礫少量 炭化物粒微量 しまり・粘性あり
- 16 黒褐色土 炭化物粒中量 礫少量 しまり・粘性あり 柱敷か

第127図 第101号掘立柱建物跡



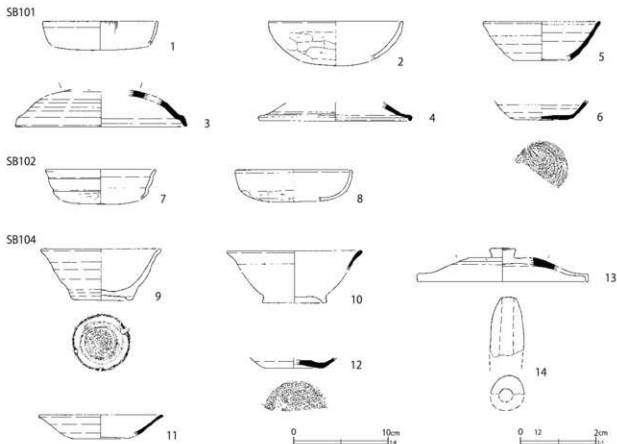
— 154 —



S B 104

- 1 灰黄褐色土 シルト質 鉄分少量 地山ブロック極多量 しまり・粘性あり
- 2 灰黄褐色土 シルト質 鉄分多量 地山ブロック少量 しまり・粘性あり
- 3 褐灰色土 シルト質 炭化物 (φ 2~3 mm) 黄灰色ブロック土 (φ 0.7~1 cm) を含む しまり・粘性あり
- 4 黄灰色土 炭化物 (φ 1 cm) 少量 黄灰色ブロック土 (φ 1~2 cm) を含む しまり・粘性強
- 5 褐灰色土 シルト質 地山粒 (φ 1 mm) を含む しまり・粘性弱
- 6 褐灰色土 シルト質 炭化物 (φ 1 mm) 微量 しまり・粘性あり
- 7 褐灰色土 粘質シルト 地山ブロック (φ 1~2 cm)・炭化物 (φ 2~3 mm) を含む しまり・粘性あり
- 8 灰黄色土 シルト質 褐灰色土を含む しまり・粘性弱 柱穴の埋め戻し土か
- 9 褐灰色土 粘質シルト 灰黄色土を含む 炭化物 (φ 1~2 mm) 微量 しまり・粘性あり 柱穴の埋め戻し土か
- 10 灰黄色土 シルト質 しまり・粘性弱 柱穴の埋め戻し土か
- 11 褐灰色土 粘質シルト 地山ブロック土 (φ 1~3 cm) を含む しまり・粘性あり
- 12 灰黄色土 粘質シルト しまり・粘性あり
- 13 灰黄褐色土 シルト質 鉄分少量 しまり・粘性あり

第129図 第104号掘立柱建物跡



第130図 第101・102・104号掘立柱建物跡出土遺物

第36表 第101・102・104号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第130図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.0	[2.5]	—	AI	5	普通	褐色	SB101 (SK105) 口唇部に油煙付着	50-2
2	土師器	坏	(14.1)	[4.2]	—	CGHIK	10	良好	明褐色	SB101 (SK105)	
3	須恵器	蓋	(18.0)	[3.9]	—	IJ	15	良好	灰	SB101 (SK125) 南比金産 埴蓋か	
4	須恵器	蓋	(16.0)	[1.9]	—	EIK	5	普通	明灰	SB101 (SK105) 末野産 埴蓋か	
5	須恵器	坏	(12.2)	4.1	(6.0)	DJ	15	良好	灰	SB101 (SK125) 南比金産 底部調整不明	
6	須恵器	坏	—	[2.1]	5.5	DJ	45	良好	青灰	SB101 (SK125) 南比金産 底部回転糸切り	
7	土師器	坏	(11.5)	[2.2]	—	GI	5	不良	暗褐色	SB102P8 (S-17P34) 有段口縁坏 口径不安定	
8	土師器	坏	(12.0)	3.3	—	DIK	20	良好	明褐色	SB102P6 (T-17P7) 北武蔵型坏	
9	ロクロ土師器	高台坏	12.6	5.5	5.7	ABDI	60	普通	灰褐色	SB104 (SK168) 末野産 黒色処理か	
10	須恵器	(高台) 埴	(14.0)	[2.1]	—	ABE	10	不良	暗灰	SB104 (SK168) 末野産 高台埴か	
11	須恵器	皿	(12.8)	[3.2]	—	IK	5	不良	明灰	SB104 (SK119) 末野産	
12	須恵器	坏	—	[1.1]	(6.0)	BEI	45	良好	灰	SB104 (SK119) 末野産 底部回転糸切り	
13	須恵器	蓋	—	[1.4]	—	DEJ	15	良好	灰白	SB104 (SK119) 南比金産	
14	土製品	土鍾	長さ3.1 最大幅1.8		孔径0.7	重量5.0				SB104 (S-17P10) 下半と裏面欠失	

明褐色である。20%残存する。全体に扁平な器形で、腰に丸みをもって底部に移行する、弱い丸底風となっている。腰部以下はヘラケズリ調整される。8世紀前半～中葉段階の所産であろう。

出土遺物は7世紀後半～8世紀中葉段階と思われるが、建物跡の時期は第104号掘立柱建物跡との新旧関係から9世紀後半以降となる。10世紀初頭から前半 (IV期新段階) 頃の建物跡と考えて

おきたい。

第104号掘立柱建物跡 (第129図)

第104号掘立柱建物跡はS-17・18グリッドに位置する。第138・139・147号住居跡、第118号土壇よりも新しく、第124号住居跡、第102号掘立柱建物跡、第3号溝跡よりも古い。

2×2間の側柱建物で、規模は桁行6.30m、梁行5.40m、面積34.02㎡である。主軸方位はN-20°-Wを指す。

柱穴は不整楕円形と長方形で、全体に比較的大きい。特に、隅柱は長径0.98～1.35mと大型である。P8は第3号溝跡に削平されていた。桁行中間柱は柱筋からややずれ気味で、きれいには揃わない。柱間距離は桁行3.15m、梁行2.70mとなるが、東側桁行の中間柱は等間にならない。柱間距離が非常に広い点が特徴である。

柱痕はP5で確認された(第11層)。その上部には版築状の堆積が見られ、柱周囲を突き固めた土層であろう(第5～10層)。

出土遺物は土師器・甕、クロロ土師器高台、須恵器・埴・皿・蓋、土鍾が検出されている(第130図9～14)。9・10はP1から出土した。9はクロロ土師器または軟質須恵器の高台である。

胎土に雲母と片岩が含まれ、末野産である。10は須恵器高台埴の口縁部片と思われる。9と同時期とみて良い。9・10は重複する第124号住居跡と同時期であり、本来第124号住居跡に帰属する可能性が高い。11～13はP4から出土した。須恵器の皿と坏底部がある。坏は底径6.0cmで焼成は良好である。9世紀中頃～後半であろう。

建物の時期は、重複関係と出土遺物から9世紀中頃～後半(IV期中段階)と考えておきたい。

第105号掘立柱建物跡 (第131図)

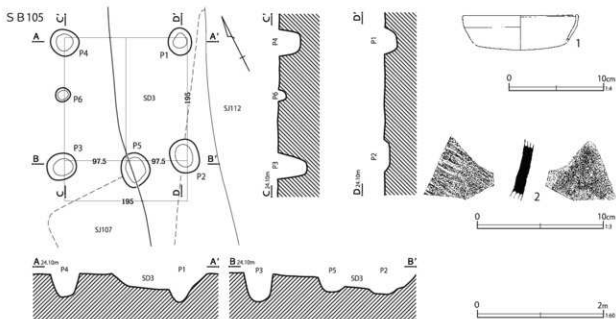
第105号掘立柱建物跡はT-17グリッドに位置する。第112号住居跡、第3号溝跡と重複する。第112号住居跡との新旧関係は不明確であるが、掘立柱建物跡の方が新しい可能性が高い。第3号溝跡との関係は、第105号掘立柱建物跡の方が古いことが判明した。

1×1間の建物跡で、南側柱列には中間柱が付属する可能性がある(P5)。西側中間柱(P6)は規模が小さく伴わない可能性が高い。柱間距離は1.95m等間である。

覆土の状態は明らかにできなかった。

出土遺物は土師器・甕、須恵器甕がある。

第131図1はP3から出土した土師器坏である。



第131図 第105号掘立柱建物跡・出土遺物

北武蔵型坏で底部は平底風になるうか。推定口径は12.0cm、残存高は2.8cmである。胎土に角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子を含む。5%残存する。焼成は不良で、褐色である。9世紀前半～中頃のものであろう。2はP5出土の須恵器甕である。胴部片で外面は平行叩き、内面は無文当具調整である。表面は摩滅している。南比企産で焼成は良好である。8世紀中頃以降9世紀前半頃のものと思われる。

建物の時期は不明確であるが、9世紀前半～中頃と推定しておきたい。

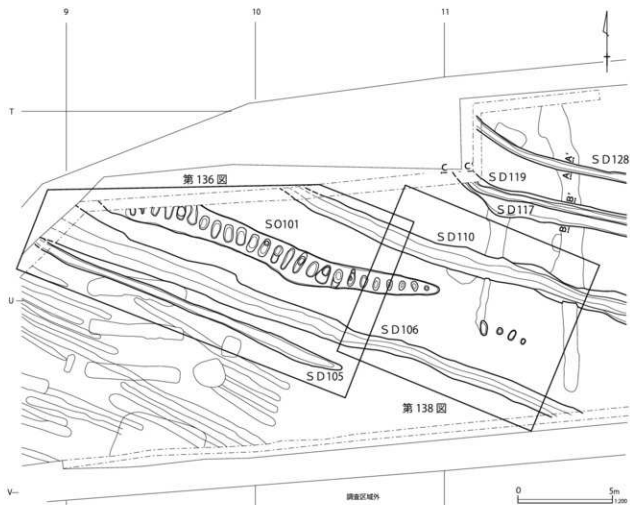
(3) 溝跡・道路跡

第3号溝跡 (第134・135・139・140図)

第3号溝跡はR・S・T-17グリッドに位置する。北北東から南南西に概ね直線的に延びる溝

跡で、西側4mには第6号溝跡が平行して延びている。両者は同時に機能した溝跡と考えられる。北側は第25次調査区に連続しM-18グリッドで東側に折れるが、第6号溝跡よりも屈曲角度は緩い。南側は調査区外に直線的に抜けている。第11・112・124・137・139・140・147・158号住居跡、第1・2・102・104・105号掘立柱建物跡、第102・107号井戸跡、第108号溝跡と重複し、すべての遺構よりも新しい。

規模は第26次調査区内で長さ27.60m、幅1.34～1.70m、深さ0.24～0.36m、断面形は逆台形である。第6号溝跡と比較すると、幅はほぼ同じであるが、深さは約0.20～0.30m浅い。第25次調査区と合わせると、総延長67.6mとなる。調査区南端のU-18グリッドから第101号溝跡が



第132図 古代の溝跡全体図 (1)

検出された。走向は第3号溝跡と直交し、確認面での形態や深さが類似する。同一区画溝の一部と考えることもできる。仮に同一溝跡とすると、一辺74m前後の区画溝の一部ということになる。

覆土は褐灰色土、灰黄褐色土を基調とし、白色粒子や白色粘土ブロックの混入が目立った（第135・139図）。

出土遺物は土師器杯・甕、ロクロ土師器杯、須恵器杯・高台杯・高台埵・甕、灰釉陶器高台碗、鉄製刀子、モモの核がある（第141図）。

第141図1～3は土師器杯、4はロクロ土師器杯である。5は皿状に大きく開く杯で、小針型杯かもしれない。

6は灰釉陶器高台碗で、見込み部は摩滅している。見込み部と外面高台の内側には墨痕跡が残り、

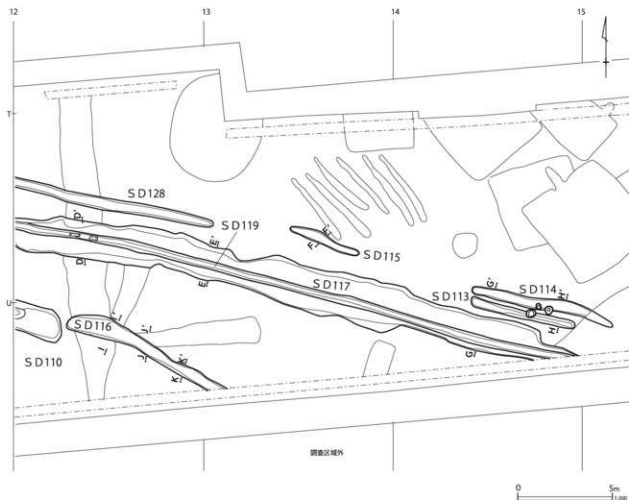
転用硯として使用されたものである。側縁も故意に打ち欠かれたと考えられる。

7・10・14は須恵器高台杯（埵）、8・9は杯、11・12は須恵器甕である。

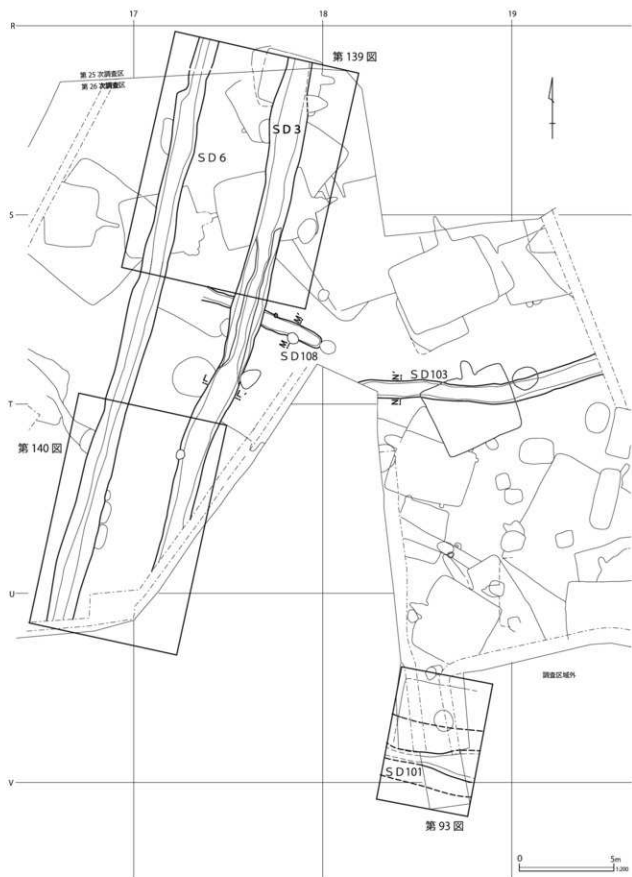
16～30はモモの核。18・21には縫合面の欠損が認められ、ネズミによる食痕と思われる。

第6号溝跡と幅はほぼ同じであるが、深さは第3号溝跡の方がやや浅い。両者は方形の区画溝の一部を構成すると考えられ、第3号溝跡は内部溝跡的な位置付けとなろう。

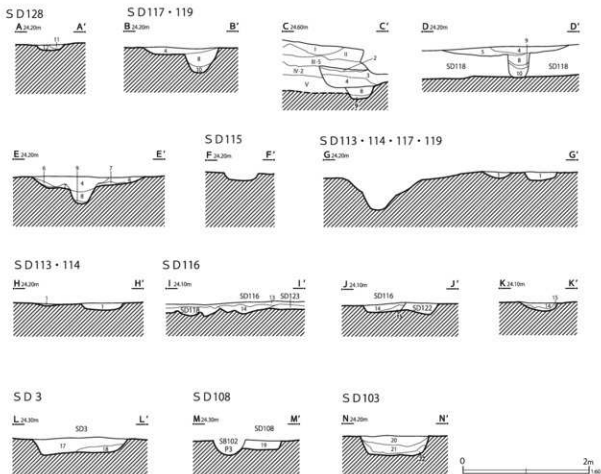
遺物は9世紀末～10世紀前半頃が最新のものである。また、同時期の遺構を壊していることが確認されており、10世紀前半以降に掘削されたことは確実である。平行する第6号溝跡からは上層に天仁元年（1108）に降灰した浅間B軽石層



第133図 古代の溝跡全体図（2）



第134図 古代の溝跡全体図（3）



S D 3・103・108・113～117・119・128

- 1 褐灰色土 粘質シルト 地山粒(φ0.5～1cm) 痕状に含む しまり・粘性あり 基本土層3層に由来すると推定される (S D113・114)
- 2 粘質シルト にぶい黄褐色土粒多量 しまり・粘性強 (S D117)
- 3 粘質シルト にぶい黄褐色土ブロック(φ3～5mm) 含む しまり・粘性強 (S D117)
- 4 黒色粘土粒(φ5mm) 中量 白色粒(φ1～3mm 軽石) 中量 しまり・粘性あり 水の影響ありか (S D117)
- 5 黒色粘土粒(φ5～10mm) 極多量 白色粒(φ1～3mm) 中量 しまり・粘性あり 水の影響ありか (S D117)
- 6 シルト 地山ブロック含む しまりあり 粘性ややあり (S D117)
- 7 シルト 地山ブロック多量 しまりあり 粘性ややあり (S D117)
- 8 白色粒(φ1～3mm) 中量 炭化物粒(φ5mm) 微量 しまり・粘性あり (S D119)
- 9 白色粒(φ1～3mm) 中量 炭化物粒(φ5mm) 多量 しまり・粘性あり (S D119)
- 10 白色粒(φ1～3mm) 微量 しまり・粘性あり (S D119)
- 11 シルト 地山粒(φ5mm) 少量 しまりあり 粘性ややあり (S D128)
- 12 シルト 地山粒(φ5mm) 含む しまり・粘性あり (S D128)
- 13 白色粒(φ1～2mm) 多量 しまり・粘性あり 水性増殖と思われる (S D116)
- 14 地山粒(φ3mm) 多量 しまり・粘性あり (S D116)
- 15 地山ブロック主体 しまり・粘性あり (S D116)
- 16 S D158の1層に似る 白色粒(φ1～3mm) 多量 しまり・粘性あり (S D3)
- 17 白っぽい粘土ブロックとの混土層 焼土粒(φ5mm) 少量 薄い白色土の層を挟む しまり・粘性あり (S D3)
- 18 シルト質 地山粒(φ0.5～2mm) 中量 小礫(φ10mm未満)を含む しまり・粘性弱 (S D3)
- 19 シルト質 炭分・地山ブロック多量 しまり・粘性あり (S D108)
- 20 白色粒微量 黄褐色ブロック少量 しまり強 粘性やや強 (S D103)
- 21 黄褐色ブロック少量 炭化物少量 白色粒微量 微量 しまり強 粘性やや強 (S D103)
- 22 白色粒微量 微量 しまり・粘性やや強 (S D103)

第135図 古代の溝跡土層図(1)

の堆積が確認されており、覆土中からは中世の常滑焼の甕が検出された。また、第3号溝跡と重複する第102号井戸跡からは、12世紀後半～13世紀初頭頃の渥美焼の鉢が検出されている。本来第3

号溝跡に帰属する可能性が高いことから12世紀初頭以前に掘削され、中世初期段階まで埋没しなかったと考えられる。

第6号溝跡(第139・140図)

第6号溝跡はR・S-17、T・U-16グリッドに位置する。北北東から南南西方向に直線的に延びる溝跡で、東側に約4m離れて第3号溝跡が平行して延びている。北側は第25次調査区に連続し、M-18グリッドで東に直角に折れていた。南側は直線的に調査区外に抜けている。

第26次分の規模は長さ29.72m、幅0.92～1.60m、深さ0.45～0.73mで、断面形は逆台形である。第25次分を含めた南北長は77.6m、東西長は5.8mである。第3号溝跡と幅は同様であるが、深さは第6号溝跡の方が深い。

第122・147・148号住居跡、第125号溝跡、第102・103・167・174号土壌坑と重複し、第6号溝跡はすべての遺構よりも新しい。第103号土壌坑(第3号墓跡)は年代測定により、10世紀末～11世紀前半という測定値が得られている。溝跡の掘削年代の上限が10世紀末以降であることがわかる。

南側の溝下層には有機質土が堆積していた。また、南端壁面の土層観察により、遺構確認面上層に天仁元年(1108)降灰の浅間B軽石が混じっていることが確認された。

出土遺物は土師器杯・皿・甕・壺、クロロ土師器高台杯、須恵器杯・高台杯・無台碗・蓋・甕・短頸壺、灰釉陶器高台皿、陶器甕(常滑焼)が検出されている(第141～143図)。

第141図31は土師器有段口縁杯、32は皿である。33は灰釉陶器高台皿と思われる。内面と口縁部外面に灰釉が掛けられている(刷毛塗りの可能性がある)。胎土は緻密で硬く焼かれている。猿投産か。34・35はクロロ土師器高台杯(碗)、第141図36・第142図37～39は土師器甕である。

40・41は須恵器蓋、42は須恵器無台碗である。43は須恵器杯G、44は須恵器杯である。45は須恵器甕口縁部、46は須恵器短頸壺か。47～51は須恵器甕である。

52～54は常滑焼甕胴部片である。

遺物の時期は6世紀～10世紀前半と古代末期～中世(12世紀後半～13世紀)のものが含まれている。掘り込み面上層の浅間B軽石の存在と第3号墓跡との新旧関係から、10世紀末以降12世紀初頭以前に掘削されたのは確実である。常滑焼の存在から、13世紀頃まで機能したと考えられる。

第101号溝跡(第93・134図)

第101号溝跡は調査区南端のU-18グリッドに位置する。走行方向は西南西から東南東に延びている。第105号住居跡を壊して掘削されていた。確認面上部は攪乱が入り、掘り込み面は不明な部分があったが、上幅は約3.6mであった可能性がある。

規模は長さ2.23m、幅0.70～1.52m、深さ0.16～0.30mで、断面形は逆台形である。基本土層の第Ⅲ層対応層に溝跡の上面が削平されていた。第Ⅲ層には浅間B軽石(天仁元年:1108年降灰)が微量含まれていた。純層ではないことから、古代末期から中世にかけて堆積した層となる。第Ⅲ層が被覆していたため、古代末期以前に掘削されたと考えられる。

その一方で、確認面以下の形態・深さは西側で検出された第3号溝跡と類似する。第3号溝跡は第6号溝跡とともに区画溝と考えられるため、どこかで東側に屈曲すると考えられる。第101号溝跡がそれに対応する可能性を考えたい。走向方向もほぼ直角であり、掘り込み面も一致する。

出土遺物は土師器甕・小型台付甕、須恵器甕小片・瓶が検出されている(第143図55～58)。55は土師器小型甕である。口縁部は「コ」の字状で、器壁が厚くなっている。台付になると思われる。56は武蔵型甕の胴部から底部の破片である。おそらく「コ」の字状口縁甕であろう。器壁は薄い。57は須恵器瓶胴部片、58は須恵器甕である。図化した遺物は8世紀～10世紀前半頃の土器と思われる。溝跡の時期は平安時代、12世紀初頭以前に掘削されたと考えられる。

第103号溝跡（第134・135図）

第103号溝跡はS-18・19グリッドに位置する。西から東に緩い弧を描いて延びる溝跡で、西側・東側ともに調査区外に延びている。その西側の調査区を抜けた先には検出されなかった。

重複する第109号住居跡、第112号土壌よりも古かった。

規模は長さ12.41m、幅0.90～1.09m、深さ0.23～0.32mで、断面形は逆台形である。底面は概ね平坦であった。覆土は上層に褐灰色土、下層に灰黄褐色土が堆積していた。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器甕・瓶が検出された（第143図59～63）。59は北武蔵型杯、60は有段口縁杯である。61は須恵器杯で、やや小振りで浅身である。底部は回転糸切り後無調整である。底径は口径の1/2を超えている。9世紀初頭頃のものであろう。62は須恵器杯、63は須恵器瓶である。第109号住居跡との新旧関係と61の須恵器杯から9世紀初頭頃の溝跡と考えておきたい。性格は不明である。

第105号溝跡（第136・137図）

第105号溝跡は南サイドスタンド西端のT-9、U-9・10グリッドに位置する。西側は調査区外に延び、東側はU-10グリッドで止まっていた。第103号掘立柱建物跡と重複し、本溝跡の方が新しい。

走向方向は西北西から東南東方向に延びていた。北側0.30～0.60mには第101号道路跡南側溝SD106（第106号溝跡）がほぼ平行して掘削されていた。

規模は長さ16.62m、幅0.40～0.78m、深さ0.18mで、断面形は皿形である。深さは浅い。

覆土は褐灰色の粘質シルトであった。断面観察からは、第101号道路跡南側溝SD106に壊されている。

出土遺物は土師器甕、須恵器甕・広口壺が検出されているが、量的には少ない（第143図）。64

は須恵器広口壺である。口縁直下に三角形の突帯をもつ。産地は不明であるが、湖西産に形態は類似する。8世紀初頭から前半のものであろう。65は須恵器甕で、外面平行叩き、内面同心円文当具痕が残る。

第101号道路跡側溝と平行することから関連する可能性もあるが、遺物の時期は奈良時代であり、断面観察の結果と整合的であるため、ここでは8世紀前半の溝跡と考えておきたい。

第106号溝跡→第101号道路跡

第110号溝跡→第101号道路跡

第116号溝跡→第101号道路跡

第101号道路跡、第106・110・116号溝跡（第136～138図）

第101号道路跡はT-8～11、U-9～13グリッドに位置する。西北西から東南東方向に概ね直線的に延びている。道路の両側に側溝をもつタイプで、西半部では両側溝間の路面、または路盤には「波板状圧痕」が観察された。第118・120～123号溝跡、第166号土壌と重複し、道路跡が最も新しい。

全体の総延長は側溝を含め41.7mとなる。両側溝間の道路幅は芯々で約6mとなる。側溝内側の幅は約5mである。「波板状圧痕」は路幅のほぼ中央付近にあり、ややカーブを描くように長さ約18mに亘って検出された。

波板状圧痕は、道路に直交する楕円形の浅い掘り込みで、25基連続的に掘り込まれていた。最も大きい圧痕は、長さ1.26m、幅0.60m、深さ0.24mである。圧痕底面は不整形に窪んでいた。

覆土は白色粗砂と砂混じりの褐灰色シルトで構成され、調査所見では底面及び周囲が特に硬化した状況は観察されなかった（第7～11層）。

北側溝は第110号溝跡（SD110）と第116号溝跡（SD116）から構成される。同一溝跡と思われるが、一部途切れる箇所がある。両者を合わせた長さは30.70m、幅は0.96～1.48m、確認面

からの深さは0.20～0.57mである。

南側溝（SD106）は長さ28.80m、幅0.68～2.00m、深さ0.19～0.51mである。溝跡の走向方位はN-69°-Wを指す。

西側調査区境の断面観察によれば、波板状圧痕の上部から南側溝上部にかけて浅間B軽石層が数cmの厚さで堆積していることが確認された（基本土層Ⅲ-3層）。その下層の堆積層であるⅢ-4層・Ⅲ-5層を挟み、第Ⅳ層の上面に波板状圧痕が検出された。両側側溝は基本土層Ⅳ-1層を切り込んで掘削されていた。波板状圧痕の検出されたⅢ-5層下面では硬化面は観察されなかった。

出土遺物は北側溝（SD110）から土師器甕・台付甕、須恵器杯・高台杯、北側溝（SD116）から土師器甕と馬の歯が、南側溝（SD106）から土師器杯・甕、須恵器杯が検出されている。

第143図66・67は南側溝出土の須恵器杯で、底部回転糸切り後無調整である。末野産である。第143図70～72は須恵器杯である。71・72はいずれも底部回転糸切り後無調整で、末野産である。73は須恵器高台杯で、底部は回転糸切り後周辺ヘラケズリ調整が施される。74・75は入れ子状に重なった状態で検出された土師器甕である。内側は小型台付甕、外側は甕である。いずれも「コ」の字状口縁甕である。台付甕は台が外れた状態で、外側の甕の内部にすっぽりと収まる大きさであった。横倒しの状態で故意に重ね置いた可能性が高い。内部から骨や歯は検出されなかったが、乳・幼児用棺や火葬骨を収めた土器棺として使用された可能性を考えておきたい。

出土遺物の時期は、須恵器杯と土師器甕の特徴から9世紀中頃～後半（Ⅳ期中段階）と考えられる。道路の築造時期は不明確であるが、9世紀中頃から後半には側溝がある程度埋没したが、道路としては機能していた。12世紀初頭以前には機能を停止し路面が削平されたこと、天仁元年（1108）には浅間B軽石層が堆積したことが判明した。

第108号溝跡（第134・135図）

第108号溝跡はS-17グリッドに位置する。走向方向は西北西から東南東に延びている。重複する第147号住居跡よりも新しく、第102号掘立柱建物跡P3、第3号溝跡、第154号土壌よりも古かった。

規模は長さ6.72m、幅0.60～0.82m、深さ0.12～0.19mで、断面形は皿形である。

覆土は地山ブロックを多量に含む灰黄褐色土を基調としていた。

出土遺物は土師器杯・甕（武蔵型甕）、砥石が検出されている。

第143図68は土師器武蔵型甕で、底部は砂底となっている。69は砥石である。

時期は、第154号土壌との関係から9世紀後半以前、第102号掘立柱建物跡との新旧関係から10世紀初頭以前となる。出土した砂底の武蔵型甕は9世紀後半以降と思われる、遺構の重複関係を考慮すると、9世紀後半（Ⅳ期中段階）頃と考えておきたい。

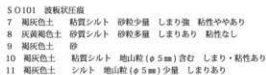
第113～115・128号溝跡（第132・133・135図）

第113～115・128号溝跡はT-11～15・O-14・15グリッドにかけてほぼ一直線上に位置する。走向方向は西北西から東南東方向に向きを取る。

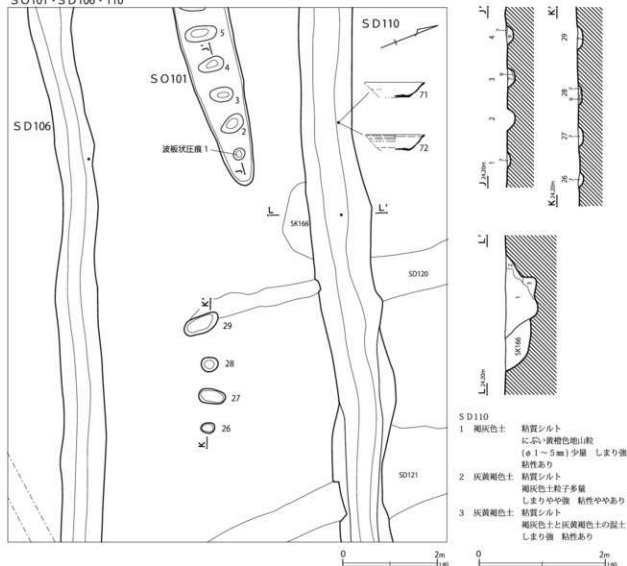
西から第128・115・114号溝跡の順に縦列するが、各溝の間は途切れている。第128号溝跡西端は北方向に僅かに弧を描くように湾曲しているように見える。また、第113号溝跡は第114号溝跡の南側に平行して位置し、関連する溝跡と思われる。

南側には第117・119号溝跡がある。芯々間で約2mの間隔を空けてほぼ平行して延びていた。覆土の状況も類似し、関連する溝跡と考えられる。

第114号溝跡は第156号住居跡を壊していた。また西側にある第128号溝跡は南北方向に延びる第118号溝跡と第121号溝跡を壊して掘削されて



— 166 —



第138図 第101号道路跡・第106・110号溝跡・遺物出土状況(3)

いた。

第128号溝跡西端から第114号溝跡東端まで総延長は41.0mとなる。

西側にある第128号溝跡は長さ19.70m、幅0.43～0.62m、深さ0.09～0.26mである。

第115号溝跡は長さ4.30m、幅0.56m、深さ0.12mである。断面形は扁平な逆台形である。

第114号溝跡は長さ7.80m、幅0.39～0.69m、深さ0.11～0.17mで、断面形は皿形である。各溝は規模が類似し、深さも全体に浅いなど、共通性が高く、本来同一溝跡と考えられる。

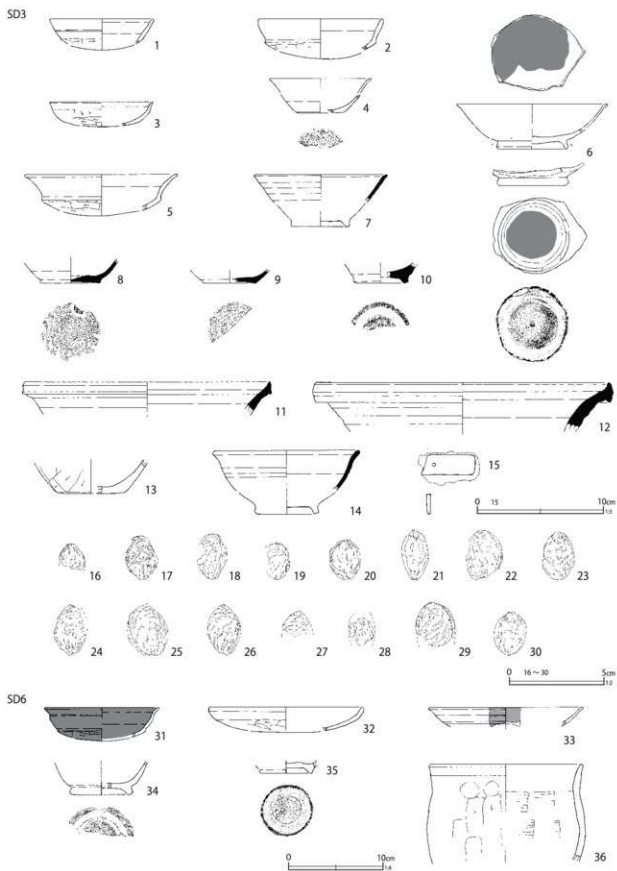
覆土には基本土層Ⅲ層に由来する土が含まれて

おり、古代末期以降の堆積土と考えられる。

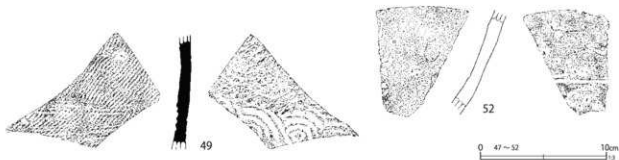
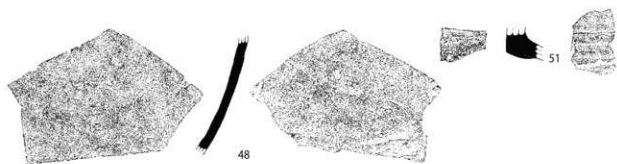
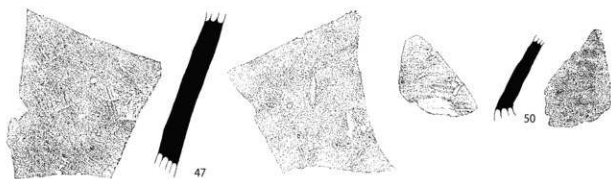
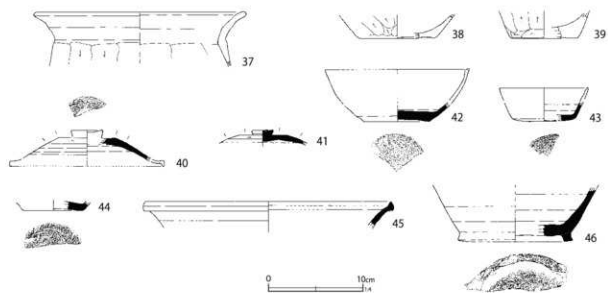
第117・119号溝跡は2段に掘り込まれ、深い溝跡(SD119)は第128号他溝跡と幅が類似している。深さはSD119が深い点は異なるが、ほぼ平行して掘り込まれることを重視すれば、道幅約2mの道路跡に付随する南北側溝の可能性が想起される。但し、波板状圧痕は検出されなかった。

出土遺物は、第128号溝跡から古墳時代後期頃の土師器坏と甕の小片が少量出土したのみである。

時期は不明確であるが、第117・119号溝跡との関係から12世紀初頭またはそれ以前に掘削されたと考えられる。

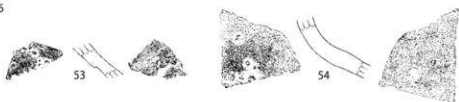


第141図 古代の溝跡出土遺物（1）

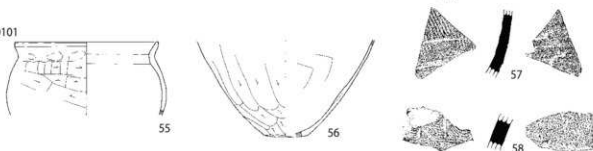


第142図 古代の溝跡出土遺物（2）

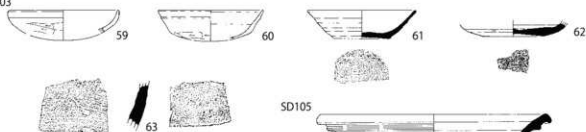
SD6



SD101



SD103



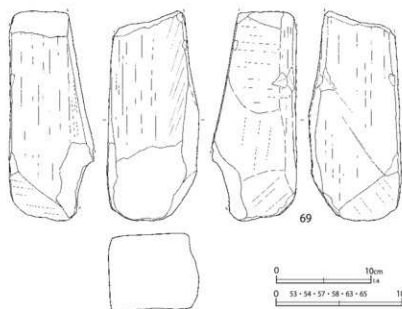
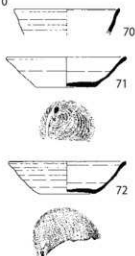
SD106



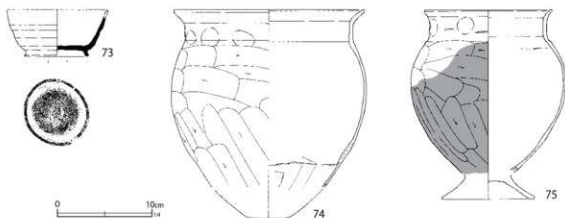
SD108



SD110



第143図 古代の溝跡出土遺物（3）



第144図 古代の溝跡出土遺物（4）

られる。

走向方向は西北西から東南東に延びている。北側にある第113～115・128号溝跡と概ね平行する。間隔は約1～2mである。道路とその側溝の可能性がある。

規模は長さ39.50m、幅1.06～2.66m、深さ0.33～0.59mで、断面形は中心部が箱形に掘り込まれ、周辺部が浅く開く箱葉形である。

西側調査区境の断面観察によれば、基本土層Ⅳ～Ⅱ層を切って掘り込まれ、覆土上面に基本土層Ⅲ～Ⅴ層が乗っていた。

覆土は9層に分けられた。基本的に褐灰色土が堆積していた。調査区境の断面観察ではⅢ～Ⅲ層に浅間B軽石層があるが、それよりも下層にあるⅢ～Ⅴ層が溝埋没後に堆積しており、浅間B軽石堆積以前に掘削されたと考えられる。

出土遺物は混入の弥生土器壺（弥生中期）が検出されているのみである。

溝跡の掘削時期は平安時代後期と推定される。第101号道路跡の北側にほぼ平行し、时期的にも大きな時間差はないと思われる。第101号道路跡廃絶後、その北側に付け替えられた道路側溝の可能性もある。

第301号溝跡（第145・147・148図）

第301号溝跡は北サイドスタンド、調査区北東端部、B・C-13・14グリッドに位置する。重

複する第301号土壇、第306号溝跡よりも本溝跡の方が新しい。また、C-14グリッドP5よりも本溝跡の方が古い。

走向方向は、南南東から北北西方向である。規模は長さ5.82m、幅0.55～0.65m、深さ0.14～0.28mである。断面形は逆台形である。

覆土は地山ブロック・白色粒子を多量に含む褐灰色土を基調としていた。

出土遺物は土師器武蔵型甕が検出されている。

時期は不明確であるが、8世紀代と推定される。

第302号溝跡（第145・147・148図）

第302号溝跡は中央より東のC・D-13グリッドに位置する。南北方向に延びる溝跡で、北側は僅かに東に湾曲する。重複する第314号溝跡と第3号畠跡よりも新しく、南側は第307号溝跡に壊されていた。北側は擾乱を受けていた。

規模は長さ8.53m、幅0.55～0.65m、深さ0.14～0.28mで、断面形は逆台形である。

出土遺物はない。

時期は不明であるが、第303・307号溝跡との関係から9世紀末葉かそれ以前という限定は可能である。

第303・307号溝跡（第145・147・148図）

第303号溝跡は中央より東のC-11・12、D-12・13グリッドに位置する。南東から北西方向に直線的に延びる溝跡で、北側の浅い部分が第

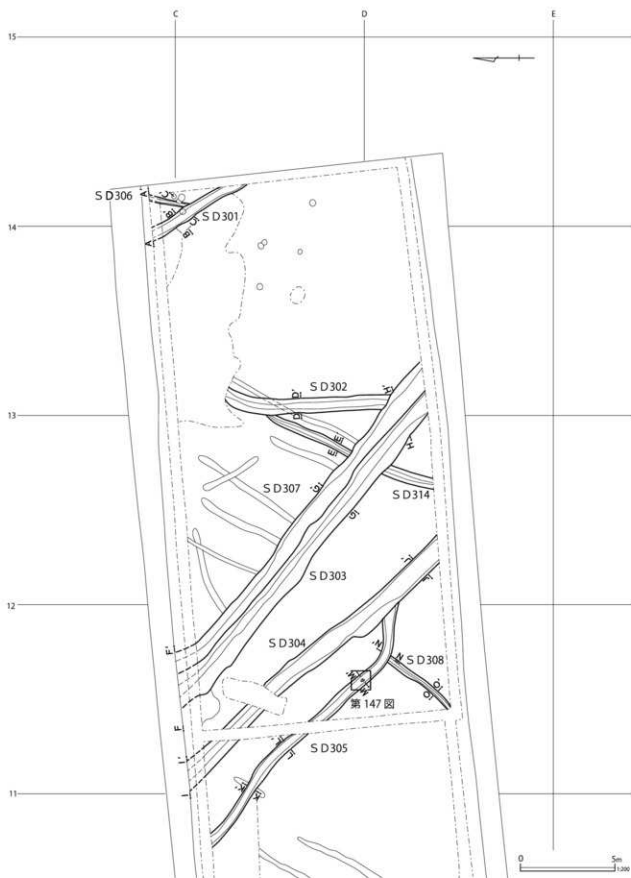
307号溝跡、南側の深い部分が第303号溝跡と分けて名称を付けたが、基本的に同一溝跡と考えら

れる。重複する第314号溝跡、第302号土壌、第301号井戸跡、第3号島跡よりも新しかった。

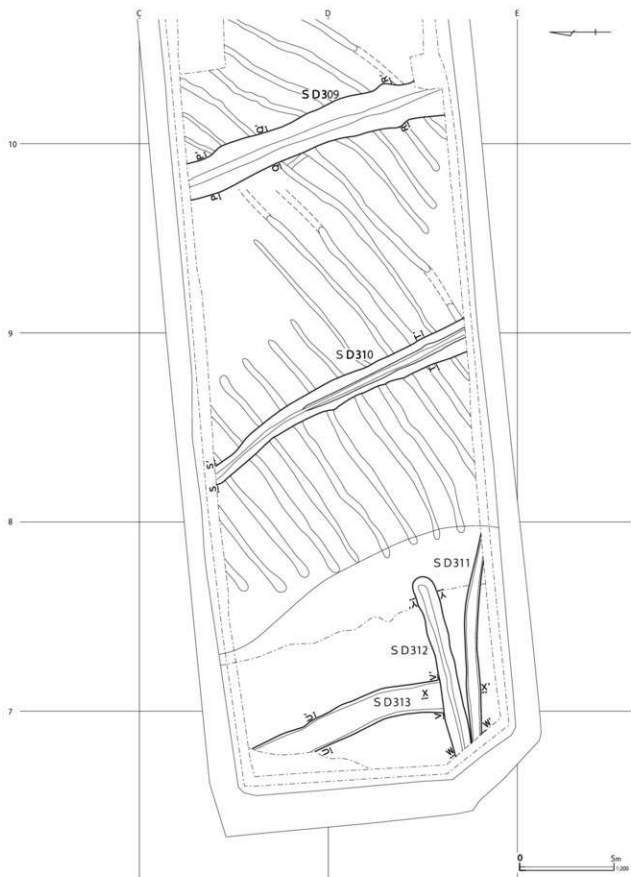
第37表 古代の溝跡出土遺物観察表(1)(第141～144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(10.9)	[2.7]	—	HI	20	良好	明褐	SD 3 T-17 有段口縁円筒化形式	
2	土師器	坏	13.0	[3.3]	—	EHK	10	良好	明褐	SD 3 T-17 坏蓋模倣坏	
3	土師器	坏	(10.8)	[2.5]	—	CI	10	良好	燈褐	SD 3 T-17 坏蓋模倣坏	
4	ロクロ土師器	坏	—	[2.4]	(5.0)	DGI	30	不良	暗褐	SD 3 R-17 底部回転糸切り	
5	土師器	坏	(15.8)	[3.8]	—	DGIK	35	良好	淡褐	SD 3 T-17 小針型か	50-4
6	灰軸陶器	高台碗	—	—	6.9	G	80	良好	灰白	SD 3 R-17 鍬投系か 見込部摩滅し転用破	51-1
7	須恵器	高台埴	(14.0)	[3.0]	—	ABEI	15	不良	黄灰	SD 3 R-17 末野産	
8	須恵器	坏	—	[2.6]	6.3	BEI	60	良好	青灰	SD 3 T-17 末野産 底部回転糸切り	51-2
9	須恵器	坏	—	[1.4]	(5.6)	BEIK	40	普通	灰	SD 3 R-17 末野産 底部回転糸切り	
10	須恵器	高台坏	—	[2.2]	(5.0)	BEI	45	普通	灰	SD 3 R-17 末野産 内面摩滅 底部回転糸切り	
11	須恵器	甕	(26.0)	[3.5]	—	BEI	5	良好	黒灰	SD 3 T-17 末野産	
12	須恵器	甕	(31.0)	[5.3]	—	IL	5	良好	灰	SD 3 S-17 産地不明 砂っぽい胎土で混和材少ない	
13	土師器	甕	—	[3.7]	(7.0)	GHK	75	良好	明褐	SD 3 R-17	
14	須恵器	(高台)埴	(15.0)	[4.3]	—	BEI	15	普通	灰	SD 3 R-17 末野産	
15	鉄製品	刀子	長さ4.3 幅1.6 厚さ0.3 重さ9.6							SD 3 刀子柄部か、板状製品残欠 孔が穿たれている可能性あり	65-7
16	植物	モモ核	長さ1.4 幅1.4 厚さ1.2 重さ0.3							SD 3 R-17 下半欠損	66-9
17	植物	モモ核	長さ2.3 幅1.7 厚さ0.8 重さ0.4							SD 3 R-17 裏面欠損	66-9
18	植物	モモ核	長さ2.4 幅1.6 厚さ0.8 重さ0.4							SD 3 R-17 裏面欠損 図上で左側面に孤状の欠損部がある ネズミによる縫合片割食痕の可能性はある	66-9
19	植物	モモ核	長さ1.9 幅1.1 厚さ0.25 重さ0.2							SD 3 R-17 図上で左側欠損	66-9
20	植物	モモ核	長さ2.1 幅1.6 厚さ1.3 重さ0.9							SD 3 R-17 ほぼ完存	66-9
21	植物	モモ核	長さ2.6 幅1.5 厚さ1.2 重さ1.6							SD 3 R-17 縫合面に楕円形の穿孔 ネズミの食痕と思われる	66-9
22	植物	モモ核	長さ2.6 幅1.85 厚さ0.8 重さ0.8							SD 3 S-17 裏面欠損	66-9
23	植物	モモ核	長さ2.5 幅1.7 厚さ1.4 重さ0.7							SD 3 S-17 ほぼ完存	66-10
24	植物	モモ核	長さ2.7 幅1.7 厚さ0.8 重さ0.6							SD 3 S-17 裏面欠損	66-10
25	植物	モモ核	長さ2.75 幅2.15 厚さ1.4 重さ1.7							SD 3 S-17 完存	66-10
26	植物	モモ核	長さ2.7 幅1.75 厚さ0.7 重さ0.6							SD 3 S-17 裏面欠損	66-10
27	植物	モモ核	長さ1.4 幅1.5 厚さ0.6 重さ0.2							SD 3 S-17 裏面・下部欠損	66-10
28	植物	モモ核	長さ1.45 幅1.4 厚さ0.5 重さ0.1							SD 3 S-17 片面の一部残存	66-10
29	植物	モモ核	長さ2.3 幅2.1 厚さ0.8 重さ0.8							SD 3 S-17 裏面欠損	66-10
30	植物	モモ核	長さ2.3 幅1.7 厚さ0.7 重さ0.8							SD 3 S-17 裏面欠損	66-10
31	土師器	坏	(12.0)	[3.1]	—	CGI	10	普通	暗褐	SD 6 S-17 有段口縁円 黒色処理(内外面)か	
32	土師器	皿	(16.2)	[2.5]	—	CDGI	10	普通	燈褐	SD 6 S-17 内面風化	
33	灰軸陶器	高台皿	(16.0)	[2.1]	—	K	5	良好	明灰	SD 6 S-17 鍬投系か 内面全体と外面口縁部灰軸施軸(刷毛塗り)	
34	ロクロ土師器	高台坏	—	[3.5]	(6.0)	CI	30	不良	黒褐	SD 6 S-17 底部回転糸切りか 黒色処理か	51-3
35	ロクロ土師器	高台坏	—	[1.3]	5.2	DEG	90	不良	灰白	SD 6 S-17 底部回転糸切りか 胎土に粗い砂礫多く含む	
36	土師器	甕	(16.0)	[10.3]	—	DEGIL	5	普通	暗褐	SD 6 S-17 整形雑	
37	土師器	甕	(22.0)	[5.9]	—	AGHI	5	良好	淡褐	SD 6 R-17	
38	土師器	甕	—	[2.5]	(8.0)	CI	15	良好	暗褐	SD 6 S-17 器種不明確 外面煤付着 内面平滑	

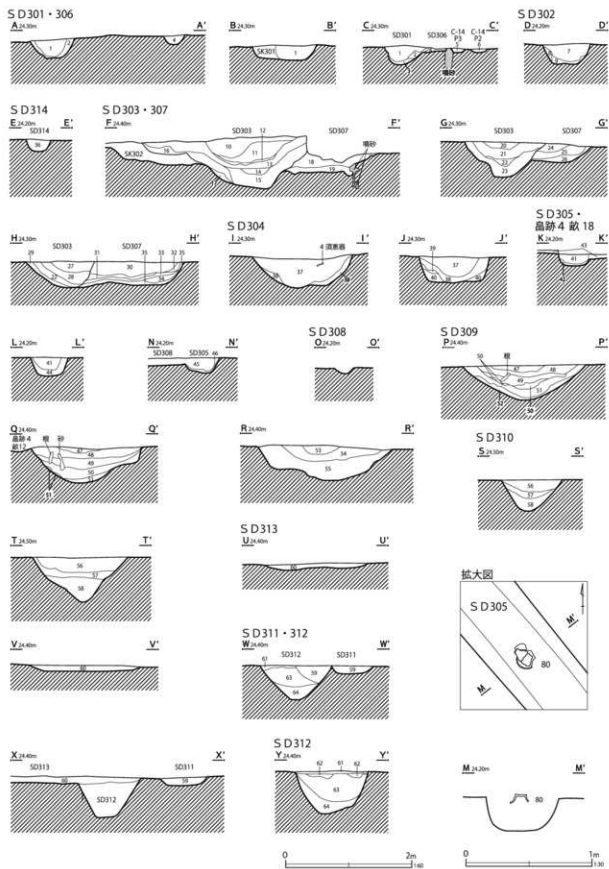
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
39	土師器	甕	—	[2.9]	(7.0)	DEG1	40	良好	灰白	SD 6 S-17 白っぽい胎土 底部厚い	
40	須恵器	蓋	—	[2.5]	—	B1K	15	普通	明灰	SD 6 S-17 末野産 天井部回転糸切り 後周辺回転ケズリ (ロクロ右回転)	
41	須恵器	蓋	—	[1.7]	—	G1J	15	普通	灰白	SD 6 S-17 南比企産	
42	須恵器	無台壇	—	[2.0]	(7.0)	G1J	25	普通	黄灰	SD 6 S-17 南比企産 底部回転糸切り	
43	須恵器	環	—	[2.1]	(6.7)	DE1	20	良好	青灰	SD 6 S-17 末野産か 底部ナデ	
44	須恵器	坏	—	[1.0]	(6.2)	G1	35	良好	青灰	SD 6 S-17 東金子産か 砂っぽい胎土 底部回転糸切り	
45	須恵器	甕	(26.0)	[2.8]	—	IJ	5	良好	黒灰	SD 6 S-17 南比企産	
46	須恵器	短頸甕	—	[6.0]	(12.0)	DJ	30	良好	暗灰	SD 6 R-17 南比企産 底部ナデか	52-1
47	須恵器	甕	—	[13.0]	—	BEL	—	良好	暗青灰	SD 6 S-17 末野産か 外面平行叩き 内面木口ナデ	51-4
48	須恵器	甕	—	[9.5]	—	BDEI	5	普通	灰	SD 6 S-17 末野産 外面平行叩き後ナ デ 内面同心円文か 当具	52-2
49	須恵器	甕	—	[9.0]	—	EK	5	良好	灰	SD 6 S-17 外面カキ目後平行叩き 内 面同心円文当具	
50	須恵器	甕	—	[6.6]	—	IJK	5	良好	黒灰	SD 6 R-17 南比企産 大甕頸部破片 内外面自然軸	51-5
51	須恵器	甕	—	[2.5]	—	IJ	5	良好	黒灰	SD 6 S-17 南比企産 肩部片 外面緑 色の自然軸	
52	陶器	甕	—	[8.2]	—	DE	5	良好	茶褐	SD 6 S-17 常滑焼 内面自然降灰 胴 部下位破片	51-6
53	陶器	甕	—	[2.9]	—	DEI	5	良好	茶褐	SD 6 S-17 常滑焼 肩部片 外面白緑 色の降灰	
54	陶器	甕	—	[4.9]	—	DEI	5	良好	茶褐	SD 6 S-17 常滑焼 肩部破片 外面白 緑色の自然軸	
55	土師器	小型(台付)甕	(15.0)	[7.8]	—	CDG1K	20	良好	明褐	SD101 武蔵型甕 台付か 器壁厚い	
56	土師器	甕	—	[10.1]	(4.6)	CG1K	35	良好	暗褐	SD101 武蔵型甕	
57	須恵器	甕	—	[5.2]	—	IK	5	良好	灰白	SD101 東海(湖西)産 瓶腹下半 外面 平行叩き後沈積2条 内面口クロナデ	
58	須恵器	甕	—	[3.0]	—	EI	5	良好	淡青灰	SD101 在地産 大甕頸部片 外面櫛描波 状文	
59	土師器	環	(11.6)	[2.5]	—	CGI	10	普通	褐	SD103 北武蔵型環	
60	土師器	環	(11.0)	[3.2]	—	CGI	15	普通	淡褐	SD103 有段口縁環 風化著しい	
61	須恵器	環	(11.4)	3.0	(6.0)	DJ	30	良好	灰	SD103 南比企産 底部回転糸切り	52-3
62	須恵器	環	—	[1.6]	(6.4)	BEL	10	良好	暗青灰	SD103 末野産か 坏または無台壇	
63	須恵器	甕	—	[4.0]	—	G1K	—	普通	灰白	SD103 在地産(非末野 非南比企) 外 面下位回転ヘラケズリ(ロクロ逆時計回 り) 内面口クロナデ	
64	須恵器	広口甕	(24.0)	[4.5]	—	BDEIK	15	良好	淡黄灰	SD105 №1 産地不明 口縁下に突帯 湖西産に似る	52-4
65	須恵器	甕	—	[6.1]	—	BDEI	—	良好	暗青灰	SD105 末野産 外面平行叩き 内面同心 円文当具	52-5
66	須恵器	環	—	[0.9]	6.5	BDEI	95	普通	淡黄白	SD106 №10 末野産 底部回転糸切り	
67	須恵器	環	—	[1.3]	(6.0)	BDEI	20	良好	灰	SD106 末野産 底部回転糸切り	
68	土師器	甕	—	[1.3]	(4.0)	G	50	普通	暗褐	SD108 武蔵型甕 底部砂底か	
69	石製品	砥石	長さ[16.6] 幅7.3 厚さ[6.7] 重さ1214.6							SD108 №1 砂岩 方柱状砥石 上部と 下端欠失 側面の四面は平滑	65-5
70	須恵器	環	(11.0)	[2.8]	—	IJ	20	良好	青灰	SD110 T11 南比企産 時期不明確 口 径小さく体部角度が急なので7c 末頃の坏 Aにも見える	
71	須恵器	環	(12.5)	3.2	6.2	BG	25	普通	灰	SD110 №2 末野産 底部回転糸切り	52-7
72	須恵器	環	(12.3)	3.4	6.0	BDIK	40	不良	灰	SD110 №2 末野産 底部回転糸切り	53-1
73	須恵器	高台環	—	[4.3]	6.6	IJ	60	良好	青灰	SD110 T11 南比企産 底部回転糸切り 後周辺ヘラケズリ	53-2
74	土師器	甕	(20.0)	[18.8]	—	CDGHI	40	良好	褐	SD110 №1 武蔵型甕	53-3
75	土師器	小型(台付)甕	13.2	[17.2]	—	DGI	60	良好	茶褐	SD110 №1 武蔵型甕 胴部煤付着	53-4



第145図 古代の溝跡全体図(4)



第146図 古代の溝跡全体図（5）



第147図 古代の溝跡土層図（2）

S D301 ~ 314・品録4

1 褐色土	粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 黄色地山ブロック・粒子多量 白色粒子多量 (S D301)	36 灰黄褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分・褐色地山ブロック少量 (S D314)
2 灰黄褐色土	粘質シルト しまりあり 粘性やや弱 褐色土大ブロック多量 (S D301)	37 褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子少量 (S D304)
3 黒褐色土	粘質土 しまり・粘性あり 褐色土粒子少量 (S D301)	38 褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分・灰黄褐色土ブロック少量 (S D304)
4 褐色土	粘質シルト しまり・粘性ややあり 黄褐色土と黒褐色土粒の混生 理の反しか (S D306)	39 にぶい黄褐色土	粘性・しまりやや強 粘質土 鉄分少量 白色粒子微量 (S D304)
5 褐色土	シルト しまりややあり 粘性やや弱 砂粒含む 上層に炭化粒含む (C-14 P 3)	40 褐色土	粘性・しまりやや強 粘質土 鉄分・白色粒子少量 (S D304)
6 にぶい黄褐色土	砂質シルト しまりあり 粘性弱 暗褐色土粒多 砂粒含む (C-14 P 2)	41 灰黄褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子・地山粒子少量 (S D305)
7 褐色土	粘質シルト しまり・粘性あり 地山粒子少量 鉄分含む (S D302)	42 灰黄褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子少量 地山粒子・ブロック少量 (S D305)
8 暗褐色土	砂質 しまりやや弱 粘性なし 地山粒子少量 (S D302)	43 にぶい黄褐色土	シルト質 粘性・しまりやや弱 鉄分微量 白色粒子少量 (品録4 頁18)
9 にぶい黄褐色土	シルト しまり・粘性やや弱 地山粒子・ブロック多量 砂粒少量 (S D302)	44 灰黄褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子少量 地山粒子・ブロック多量 (S D305)
10 灰黄褐色土	粘性・しまりやや弱 鉄分炭粒に多量 白色粒子炭粒に少量 (S D303)	45 灰黄褐色土	粘質シルト しまり強 粘性ややあり 地山粒子少量 (S D305・308 共通)
11 褐色土	粘性・しまりやや弱 炭化物ブロック少量 鉄分炭粒に多量 (S D303)	46 灰黄褐色土	粘質シルト しまり強 粘性ややあり 地山粒子・ブロック多量 (S D305)
12 褐色土	粘性・しまり弱 砂多含む 鉄分少量 砂層 (S D303)	47 黒褐色土	粘質シルト しまりあり 粘性ややあり (ピンク系炭状粉や白色粒子 (炭屑) 含む) (S D309)
13 灰黄褐色土	粘性・しまりやや弱 砂・鉄分・炭化物ブロック少量 (S D303)	48 にぶい黄褐色土	しまり強 粘性ややあり 白色粒子微量 (S D309)
14 褐色土	粘性・しまり弱 砂多量 鉄分微量 炭化物ブロック微量 (S D303)	49 暗褐色土	砂質シルト 黄褐色土・ブロック含む (S D309)
15 にぶい黄褐色土	粘性・しまりやや強 鉄分炭粒に多量 炭化物ブロック微量 黄褐色土ブロック部分に多量 (S D303)	50 黄褐色土	砂質シルト しまりややあり 粘性弱 細かな砂粒と粘土ブロック混じる (S D309)
16 黒褐色土	粘性強 しまりやや強 鉄分炭粒に多量 炭化物ブロック少量 灰黄褐色土ブロック部分に多量 (S D303)	51 黒褐色土	シルト しまり・粘性ややあり 炭化物微量 砂含む (S D309)
17 暗褐色土	粘性・しまりやや弱 鉄分・褐色土ブロック (粘土) 少量 (S D303)	52 黄褐色土	砂 しまりややあり 粘性弱 黒褐色粘質土を混入する 砂質土 (S D309)
18 にぶい黄褐色土	粘性・しまりやや弱 鉄分微量 白色粒子少量 (S D307)	53 暗褐色土	シルト質 粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子少量 (S D309)
19 褐色土	粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子・灰黄褐色土ブロック少量 (S D307)	54 にぶい黄褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分炭に多く含む 炭化物ブロック微量 (S D309)
20 黒褐色土	粘性・しまりやや強 鉄分・炭化物ブロック少量 粘質シルト (S D303)	55 暗褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分少量 炭化物ブロック微量 (S D309)
21 灰黄褐色土	粘性・しまりやや弱 白色粒子・微量 炭化物ブロック微量 粘質炭粒に含む (S D303)	56 にぶい黄褐色土	シルト質 粘性・しまりやや弱 鉄分・白色粒子少量 (S D310)
22 にぶい黄褐色土	シルト質 粘性・しまり弱 礫・鉄分・白色粒子少量 (S D303)	57 褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分炭に多く含む 白色粒子少量 (S D310)
23 暗褐色土	粘性・しまりやや強 礫・鉄分・白色粒子少量 (S D303)	58 暗褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子・褐色土ブロック少量 (S D310)
24 灰黄褐色土	粘性・しまりやや強 鉄分・褐色土ブロック少量 黒褐色土ブロック少量 (S D307)	59 灰黄褐色土	しまり強い 粘性やや強 灰白色シルトブロック (φ5～20mm) 多量 シャリシャリしている (S D311・312)
25 にぶい黄褐色土	粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子・灰黄褐色土ブロック少量 (S D307)	60 褐色土	しまり強い 粘性やや強 黒色粒子 (φ1mm) (おそらく浅間B軽石) を所々に含む 灰白色シルトブロック (φ5～20mm) 多量 (S D313)
26 にぶい黄褐色土	粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子・褐色土ブロック少量 (S D307)	61 褐色土	しまり強い 粘性やや強 粘土層 灰白色シルトブロック (φ5～20mm)・黒色粒子 (φ1～2mm) 多量 (S D311・312)
27 黒褐色土	粘質シルト 粘質・しまりやや強 鉄分上部に少量 白色粒子少量 (S D303)	62 暗褐色土	しまり強い 粘性やや強 硬化している 灰白色シルトブロック (φ5～20mm) 多量 固い (S D312)
28 灰黄褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや弱 鉄分微量 礫多量 白色粒子少量 (S D303)	63 黒褐色土	しまり強い 粘性やや強 粘土層 黒色粒子 (φ1～2mm) 多量 浅間B軽石が両増したもののか (浅間B軽石を切っている) (S D312)
29 暗褐色土	粘性・しまりやや強 礫・礫少量 白色粒子微量 (S D303)	64 黒褐色土	しまり強い 粘性強 粘土層 灰白色シルトブロック (φ5～50mm) 少量 (S D312)
30 灰黄褐色土	粘質土 粘性強 しまりやや強 鉄分多量 褐色土ブロック少量 炭化物ブロック微量 (S D307)		
31 灰黄褐色土	砂質シルト 粘性・しまり弱 鉄分・白色粒子少量 (S D307)		
32 灰黄褐色土	粘質シルト 粘性・しまりやや強 鉄分少量 灰黄褐色土ブロック少量 白色粒子微量 (S D307)		
33 にぶい黄褐色土	粘土土 粘性・しまりやや強 鉄分・白色粒子少量 (S D307)		
34 褐色土	粘性・しまりやや強 粘質シルト 鉄分少量 白色粒子微量 (S D307)		
35 黒褐色土	粘性・しまりやや強 粘質シルト 鉄分・褐色土ブロック少量 白色粒子微量 (S D307)		

第148図 古代の溝跡土層図 (3)

規模は長さ21.00m、幅0.95～1.35m、深さ0.44～0.56mで、底面は2段に掘り込まれている。覆土の状況から第303号溝跡は、第307号溝跡を2回程度深く掘り直したことがわかる。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯がある。量的には少ない。第149図76・77は平底となる土師器北武蔵型杯である。76は体部指頭痕を顕著に残す。77は体部無調整である。78は須恵器杯口

縁部片である。

時期は9世紀後半と考えられる。

第304号溝跡 (第145・147・148図)

第304号溝跡は中央部のC-11、D-11・12グリッドに位置する。第303・307号溝跡の西側にあり、南東から北西方向に延びている。途中から第305号溝跡が分岐している。第305号溝跡との関係は不明である。

規模は長さ18.26m、幅0.87～1.32m、深さ0.35～0.47mで、断面形は逆台形である。

出土遺物は土師器甕、須恵器甕が検出された。

第149図79は須恵器甕である。外面平行(擬斜格子)叩き、内面は同心円文当具痕を残す。時期は7世紀末～8世紀前半と推定される。

第305号溝跡 (第145・147・148図)

第305号溝跡は中央のC-10・11、D-11グリッドに位置する。第304号溝跡から分岐し南東方向から北西方向に延びている。新旧関係は不明である。また、第308号溝跡と一体のものであることが土層観察から確認された。第4号畠跡とも重複し、畝跡よりも新しくあった。

規模は長さ16.60m、幅0.50～0.64m、深さ0.24～0.28mで、断面形は逆台形である。

出土遺物は、土師器甕、須恵器脚付盤が検出されている。

第149図80は須恵器脚付盤である。盤部外面は回転ヘラケズリ調整される。口縁は欠くが、推定口径27cmになる大型品である。末野産と思われる。時期は7世紀末～8世紀前半と考えられる。

第306号溝跡 (第145・147・148図)

第306号溝跡は、調査区東側のB・C-14グリッドに位置する。南北方向に延びる溝跡で、北側は調査区外に抜け、南側は第301号溝跡までで途切れている。新旧関係は本溝跡の方が古い。また、C-14グリッドP3に壊されていた。

規模は長さ1.45m、幅0.23～0.27m、深さ0.08～0.13mで、断面形はU字形である。

出土遺物はない。詳細な時期は不明である。

第308号溝跡 (第145・147・148図)

第308号溝跡は中央のD-11グリッドに位置する。第305号溝跡から分岐し、南西方向に延びている。土層観察から第305号溝跡と一体であることが確認されている。

規模は長さ4.17m、幅0.28～0.40m、深さ0.06～0.10mで、断面形は逆台形である。

出土遺物はない。

時期は第305号溝跡と同じと考えられるため、7世紀末～8世紀前半と考えられる。

第309号溝跡 (第146～148図)

第309号溝跡は中央より西のC-9・10、D-10グリッドに位置する。南南東から北北西方向に延びているが、両端は調査区外に抜けている。第4号畠跡と重複し、本溝跡の方が新しい。

規模は長さ14.33m、幅1.70～2.40m、深さ0.54～0.60mで、断面形は深い皿状または葉研状である。

覆土は9層に分割された。第1層(最上層)に浅間B軽石が含まれていたことから、平安時代末期には掘削されたと推定される。

出土遺物はない。

時期は堆積状態から平安時代末期と考えられる。

第310号溝跡 (第146～148図)

第310号溝跡は中央より西のC-8、D-8・9グリッドに位置する。第309号溝跡の西側約13m隔てて南南東から北北西方向にほぼ平行して延びていた。第4号畠跡と重複し、本溝跡の方が新しい。

規模は長さ15.43m、幅0.78～1.60m、深さ0.49～0.70mで、断面形は葉研形である。

覆土はシルト質で、浅間B軽石は確認されていない。

出土遺物はない。

時期は不明であるが、浅間B軽石層堆積以前と思われ、平安時代末期と推定しておきたい。

第311号溝跡（第146～148図）

第311号溝跡は調査区西端のD-6・7グリッドに位置する。東西方向に延びる溝跡で、両端は調査区外に抜けている。北側に第312号溝跡がほぼ平行して位置するが、重複はない。

規模は長さ11.20m、幅0.45～0.70m、深さ0.12～0.17mで、断面形は皿状である。

出土遺物は土師器甕片が少量検出されている。

時期は不明であるが、平安時代と推定される。

第312号溝跡（第146～148図）

第312号溝跡は調査区西端のD-6・7グリッドに位置する。東西方向に延びる溝跡で、西側は調査区外に抜けている。第311号溝跡と接し、第313号溝跡と重複していた。第313号溝跡は浅く本溝跡の上層に乗っていたため、本溝跡の方が古いことが判明した。

規模は長さ9.38m、幅0.87～1.17m、深さ0.53～0.66mで、断面形は箱渠形である。

出土遺物は土師器甕、須恵器甕・瓶が検出されている。

遺物の時期は8世紀～9世紀である。溝跡の上面に浅間B軽石層が堆積していたことから平安時代の溝跡と推定される。

第313号溝跡（第146～148図）

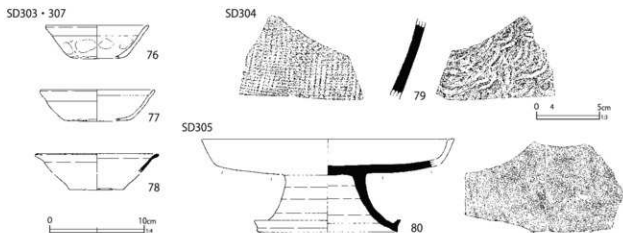
第313号溝跡は調査区西端のC-6、D-6・7グリッドに位置する。南北方向に延びる溝跡で、北側は調査区外に抜けている。南側は第312号溝跡の上で途切れていた。本来、第312号溝跡の上部を抜けていたと思われるが、浅いために検出できなかった。

規模は長さ10.13m、幅1.44～1.70m、深さ0.10～0.13mで、断面形は皿状である。

覆土には浅間B軽石が堆積していた。

出土遺物は9世紀後半頃の須恵器坏片が検出されている。

溝跡の時期は浅間B軽石の堆積から平安時代の



第149図 古代の溝跡出土遺物（5）

第38表 古代の溝跡出土遺物観察表（2）（第149図）

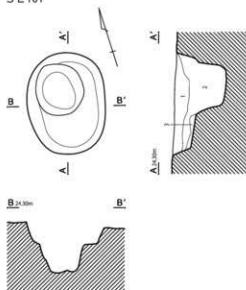
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
76	土師器	坏	(10.6)	3.5	(5.6)	HI	20	普通	褐	SD303・307 体部無調整 指押え 雑なつくり	
77	土師器	坏	(12.0)	3.3	(7.0)	GHI	15	良好	淡黄褐	SD303・307 体部無調整 底部ヘラケズリ	
78	須恵器	坏	(12.8)	[2.0]	—	EI	5	良好	青灰	SD303・307 末野産か	
79	須恵器	甕	—	[6.0]	—	BFI	5	良好	暗青灰	SD304 №1 末野産 外面格子叩き 内面同心円文当具	
80	須恵器	脚付盤	—	[7.6]	14.6	BDEI	50	良好	黒灰	SD305 №1 末野産 盤部外面回転ケズリ 内面ナデ	55-1

所産と推定される。

第314号溝跡 (第145・147・148図)

第314号溝跡は中央より東のC・D-12グリッドに位置する。北北東から南南西方向に延びる溝跡で、北側は第302号溝跡に壊され、南側は調査区外に抜けていた。また、第303・307号溝跡に

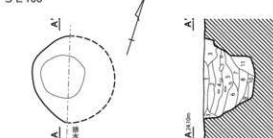
S E 101



S E 101

- 1 にぶい黄褐色土 地山ブロック (φ 5 ~ 10 mm) 多量 埋め戻し
- 2 褐色土 地山砂少量 埋め戻し
- 3 にぶい黄褐色土 地山砂・地山ブロック多量 埋め戻し

S E 106



S E 106

- 1 黒褐色土 焼土粒 (φ 5 mm)・土器細粒 (φ 5 mm)・地山粒 (φ 5 ~ 10 mm) 多量 しまり・粘性あり
- 2 黒褐色土 地山粒 (φ 5 mm)・小石 (φ 5 ~ 10 mm) 中量 しまり・粘性あり
- 3 灰黄褐色土 地山ブロックの崩落土と思われる しまりあり 粘性やや弱
- 4 黒褐色土 地山粒 (φ 5 ~ 10 mm) 多量 砂と礫の混土層中央にあり しまり・粘性あり
- 5 黒褐色土 礫少量 しまり・粘性あり
- 6 褐色土 砂と粘土ブロックの混土層 しまり・粘性あり
- 7 褐色土 粘土主体 しまりあり 粘性強
- 8 褐色土 粘土ブロック少量 しまり・粘性あり
- 9 褐色土 砂主体 しまり・粘性あり
- 10 褐色土 9層との間に粘土層 (厚 20 mm) あり しまり・粘性弱
- 11 褐色土 粘土ブロック少量 しまり・粘性弱

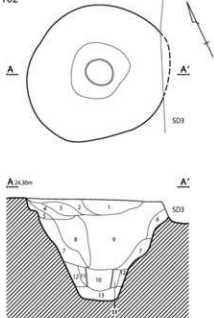
壊されていた。

規模は長さ9.37m、幅0.37 ~ 0.62m、深さ0.16 ~ 0.25mで、断面形は逆台形である。

出土遺物はない。

時期は第303・307号溝跡との関係から9世紀後半以前となる。

S E 102



S E 102

- 1 褐色土 地山粒 (φ 1 ~ 2 cm) を含む 礫 (φ 10 cm未満) 少量 しまり・粘性あり 埋め戻し土か
- 2 褐色土 地山粒 (φ 0.2 ~ 1 cm) を含む しまり・粘性あり 埋め戻し土か
- 3 褐色土 炭化物 (φ 1 cm)・地山粒 (φ 4 ~ 5 mm)・礫 (φ 10 cm未満) 少量 しまり・粘性あり 埋め戻し土か
- 4 褐色土 地山粒 (φ 4 ~ 6 mm) 微量 埋め戻し土か
- 5 褐色土 地山粒 (φ 2 ~ 3 cm) を含む しまり・粘性あり 埋め戻し土か
- 6 黄褐色土 全体に砂利を含む しまり・粘性強
- 7 褐色土 地山土とグライ化した土を多量に含む しまり・粘性あり 井戸機能時の流れ込みか
- 8 灰色土 グライ化 砂利 (φ 1 mm) 少量 しまり・粘性非常に強 井戸機能時の流れ込みか
- 9 黄褐色土 礫 (φ 2 ~ 30 cm)・砂利多量 しまり・粘性あり 埋め戻し土か
- 10 灰色土 グライ化した土層 小礫・砂利多量 砂利は暗褐色～赤褐色を呈し粘りが強い 小礫 (φ 10 cm未満) を含む しまり・粘性強
- 11 黄褐色土 礫 (約 10×30 cm) 少量 小礫 (10 cm未満) 多量 しまり・粘性強
- 12 粒子の粗い砂利と小礫 (φ 10 cm未満) を含む
- 13 粒子の粗い砂利のみ



第150図 第101・102・106号井戸跡

(4) 井戸跡

第101号井戸跡 (第150図)

第101号井戸跡は調査区東端のS・T-19グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.61m、短径1.25m、深さ0.80mである。主軸方位はN-19°-Eを指す。

底面は2段に掘り込まれ、下段部は直径0.84mである。覆土は3層に分かれ、地山ブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻されたと考えられた。井戸に通有の有機質土や砂礫の堆積は認められなかった。

出土遺物は土師器・甕・高坏脚部、須恵器・甕が検出されている (第151図)。

第151図1～3は土師器北武蔵型坏である。やや浅身の丸底形態で、口縁部は内湾気味のものと直立するものがある。4は須恵器甕、5は須恵器甕である。6は土師器高坏か。脚部に円形透かし穴が2個穿たれている。7は土師器甕で、胴部は縦ケズリ調整される。

時期は北武蔵型坏と須恵器甕から8世紀初頭～前半 (Ⅲ期古段階) 頃と推定される。

第102号井戸跡 (第150図)

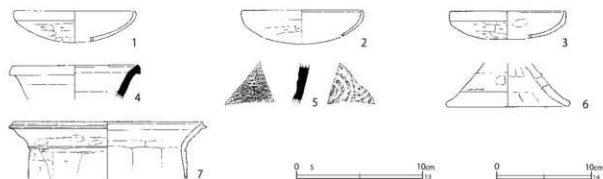
第102号井戸跡はS-17グリッドに位置する。第107号井戸跡よりも新しく、東肩部を第3号溝跡に壊されていた。

平面形態は不整形円で、漏斗状に掘り込まれている。規模は直径2.31×2.09m、深さ1.57mである。

覆土は13層に分層された。全体に砂礫の含有が多く、また土壌はグライ化していた。底径は約0.60mで、底面から0.15m埋め戻した上に底部を抜いた曲物桶が設置されていた。井戸枠 (水溜) として使用されたと考えられる。曲物の周囲は礫混じりの黄灰色土で埋め戻され (第11・12層)、曲物の上面に合わせて平坦面が造り出されていた。

出土遺物は土師器甕、須恵器・甕、陶器鉢 (渥美焼)、曲物片が検出されている (第152・153図)。

1は須恵器高台甕と思われる。口縁部は肥厚し外反する。末野産と推定される。2は渥美焼の鉢



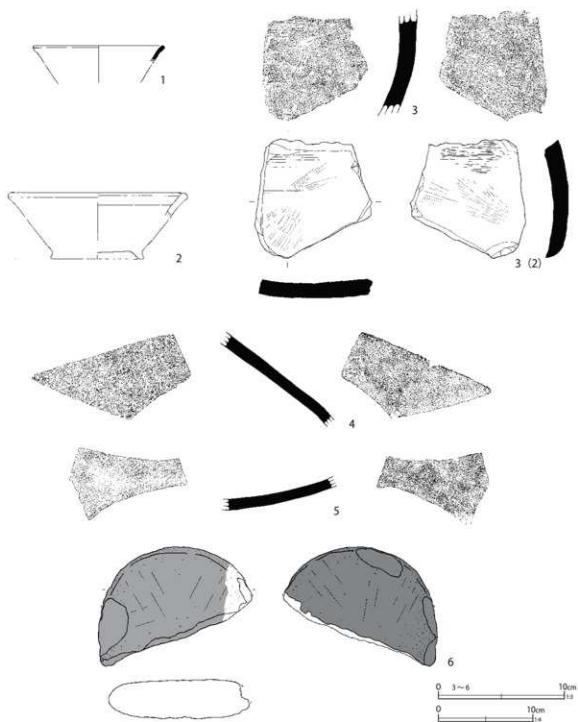
第151図 第101号井戸跡出土遺物

第39表 第101号井戸跡出土遺物観察表 (第151図)

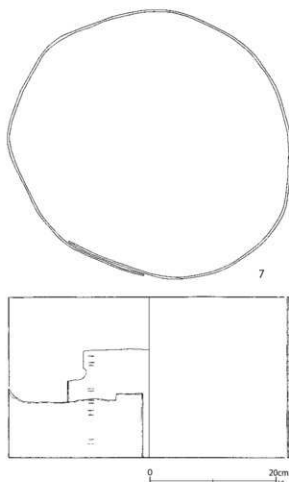
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.7)	[3.2]	—	CIK	15	普通	褐	北武蔵型坏 風化し調整不明瞭	
2	土師器	坏	(12.5)	[2.8]	—	ACI	10	普通	褐	北武蔵型坏	
3	土師器	坏	(12.0)	[2.9]	—	CIK	10	良好	橙褐	北武蔵型坏	
4	須恵器	甕	(13.2)	[3.6]	—	DI	10	良好	明灰	産地不明 (南比企産か) 黒味をおびた自然釉	
5	須恵器	甕	—	[3.1]	—	DK	—	良好	暗灰	産地不明 比較的緻密な胎土	
6	土師器	高坏か	—	[4.5]	13.2	CGHK	25	良好	明褐	器種不明確 脚部 透孔2ヶ所あるが4孔か3孔か微妙	
7	土師器	甕	(20.0)	[6.1]	—	CEGHIK	25	良好	淡黄褐		

口縁部片である。口縁部の厚みが部分的に異なり、口径は不安定である。片口となる可能性もある。12世紀後半～13世紀初頭頃のものと考えられ、遺構の新旧関係と矛盾する。重複する第3号溝跡に本来帰属するものが、井戸跡を先に調査したために混入した可能性が大きい。3～5は須恵

器甕である。3は表裏に無数の擦痕が残し、砥石に転用されたと推定される。6は磨石で、破面を除き被熱している。7は曲物桶である。側板のみで底板を欠く。直径43.6cm、高さ25.0cmである。側板を一部重ねて樺皮で綴じ合わせた痕跡が残っていた。樹種は不明だが、スギまたはヒノキと思



第152図 第102号井戸跡出土遺物（1）



第153図 第102号井戸跡出土遺物（2）

われる。底面から出土した。

時期は遺構の重複関係と出土遺物から9世紀後半（IV期中段階）頃と考えておきたい。

第105号井戸跡（第24図）

第105号井戸跡はS・T-16グリッドに位置す

る。円形の井戸（井筒）の周囲に楕円形の浅い掘り込みを伴う。

井戸跡の上部には第125号溝跡が重複し、井戸跡の方が新しい。井筒の平面形は円形で、規模は直径1.44m、深さ1.02mである。楕円形の掘り込みは長径3.90m、短径2.64mで中心部の井筒に向かって皿状に窪んでいた。井筒周囲の掘り方とも思われるが、土層変化はあまりなく、その関係は明確にできなかった。

覆土は暗褐色土を基調としていた。3層に分けられ、第2層には大型の礫が目立った。井筒埋没後の堆積土である。第3層は礫層を掘り抜いており、砂礫が多く混入していた。最下層には腐食した木材片が検出された。井戸枠の一部かもしれない。腐食が進み図化できなかった。

出土遺物は土師器杯・壺・甕があるが、量的には少ない（第154図）。井筒埋没後の堆積土から出土したものが多い。

第154図1～4は土師器杯である。1・3は模倣杯、2は有段口縁杯で7世紀代の所産である。4は北武蔵型杯である。浅身、扁平な丸底風の器形で8世紀前半頃のものと思われる。5は甕、6は壺でいずれも7世紀代であろう。

遺物の時期は7世紀から8世紀前半に跨るが、新しい北武蔵型杯で代表させると、8世紀前半（III期古段階）頃となる。

第40表 第102号井戸跡出土遺物観察表（第152・153図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	埴	(13.6)	[1.9]	—	DEI	5	普通	灰	末野産か。軟質。高台壇と思われる。	
2	陶器	鉢	(18.0)	[2.8]	—	EI	5	良好	灰	麗美焼。口径不安定。やや歪みあり。片口になるかもしれない。	55-3
3	須恵器	甕	—	[8.4]	—	DOEK	—	普通	灰	末野産。胴部片。	55-2
3 (2)	須恵器	壺（転用甕石）	—	—	—	DOEK	—	普通	灰	須恵器甕胴部片を甕石に転用。表裏両面に無数の条線（擦痕）あり。長さ9.3cm。幅9.0cm。	55-2
4	須恵器	甕	—	[7.4]	—	DIJ	—	良好	暗灰	南比企産。外面は灰白色の自然釉。内面はやや摩滅。	
5	須恵器	甕	—	[2.6]	—	EIJ	—	良好	暗灰	南比企産。内面自然降灰。摩滅して平滑。	
6	石製品	磨石	長さ[9.5]	幅[12.2]	厚さ[3.3]	重さ431.9				安山岩。断面楕円形。図下部の破断面を除き摩滅。破面以外被熱。	65-2
7	木製品	曲物	径(43.6)	高さ25.0	木取り	榎目				側板のみ。縦紐一部残存。側板付近に円孔2ヶ所。縦紐内面、縦方向にケビキ。	66-1

第106号井戸跡 (第150図)

第106号井戸跡は調査区南東端部のU-19グリッドに位置する。東半部は調査区外に延び詳細は不明とせざるを得ない。

平面形態は楕円形または円形になると思われる、漏斗状に掘り込まれている。残存規模は長さ1.37m、短径0.83m、深さ0.81mである。

覆土は11層に分層された。覆土中層(第4～6層)には礫や砂層混じりの土が堆積していた。

出土遺物は土師器・台付甕、須恵器・甕の破片が少量出土しているが、図化可能な遺物はなかった。

時期は不明確であるが9世紀代と推定される。

第301号井戸跡 (第151図)

第301号井戸跡は北サイドスタンドのD-12グリッドに位置する。第303・307号溝跡の直下にあり、井戸跡の方が古い。

平面形は円形で、直径2.82×2.64m、深さ1.59mである。掘り込みは3個重複していたことが確認され、2回掘り直した可能性がある。

2回目の掘り込みからは、曲物桶の側板を上下

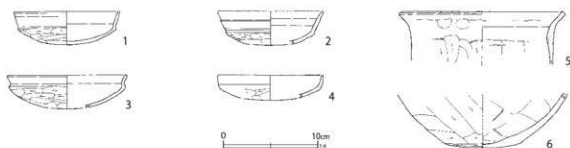
2段に重ねた井戸枠が検出された。東側しか残さず、西側は掘り直した際に削平されたと推定される。当初の掘り込みと最後の掘り込みは素掘りであった可能性がある。

上段の井戸枠は曲物を2枚重ねた可能性がある。下段の井戸枠には2枚の曲物(本来は1枚であろう)を綴じた痕跡が確認された。また、下段の曲物の周囲には長さ約20cmの礫が5個配置されており、曲物の周囲を押さえた根石と考えられる。

出土遺物は少ない。ロクロ土師器・武蔵型甕の胴部片と思われる器壁の薄い土器片が検出されたにとどまる。

第155図1はロクロ土師器である。体部に接合痕を残す。推定口径12.5cm、残存高3.1cmである。胎土に砂粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。25%残存する。焼成は普通で、暗赤褐色である。曲物は遺存状態が非常に悪く、調査時点で粉々に割れてしまい、取り上げられなかった。

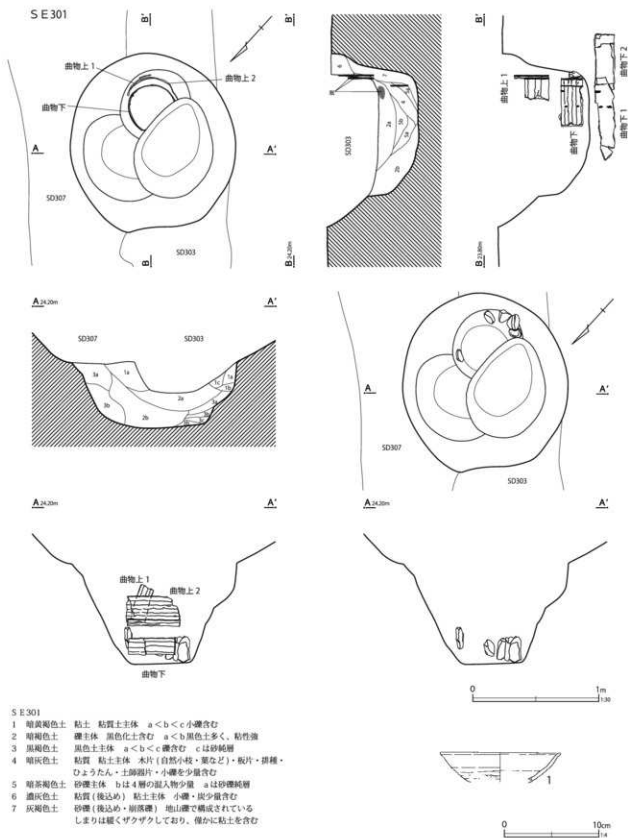
時期は不明確であるが10世紀前半代と考えておきたい。重複する第303・307号溝跡とあまり時期差は認められないようである。



第154図 第105号井戸跡出土遺物

第41表 第105号井戸跡出土遺物観察表 (第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	3.5	—	CGIK	60	良好	橙褐	SJ125Na.5 坏蓋模倣坏 風化し調整不明瞭	55-5
2	土師器	坏	(11.0)	[3.5]	—	CDEI	25	普通	橙褐	SJ125 A区 有段口縁坏 風化のため調整不明瞭	55-6
3	土師器	坏	(12.6)	[3.4]	—	CEGJK	20	良好	褐	坏蓋模倣坏	
4	土師器	坏	(11.0)	[2.4]	—	CIK	5	良好	橙褐	北武蔵型坏 風化のため調整不明瞭	
5	土師器	甕	(17.0)	[5.6]	—	HIK	10	良好	暗褐		
6	土師器	蓋	—	[5.8]	8.0	DEGI	35	良好	褐	SJ125Na.6 底部黒斑あり	56-1



第155図 第301号井戸跡・出土遺物

(5) 土壇

第102号土壇→第2号墓跡

第103号土壇→第3号墓跡

第111号土壇→第4号墓跡

第112号土壇 (第156図)

第112号土壇はS-19グリッドに位置する。第103号溝跡と重複し、本土壇の方が新しい。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.35m、短径1.15m、深さ0.16mである。主軸方位はN-69°-Eを指す。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯が検出された(第160図1~3)。第160図1は土師器北武蔵型杯である。扁平な丸底形で、腰部以下はヘラケズリ調整される。2・3は須恵器杯である。底部は回転糸切り後無調整である。末野産である。土師器杯は8世紀中頃、須恵器杯は9世紀中頃~後半であろう。

土壇の時期は、第103号溝跡と出土遺物から9世紀中頃~後半(IV期中段階)と推定される。

第114号土壇 (第156図)

第114号土壇はT-18・19グリッドに位置し、第113号土壇に隣接する。

平面形態は不整形で、規模は長さ0.94m、幅0.68m、深さ0.26mである。主軸方位はN-88°-Eを指す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第116号土壇 (第156図)

第116号土壇はT-19グリッドに位置する。

平面形態は方形で、規模は長さ0.92m、幅0.82m、深さ0.28mである。主軸方位はN-76°-Eを指す。

第141号住居跡床面を壊して掘り込まれていた。

出土遺物はなかった。

詳細な時期は不明であるが、第141号住居跡との関係から6世紀後半以降という限定はできる。

第117号土壇 (第156図)

第117号土壇はT-19グリッドに位置する。第141号住居跡に接する位置にある。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長さ1.81m、幅1.36m、深さ0.16mである。主軸方位はN-86°-Eを指す。

覆土には少量の焼土と炭化物層が層状に含まれていた。

出土遺物は土師器杯・皿・甕、鉄製鎌が検出された(第160図4~6)。4は北武蔵型杯で、扁平な丸底形態である。5は土師器皿である。内面が風化しており、暗文の有無は不明である。6は鉄鎌で、基部の左上を折り返して着柄部を作り出す。

時期は4の杯を基準に8世紀前半~中頃(III期古~新段階)と考えられる。

第121号土壇 (第156図)

第121号土壇はT-18グリッドに位置する。重複する第109号溝跡・第106号住居跡よりも新しい。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.89m、短径0.63m、深さ0.13mである。主軸方位はN-70°-Wを指す。

出土遺物はなかった。時期は第106号住居跡との関係から9世紀中頃以降となる。

第122号土壇 (第157図)

第122号土壇は調査区東南端部に近いT-19グリッドに位置する。南側に第123号土壇が軸を揃えて並んでいる。

平面形態は長方形で、規模は長さ2.55m、幅1.17m、深さ0.37mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。

覆土は3層に分層された。黄褐色ブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻されたと考えられた。

出土遺物はなかった。墓壇とも思われるが、確証は得られなかった。時期は不明である。

第123号土壇 (第157図)

第123号土壇はT-19グリッドに位置する。北側に第122号土壇が軸を揃えて位置する。第141号住居跡と重複し、本土壇の方が新しかった。

平面形態は長方形で、規模は長さ3.24m、幅

1.13m、深さ0.55mである。主軸方位はN-14°-Eを指す。出土遺物はなかった。時期不明であるが、第141号住居跡との関係から6世紀後半以降という限定はできる。

第127号土壇 (第157図)

第127号土壇はT・U-18グリッドに位置する。第110・133号住居跡と重複し、本土壇の方が新しい。

平面形態は方形で、規模は長さ0.79m、幅0.73m、深さ0.21mである。主軸方位はN-76°-Wを指す。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器蓋が検出されている。第160図7は土師器北武蔵型杯である。やや扁平な丸底形態で、体部上位以下がヘラケズリ調整されている。

時期は8世紀前半(Ⅲ期古段階)と考えられる。

第130号土壇 (第157図)

第130号土壇はU-18・19グリッドに位置する。第133号住居跡・第101号掘立柱建物跡P5よりも古い。

平面形態は楕円形と推定され、残存規模は長径0.74m、短径0.66m、深さ0.36mである。

出土遺物は土師器甕が検出されているが、図化可能な資料はない。

時期は他遺構との重複関係から、7世紀前半以降9世紀後半以前となる。

第131号土壇 (第157図)

第131号土壇はU-18グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径0.92m、短径0.57m、深さ0.27mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第132号土壇 (第157図)

第132号土壇はT・U-19グリッドに位置する。重複する第111号住居跡よりも新しかった。

平面形態は方形で、規模は長さ0.55m、幅0.54m、深さ0.33mである。主軸方位はN-1°

-Wを指す。

出土遺物はなかった。

時期は不明である。第111号住居跡との関係から6世紀後半以降という限定はできる。

第142号土壇 (第157図)

第142号土壇は南サイドスタンド西端のU-8・9グリッドに位置する。第103号掘立柱建物跡の西側に隣接する。

平面形態は長方形で、規模は長さ0.97m、幅0.38m、深さ0.06mである。主軸方位はN-18°-Eを指す。出土遺物はない。時期は不明である。

第143号土壇 (第157図)

第143号土壇はS-17グリッドに位置する。第147号住居跡と重複し、本土壇の方が新しい。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.94m、短径0.69m、深さ0.07mである。主軸方位はN-37°-Eを指す。

出土遺物はなかった。時期は不明であるが、第147号住居跡との関係から、7世紀末葉乃至8世紀初頭以降という限定はできる。

第145号土壇 (第158図)

第145号土壇は南サイドスタンドの西端部U-9グリッドに位置する。第2号畠跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は不整形で、規模は長径1.77m、短径1.40m、深さ1.22mである。主軸方位はN-66°-Wを指す。

掘り込み途中で段が付き、その下部は隅丸長方形で、垂直に掘り込まれていた。深さは通常の土壇よりも深く、井戸に近い。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第147号土壇 (第158図)

第147号土壇はT-18グリッドに位置する。第120・121号住居跡、第150号住居跡と重複し、本土壇が最も新しい。

平面形態は円形と推定され、規模は長径1.40

m、短径0.84m、深さ0.63mである。

出土遺物はなかった。時期は不明であるが、重複関係から7世紀末～8世紀初頭以降となる。

第154号土壇 (第158図)

第154号土壇はS-17・18グリッドに位置する。第108号溝跡よりも新しく、第104号掘立柱建物跡と接していた。掘立柱建物跡との新旧関係は確定できなかった。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.86m、短径0.70m、深さ0.54mである。

断面には柱痕状の土層が確認された(第2・3層)が組み合う柱穴が確認できず、掘立柱建物跡か否か明かではない。

出土遺物は土師器甕、須恵器環が検出されている。第160図8は須恵器坏底部である。底部は回転系切り後無調整である。時期は9世紀中頃～後半と考えられる。

第155号土壇 (第98図)

第155号土壇はT-18グリッドに位置する。第109号住居跡と重複し、本土壇の方が古い。

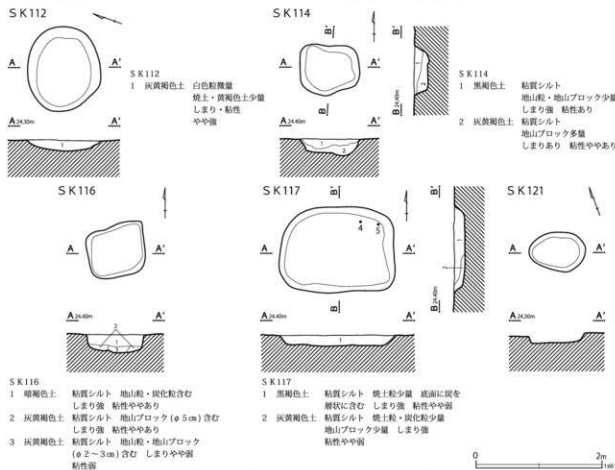
平面形態は楕円形と推定され、規模は長径0.55m、短径0.55m、深さ0.37mである。

出土遺物は土師器壺があるが、図化可能な遺物はない。時期は第109号住居跡との関係から9世紀後半以前という限定はできる。8世紀頃と推定される。

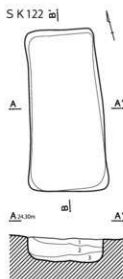
第156号土壇 (第158図)

第156号土壇はT-18グリッドに位置する。T-18グリッドP17に壊されていた。また、第106号住居跡とも重複する可能性があるが、住居跡が削平されており、新旧は不明である。

平面形態は楕円形と推定され、規模は長径0.50m、短径0.31m、深さ0.23mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

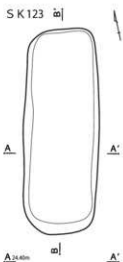


第156図 第112・114・116・117・121号土壇



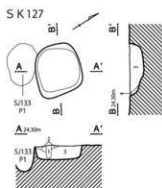
SK 122

- 1 にぶい・黄褐色土 白色粒・炭化物微量 黄褐色ブロック多量
しまり・粘性やや強 人為堆積
- 2 黒褐色土 白色粒微量 黄褐色ブロック少量
しまり・粘性やや強 人為堆積
- 3 灰黄褐色土 白色粒微量 黄褐色ブロックやや多く含む
しまり・粘性やや強 人為堆積



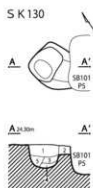
SK 123

- 1 灰黄褐色土 白色粒・炭化物微量 黄褐色ブロック多量
しまり・粘性やや強 人為堆積
- 2 にぶい・黄褐色土 白色粒微量 黄褐色ブロック少量
しまり・粘性やや強 人為堆積
- 3 黒褐色土 白色粒微量 黄褐色ブロック少量
しまり・粘性やや強 人為堆積
- 4 灰黄褐色土 白色粒微量 黄褐色ブロックやや多く含む
しまり・粘性やや強 人為堆積



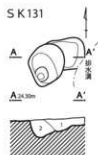
SK 127

- 1 褐灰色土 灰主 体・焼土粒 (φ 5 ~ 10 mm) 多量
炭化物粒 (φ 5 mm) 中量
ローム粒 (φ 5 ~ 10 mm) 中量
- 2 灰黄褐色土 焼土粒 (φ 5 ~ 10 mm) 多量
- 3 褐灰色土 焼土粒 (φ 5 ~ 10 mm) 多量
- 4 にぶい・黄褐色土 焼土粒 (φ 10 mm) 主体



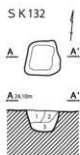
SK 130

- 1 褐灰色土 焼土粒 (φ 5 mm) 少量
炭化物粒 (φ 5 mm) 微量
しまり・粘性あり
- 2 黒褐色土 焼土粒 (φ 5 ~ 10 mm) 多量
しまり・粘性あり
- 3 黒褐色土 焼土粒 (φ 5 ~ 10 mm) 多量
しまり・粘性あり
- 4 褐灰色土 砂と粘質土の混土層
しまりあり 粘性やや弱
- 5 黒色土 炭化物粒 (φ 3 mm) 微量
ローム粒 (φ 5 mm) 中量
しまり・粘性あり



SK 131

- 1 灰黄褐色土 焼土粒 (φ 3 mm) 少量
しまり・粘性あり
- 2 灰黄褐色土 焼土粒 (φ 3 ~ 15 mm) 多量
しまり・粘性あり



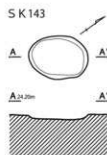
SK 132

- 1 褐灰色土 小石・炭化物 しまり・粘性あり
- 2 褐灰色土 焼土粒 (φ 10 mm) 多量
しまり・粘性あり
- 3 灰黄褐色土 焼土粒 (φ 10 ~ 20 mm) 主体
しまり・粘性あり 埋め戻し



SK 142

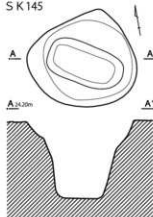
- 1 褐灰黄褐色土 焼土粒多量
炭化物多量
粘性強



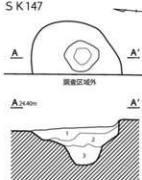
SK 143

0 2m 1:40

SK 145



SK 147



SK 147

- 1 暗褐色土 地山ブロック (φ10～20 mm) 多量
しまり・粘性あり
- 2 黒色土 地山粒 (φ3 mm)・埴土粒 (φ3 mm)
微量 しまり・粘性あり
- 3 凝礫土

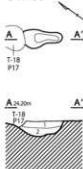
SK 154



SK 154

- 1 灰黄褐色土 シルト 鉄分・炭化物ブロック
少量 しまり・粘性あり
- 2 灰黄褐色土 シルト 鉄分・炭化物ブロック
少量 地山ブロックやや多量
しまり・粘性あり
- 3 地山ブロック 鉄分少量 集積層
シルト
- 4 灰黄褐色土 鉄分・炭化物ブロック・地山
ブロック少量
しまり・粘性あり
- 5 暗灰黄色土 シルト 鉄分多量 灰黄褐色
ブロック少量
しまり・粘性あり

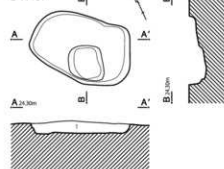
SK 156



SK 156

- 1 褐灰色土 地山粒 (φ5～15 mm) 中量
しまり・粘性あり
- 2 褐灰色土 地山粒 (φ5 mm) 中量
しまり・粘性あり

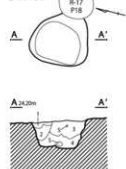
SK 157



SK 157

- 1 褐灰色土 粘質シルト 地山ブロック (φ0.5～10 cm) を含む
炭化物 (φ2～4 mm) 微量 しまり・粘性あり

SK 160



SK 160

- 1 灰黄褐色土 シルト質 マンガン・鉄分多量
しまりあり 粘性あまりなし
- 2 黄褐色土 シルト質 鉄分多量
しまり・粘性あり
- 3 暗灰黄色土 粘土質 鉄分多量 しまり・粘性あり
- 4 暗灰黄色土 粘土質 地山ブロック多量 鉄分少量
しまり・粘性あり

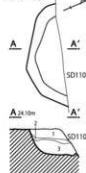
SK 165



SK 165

- 1 灰黄褐色土 シルト質 鉄分・地山ブロック少量
埴土ブロック微量
粘性ややあり しまりあり

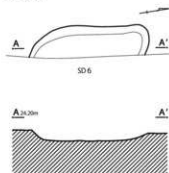
SK 166



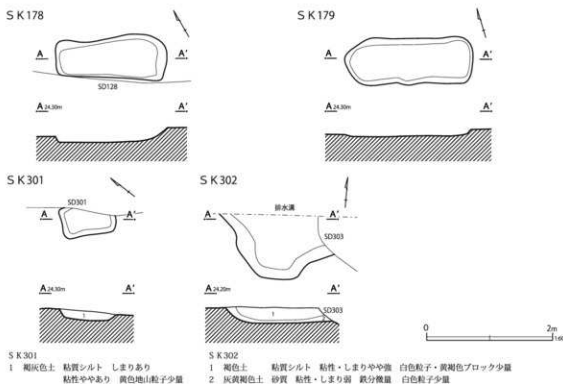
SK 166

- 1 灰黄褐色土 粘質シルト
におい黄褐色粘質層
- 2 におい黄褐色土 シルト しまりややあり
粘性やや弱
- 3 褐灰色土 粘質シルト 地山粒 (φ3～5 mm)
少量 しまり・粘性あり

SK 174



第158図 第145・147・154・156・157・160・165・166・174号土壌



第159図 第178・179・301・302号土坑

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第157号土坑（第158図）

第157号土坑はT-15グリッドに位置し、第127号住居跡の西側に隣接する。

平面形態は不整長方形で、規模は長径1.57m、短径1.04m、深さ0.16mである。主軸方位はN-52°-Wを指す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第160号土坑（第158図）

第160号土坑はR-17グリッドに位置する。R-17グリッドP18に東側を削平されていた。

平面形態は不整形で、規模は長径0.91m、短径0.76m、深さ0.44mである。遺物は土師器甕が検出された。時期は不明であるが、8世紀頃と推定される。

第165号土坑（第158図）

第165号土坑はR-17グリッドに位置する。第122号住居跡に一部削平されていたが、ほぼ全体は判明した。平面形態は楕円形で、規模は長径0.78m、短径0.61m、深さ0.20mである。

出土遺物は土師器北武蔵型坏（第160図9）・甕、須恵器甕が検出されている。

時期は出土遺物から8世紀前半と考えられる。

第166号土坑（第158図）

第166号土坑はT-11グリッドに位置する。第101号道路跡北側溝SD110に削平されていた。

平面形態は楕円形と推定され、規模は長径1.61m、短径0.43m、深さ0.40mである。

出土遺物はない。

時期は第101号道路跡北側溝との関係から、9世紀後半以前という限定は可能である。

第174号土坑（第158図）

第174号土坑はR-17グリッドに位置し、第6号溝跡に東半分を削平されていた。平面形態は楕円形と推定され、規模は長径1.83m、短径0.48m、深さ0.15mである。出土遺物はなかった。時期は不明である。

第178号土坑（第159図）

第178号土坑はT-11グリッドに位置する。重複する第128号溝跡に南辺側を一部削平されていた。

平面形態は長方形で、規模は長さ1.76m、幅0.71m、深さ0.18mである。主軸方位はN-61°-Wを指す。出土遺物はなく時期は不明であるが、第128号溝跡との関係から12世紀前半以前に収まる。9世紀後半以降11世紀代と考えておきたい。

第179号土壌 (第159図)

第179号土壌はU-8グリッドに位置する。第2号畠跡と重複するが、いずれも深度が浅く新旧関係は明確に把握できなかった。

平面形態は長方形で、規模は長さ2.03m、幅0.71m、深さ0.07mである。主軸方位はN-64°-Wを指す。出土遺物はなかった。時期は不

明である。

第301号土壌 (第159図)

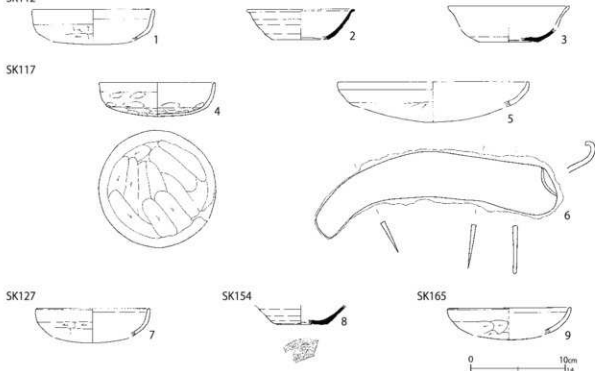
第301号土壌は北サイドスタンド調査区東端のC-13・14グリッドに位置し、第301号溝跡に削平されていた。

平面形態は長方形で、規模は長さ0.86m、幅0.40m、深さ0.20mである。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、第301号溝跡との関係から8世紀またはそれ以前である。

第302号土壌 (第159図)

第302号土壌は北サイドスタンド調査区北壁部のC-11グリッドに位置する。第303・307号溝



第160図 古代の土壌出土遺物

第42表 古代の土壌出土遺物観察表 (第160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	[3.3]	—	CI	5	良好	褐	SK112 北武蔵型坏	56-3
2	須恵器	坏	(11.2)	3.2	(6.0)	BE	10	良好	暗青灰	SK112 末野産 底部回転糸切り	
3	須恵器	坏	—	[1.5]	(6.0)	DGIK	15	不良	灰	SK112 末野産 底部回転糸切り	
4	土師器	坏	12.1	3.6	—	GI	95	良好	橙褐	SK117 No.1 北武蔵型坏 全体に風化	
5	土師器	皿	(20.0)	2.7	—	CGI	5	良好	茶褐	SK117 内面風化	
6	鉄製品	鎌	長さ19.1	幅3.8	厚さ0.3	刃部長13.3	重さ168.8			SK117 No.1・2 柄部上角部を折り返して着柄部作出 磨化著しい	
7	土師器	坏	(11.8)	[3.0]	—	CDI	10	普通	褐	SK127 北武蔵型坏	
8	須恵器	坏	—	[2.0]	(5.8)	DEI	20	良好	青灰	SK154 末野産か 底部回転糸切り	
9	土師器	坏	(13.0)	[2.8]	—	DEGHIK	10	良好	明褐	SK165 北武蔵型坏	

跡と重複し、本土墳の方が古い。平面形は不整形である。規模は長さ1.78m、幅1.04m、深さ0.25mである。

出土遺物はないが、第303・307号溝跡との関係から9世紀後半またはそれ以前と考えられる。

(6) 墓跡

墓跡は今回の調査区内から4基検出された。円形区画墓が1基、土壇墓が2基、土器棺墓(火葬墓)1基となる。円形区画墓としたものは、木棺墓の周囲を円形周溝状に溝が区画するタイプの墓で、類例に乏しい。木棺墓の脇に副葬品として土器を埋納していた。

第1号墓跡(円形区画墓)(第161・162図)

第1号墓跡(円形区画墓)は、中心部に主体部(木棺墓)を置き、その周囲に楕円形の周溝を巡らすものである。S・T-12・13グリッドに位置し、周溝の北東側約1/4は調査区外に延びている。

周溝外側の長径は5.76m、短径は4.80mである。周溝の最大幅は0.65m、最小幅は0.38m、深さは0.10～0.19mである。周溝西側では、溝中に中堤状の盛り上がりが確認された。板等を差し入れた何らかの遮蔽施設が存在したのかもしれない。

調査区境の断面観察では、周溝内側には封土(盛土)はなく、当時の生活面から主体部を掘り込んだことがわかる。

主体部は楕円形もしくは隅丸長方形の掘り方を持ち、北西側に突出部が付属する。規模は長軸長2.30m、短軸長1.26m、突出部の幅1.26m、深さは0.30mである。

底面は概ね平坦であった。覆土は地山土(砂質灰色土)混じりの暗灰褐色土、黒褐色土、暗黒褐色土をベースとした人為的な堆積土である(第1～3層)。

木棺自体は残存せず、木片数点と鉄釘が検出されたにとどまる。南北両短辺にある木片は棺に伴うこと、副葬品の灰釉長頸瓶は原位置からやや木棺側に傾いた状態であったと仮定すると、概ね推

定線で示した長さ195cm、幅69cm前後の大きさの木棺が据えられたと考えられよう。木棺墓の推定主軸方位はN-7°-Eを指す。

木棺内からは人骨は発見されなかったが、北壁に寄った場所から人の歯が十数点出土した。性別・年齢は明らかではないが、北頭位に埋葬されたことがわかる。

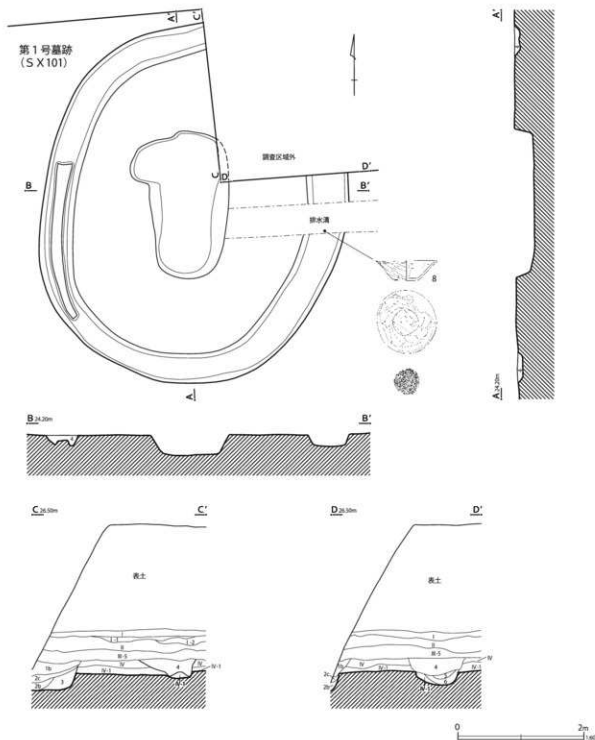
木棺の西壁に接して灰釉長頸瓶1点・灰釉陶器高台碗3点・灰釉陶器高台皿1点、土師器杯2点・土師器高台埴1点、ロクロ土師器杯1点が約54cm四方の狭い範囲にまとまって出土した。木箱に収まっていたか否かは明確にできなかったが、可能性は高いと思われる。

副葬品は、中心に灰釉陶器高台碗(第162図3)を置き、その東側、遺体近くに灰釉陶器長頸瓶(5)を据えていた。時計回りに土師器高台埴(10)、灰釉陶器高台碗(2)、ロクロ土師器杯(9)、灰釉陶器高台碗(1)、土師器杯(7)、灰釉陶器高台皿(4)、土師器杯(6)の順に灰釉陶器高台碗を取り囲むように円形に配置されていた。灰釉陶器と土師器は1つおきに置かれていた。そのほか、周溝から土師器杯が1点出土している(第164図8)。

出土遺物は土師器杯3点・土師器高台埴1点、ロクロ土師器杯1点、灰釉陶器高台碗3点・高台皿1点・長頸瓶1点、鉄釘4点、棺の下に敷いた枕木の一部と思われる木と歯が検出された(第163・164図)。

1は浅身で口縁部が大きく開く灰釉陶器高台碗である。器壁は比較的薄い。体部は腰部以下が回転ヘラケズリ調整される。底部調整は不明瞭であるが、回転ヘラケズリ後ナデか。内面は数条の圈線が巡っている。高台は細く高い。断面は三角形に近い。灰釉は内外面に刷毛塗りされる。内面見込み部には墨書がある。「鷹」と判読され、「雁」の異体字である。

2は灰釉陶器高台碗である。やや深身で器壁は



S X 101

主体部

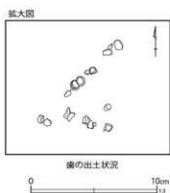
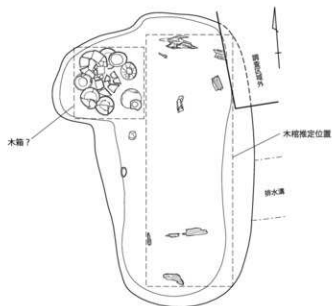
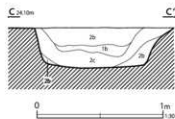
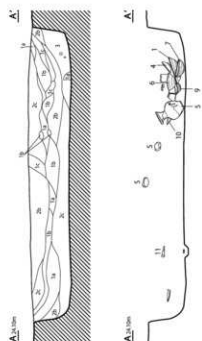
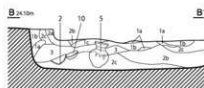
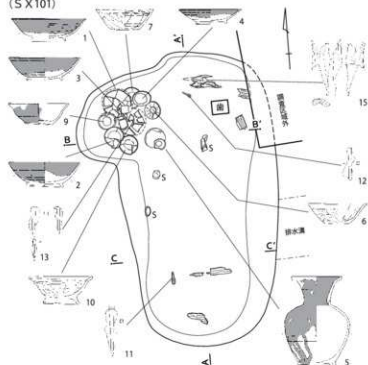
- 1 暗灰褐色土 地山土(砂質灰褐色土)主体 黒色土を含む aは地山土の純層 a<b<c 地山土は減少し、暗色を呈す
- 2 黒褐色土 黒色土主体 地山土を含む a>b>c 地山土粒子は小さく、暗色を呈す
- 3 暗黒褐色土 黒色土主体 地山粒子は殆ど含まない 極めて粘性あり 粒子も細かい

排水溝

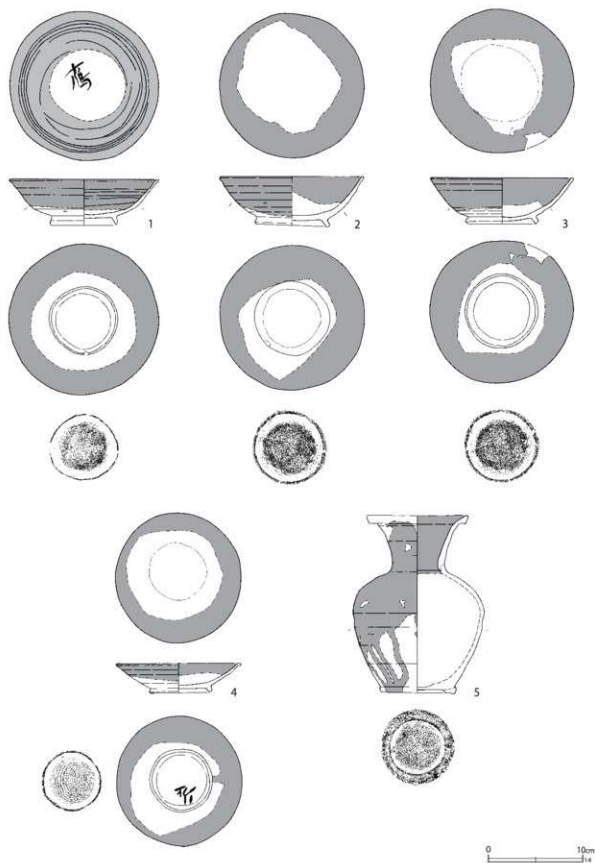
- 4 褐灰色土 粘質シルト 黄褐色粒子(φ5-10mm)多量 白色粒子(φ5mm)少量 しまり・粘性あり
- 5 褐灰色土 粘質シルト 黄褐色粒子(φ5-10mm)多量 しまり・粘性あり
- 6 褐灰色土 粘質シルト 黄褐色粒子(φ5mm)含む しまり・粘性あり

第161図 第1号墓跡(円形区画墓)・遺物出土状況(1)

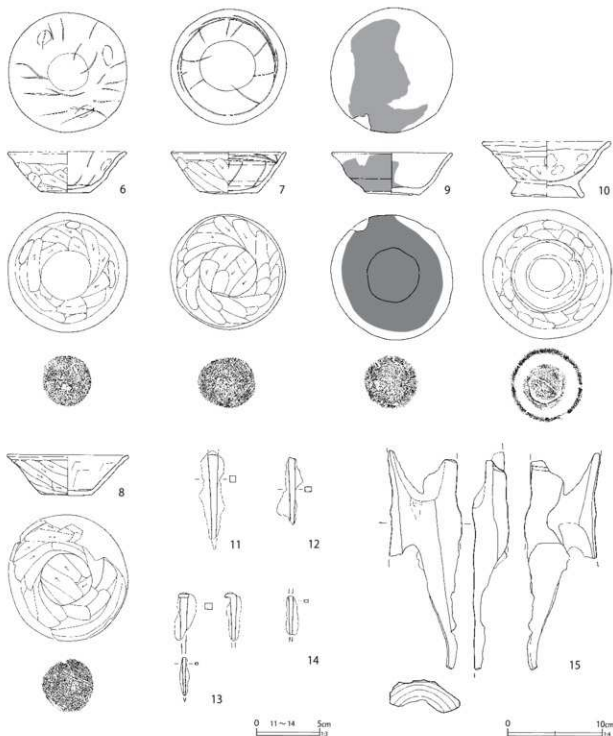
第1号墓跡
(S X101)



第162図 第1号墓跡 (円形区画墓)・遺物出土状況 (2)



第163图 第1号墓跡（円形区画墓）出土遺物（1）



第164图 第1号墓跡(凹形区画墓)出土遺物(2)

厚い。口縁部の外反はない。高台は幅広で外に踏ん張るが、三日月高台風ではない。外面腰部以下は回転ヘラケズリ調整される。底部外面は回転ヘラケズリ後ロクロナデされるようである。灰軸は漬け掛けである。

ある。底部は丸みをもって沈み込んでいる。体部下位から底部は回転ヘラケズリ調整される。灰軸は漬け掛けで、内面見込み部には重ね焼きによる変色帯が残る。

部は回転糸切り後無調整である。灰軸は漬け掛けである。内面見込み部には重ね焼き痕が残る。高台は三角形で内面が接地面となる。底部外面には墨書があるが、良く判読できない。「花口」あるいは「死口」とも思えるが、不明瞭である。

5は灰軸長頸瓶である。口縁部を僅かに欠く。頸部がやや短く、太い。口縁部の開きはやや小さい。口縁端部はやや鋭さに欠ける。胴部下半と底部外面は回転ヘラケズリ調整される。高台部は低く、やや歪んで取り付けられている。口縁部内外面と胴部にかけて淡緑色の灰軸が掛かっている。

6～8は非クロコ土師器環である。6は深身の坏で、体部内外面に指頭による押捺痕を残し、体部外面はヘラケズリ調整される。内面はヘラ状工具によるナデ。工具の押し付け痕を顕著に残す。底部は無調整か、軽いナデ。7は6とよく似るが、体部の指頭痕が見られない。また、底部はヘラケズリ調整されている。8は主体部を取り囲む周溝から出土した坏で、7と同様体部と底部はヘラケ

ズリ調整が施されている。

9はクロコ土師器の坏である。口縁部は楕円形に歪み、口径は12.3～13.0cm、平均12.6cmで図化した。底部は回転糸切り後無調整である。弱い還元焰焼成を受けているようにも見えるが、外面と内面には黒斑あるいは重ね焼きに由来する黒色の変色部位がある。

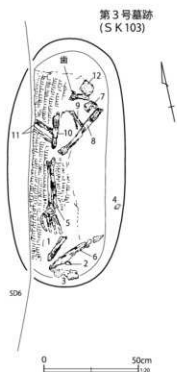
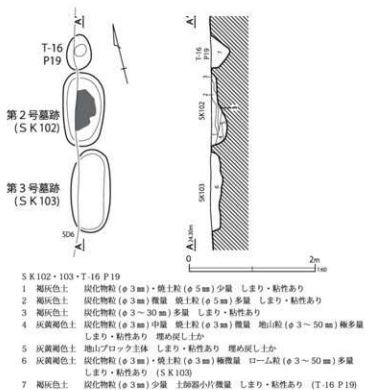
10は非クロコ土師器の高台埴である。口縁部は強いヨコナデ、体部は上位が指頭痕、下位がヘラケズリ調整される。底部外面は無調整かナデである。

11～14は鉄釘である。棺の接合に使用されたと考えられる。15は木片である。棺に使用された板材にしては丸みがあるので自然木と思われる。棺の下に敷かれた根太（枕木）と推定される。

灰軸陶器は東濃産、非猿投産・非東濃産、双方の可能性がある。K-90号窯式（光ヶ丘1号窯式）から、主体はO-53号窯式（大原2号窯式）併行と考えられる。年代的には9世紀末～10世紀

第43表 第1号墓跡（円形区画墓）出土遺物観察表（第163・164図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰軸陶器	高台碗	15.6	4.8	7.0	I	100	良好	灰白	№4 見込部墨書「麿」 灰軸刷毛塗り 高台高い	57-5
2	灰軸陶器	高台碗	15.1	5.3	7.1	G	100	良好	灰白	№7 腰部以下回転ヘラケズリ 灰軸漬け掛け	59-1
3	灰軸陶器	高台碗	15.0	4.9	7.0	I	95	良好	灰白	№4・5 灰軸漬け掛け 腰部下は回転ヘラケズリ 見込部に重ね焼き痕 やや歪む	59-2
4	灰軸陶器	高台皿	12.8	3.1	6.1	IK	100	良好	灰白	№3 灰軸漬け掛け 見込部に重ね焼き痕 底部回転糸切り 三角高台で内側が接地面 底部外面不明墨書	58-1
5	灰軸陶器	長頸瓶	10.5	18.8	7.6	K	95	良好	灰白	№1 胴部下半及び底部回転ヘラケズリ 淡緑色の灰軸厚く塗布される	58-2
6	土師器	坏	12.2	4.3	5.2	CGHI	100	良好	灰黄白	№2 体部外面指頭痕とヘラケズリ 底面は無調整かナデ	60-1
7	土師器	坏	11.9	4.4	6.1	ACGHI	100	良好	黄灰白	№9 内面疎らな放射暗文 体部外面と底部ヘラケズリ	60-2
8	土師器	坏	12.6	6.3	5.5	CI	80	良好	暗褐	№10 体部外面と底部ヘラケズリ	58-3
9	クロコ土師器	坏	12.6	4.5	5.6	CIK	95	不良	灰白	№6 底部回転糸切り 内外面黒斑あり 歪みあり口径φ12.3～13.0cm 平均で図化した 弱い還元焰焼成か	61-1
10	土師器	高台埴	13.4	5.9	7.1	CHI	98	良好	黄灰白	№8 非クロコ高台埴	58-4
11	鉄製品	釘	長さ[6.5]	幅0.5	厚さ0.5	重さ13.6					65-9
12	鉄製品	釘	長さ[5.3]	幅0.5	厚さ0.4	重さ5.6					65-9
13	鉄製品	釘	長さ[6.6]	幅0.6	厚さ0.5	重さ5.9					65-9
14	鉄製品	釘	長さ[3.0]	幅0.3	厚さ0.2	重さ2.7					65-9
15	木製品	棺台か	長さ[22.9]	幅7.4	厚さ3.3	木取り	板目			接合しないが同一個体と思われる B区出土 棺台1（北） 自然木か、棺の一部か	65-9 66-8



第165図 第2～4号墓跡・出土遺物

前半中心となる。

第2号墓跡 (SK102) (第165図)

第2号墓跡は、調査区南端のT-16グリッドに位置する。南側には第3号墓跡が隣接し、西壁側は第6号溝跡によって削平されていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.15m、短径0.45m、深さ0.24mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。

覆土は5層に分けられ、第2層中に多量の焼土粒子、第3層に多量の炭化物粒子が含まれていた。第4・5層は埋め戻された土であり、第3層下面が底面に相当する。隣接する第3号墓跡とほぼ同一形態であるため、墓跡として報告した。ただし、

人骨は検出されていない。

出土遺物は土師器杯・甕小片が検出されている。時期は不明確であるが、第6号溝跡から浅間B軽石 (1108年降灰) が検出されており、それ以前という限定は可能である。

第3号墓跡 (SK103) (第165図)

第3号墓跡は調査区南端近くのT-16グリッドに位置する。北側に第2号墓跡が隣接する。西壁部は第6号溝跡に削平されていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.30m、短径0.50m、深さ0.16mである。主軸方位はN-13°-Eを指す。

底面は概ね平坦で、中心部がやや凹んでいた。

覆土はローム粒子を多量に含む灰黄褐色土の単層であった。底面には炭化した蓆状の繊維が敷かれた状態で検出された。人骨(1~12)は蓆状繊維の上に残されていた。歯が北端部から出土したため、北頭位、顔を西に向けて屈葬で埋葬されたと考えられる。

出土遺物は土師器杯・甕の小片が検出されているが、直接伴うものはない。時期は重複する第6号溝跡との関係から1108年以前という限定はできる。また、蓆状繊維のC14年代測定を実施したところ、996cal AD-1027cal ADという暦年較正年代(1σ)が得られた。第6号溝跡との新旧関係とも整合的で、10世紀末~11世紀前半と考えておきたい。

第4号墓跡(SK111)(第165図)

第4号墓跡は、S-17グリッドに単独で位置する。掘り方の平面形態は円形で、規模は長径0.49m、短径0.49m、深さ0.12mである。

掘り方の上にローム粒子を多量に含む灰黄褐色土を敷き、その上に土師器武蔵型甕が逆位に伏せてあった。中には多量の焼土粒子と骨片を含む黒色土が堆積していた。胴部以下は削平されていたが、土師器甕を蔵骨器に利用した土器棺墓と考えられる。焼土混じりの土が収められていたことから、火葬骨を収めたと考えられる。

出土遺物は蔵骨器として使用された土師器甕と土師器杯の小片が検出されている(第165図)。

1は土師器武蔵型甕の口縁部である。口径18.7cm、残存高は5.6cmである。胎土に雲母・片岩・砂粒子・赤色粒子・白色粒子を含む。70%残存する。焼成は普通で、明褐色である。全体に風化している。いわゆる「コ」の字状口縁甕であるが、口縁部の屈曲はまだ弱いので、8世紀後半~9世紀初頭(Ⅲ期新段階)頃に位置付けられる。武蔵型甕を蔵骨器とした火葬墓(西田2015)の一例となろう。

(7) 畝跡

第3号畝跡(第166・167図)

第3号畝跡は北サイドスタンドのC-11~13

グリッドに位置する。第302号溝跡、第303・307号溝跡に壊されていた。7条の畝跡から構成される。1条を除き南西から北東方向に延びていた。第5号畝跡のみ北西から南東方向に延び、第4号畝跡と重複していた。また、第1号畝跡と第2号畝跡も重複していたが新旧は不明である。第303・307号溝跡の北東側では確認できたが、その南西側では検出できなかった。

畝跡の規模は、最も長い第7号畝跡が長さ7.47m、最も短い第5号畝跡が3.30m、幅は0.22~0.40m、深さは0.06~0.10mである。畝間間隔は約1~3mと長い傾向が認められる。

出土遺物はない。

時期は第303・307号溝跡が9世紀後半の掘削と考えられることから、それ以前という限定は可能である。8~9世紀の所産と推定しておきたい。

第4号畝跡(第166・167図)

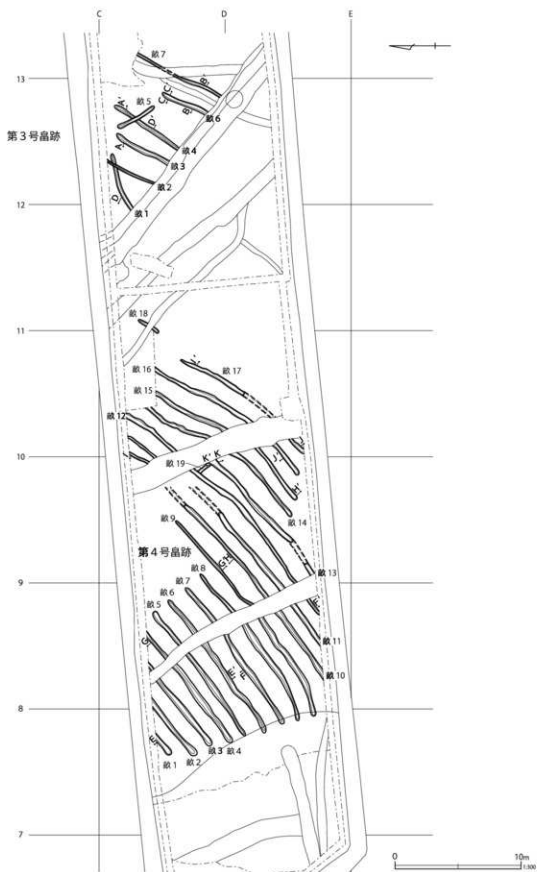
第4号畝跡は北サイドスタンドの西半部に位置する。19条の畝跡から構成され、概ね南西から北東方向に延びている。第19号畝跡のみ北西から南東方向に延びていたが、第12号畝跡と第13号畝跡を繋ぐ1.03mの長さしか検出されなかった。第305・309・310号溝跡と重複し、畝跡の方が古いと思われるが、覆土が浅く確定は難しい。

規模は最も長い第12号畝跡が長さ22.16mである。幅は0.28~0.60m、深さは0.01~0.13mと非常に浅い。畝間間隔は1.20m前後のものが多く、畝間間隔としては全体的に広い。

出土遺物はない。時期は不明である。第309・310号溝跡からは古代末期以前という限定が可能である。第305号溝跡は須恵器脚付盤の時期からみると8世紀前半以前となるが、そこまで時期的に遡上するか不明確である。大きく奈良・平安時代の畝跡と認識しておくに留めたい。

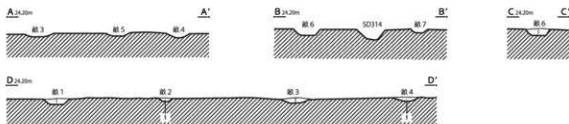
(8) ビット(第168~171図)

第26・27次調査区から検出されたビットは303基ある。R-17、S-16・19、T-16グリッド

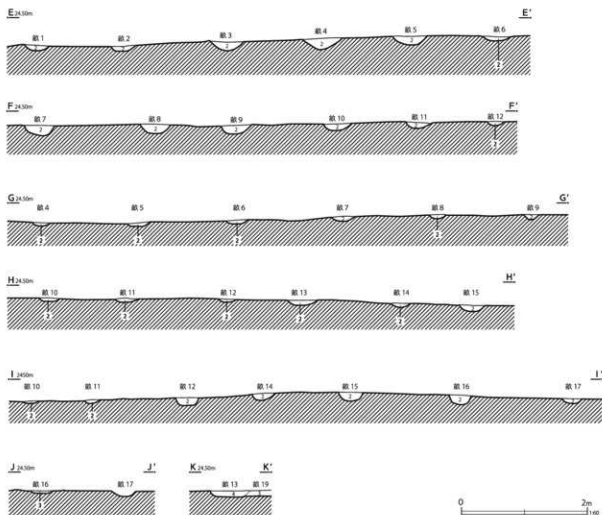


第166図 第3・4号畠跡全体図

第3号畝跡



第4号畝跡



第3・4号畝跡

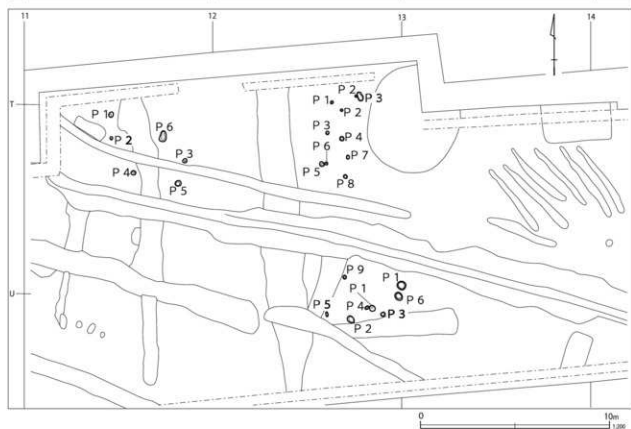
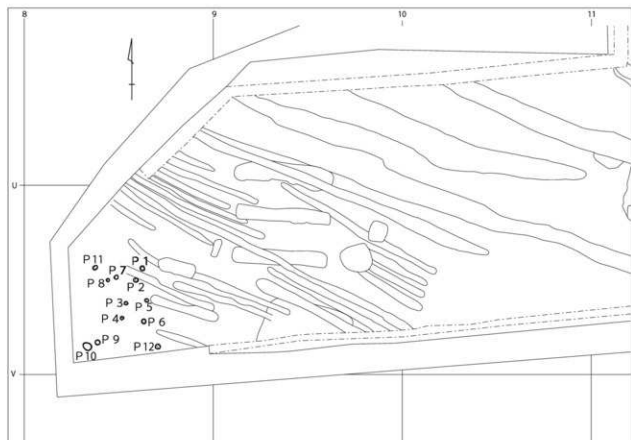
- 1 におい・黄褐色土 シルト質 粘性・しまりやや弱 鉄分微量 白色粒子少量 (第3号畝跡)
- 2 におい・黄褐色土 粘性・しまりやや弱 鉄分痕状に多く含む 白色粒子微量 黒色粒子少量 (第4号畝跡)
- 3 におい・黄褐色土 シルト質 粘性・しまりやや弱 鉄分・白色粒子少量 (第4号畝跡)
- 4 におい・黄褐色土 シルト質 粘性・しまりやや弱 鉄分・白色・黒色粒子少量 (第4号畝跡)

第167図 第3・4号畝跡

に多く分布していた。掘立柱建物跡柱穴かと思われるビットも含まれているが、組み合わせが不明であるために、単独ビットとしたものもある。個

別の平面図と断面図は紙数の都合で割愛した。規模等の詳細は第45表に示した。

出土遺物は第172図に示した。



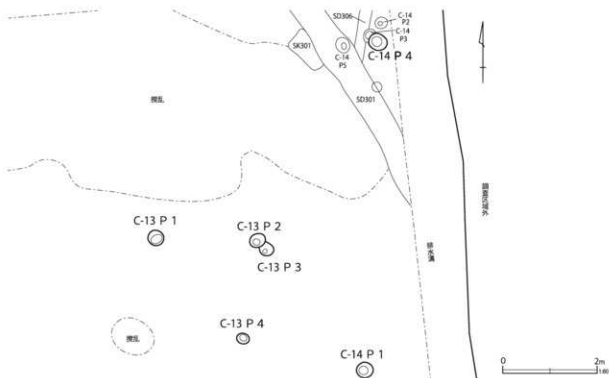
第168図 ピット分布図(1)



第169図 ビット分布図 (2)



第170図 ビット分布図 (3)



第171図 ビット分布図 (4)

T-14 P11



1

T-16 P2



2

T-16 P3



3

T-16 P39



4

T-17 P6



5

T-18 P11



6

0 4 10cm

0 10cm

第172図 ビット出土遺物

第144表 ビット出土遺物観察表 (第172図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	[3.3]	—	CEIK	30	普通	淡褐	T-14P11 有段口縁坏 内面に黒色有機物付着	59-3
2	土師器	坏	(11.0)	3.4	—	CEIK	20	普通	黄灰	S-16P 2 有段口縁坏	
3	土師器	坏	(12.0)	[3.4]	—	CEHK	15	不良	褐	S-16P 3 有段口縁坏 風化	
4	須恵器	甕	—	[2.2]	—	DEI	5	普通	暗灰	T-16P39 産地不明 内面自然降灰	
5	土師器	坏	(13.0)	[3.0]	—	CHI	10	普通	橙褐	T-17P 6 北武蔵型坏 口縁部歪みあり (瘤状突起)	
6	須恵器	皿	—	[1.2]	(6.0)	IJ	20	良好	紫灰	T-18P11 南比金産 底部回転糸切り	

第145表 ビット計測表 (第168～171図)

グリッド	番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
C-13	1		35	34	24
C-13	2		35	30	16
C-13	3		28	(25)	9
C-13	4		27	23	34

グリッド	番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
C-14	1		35	34	9
C-14	2		27	24	7
C-14	3		31	(16)	5
C-14	4		40	34	6
C-14	5		34	30	5

グリッド	番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
R-16	1		28	26	26
R-16	2		32	28	25
R-16	3		23	19	5
R-16	4		38	26	20
R-16	5		33	27	24
R-16	6		33	25	23
R-16	7		31	27	19
R-16	8	R-16 P15	31	20	10
R-16	9		29	23	16
R-16	10		20	16	6
R-16	11		29	19	8
R-16	12		23	15	7
R-16	13		17	15	10
R-16	14		22	20	10
R-16	15		18	17	16
R-17	1		25	22	15
R-17	2		33	28	28
R-17	3		26	24	20
R-17	4		27	26	20
R-17	5		29	29	16
R-17	6		19	18	23
R-17	7		29	28	20
R-17	8		33	32	18
R-17	9		48	38	30
R-17	10		34	32	15
R-17	11		36	28	16
R-17	12	R-17不明No.1	21	18	9
R-17	13	R-17不明No.2	24	22	12
R-17	14	R-17 P30	(19)	21	10
R-17	15	R-17 P31	14	12	6
R-17	16	R-17不明No.3	36	30	26
R-17	17	R-17 P33	30	23	17
R-17	18	R-17 P32	57	51	45
R-17	19		24	21	19
R-17	20		21	17	22
R-17	21		20	16	9
R-17	22	R-17 P25	32	24	8
R-17	23		66	45	25
R-17	24		(23)	29	13
R-17	25		32	21	8
R-17	26		57	33	21
R-17	27		(17)	23	22
R-17	28		22	18	12
R-17	29		26	14	9
R-18	1	R-18 P12	43	37	40
R-18	2	R-18 P13	39	29	25
R-18	3	R-18 P14	33	26	36
R-18	4	R-18 P15	46	36	38
R-18	5	R-18 P16	44	36	25
R-18	6	R-18 P21	58	37	36
R-18	7	R-18 P16	26	23	32
S-12	1	T-12 P1	15	14	20
S-12	2	T-12 P9	13	12	9
S-12	3	T-12 P10	49	27	21
S-16	1		37	28	27
S-16	2		30	28	29
S-16	3		37	27	18
S-16	4		48	30	10
S-16	5		35	25	13
S-16	6		44	31	11
S-16	7	S-16 P24	26	21	14
S-16	8	S-16 P25	38	20	11
S-16	9	S-16 P37	86	62	17
S-16	10		33	28	15
S-16	11		34	29	19
S-16	12		26	19	11
S-16	13		64	39	31
S-16	14		21	21	16
S-16	15		27	25	9
S-16	16		22	21	8
S-16	17		30	23	14
S-16	18		26	16	17
S-16	19		25	23	10

グリッド	番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
S-16	20		24	17	16
S-16	21		23	21	24
S-16	22		39	24	23
S-16	23		65	47	17
S-16	24		38	36	29
S-16	25		31	23	31
S-16	26		51	46	23
S-16	27		49	33	19
S-16	28		41	33	4
S-16	29		37	32	13
S-16	30		(48)	55	4
S-16	31		25	21	15
S-16	32		38	32	13
S-16	33		36	29	11
S-16	34		(17)	35	18
S-16	35		(16)	27	19
S-17	1		37	35	13
S-17	2		22	18	18
S-17	3		23	13	17
S-17	4		16	14	10
S-17	5		21	18	10
S-17	6	T-17 P4	84	65	50
S-17	7	S-17 P5	30	23	14
S-17	8	S-17 P17	24	20	20
S-17	9	S-17 P16	27	25	15
S-17	10	S-17 P21	52	45	25
S-17	11	S-17 P30	28	25	20
S-18	1	S-18 P10	48	44	38
S-18	2		57	56	46
S-18	3	S-18 P12	26	21	11
S-18	4		71	58	34
S-18	5		17	17	14
S-18	6		20	19	8
S-18	7		18	15	6
S-18	8		35	30	9
S-18	9		22	21	7
S-18	10		37	32	18
S-18	11		58	46	42
S-19	1		57	53	45
S-19	2		63	51	49
S-19	3		(42)	43	18
S-19	4		25	23	28
S-19	5		31	23	24
S-19	6		(35)	39	26
S-19	7		27	26	20
S-19	8	T-19 P3	36	28	19
S-19	9	S-19 P21	15	12	6
S-19	10		45	38	30
S-19	11		26	21	15
S-19	12		42	31	39
S-19	13		56	49	38
S-19	14		34	31	22
S-19	15		29	23	15
S-19	16	S-19 P10	42	27	11
S-19	17		39	(29)	15
S-19	18		20	19	7
S-19	19		23	18	9
S-19	20		25	18	9
T-11	1		36	25	34
T-11	2		15	13	13
T-11	3		24	20	20
T-11	4		25	25	24
T-11	5		32	30	18
T-11	6		58	37	31
T-12	1	T-12 P1	46	42	13
T-12	2		14	12	16
T-12	3		20	17	15
T-12	4		27	22	24
T-12	5		25	23	15
T-12	6		15	15	14
T-12	7		20	15	5
T-12	8		20	18	12
T-12	9		18	17	12

グリッド	番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	グリッド	番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
T-14	1	T-14 P13	40	32	21	T-17	2	T-17 P16	45	(41)	44
T-14	2	T-14 P12	47	45	37	T-17	3		19	14	5
T-14	3	T-14 P14	31	30	10	T-17	4	T-17 P19	47	45	18
T-14	4		28	21	18	T-17	5	T-17 P23	26	23	14
T-14	5		37	23	22	T-17	6		35	25	34
T-14	6		26	25	14	T-17	7		30	15	12
T-14	7		25	25	14	T-17	8	T-16 P48	21	17	12
T-14	8		31	26	16	T-18	1		25	25	27
T-14	9		45	34	29	T-18	2		27	24	20
T-14	10		40	40	33	T-18	3		33	30	15
T-14	11		39	33	40	T-18	4		(46)	45	43
T-15	1	T-15 P10	41	39	12	T-18	5		33	(24)	13
T-15	2		29	21	11	T-18	6	T-18 P25	27	25	12
T-15	3	T-15 P11	17	16	21	T-18	7		30	25	22
T-15	4		23	19	15	T-18	8		26	18	16
T-15	5		29	(14)	13	T-18	9	T-18 P26	17	17	7
T-15	6	T-15 P16	45	40	16	T-18	10	T-19 P10	28	23	17
T-15	7		42	41	44	T-18	11		35	30	28
T-16	1		97	64	17	T-18	12		24	22	14
T-16	2		42	35	6	T-18	13		30	26	14
T-16	3		35	30	7	T-18	14	T-18 P27	20	20	15
T-16	4		29	26	8	T-18	15	T-18 P28	25	20	20
T-16	5		25	25	6	T-18	16	T-18 P29	40	33	26
T-16	6		30	25	9	T-18	17	T-18 P30	45	37	12
T-16	7		51	29	13	T-18	18	T-18 P32	30	(20)	14
T-16	8		16	12	6	T-18	19	T-17 P1	16	14	10
T-16	9		46	44	10	T-18	20	T-17 P2	15	14	13
T-16	10		62	52	9	T-18	21		25	25	34
T-16	11		42	38	10	T-18	22		22	21	26
T-16	12		27	22	7	T-18	23	T-17 P3	22	16	11
T-16	13		32	25	7	T-19	1		58	(15)	25
T-16	14		40	35	16	T-19	2		51	50	29
T-16	15		25	20	7	T-19	3	T-19 P14	27	21	13
T-16	16		37	30	13	T-19	4	T-18 P33	41	33	39
T-16	17		21	20	12	T-19	5		55	52	21
T-16	18		60	38	8	T-19	6		25	24	11
T-16	19	U-17 P1	56	39	30	T-19	7	U-19 P14	(64)	63	5
T-16	20		29	27	13	T-19	8		32	25	15
T-16	21	T-16不明	22	17	7	T-19	9		22	16	16
T-16	22		32	29	17	T-19	10		54	45	36
T-16	23		39	30	5	T-19	11		30	27	18
T-16	24		36	28	14	T-19	12		25	19	6
T-16	25		34	30	19	T-19	13		24	21	11
T-16	26	S-16 P38	35	30	7	U-8	1		26	24	20
T-16	27	T-15 P12	30	(15)	13	U-8	2		24	22	17
T-16	28		29	28	8	U-8	3		19	19	19
T-16	29		24	23	15	U-8	4		18	17	26
T-16	30	T-16 P13	20	19	20	U-8	5		21	18	21
T-16	31	T-16 P45	50	35	18	U-8	6		26	23	24
T-16	32		25	23	5	U-8	7		23	18	12
T-16	33		35	31	5	U-8	8		16	16	14
T-16	34	T-17 P7	45	41	20	U-8	9		27	25	4
T-16	35		40	33	15	U-8	10		47	38	6
T-16	36		46	35	6	U-8	11		27	21	16
T-16	37		32	23	25	U-8	12		27	25	11
T-16	38		28	24	20	U-12	1		30	28	11
T-16	39		31	28	21	U-12	2		37	33	13
T-16	40		19	19	13	U-12	3		23	22	11
T-16	41		21	15	9	U-12	4		22	15	8
T-16	42		45	29	20	U-12	5		24	12	16
T-16	43		29	24	7	U-12	6	U-13 P1	45	36	14
T-16	44		30	25	14	U-14	1		44	40	27
T-16	45		37	27	29	U-14	2	T-14 P2	34	28	41
T-16	46	T-17 P7	44	(20)	12	U-14	3		52	43	31
T-16	47		27	26	34	U-16	1		24	20	9
T-16	48	T-17 P5	48	47	28	U-16	2		23	20	10
T-16	49		25	24	16	U-18	1	T-17 P4	23	19	10
T-16	50		14	13	3	U-18	2	S B101 P7	68	56	42
T-16	51		30	28	13	U-19	1		36	41	36
T-16	52		23	20	7	U-19	2	U-18 P3	57	52	77
T-16	53		28	20	13	U-19	3	S B102 P3	60	(35)	32
T-16	54		14	15	19	U-19	4		32	27	16
T-16	55	T-15 P42	43	31	16	U-19	5	S B102 P8	(59)	103	56
T-17	1	T-17 P15	36	32	25	U-19	6	U-19 P7	(42)	43	36

4. 中・近世の遺構と遺物

(1) 土壌

第101号土壌 (第173図)

第101号土壌はU-13・14グリッドに位置し、調査区外に延びている。

平面形態は長方形と推定され、残存規模は長さ1.88m、幅1.24m、深さ0.26mである。主軸方位はN-21°-Eを指す。

出土遺物は土瓶 (白土染付) が検出された。

第174図1は土瓶注口部破片である。いわゆる白土染付である。焼成は良好で、色調は白色である。産地は不明である。

時期は19世紀前葉以降である。

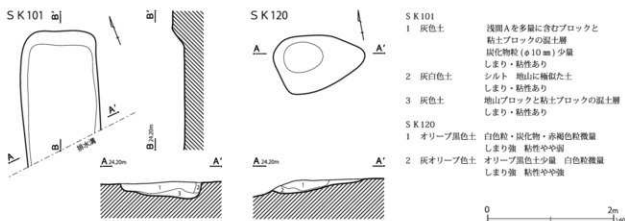
第120号土壌 (第173図)

第120号土壌はR-17・18グリッドに位置する。重複する第158号住居跡・第3号溝跡よりも新しいと思われる。

平面形態は楕円形 (卵形) で、規模は長径1.46m、短径0.92m、深さ0.27mである。主軸方位はN-83°-Wを指す。

出土遺物は土師器甕、ロクロ土師器高台壇、須恵器坏・甕、瓦質土器底部小片が出土した (第174図2~4)。2・3は第158号住居跡からの混入品であろう。4は中世、14~15世紀の在地産土器と思われる。

時期は中世と考えられる。



第173図 第101・120号土壌



第174図 中・近世の土壌出土遺物

第46表 中・近世の土壌出土遺物観察表 (第174図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	土瓶	—	[5.5]	—	—	95	良好	白	SK101 白土染付 土瓶注口部破片 産地不明	62-7
2	ロクロ土師器	高台壇	(14.0)	[3.8]	—	CDI	20	不良	黒褐	SK120 内外面黒色処理か (断面黒色)	
3	土師器	小型甕	(11.6)	[2.8]	—	AIK	20	良好	茶褐	SK120 武蔵型甕 内外面保付着	
4	瓦質土器	鉢	—	[2.1]	(14.0)	ABD	5	不良	暗灰	SK120 末野産 瓦質 鉢か、軟質	

V 第28次調査の遺構と遺物

1. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 土壌

第170号土壌 (第175図)

第170号土壌はU-7グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.68m、短径0.62m、深さ0.31mである。

遺物は土師器杯・甕、石製品が検出された。土器片は比較的多く検出されたが、乱雑に投棄した

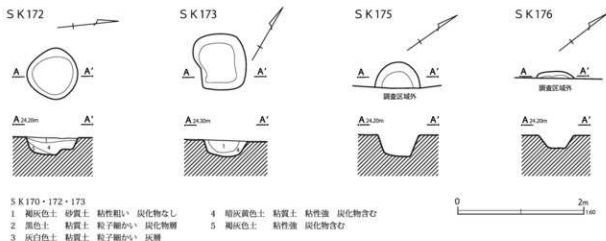
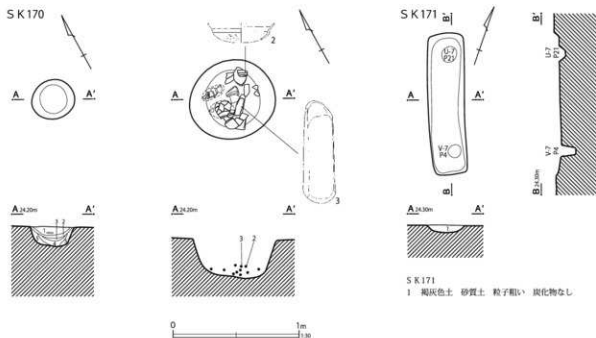
ような状況であった。

第176図1・2は有段口縁杯である。2は皿状で口径が大きい。3は方柱状の石製品で、敲打痕がみえる。

時期は7世紀前半頃と推定される。

第171号土壌 (第175図)

第171号土壌はU・V-7グリッドに位置する。



第175図 第170～173・175・176号土壌・遺物出土状況

U-7 P21、V-7 P4と重複するが、新旧関係は明らかではない。

平面形態は長方形で、規模は長さ2.26m、幅0.60m、深さ0.11mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

出土遺物は土師器環（有段口縁環）・北武蔵型暗文杯・甕が検出されている。

第176図4は北武蔵型暗文杯と思われるが、風化が著しく暗文は確認できない。

時期は7世紀後半と推定される。

第172号土壌（第175図）

第172号土壌はU・V-7グリッドに位置し、第170号土壌の南側に隣接する。

平面形態は円形で、規模は長径0.80m、短径0.79m、深さ0.28mである。

第5号畠跡の第3号畝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物は、不明植物の種が検出されているのみで、時期は不明であるが、第170号土壌と同一時期とすれば7世紀前半の可能性もある。

第173号土壌（第175図）

第173号土壌はV-7グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長さ0.93m、

幅0.78m、深さ0.24mである。主軸方位はN-46°-Wを指す。

出土遺物は土師器杯・甕・壺が検出されている。第176図5は土師器有段口縁杯である。口径は小さい。6は土師器甕である。和泉期の所産と思われる。

時期は有段口縁杯から、7世紀中頃～後半と思われる。

第175号土壌（第175図）

第175号土壌はV-7グリッドに位置する。東側は調査区外に延びている。

平面形態は円形と推定される。残存規模は長径0.70m、短径0.45m、深さ0.33mである。

出土遺物はなかった。

時期は不明であるが、7世紀代と推定される。

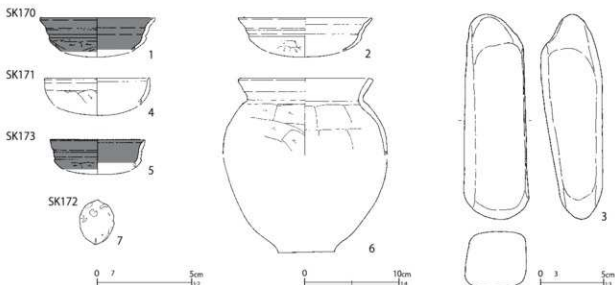
第176号土壌（第175図）

第176号土壌はV-7グリッドに位置する。大半は調査区外に位置するため、詳細は不明である。

平面形態は不明で、規模は長径0.54m、短径0.11m、深さ0.20mである。

出土遺物はなかった。

時期は不明である。



第176図 第28次土壌出土遺物

第47表 第28次土壇出土遺物観察表 (第176図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	[3.6]	—	CEI	30	良好	黒褐	SK170 No.7 照明灯 有段口縁坏 内外面黒色処理 (黒漆か)	57-3
2	土師器	坏	(14.0)	[3.6]	—	CDI	5	良好	淡褐	SK170 有段口縁坏	65-3
3	土製品	不明	長さ16.2 幅5.1 厚さ4.9 重さ652.7							SK170 No.2 ホルンフェルス 方柱状で図の上下端に敲打状の使用痕	
4	土師器	坏	(11.0)	[2.9]	—	CDI	15	良好	橙褐	SK171 北武蔵型暗文 風化著しく内面の放射暗文確認できない	57-4 66-9
5	土師器	坏	(9.8)	[3.2]	—	CDEG	15	良好	黒褐	SK173 有段口縁坏 黒色処理 (黒漆か)	
6	土師器	甕	(13.5)	[8.1]	—	DGHIK	15	普通	淡褐	SK173 和泉期	
7	植物	不明種	長さ1.15 幅0.95 厚さ0.6 重さ0.2							SK172	

(2) 畝跡

第5号畝跡 (第177図)

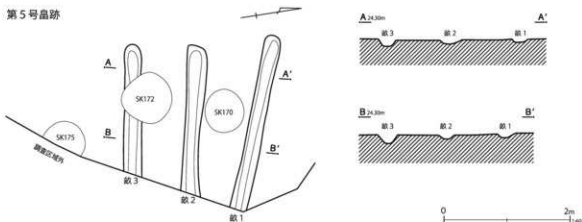
第5号畝跡はU・V-7グリッドに位置する。第27次調査区の第2号畝跡の西側にあり、関連する遺構と考えられる。畝跡は3条平行して検出され、調査区の東側に抜けている。

規模は、長さ2.10～2.80m、幅0.24～0.30m、深さ0.10m前後である。

第3号畝跡は第172号土壇と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物はないが、他の遺構との関係から7世紀後半と考えられる。

第5号畝跡



第177図 第5号畝跡

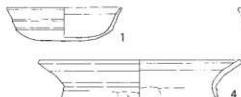
第48表 第28次ピット計測表 (第12図)

グリッド	番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
U-6	1		26	20	11
U-6	2		25	20	12
U-6	3		38	34	31
U-7	1		27	23	29
U-7	2		24	22	36
U-7	3		31	30	35
U-7	4		25	22	11
U-7	5		32	26	33
U-7	6		30	26	29
U-7	7		27	26	13
U-7	8		22	19	26
U-7	9		20	18	8
U-7	10		28	22	15
U-7	11		(20)	20	12
U-7	12		38	35	6
U-7	13		25	24	11
U-7	14		32	27	14
U-7	15		24	18	5
U-7	16		19	15	4

グリッド	番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
U-7	17		25	21	12
U-7	18		28	20	10
U-7	19		19	16	10
U-7	20		19	14	10
U-7	21		26	23	11
U-7	22	U-6 P 4	27	23	5
V-6	1		25	17	5
V-7	1		30	27	11
V-7	2		30	28	9
V-7	3		23	21	8
V-7	4		21	20	22
V-7	5		30	25	11
V-7	6		21	20	9
V-7	7		30	27	12
V-7	8		24	19	30
V-7	9		31	24	16
V-7	10		25	19	12
V-7	11		27	24	21

(3) ビット

ビットは37基検出され、第130号溝跡と第129・131号溝跡の間に大多数が位置する。直径0.30m程度の小ビットが集中し、特に柱痕は検出されていない。配置にも規則性はない。覆土はすべて灰色の粘質土で堆積し、分層できなかった。

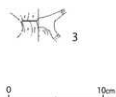


第178図 包含層出土遺物

出土遺物はほとんどなく、時期も不明であるが、7世紀後半のビット群と推定される。

(4) 包含層出土遺物

第178図には遺物包含層から出土した遺物を掲載した。1・2は有段口縁杯、3は高杯である。4は土師器甕で、口唇部は面取りされている。



第49表 包含層出土遺物観察表 (第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	杯	(12.0)	3.5	—	CHIK	10	良好	明褐色	接合しない2片を復元 風化著しくケズリ不明	
2	土師器	杯	—	[2.7]	—	HIK	10	良好	褐色	底部外面黒斑あり 黒色処理なし	
3	土師器	小型高杯	—	[3.1]	—	DI	40	良好	赤褐色	外面ヘラケズリで面取りされる	
4	土師器	甕	(21.0)	4.2	—	AGHI	10	普通	褐色		

2. 奈良・平安時代以降の遺構と遺物

(1) 溝跡

第129・131号溝跡 (第14・179図)

第129号溝跡は第28次調査区北西側のU-7グリッドに位置する。南北方向に延びる溝跡で、規模は長さ2.80m、幅0.26～0.30m、深さ0.08～0.10mである。南側3m延長上に第131号溝跡が位置することから同一溝跡と考えられる。

第131号溝跡は南側のV-6グリッドに位置する。規模は長さ3.43m、幅0.27～0.36m、深さ0.05～0.06mである。覆土中には第V層の浅間B軽石が混じっていた。出土遺物はない。

時期は、第131号溝跡に堆積した浅間B軽石の存在から古代末期以降に掘削されたと考えられる。

第130号溝跡 (第14・179図)

第130号溝跡は第28次調査区北側中央のU・V-7グリッドに位置する。南北方向に延びる溝跡で、第129・131号溝跡の東側約3mに概ね平行して検出された。規模は長さ5.82m、幅0.28～0.55m、深さ0.08～0.11mである。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、第129・131号溝跡と関連すれば古代末期以降となる。

第132～134号溝跡→第5号畠跡

第135号溝跡 (第14・179図)

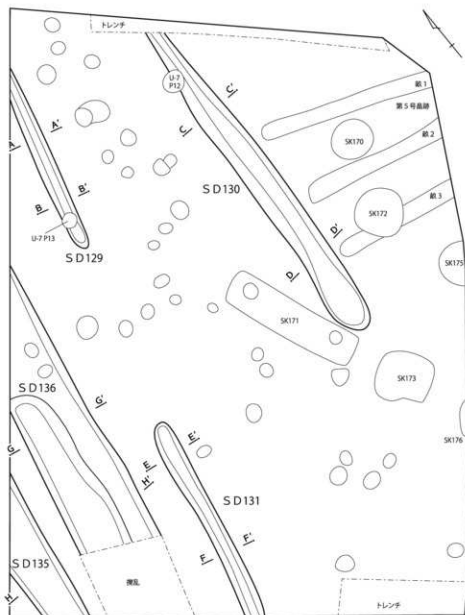
第135号溝跡は西側のU・V-6グリッドに位置し、概ね南北方向に延びている。規模は長さ1.96m、幅0.73m、深さ0.33mである。覆土は浅間B軽石を含む灰色土で構成されていた。出土遺物はない。

時期は、古代末期以降掘削されたものである。

第136号溝跡 (第14・179図)

第136号溝跡は西側のU・V-6グリッドに位置し、南北方向に延びている。南側調査区境には撿乱が入る。規模は長さ6.24m、幅1.20m、深さ0.16mで、底面西半が一段深く掘り込まれていた。覆土はにがひ褐色土で、浅間B軽石は含まれない。

出土遺物はなかった。時期は浅間B軽石降灰前であるので、平安後期と推定される。



SD129



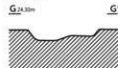
SD130



SD131



SD136



SD135・136

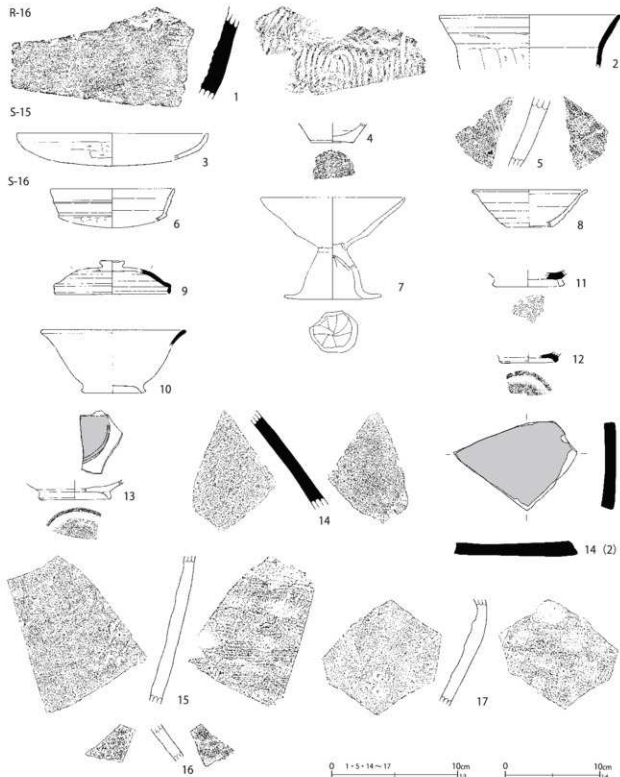


第179図 第129～131・135・136号溝跡

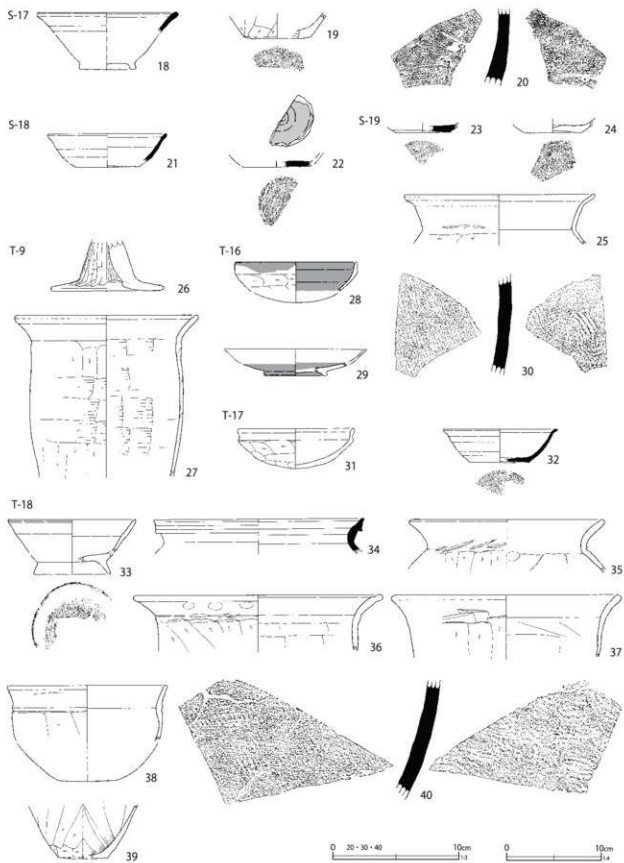
VI グリッド他出土遺物

第26～28次調査でグリッドから出土した遺物を第180～183図に掲載した。また、表採遺物は

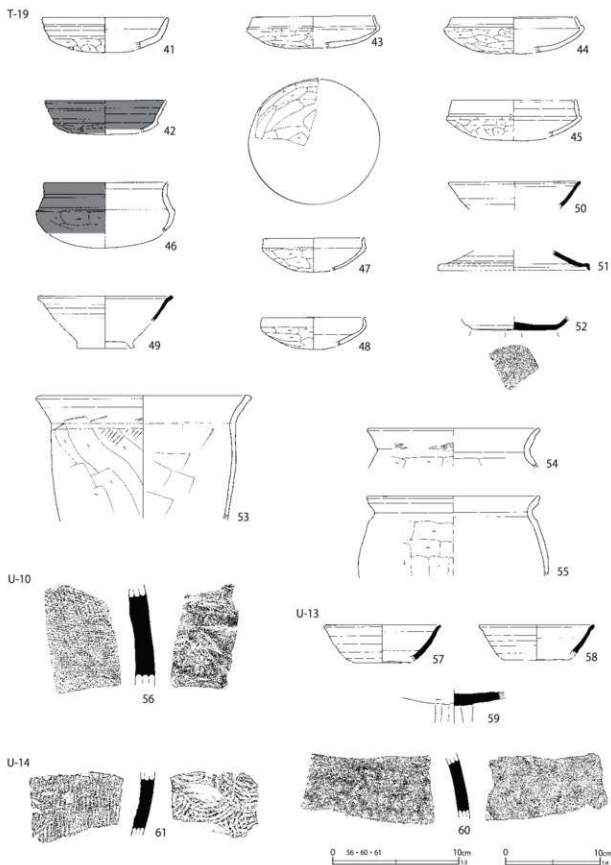
第184図に掲載した。



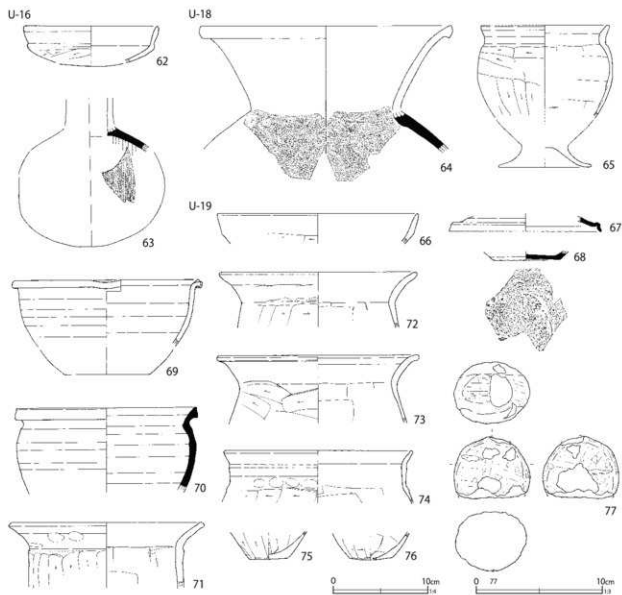
第180図 グリッド出土遺物（1）



第181図 グリッド出土遺物 (2)

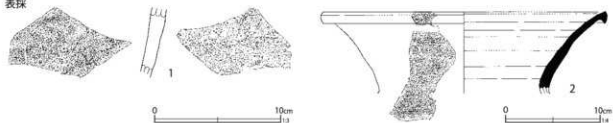


第182図 グリッド出土遺物（3）



第183図 グリッド出土遺物（4）

表採



第184図 表採出土遺物

第50表 表採出土遺物観察表（第184図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	甕	—	[5.5]	—	DEI	5	良好	茶褐	常滑焼 内外面ナデ	59-4
2	須恵器	甕	(30.0)	[8.6]	—	DIJ	5	良好	暗灰	南比金産 頸部 平行叩き後ロクロナデ	

第51表 グリッド出土遺物観察表 (第180～183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[7.3]	—	D1J	5	不良	灰	R-16 南比企産 外面平行叩き 内面同心円文当具	60-4
2	須恵器	甕か	(19.0)	[5.8]	—	ACIK	20	良好	暗灰褐	R-16	
3	土師器	皿	(20.0)	[2.8]	—	CEI	5	良好	褐	S-15 内面風化	
4	コクロ土師器	坏	—	—	4.5	HIK	50	良好	橙白	S-15 排水溝 底部回転系切りか、全体に風化	
5	陶器	甕	—	[5.5]	—	DEI	5	良好	濃茶褐	S-15 常滑焼	
6	土師器	坏	(13.0)	[3.4]	—	BCHIK	15	普通	淡褐	S-16 有段口縁 黒色処理不明	
7	土師器	高坏	—	[3.1]	—	DEIM	80	普通	明褐	S-16 調整不明瞭 継ぎ目	
8	コクロ土師器	坏	(12.0)	3.9	(5.0)	AEHI	10	良好	淡黄褐	S-16 底部調整不明	
9	須恵器	蓋	(12.0)	[2.7]	—	IJ	15	良好	青灰	S-16 南比企産 高台坏の蓋	
10	須恵器	高台埴	(15.0)	[1.8]	—	BEX	5	普通	明灰	S-16 末野産	
11	須恵器	高台埴	—	[1.1]	—	BDIK	20	良好	灰	S-16 末野産 高台欠失 底部回転系切り	
12	須恵器	高台坏	—	[1.1]	(5.5)	ABE	20	普通	灰褐	S-16 末野産 底部回転系切り	
13	灰輪陶器	高台碗	—	[2.0]	(7.2)	GIK	25	良好	明灰	S-16 胎土粗い 産地不明 底部回転系切り 0-53併行か	
14	須恵器	甕	—	[7.9]	—	IJK	5	良好	暗灰	S-16 南比企産 内面摩滅 砥石として再利用か	
14 (2)	須恵器	(甕) 転用底底	—	—	—	IJK	5	良好	暗灰	S-16 南比企産 内面はよく摩滅 側面弱く摩滅 長さ9.8cm 幅6.8cm 厚さ1.1cm	
15	陶器	甕	—	[11.9]	—	DEGI	5	良好	暗紫灰	S-16 常滑焼	60-3
16	陶器	甕	—	[3.0]	—	DEGI	—	良好	紫灰	S-16 常滑焼 外面緑色の自然降灰	
17	陶器	甕	—	[8.5]	—	DEGI	5	良好	濃茶褐	S-16 常滑焼 上端に自然降灰	
18	須恵器	高台埴	(14.4)	[2.2]	—	BEI	10	良好	灰	S-17 末野産	
19	土師器	甕	—	[2.7]	(7.2)	CEGIK	25	普通	暗褐	S-17 底部被熱 底部本葉痕か	
20	須恵器	甕	—	[6.0]	—	IJK	5	良好	灰	S-17 南比企産 胴部下位の破片 下端に回転ヘラズリ	
21	須恵器	坏	(12.3)	[3.0]	—	IJ	15	良好	灰	S-18・19 南比企産 底部欠失	
22	須恵器	坏	—	[0.6]	(6.0)	DJ	45	良好	青灰	S-18 南比企産 底部回転系切り 内面摩滅著しい	
23	須恵器	坏	—	[1.0]	(6.0)	AIH	—	良好	褐	S-19 末野産か 内面灰色に還元	
24	コクロ土師器	坏	—	[1.5]	(6.0)	DEGHIK	25	良好	褐	S-19 末野産の可能性もあり 底部回転系切り 断面に還元層を挟む	
25	土師器	甕	(20.0)	[5.4]	—	ACEGI	10	良好	橙褐	S-19 武蔵型甕	
26	土師器	高坏	—	[5.4]	(11.2)	CEIK	40	普通	明褐	T-9表探 脚部粗いミガキか 内面段り	
27	土師器	甕	(19.0)	[17.0]	—	EGIK	15	不良	褐	T-9表探 胴部中位と内面木ノナゲか 全体に二次被熱か	
28	土師器	坏	(12.8)	[3.1]	—	EGIK	20	良好	淡橙褐	T-16一括 二次的に煤付着 割れた後に内面煤付着する 破断面にも付着	
29	緑輪陶器	高台皿	—	[1.3]	(6.7)	—	10	良好	淡褐	T-16 東海(鎗投)産 全面緑輪 素地土は灰色で硬質感ある	61-3 61-4 61-2
30	須恵器	甕	—	[8.0]	—	EIK	5	良好	灰	T-16一括 産地不明 外面平行叩き後カキ目 内面に同心円文当具	
31	土師器	坏	(12.0)	4.2	—	DHIK	35	普通	明褐	T-17 内面風化 腰高の器形 在地産	
32	須恵器	坏	(11.8)	3.5	(6.2)	BI	25	良好	暗灰	T-17 末野産 底部回転系切り	
33	土師器	高台埴	(13.5)	[5.8]	(8.0)	GI	40	普通	橙褐	T-18 非コクロか 風化著しく調整不明 歪み目立つ 口縁部と底部接合しない	
34	須恵器	鉢	(22.0)	[3.7]	—	EIK	10	良好	灰	T-18 末野産か	
35	土師器	壺	(20.0)	[5.7]	—	CEGIK	15	普通	褐	T-18 末野産	
36	土師器	甕か	(26.0)	[5.9]	—	CEGHIK	15	良好	明褐	T-18	
37	土師器	甕	(23.6)	[6.8]	—	DGHI	10	良好	淡黄褐	T-18 内面黒底あり 甕と思われる	
38	土師器	鉢	(16.5)	[6.0]	—	DEGI	20	普通	褐	T-18 二次被熱	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
39	土師器	甕	—	[5.5]	(5.3)	CHK	35	普通	褐	T-18 武蔵型甕か、底部ケズリ	62-1
40	須恵器	甕	—	[9.4]	—	DI	5	良好	青灰	T-18 産地不明 外面平行叩き 内面同心円文当具	
41	土師器	坏	(13.2)	[3.4]	—	CDGH	20	普通	明褐	T-19%13 坏蓋模倣坏	
42	土師器	坏	(12.5)	[2.3]	—	CDGI	15	普通	黒褐	T-19 有段口縁坏 黒色処理（漆か）	
43	土師器	坏	(12.8)	3.3	—	CDEIK	25	良好	茶褐	T-19%13 坏身模倣坏 底部外面中央に黒斑あり 内外面黒処理と思われる	61-5
44	土師器	坏	(13.0)	[3.8]	—	ACDGHK	20	良好	明褐	T-19%12 坏身模倣坏 底部外面黒斑あり 黒色処理痕跡なし	
45	土師器	坏	(13.0)	[3.9]	—	CDHI	25	普通	褐	T-19%11 坏身模倣坏 黒色処理有無不明	62-2
46	土師器	鉢	(13.0)	[4.3]	—	CHK	15	普通	暗茶褐	T-19 外面黒色処理 内面不明	62-3
47	土師器	坏	(10.6)	[3.4]	—	CHI	35	普通	橙褐	T-19%7 北武蔵型坏	
48	土師器	坏	(10.8)	[3.0]	—	CDIK	25	普通	淡褐	T-19%8 北武蔵型坏	62-4
49	須恵器	高台埴	(14.0)	[2.7]	—	BEI	10	不良	灰褐	T-19 末野産	
50	須恵器	坏	(13.7)	[2.9]	—	DEGI	10	良好	灰	T-19 産地不明（在地） 砂っぽい胎土 太田金山産か	62-5
51	須恵器	蓋	(16.0)	[2.1]	—	IKL	5	普通	灰白	T-19 南比企産か三義産 南比企産に似るが針状物質含まれない	
52	須恵器	坏	—	[1.5]	(8.8)	IJ	20	普通	灰	T-19 南比企産 底部全面回転ヘラケズリ	62-6
53	土師器	甕	(21.8)	[13.2]	—	CDEGH	20	良好	明褐	T-19%1	
54	土師器	甕	(18.0)	[4.2]	—	CHK	5	普通	褐	T-19 武蔵型甕の退化形式	62-6
55	土師器	甕	(18.0)	[8.5]	—	CDHK	5	普通	黄灰	T-19 「コ」の字甕の退化形式と思われる 器壁厚い	
56	須恵器	甕	—	[8.1]	—	BDEIL	5	良好	青灰	U-10一括 末野産 外面平行叩き 内面同心円文当具後ナゲ	62-5
57	須恵器	坏	(12.2)	[3.8]	—	DJL	25	良好	青灰	U-13 南比企産 厚手でぼったりした作り 深身 HⅧ期と思われる	
58	須恵器	坏	(12.0)	[3.4]	—	DEIJ	25	普通	青灰	U-13 南比企産	62-6
59	須恵器	高坏	—	[1.3]	—	BDEK	10	良好	灰	U-13 末野産 脚部透かしの痕跡あり 長脚二段三方透高坏か、TK209併行か	
60	須恵器	甕	—	[5.2]	—	IK	5	良好	緑灰	U-13 産地不明 外面平行叩き 内面無文当具 素地土は灰白で多孔質	62-6
61	須恵器	甕	—	[5.1]	—	BEI	5	良好	紫灰	U-14 末野産 外面平行叩き 内面同心円文当具	
62	土師器	坏	(14.0)	[3.9]	—	OGIK	15	普通	赤褐	U-16側溝 坏蓋模倣坏	62-5
63	須恵器	フラスコ瓶	—	[2.3]	—	K	5	良好	灰白	U-16側溝 湖西産 外面緑色自然釉 フラスコ瓶と思われる 胎土精良	
64	須恵器	甕	—	[4.5]	—	DJK	15	良好	明灰	U-18 南比企産	62-5
65	土師器	小型内付甕	(13.2)	[9.8]	—	CGHIK	25	良好	橙褐	U-18 武蔵型甕 胴下半二次被熱	
66	土師器	鉢か	(21.2)	[3.2]	—	CDIK	5	普通	明褐	U-19 器形不明確	62-6
67	須恵器	蓋	(16.0)	[1.6]	—	IJK	10	普通	灰白	U-19 南比企産	
68	須恵器	坏	—	[0.9]	7.0	BEI	80	良好	灰	U-19 末野産 底部回転糸切り	62-6
69	須恵器	片口鉢	(19.4)	[7.1]	—	BEHI	10	普通	黄灰	U-19 末野産	
70	須恵器	鉢	(19.0)	[9.0]	—	BEI	10	良好	暗灰	U-19 末野産	62-6
71	土師器	甕	(20.0)	[7.0]	—	ACHI	30	良好	褐	U-19%5 長胴甕	
72	土師器	甕	(20.6)	[5.9]	—	CDGIK	15	普通	褐	U-19%9	62-6
73	土師器	甕	(21.0)	[7.2]	—	ACEGI	20	良好	茶褐	U-19	
74	土師器	甕	(19.6)	[5.6]	—	ACIK	15	普通	黒褐	U-19 武蔵型甕	62-6
75	土師器	甕	—	[2.8]	(4.0)	CGHI	25	良好	淡褐	U-19 武蔵型甕	
76	土師器	甕	—	[3.0]	(5.6)	CHK	40	普通	暗褐	U-19%8 武蔵型甕	62-6
77	石製品	磨石	長さ4.9 幅6.1 厚さ4.9 重さ87.1							U-19%10 軽石 断面円形 球形で下半を欠く 石材は角閃石安山岩 細かな凹凸著しいが表面は平滑	

VII 遺構新旧対照表

第52表 第25～28次遺構新旧対照表

新	旧	備考	新	旧	備考	新	旧	備考
25次			M-16 P-7	M-16P-3			S J 146	欠番
S J 8 P 2	S J 69 P 8		N-16 P-3	N-17 P-1		S J 104 P 1	U-18 P 6	
S J 8 壁溝	S J 69 P 10		N-18 P-1	N-18 P-13		S J 105 P 1	U-18 P 6	
S J 16	S J 15のカード		N-18 P-2	N-18 P-14		S J 106 P 4	T-18 P 5	
	S J 33	欠番	N-18 P-3	N-18 P-15		S J 106 P 5	T-18 P 17	
S J 43 P 1	S J 43 P 106		N-18 P-4	N-18 P-1・2		S J 109 P 8	S-18 P 15	
S J 43 P 2	S J 43 P 102		O-16 P-2	O-16 P-18		S J 109 P 10	S-18 P 13	
S J 43 P 3	S J 43 P 103		P-16 P-1	P-16 P-2		S J 109 P 11	T-18 P 20	
S J 43 P 4	S J 43 P 104		P-16 P-2	P-16 P-8		S J 111 P 1	S B 102 P 1	
	S J 43 P 1		P-16 P-3	P-16 P-6		S J 111 P 2	S B 102 P 2	
	S J 43 P 100	欠番	P-16 P-6	P-16 P-1		S J 111 P 3	T-19 P 13	
	S J 43 P 101		P-17 P-1	P-17 P-7		S J 111 P 4	T-19 P 7	
	S J 43 P 107		P-17 P-2	P-17 P-6		S J 111 P 5	T-19 P 12	
S J 46	S J 49のカード		P-17 P-4	P-17 P-8		S J 112 P 3	S K 104	欠番
S J 51 P 5	S J 51 P 6		P-17 P-5	P-16 P-4	欠番	S J 112 P 4	T-17 P 21	
S J 51 P 6	S J 51 P 5		P-17 P-6	P-16 P-5	欠番	S J 112 P 5	T-17 P 1	
	S J 56	欠番	P-17 P-7	P-16 P-7	欠番	S J 112 P 6	T-17 P 2	
S J 60貯蔵穴	S J 60 P 1		P-17 P-6	P-16 P-5		S J 112 P 7	T-17 P 9	
S J 60壁溝	S J 60 P 2		P-17 P-7	P-16 P-7		S J 113 P 1	S-19 P 9	
S J 72のカード	S K 41		Q-16 P-2	Q-16 P-12		S J 113 P 2	S-19 P 8	
S J 81 P 4	S J 81 P 7		Q-16 P-3	Q-16 P-18			S J 119	欠番
S J 81貯蔵穴	S J 82 P 4		Q-16 P-4	Q-16 P-16		S J 120 P 1	T-18 P 9	
S K 11	S J 46の一部			Q-16 P-5	欠番	S J 120 P 2	T-18 P 16	
	S K 13	欠番	Q-16 P-6	Q-16 P-10		S J 120 P 4	T-18 P 31	
	S K 14	欠番	Q-16 P-7	Q-16 P-3		S J 120 P 5	T-18 P 23	
	S K 16	欠番	Q-16 P-8	Q-16 P-24		S J 122 P 1	S-17 P 27	
	S K 17	欠番	Q-16 P-9	Q-16 P-2		S J 122 P 2	S-17 P 28	
	S K 18	欠番	Q-16 P-10	Q-16 P-9		S J 122 P 3	S-17 P 37	
遺物集中	S K 19			Q-16 P-14	欠番	S J 122 P 5	S-17 P 19	
遺物集中	S K 21			Q-16 P-17	欠番	S J 122 P 6	S-17 P 33	
遺物集中	S K 22		Q-16 P-20	R-16 P-1		S J 123 P 1	S J 148 P 1	
	S K 30	欠番	Q-17 P-3	Q-16 P-13	欠番	S J 123 P 2	S J 148 P 2	
S K 41	L-16 P-1		Q-17 P-6	Q-16 P-8		S J 123 P 3	S J 148 P 3	
S K 42	M-16 P-3		Q-17 P-7	Q-16 P-6			S J 118	欠番
S K 57	S B 1 P 4		Q-17 P-8	Q-16 P-7		S J 126 P 6	T-15 P 6	
S K 66	S D 33	欠番	Q-17 P-9			S J 126 P 7	T-15 P 3	
S K 69	S J 57のカード		Q-17 P-10	Q-16 P-10		S J 130 P 6	T-14 P 3	
S B 3 P 8	S K 21		Q-17 P-11	Q-16 P-11		S J 133 P 1	S J 133 P 1	
S B 5 P 6	D-15 P-1	欠番	Q-17 P-13	S J 6 P 9			U-18 P 3	
	S D 16	欠番	Q-17 P-19	Q-17 P-12			U-18 P 3	欠番
A-16 P-1	A-16 P-2		Q-18 P-1	R-18 P-1	欠番	S J 133 P 4	T-18 P 14	
C-14 P-1	S B 5 P 7		R-16 P-1	R-16 P-8	欠番	S J 133 P 5	U-18 P 2	
C-16 P-1	D-16 P-1		R-16 P-2	R-16 P-22		S J 133 P 6	T-18 P 6	
D-15 P-7	D-15 P-9		R-16 P-3	R-16 P-21		S J 133 P 7	U-19 P 5	
D-16 P-1	D-16 P-2		R-16 P-4	R-16 P-1		S J 133 P 8	S J 133のカード P 1	
J-17 P-1	J-17 P-2		R-16 P-5	R-16 P-20		S J 134 P 1	T-17 P 22	
J-17 P-2	J-17 P-1		R-16 P-6	R-16 P-19		S J 134 P 2	T-17 P 20	
L-17 P-1	L-18 P-1	S J 60 P 8	R-16 P-7	R-16 P-23		S J 134 P 3	T-17 P 8	
L-17 P-4	L-17 P-1		26～28次			S J 138 P 2	S J 138 P 6	
L-17 P-5	S J 75 P 1	S J 74掘り方	S J 102 P 3	U-19 P 3		S J 138 P 3	S J 138 P 5	
M-16 P-4	S J 47 P 4		S J 102 P 4	S B 102 P 5		S J 138 P 5	S J 138 P 2	
M-16 P-6	M-17 P-1			S J 108	欠番	S J 138 P 6	S J 138 P 3	

新	旧	備考
S J 138 P 12	R-18 P 17	
S J 138 P 13	S-18 P 1	
S J 138 S K 1	S K 177	欠番
S J 139 P 1	S-17 P 31	
S J 139 P 2	S-17 P 32	
S J 139 P 3	S-18 P 16	
S J 141 P 2	S J 141 P 4	
S J 141 P 5	T-19 P 4	
S J 141 P 6	S J 141 P 4	
S J 141 P 10	S J 141 P 5	
S J 147 P 1	S-17 P 15	
S J 147 P 2	S-17 P 14	
S J 147 P 3	S-17 P 13	
S J 147 P 4	S-17 P 24	
S J 147 P 5	S-17 P 8	
S J 147 P 6	S-17 P 18	
S J 147 P 7	S-17 P 9	
S J 155 P 1	S J 155 P 2	
S J 155 P 2	S J 155 P 6	
S J 155 P 3	S J 155 P 5	
S J 155 S K 1	S J 155 P 3	
S J 155 P 1	S J 155 P 1	
S J 156 P 1	U-15 P 4	
S J 158 P 1	S J 11 P 1	
S J 158 P 2	S J 11 P 2	
S K 117	S K 106	S K 106遺物あり
S K 120	S J 11貯蔵穴	
S K 148	S K 153	
S K 154	S-17 P 14	
S K 179	S K 112	
S B 1 P 5	S K 133	欠番

新	旧	備考
S B 1 P 6	S K 134	欠番
S B 1 P 7	S K 135	欠番
S B 1 P 8	S K 136	欠番
S B 1 P 9	S K 137	欠番
S B 1 P 10	S K 138	欠番
S B 2 P 5	S K 133	欠番
S B 2 P 6	S K 134	欠番
S B 2 P 7	S K 135	欠番
S B 2 P 8	S K 136	欠番
S B 2 P 9	S K 139	欠番
S B 101 P 2	S K 125	欠番
S B 101 P 3	S K 110	欠番
S B 101 P 4	S K 128	欠番
S B 101 P 5	S K 124	欠番
S B 101 P 6	S K 105	欠番
S B 101 P 7	S B 101 P 3	
S B 102 P 1	S-17 P	ビッド番号不明
S B 102 P 2	S-17 P 7	
S B 102 P 3	S K 151	欠番
S B 102 P 6	S-17 P 9	
S B 102 P 8	S-17 P 34	
S B 102 P 9	S-17 P 9	
S B 102 P 10	S-17 P 11	
S B 103	S D 111	欠番
S B 103	S K 141	
S B 103 P 1	S K 140	
S B 103 P 2	S B 103 P 1	
S B 103 P 3	S B 103 P 2	
S B 103 P 4	S B 103 P 3	
S B 103 P 5	S B 103 P 10	
S B 103 P 6	S B 103 P 11	

新	旧	備考
S B 103 P 7	S B 103 P 12	
S B 103 P 8	S B 103 P 4	
S B 103 P 10	S B 103 P 8	
S B 103 P 11	S B 103 P 7	
S B 103 P 12	S B 103 P 6	
S B 103 P 13	S B 103 P 5	
S B 104 P 1	S K 168	欠番
S B 104 P 2	S-17 P 36	
S B 104 P 3	S K 152	欠番
S B 104 P 4	S K 119	欠番
S B 104 P 5	T-17 P 5・6	
S B 104 P 6	S-17 P 10	
S B 104 P 7	S-17 P 12	
S B 105 P 1	T-17 P 23	
S B 105 P 2	T-17 P 24	
S B 105 P 3	T-17 P 11	
S B 105 P 4	T-17 P 15	
S B 105 P 5	T-17 P 24	
S B 105 P 6	T-17 P 6	
S D 115	島路 1-紙 7	
	S D 126	欠番
	S D 127	欠番
島路 1	島路 1	
島路 2	1ブロック 紙状遺構 2	
	2ブロック 紙状遺構 1	
	3ブロック 様状遺構	
島路 3	島路 1	
島路 4	島路 2	
島路 5	紙 1 S D 134	
	紙 2 S D 133-2	
	紙 3 S D 132	

VIII 自然科学分析

北島遺跡第27次調査では、第102号井戸跡から出土した曲物井戸杵と第103号土壌から出土した人骨を対象に年代測定を実施した。第102号井戸跡は第107号井戸跡を壊して掘削され、その後第

1. 放射性炭素年代測定

1 測定対象試料

北島遺跡（第27次調査）は、埼玉県熊谷市上川上777番地他に所在し、荒川の扇状地である妻沼低地に立地する。測定対象試料は、第102号井戸跡の底に設置されていた曲物1点と、第103号土壌に埋葬された人骨の下位で検出された繊維状の物質を含む土壌1点である（第53表）。

第102号井戸跡の曲物側板は、年輪が非常に細かかったため、顕微鏡で観察して年輪の外側を判断し、最外部より木片を採取して試料とした。

第103号土壌の人骨は、頭部から脚部まで遺存していたが、保存状態が全体に悪く、比較的状态の良い下顎の歯2本でコラーゲン抽出を試みたが、分析に必要なコラーゲンの含有は確認できなかった。このため、人骨の下位に検出された蓆のような繊維状製品が土化したと見られる土壌を試料とすることになった。いずれの遺構も、浅間B火山灰（西暦1108年降灰）が堆積した溝跡に壊されているため、古代以前と推定されている。

2 測定の意義

試料が出土した遺構が構築された時期を解明する。

3 化学処理工程

（1）木片の化学処理

1）メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
2）酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸

化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第53表に記載する。

3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
5）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

6）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（2）土壌の化学処理

1）試料をすりつぶす（Bulk）。
2）酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用い、第53表に「HCl」と記載する。
以下、（1）3）以降と同じ。

4 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、14Cの計数、13C濃度（13C/12C）、14C濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシェウ酸（H₂O₂ II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

（1）δ13Cは、試料炭素の13C濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第53表）。AMS装置による測

定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) 14C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C年代は $\delta 13C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第53表に、補正していない値を参考値として第54・55表に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta 13C$ によって補正する必要があるため、補正した値を第53表に、補正していない値を参考値として第54・55表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta 13C$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCal v4.2較正

プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第54・55表、第185図図版1に示した。なお、暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表され、ここでは前者を第54表、第185図図版1に、後者を第55表、第185図図版2に示した。

6 測定結果

測定結果を第53～55表、第185図図版1、2に示す。較正年代は、cal BPとcal BC/ADの2通りで算出したが、以下の説明ではcal BC/ADの値で記載し(第55表、第185図図版2)、cal BPの値は図表のみ提示した(第54表、第185図図版1)。

試料の14C年代は、曲物が 1560 ± 20 yrBP、繊維状製品(土壌)が 1010 ± 20 yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、曲物が430～540cal ADの間に3つの範囲、繊維状製品が996～1027cal ADの範囲で示される。いずれも浅間B火山灰が堆積した溝跡に壊された遺構から出土していることと整合する結果である。

なお、曲物から採取された木片試料については、以下に記す古木効果等によって、実際の年代より古い値が示されている可能性がある点に注意を要する。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回の試料は、樹皮が確認できないことから、実際に木が伐採等で死んだ年代は、試料が採取された部位の外側に当たる年輪数の分、測定値よりも新しいことになる。さらに、素材となった木が死んだ年代から曲物が製作されるまでの間にも時間差が

生じる可能性がある。

試料の炭素含有率は、曲物が59%、繊維状製品（土壌）が2.8%であった。前者は木片として適正な値、後者は土壌として特に低くない値である。

7 成果

第102号井戸跡の測定結果は、広く見積もっても5世紀前半から6世紀中頃という結果を得た。しかし、第102号井戸跡から出土した土器は、平

安時代の須恵器埴片と渥美焼の鉢口縁部片、若干の土師器甕胴部片のみである。古墳時代という測定結果とは整合的とは言えない。古木効果とみるべきなのか、平安時代の坏が混入なのか俄かに判断できない。

第103号土壌の年代は、新旧関係とも整合的であった。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第53表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-170027	曲物	第102号井戸跡 井戸底	木片	AAA	-27.13 $\pm$ 0.21	1,560 $\pm$ 20	82.34 $\pm$ 0.23
IAAA-170028	繊維状製品	第103号土壌 土壌底	土壌	HCl	-22.59 $\pm$ 0.20	1,010 $\pm$ 20	88.14 $\pm$ 0.24

[参考値]

第54表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{13}C 年代、較正年代cal BP）

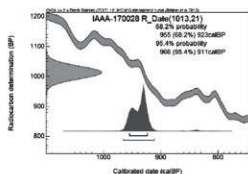
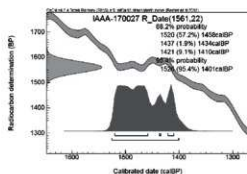
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170027	1,600 $\pm$ 20	81.98 $\pm$ 0.23	1,561 $\pm$ 22	1520calBP - 1458calBP (57.2%) 1437calBP - 1434calBP (1.9%) 1421calBP - 1410calBP (9.1%)	1526calBP - 1401calBP (95.4%)
IAAA-170028	970 $\pm$ 20	88.58 $\pm$ 0.23	1,013 $\pm$ 21	955calBP - 923calBP (68.2%)	966calBP - 911calBP (95.4%)

[参考値]

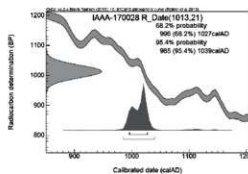
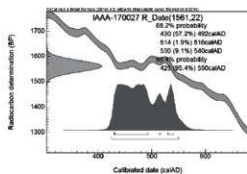
第55表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{13}C 年代、較正年代cal BC/AD）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170027	1,600 $\pm$ 20	81.98 $\pm$ 0.23	1,561 $\pm$ 22	430calAD - 492calAD (57.2%) 514calAD - 516calAD (1.9%) 530calAD - 540calAD (9.1%)	1526calBP - 1401calBP (95.4%)
IAAA-170028	970 $\pm$ 20	88.58 $\pm$ 0.23	1,013 $\pm$ 21	996calAD - 1027calAD (68.2%)	985calAD - 1039calAD (95.4%)

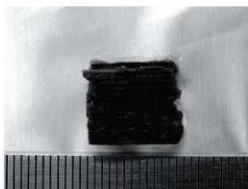
[参考値]



〔図版 1〕 暦年較正年代グラフ (cal BP、参考)



〔図版 2〕 暦年較正年代グラフ (cal BC/AD、参考)



曲物側板下端の木片（一部を使用）



曲物から採取された木片の年輪
(顕微鏡写真、下が外側)



繊維状製品（土壌に含まれている状態）



繊維状製品（細部）

IX 調査のまとめ

1. 調査の成果

北島遺跡第26～28次調査では、堅穴住居跡48軒、掘立柱建物跡7(2)棟、井戸跡7基、土壌47基、溝跡41(2)条、道路跡1条、畠跡5箇所、墓跡4基、河川跡1箇所、その他340基のピットが検出された。

時代別の遺構数をまとめると、弥生時代の遺構はなく、遺物のみが数点検出された。

古墳時代は堅穴住居跡25軒、掘立柱建物跡3(2)棟、井戸跡3基、土壌27基、溝跡7条、畠跡3箇所、河川跡1箇所がある。

奈良・平安時代は堅穴住居跡21軒、掘立柱建物跡4棟、井戸跡4基、土壌27基、溝跡34(2)条、畠跡2箇所、墓跡4基、道路跡1条がある。その他、古墳～平安時代ではあるが時期を特定できない住居跡が2軒ある。括弧内は第25次調査と同一遺構の延長部分である。

中・近世は土壌が2基検出されている。

第26～28次調査における集落の中心時期は、古墳時代後期(6世紀後半)から平安時代(10世紀初頭～前半)である。住居跡は、第25次調査区南半から南サイドスタンドにかけての区域で多数重複していた。南サイドスタンドの中央から西域では、住居跡は激減する一方、溝跡や畠跡が展開し、基本的に生産域に利用されたことがわかる。また、集落域を画するように両側側溝を伴う平安時代の道路跡が検出され、西北西から東南東に延びていた。この道路跡は、かつて第19地点で検出された道路跡に繋がる可能性が高く、その性格が目される。

第3・6号溝跡は第25地点に続き、北側は直角に屈曲し、第5地点から検出された第2・3号溝跡に繋がると考えられる。2条平行することから屋敷や館跡を区画する溝跡となる可能性がある。浅間B軽石が溝跡上層に含まれるため、12世紀

初頭以前に掘削されたのは確実である。

南サイドスタンド西側に位置する第28次調査区からは畠跡が検出され、南サイドスタンド西半と同様、生産域として土地利用されていた。

調査区北部の北サイドスタンドでは住居跡は検出されず、井戸跡と畠跡、溝跡が中心となる。また、西端部では地形が西に向かって傾斜しており、河川跡の一部が検出された。

(1) 時期区分

時期区分に当たっては、弥生時代をⅠ期、古墳時代をⅡ期、奈良時代をⅢ期、平安時代をⅣ期・Ⅴ期とし、必要に応じてその中を細分した。第25次報告(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018)とは一致しないので、注意願いたい。

弥生時代(Ⅰ期)

弥生時代の遺構は検出されなかった。弥生土器は3点検出され、いずれも櫛描文系土器群である。1点は内面に太い櫛描波状文が施文されていた。秩父市下ツ原遺跡に出土例はあるが、北島遺跡周辺ではみられない。中期後半～末頃と思われる。他の2点は後期前半岩鼻式と思われる。

古墳時代(Ⅱ期)

古墳時代の住居跡は25軒あり、そのうち細分時期が不明なものが5軒ある。1期～3期に大きく3区分する。

Ⅱ-1期

このうち古墳時代前期(Ⅱ-1期)は第155号住居跡1軒のみである。第155号住居跡は調査区の南西部に単独で検出されており、今のところ広がりには確認できない。

Ⅱ-2期

古墳時代中期(Ⅱ-2期)の住居跡は検出されなかった。

Ⅱ-3期

古墳時代後期の住居跡は19軒検出された。概ね6世紀後半から7世紀後半までの住居跡が含まれる。古・中・新の3段階に細分する。

Ⅱ－3期古段階は第101・111・112・125・134・137・141号住居跡が該当する。口径14cm大の大振りの有段口縁環と、口径12cm大の坏身模倣坏がセットで揃う段階である。第111号住居跡出土の第19図2・第141号住居跡の第51図2が有段口縁環の典型である。土師器甕は長胴甕で、口縁部は小さく斜め上方に立ち上がる。

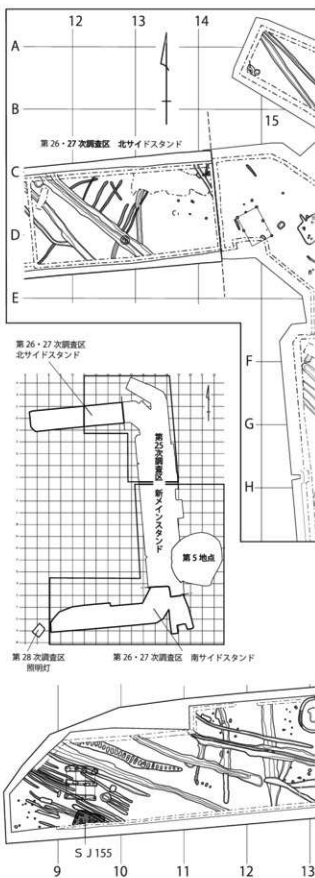
第141号住居跡からは須恵器環H蓋（第51図1）が出土している。MT15～TK10型式併行と思われる。口縁部は長く直立するが、稜は退化し、部分的に沈線化している。第111号住居跡からは須恵器環H身が検出されている。口縁の立ち上がりは高いが、端部の作りが甘い。MT15～TK10型式併行と思われる（第19図10）。

土師器坏蓋模倣坏は良好な伴出例がない。須恵器は5世紀末～6世紀前半に比定され、土師器（6世紀後半）とは、時期的な齟齬があると思われる。

Ⅱ－3期中段階は第127・130・132・133・138・142・156号住居跡が該当する。有段口縁環は小型化が進行し、口径は12～11cm大に縮小する。坏蓋模倣坏も同様に小型化する。7世紀前半を中心とした年代と考えられる。

第130号住居跡は口径12～11cm大の模倣坏と口径11～10cm大の有段口縁環がある。土師器甕は長胴甕で、胴部は膨らみを残す。中段階の典型と思われるが、古段階から連続する7世紀初頭頃の良好な資料に欠ける。土師器甕は長胴甕で口縁部が斜め上方に延び、最大径は口縁部に移行している。器高は38cmと長胴化がピークとなる。

Ⅱ－3期新段階は第120・121・126・135・152号住居跡が該当する。第126号住居跡は前段階から本段階に跨る資料である。口径11cm大の有段口縁環と口縁部が短く直立する模倣坏、長く外反する模倣坏と、北武蔵型暗文坏が伴う。北武蔵型





第186図 第25～28次他遺構変遷図(1)

暗文坏は新出の要素だが、北武蔵型坏は出土しないことから、前段階から本段階に跨る時期と捉えた方が良いかもしれない。

この段階は、北武蔵型坏・北武蔵型暗文坏が新たに組成に加わる。模倣坏と有段口縁坏はまだ残存するが、比率は大きく減少する。第120・121号住居跡は北武蔵型坏と北武蔵型暗文坏が伴出している。北武蔵型坏は口縁部が小さく内屈し、深身の丸碗形態である（第23図2・3）。土師器甕は口縁部が長く外反する薄甕で、武蔵型甕のプロトタイプである。7世紀後半～8世紀初頭である。

奈良時代（Ⅲ期）

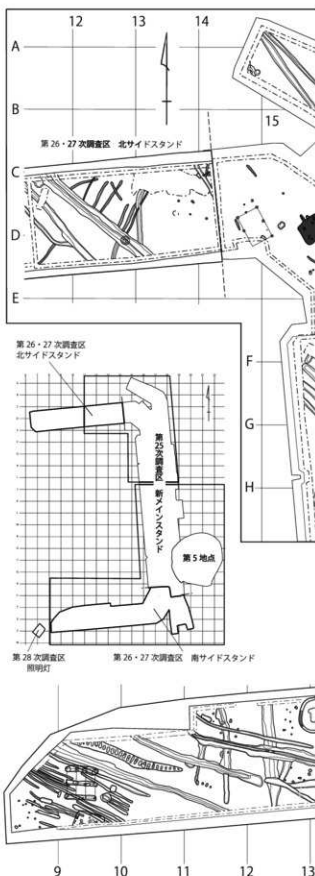
Ⅲ期は概ね奈良時代に相当し、住居跡が9軒ある。古・新の2段階に細分する。

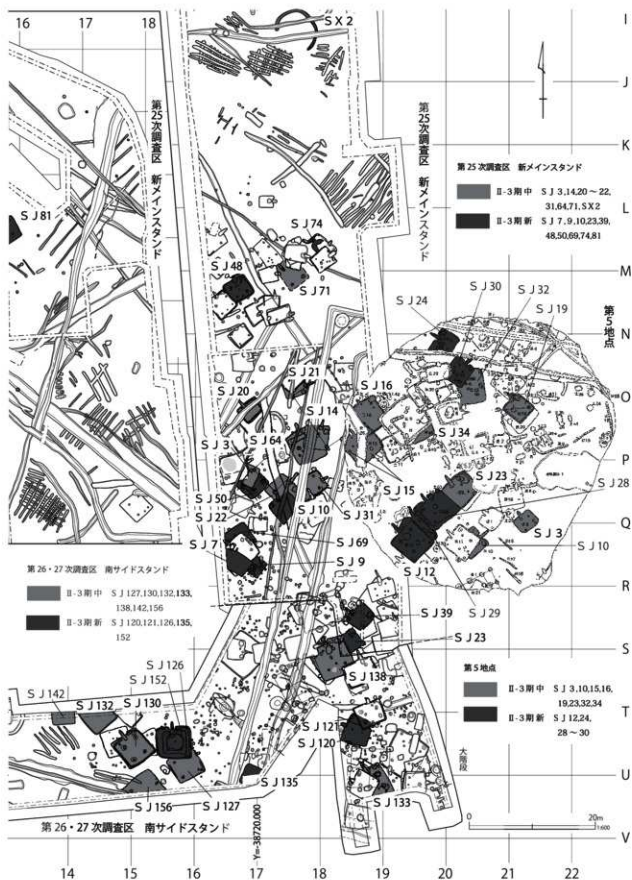
Ⅲ期古段階は第104・105・140・145・147・148号住居跡が該当する。8世紀前半の土器群である。第104号住居跡は前段階（7世紀末～8世紀初頭）の遺物を含むが、最も残りの良い第91図3の北武蔵型坏は口縁部の内湾が弱く、やや扁平な丸底である。第105号住居跡（第94図2）は同様に扁平な丸底形態の北武蔵型坏に、北武蔵型の皿が伴う。第147・148号住居跡からは北武蔵型暗文皿と思われる皿が出土するが、風化のため暗文の有無は不明である。また伴出する北武蔵型坏は口縁が内湾し、やや古い特徴を留めている。

Ⅲ期新段階は第114・115・131号住居跡、第4号墓跡（SK111）が該当する。8世紀後半の土器群であるが、良好な資料は少ない。第131号住居跡を典型とする。第131号住居跡からは、浅身で平底化した北武蔵型坏と底部回転ヘラケズリ調整された南比企産の須恵器坏が出土している。南比企編年のHIV期～V期（渡辺1990）に相当する。

平安時代（Ⅳ期・Ⅴ期）

Ⅳ期・Ⅴ期は平安時代に対応する。Ⅳ期は古・中・新の3段階に細分する。Ⅳ期古段階は概ね9世紀前半、Ⅳ期中段階は9世紀中葉～後半、Ⅳ期新段階は9世紀末葉～10世紀前半と考えておく。





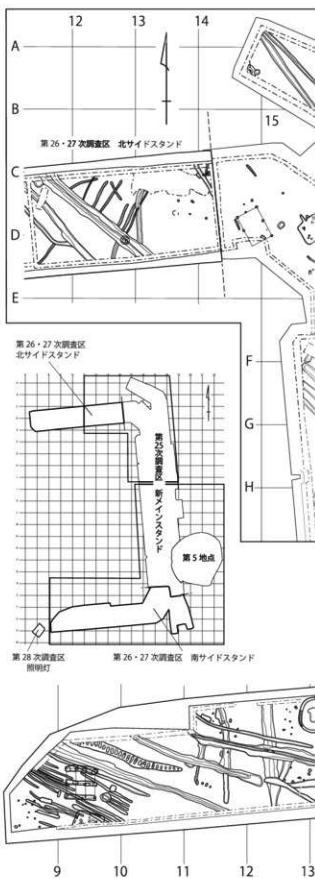
第187図 第25～28次他遺構変遷図(2)

Ⅳ期古段階は第18号住居跡が該当する(第85図)。第18号住居跡からは扁平な平底風の北武蔵型坏と皿タイプに、やや深身の平底風北武蔵型坏と、大振りで体部がヘラケズリされるタイプの坏が加わる(第85図1~4)。須恵器坏は、扁平な器形で底径は、口径の1/2を超える(第85図5)。土師器甕は武蔵型甕で、弓状口縁から「コ」の字状口縁に移行する過渡的な段階である(第85図14~16)。

Ⅳ期中段階は第106・109・110・113号住居跡が該当する。第109号住居跡出土の北武蔵型坏は、箱形で体部は無調整となる(第100図1~3)。須恵器坏は底部回転糸切り後無調整で、底径の縮小が進んでいる。第110号住居跡からは南比企産の須恵器坏が出土している。底径は口径の1/2を僅かに下回る。南比企編年のHⅧ期に属するもので、9世紀後半と考えられる。

Ⅳ期新段階は第102・122・123・124・158号住居跡、第1号墓跡(SX101)がある。第122号住居跡は中段階から新段階に跨ると考えた方がよい(第107図)。第107図2の土師器坏、7の須恵器坏は中段階、8・10・11の須恵器坏・高台壇、4~6の灰釉陶器、12・13の武蔵型甕は新段階に属する。須恵器高台坏は高台が低くなり(8)、あるいは口縁部の外反が強くなる(10)。第124号住居跡からは逆台形の深身の土師器坏が出土した(第114図1)。体部は指頭痕を残し、底部がヘラケズリされる。須恵器とロクロ土師器高台坏、灰釉陶器碗皿類が伴う。灰釉陶器はK-90~O-53号窯期に併行するものだろう。土師器甕は「コ」の字状口縁甕が崩れた段階(第115図27・28)と「く」の字状口縁に変化したもの(30)、ポスト「コ」の字甕ともいうべき内湾口縁のロクロ甕(29)がある。いずれも器壁は厚く、武蔵型甕の面影はない。

第1号墓跡からは非ロクロ整形の土師器坏(第164図6~8)・非ロクロ土師器の高台壇(10)、



ロクロ土師器坏（9）、灰釉陶器高台碗（第163図1～3）・高台皿（4）・長頸瓶（5）が出土した。非ロクロ土師器坏は逆台形の深身の器形で、体部は指頭痕とヘラケズリ、底部はヘラケズリと無調整がある。ロクロ土師器坏は、底部回転糸切りである。非ロクロ土師器高台碗は、体部指頭痕とヘラケズリ調整である。灰釉陶器はK-90～O-53号窯期並行と思われ、後者に属するものが多いようだ。

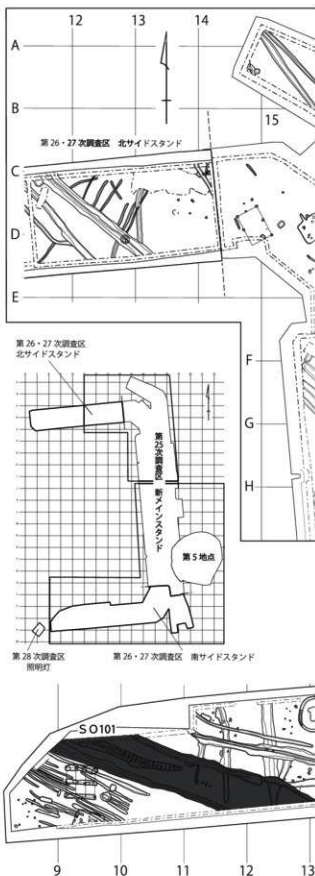
V期は10世紀後半以降とする。住居跡は抽出できなかった。第3・6号溝跡、第2・3号墓跡が該当する。遺物としては、第102号井戸跡から出土した渥美焼鉢（第152図2）が、12世紀後半～13世紀初頭頃に位置付けられる資料である。これは第3号溝跡に伴う可能性が高い。また、第6号溝跡から常滑焼の甕が出土しており、12世紀後半～13世紀のものとして推定される。浅間B軽石層の堆積と第3号墓跡との重複関係から、第3・6号溝跡が10世紀末以降12世紀初頭までに掘削されたことが判明している。また、年代測定の成果から第3号墓跡の埋葬時期は10世紀末～11世紀初頭という測定値が得られた。

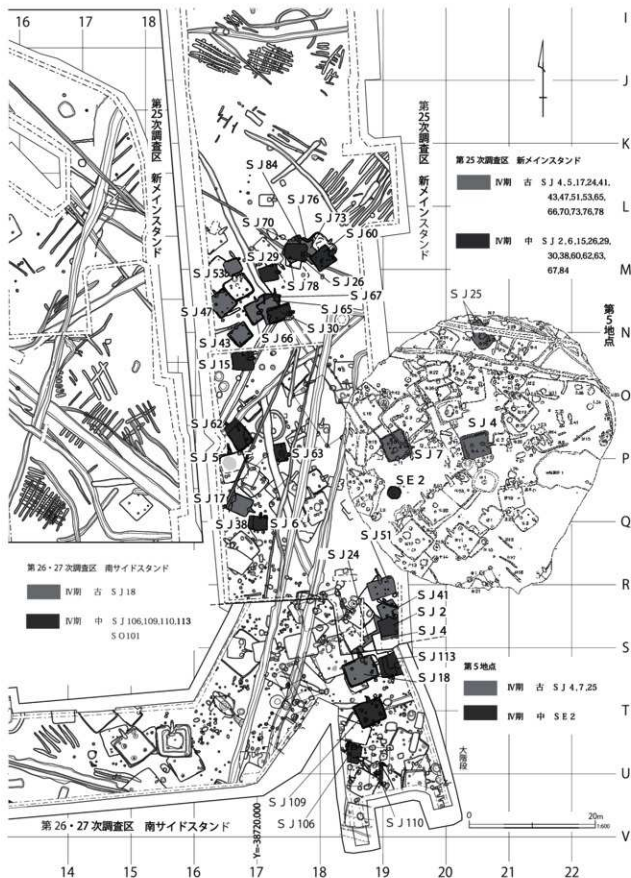
（2）集落の変遷（第186～190図）

本稿では、第26～28次調査に関わる遺構と、隣接する第25次調査区、第5地点を対象に、集落の時間的な変遷をまとめた。西側に位置する第1地点は必要に応じて触れ、変遷図からは紙幅の関係で省いた。また、時期変遷は時代の判別が比較的容易な住居跡を主対象としたため、北サイドスタンドと第28次調査区（照明灯）については触れていない。

I期 弥生時代中期後半～後期前半は集落が営まれた痕跡はない。

II-1期（第186図） 南サイドスタンド調査区西南端に住居跡が1軒検出されたのみで、広がりには不明である。第25次調査区から1軒、東に隣接する第5地点から1軒検出されているが、まと





まりは見られない。周囲の状況から大きな集落に発展する可能性は低いと思われる。

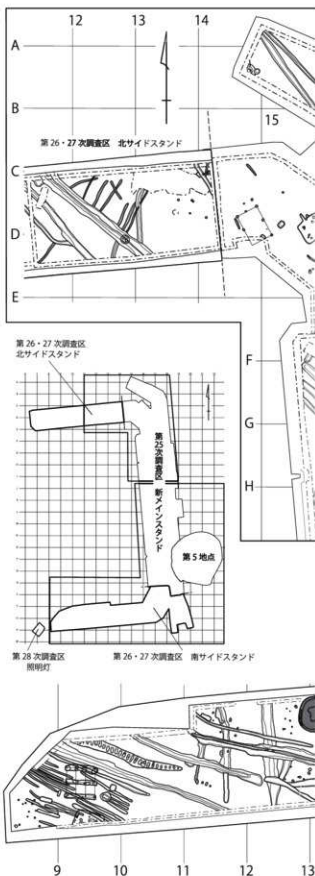
Ⅱ-2期 古墳時代中期（和泉期）～後期（鬼高期）前半段階に該当する。住居跡は検出されなかった。北島遺跡全体から見て集落の縮小～断絶期と捉えることができる。年代的には5世紀～6世紀前半頃である。

Ⅱ-3期（第186・187図） 第26～28次における古墳時代後期以降の集落の出現期で、時期的には6世紀後半～7世紀後半までである。古段階は南サイドスタンドの南東部にまとまる傾向がある。この段階は7軒の住居跡から構成され、北側の新メインスタンド（第25次）、西側に位置する第1地点の集落はまだ形成されていない。東側に位置する第5地点では該期の住居跡が2軒出現している。

Ⅱ-3期中段階は南サイドスタンド中央に位置する一群と東側に位置する一群の2群に明瞭に分かれる。西群は第127・130・132・142・156号住居跡の5軒がまとまっている。東群は第133・138号住居跡から構成されるが、15mほどの間隔がある。一辺5mを超える大型住居跡が主体となり、北西寄りに主軸を取るものが多い。北側に隣接する第25次調査区でも第14・20・21・22・31号住居跡など8軒の住居跡が進出し、一気に集落が展開・形成されるようになる。7世紀前半頃と考えられる。

Ⅱ-3期新段階は南サイドスタンド東部にまとまるが、5軒のみで集中度は高くない。第120・121号住居跡、第126・152号住居跡は重複住居跡である。7世紀後半代中心である。第25次調査区では10軒、第5地点では該期の住居跡が5軒営まれ、第25次・第26～28次・第5地点を通して安定して集落が継続したことがわかる。一方、西に位置する第1地点では、この時期まだ集落が形成されていない。

Ⅲ期（第188図） Ⅲ期は8世紀奈良時代に対応する。古段階と新段階の2段階に分ける。Ⅲ期古



段階はおおよそ奈良時代前半に相当する。住居跡6軒と井戸跡1基がある。南サイドスタンド東部に分布するが、第25次調査区で6軒、第5地点で8軒と広域に住居跡が展開し、集落は安定的に維持されている。分布状態は、1箇所に集中するのではなく、一定間隔を置いて分布する傾向が窺える。また、西側に位置する第1地点でも新たに集落が出現し、4軒の住居跡が検出されている。

Ⅲ期新段階は住居跡3軒から構成される。第114・115号住居跡はあまり良好な資料ではない。南サイドスタンド中央に第131号住居跡が1軒、東端に2軒あるが、集落は一軒縮小傾向にあるようだ。第4号墓跡(SK111)も該期に属する。これは土師器甕(武蔵型甕)を蔵骨器とした火葬墓で、第115号の住居跡の約10m西側の集落域内に造られていた。第25次調査区においても、該期の住居跡は抽出できない。第5地点でも住居跡は2軒に留まる。この段階、第1地点で6軒の住居跡が確認され、現象的には、集落の中心が西側(第1地点)に移動したようにも見える。

Ⅳ期(第189・190図) Ⅳ期は平安時代前半の集落である。古・中・新の3段階に分割した。古段階は9世紀前半、中段階は9世紀後半、新段階は9世紀末～10世紀前半である。

Ⅳ期古段階は南サイドスタンド東端に1軒あるのみである。一方、第25次調査区では15軒と大幅に増加し、第25次調査区(新メインスタンド)が集落の中心となる。第5地点は3軒で、前期同様縮小傾向にある。第1地点は住居跡4軒となり、前期からは縮小している。

Ⅳ期中段階では、南サイドスタンド東南部、大階段部分に4軒まとまっている。また、南サイドスタンド西城では第101号道路跡が該期に属する。これは両側側溝と波板状圧痕を備えた幅約6mの道路跡である。道路跡の築造時期はⅣ期古段階までは遡ると予想される。集落域の南側を画するよう西南西から東南東方向に延びている。

第25次調査区では該期の住居跡は12軒を数え、集落としてもピークを迎える。前段階に引き続き集落の中心であったと考えられる。集落の最盛期に合わせて道路跡が整備されたと考えられる。東側に位置する第5地点では住居跡は確認できない。西側の第1地点でも住居跡は1軒のみとなる。

Ⅳ期新段階では、南東端部に大型住居跡が1軒、第25次調査区寄りの南サイドスタンド北部に4軒と2群に分かれる。後者は3軒が縦列で並んでいた。南サイドスタンドでは前段階に引き続き比較的小規模な集落が営まれていたといえる。この段階に、南サイドスタンド西側に第1号墓跡(SX101)がある。これは円形の区画溝を伴う木棺墓で豊富な副葬品が伴っていた(円形区画墓)。集落域に近接した場所ではあるが、墓域という完全に分離された土地利用ともいえない微妙な距離感である。第25次調査区では、該期の住居跡は2軒と激減してしまう。第5地点では、住居跡は認められなくなってしまう。第1地点でも住居跡は1軒と、全体的に縮小する中にあっては、南サイドスタンドが中心的地域といえる。

Ⅴ期(第190図) 第3・6号溝跡と第2・3号墓(土壇墓)跡が該期に属する。この溝跡は第5地点から第25次を経由して南サイドスタンドまで連続することが判明している。後述するように「コ」の字状に屈曲する可能性が高い。古代末期から中世前期にかけての二重堀を伴う屋敷(館)跡が視野に入り、注目される。第2・3号墓跡の時期は10世紀末～11世紀初頭頃、第3・6号溝跡は第2・3号墓跡よりも新しく、覆土層に浅間B軽石(1108年降灰)が含まれていた。溝覆土中から常滑焼の甕が出土しており、10世紀末以降1108年までに掘削され、13世紀頃までは堀として機能していたことがわかる。掘削時の遺物は抽出できないが、該期の様相が窺える貴重な資料といえよう。

(3) 墓跡について

第26～28次調査では4基の墓跡が検出され

た。木棺墓が1基、土墳墓が2基、火葬墓が1基である。第1号墓跡は円形区画墓と仮称したもので、墓の周囲を円形の溝で区画した特殊な例である。いずれも平安時代の墓跡で、同一遺跡内から3種類の形態が存在する点でも興味深いものがある。ここでは、県内の土墳墓（木棺墓）出土例を参考（第56表）にその概要をまとめておきたい。

なお、第4号墓跡（火葬墓）は8世紀後半～9世紀初頭頃の墓跡である。武蔵型甕を蔵骨器として用いるタイプで、他に第6地点から須恵器甕を蔵骨器に利用した火葬墓が1基出土している。

第1号墓跡（円形区画墓）

概要 溝の外径は4.80～5.76m、溝幅は0.38～0.65m、深さ0.10～0.19mである。区画内に木棺墓が設置されている。溝の断面を見ると、底面に中堤状の高まりがあり、2分割されていたようである。墓を区画する何らかの遮蔽施設が存在した可能性がある。封土（墳丘）は存在しない。溝跡からは土師器杯が出土しており（第164図8）、墓と一体であることは疑いない。

「円形周溝で区画された土壌を伴う主体部」という意味では管見に触れた限りでは類例は見いだせなかったが、「方形周溝状遺構」または「方形区画墓」と呼ばれる方形周溝墓に似た墓が、千葉県や栃木県に分布することが知られている（渡辺1983）。県内でも狹山市宮ノ越遺跡から1例発見されている。しかし、宮ノ越遺跡では埋葬施設と思われる長方形土壌は周溝内に位置し、形態も含め、本遺跡例との差異は大きい。このタイプの墓は8世紀後半から9世紀初期にかけて盛行するといわれ（安藤・篠原1995）、本遺跡例とは周溝形態や時期での共通性は窺えない。また、「円形周溝（墓）」は青森県や岩手県など東北地方で多数出土しているが、基本的に主体部が伴わない点で決めに欠ける。時期的には8世紀から10世紀に及ぶようであるが、関連性についてはまだ検討が必要である。

北島遺跡第1号墓跡の主体部は長楕円形で、西

北隅に突出部がある。木棺外から突出部にかけての約50cm四方の範囲から灰釉長頸瓶、灰釉高台碗、非クロ土師器杯・高台碗、クロ土師器杯が合わせて9点副葬してあった。木箱等に入れて木棺外（西側）に埋置したと推定される。

群馬県高崎市下佐野遺跡7区113号土壌では長方形土壌の東長辺に奥行40cm、間口68cmの台形状の横穴が付き、横穴の奥まった位置から灰釉陶器碗、須恵器碗、耳皿が出土した（第191図3）。北島遺跡第1号墓が横穴であったか否かは不明であるが、突出部の規模は比較的近似し、底面が平坦である点も共通している。同様な副葬品埋置場所であったと思われる。群馬県富岡市内匠日影周地遺跡A区18号土坑でも長辺中央に突出部が掘り込まれている（第191図2）。報文では小動物による掘乱しということであるので、参考として紹介する。なお、副葬品は突出部には入っていない。

北島遺跡に近接する熊谷市諏訪木遺跡では、木棺の痕跡が残る。木棺の外側に、幅10cmの突出部を設け、副葬品の須恵器を埋置する点は本遺跡例に類似する。他に2点の須恵器と灰釉陶器が副葬されていたが、いずれも木棺外から出土した（第191図5）。

主軸に平行する長辺の一角に横穴を掘り込む土墳墓は「側壁扶込土坑」（仲山1990）や「L字状土坑」などと呼称され、関東各都県でみられる（註1）。群馬県国分境遺跡では扶込土坑は長辺全体に及び、底面を一段深く掘り込む（第191図4）。その多くは扶り込んだ部分に主体部を設けるようで、副葬品設置場所である本遺跡例とは異なる。

本遺跡例では墓壇内からは鉄釘と木片が検出され、木棺墓であったことは確実である。棺内から出土した木片は自然木で、木目为主軸に直交するものがあることから、棺そのものよりも棺を支える根太（枕木）状の棺材と思われる。熊谷市飯塚北遺跡の木棺墓からは底面に主軸と直交する3条の溝が掘られており、同様な枕木を敷いた跡と考

えられている(第191図7)。他にも長野県榎田遺跡(第191図6)、長野県上野遺跡、大倉崎遺跡などいくつかの遺跡で、枕木の検出例がある。

時期と副葬品

原 明芳の分析によれば、木棺墓の副葬品は食膳具、または食膳具・貯蔵具という組み合わせが一般的であるという(原2009)。第1号墓跡から出土した灰釉陶器長頸瓶・灰釉陶器碗皿類・土師器杯・埴輪、クロ土師器杯という組み合わせは通例に沿った在り方といえる。北島遺跡第4地点第10号土壇からは須恵器長頸瓶と須恵器杯・土師器杯、灰釉高台碗が土壇壁際から出土した(第191図1)。棺と壁の間に副葬品を収めた木棺墓と考えられる。原によれば、副葬された食器類・貯蔵具は棺外に埋置するのが常だったという。これは納棺儀礼ではなく、埋葬儀礼に用いられたことが原因だと解釈されている(原 前掲書)(註2)。

時期については、長野県では9世紀第4四半期に木棺墓が成立し、11世紀後半急速に衰退するという(原 前掲書)。埼玉県内では神川町青柳古墳群第1号土壇墓は、K-14号窯期の灰釉陶器高台碗が副葬されていた。9世紀前半～中頃で、県内最古例だが、木棺の痕跡はない。木棺墓は本例や第4地点など、9世紀末葉～10世紀前半に一斉に出現するようである。長野県の状況と共通する。

被葬者像

さて、木棺墓の被葬者はいかなる人物だったのだろうか。北島遺跡からは奈良・平安時代の木棺墓は第1号墓跡と第4地点10・11号土壇の3基のみである。原 明芳は木棺墓の被葬者或いは造墓主体者は畿内から下向した中小貴族で、木棺墓の存在は「ある一定以上の官位を持った貴族が地方にやってきて実際に在地社会の中に居住していたことを示している」と指摘された。

これが直ちに北島遺跡に当てはまるか否かはまだ検討の余地はあるが、9世紀代に入ると、第19地点や第2地点などに豪族層の台頭と成長を想定

することは可能である。円形区画墓の被葬者はそうした有力者の一人だったのではなかろうか。

その有力者が在地出身か畿内出身者なのか、円形区画墓の分析がその手掛かりとなるだろう。

土壇墓

第2号墓跡と第3号墓跡は土壇墓と考えられる。2基は縦に並んだ状態で検出された。第2号墓跡からは人骨は出土せず、焼土と炭化物が多量に含まれていた。第3号墓跡は蓆状繊維の上から全身人骨が埋置された状態で出土した。出土遺物はないが、第3号墓跡の年代測定によって、10世紀末～11世紀初頭という較正年代が得られた。周辺調査区からは11世紀以降の住居跡はなく、集落の様相は不明瞭となる段階である。

奈良・平安時代調査区の中で、墓域と呼べる場所は検出されておらず、土壇墓を造営した人物の居住場所は不明とせざるを得ない。

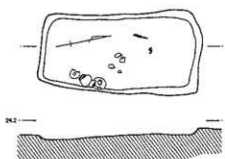
第2・3号墓跡を壊して掘削された第3・6号溝跡は11世紀初頭以降、12世紀初頭の間に掘削された方形区画であり、居住施設や遺物は発見されていないが、主要建物が配置されるような区域であったと予想される。

火葬墓

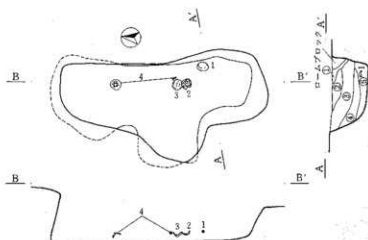
火葬墓(第4号墓跡)は1基検出された。南サイドスタンド東側の竅穴住居跡が密集する集落域の一角にある。武蔵型甕が蔵骨器に使用されていた。武蔵型甕が逆位(倒立)に据えられ、中に火葬骨が収められていた。本来口縁部には布などの蓋が存在したのであろうが、遺存していなかった。時期的には8世紀後半～9世紀初頭頃の甕である。集落域の中で単独で存在する。北島遺跡では最も西側に位置する第6地点から、須恵器甕を蔵骨器に使用した火葬墓が1基検出されている。第4号墓跡は、比較的近くに10世紀末頃の土壇墓が2基、やや西側に10世紀初頭頃の円形区画墓、約70m南の第4地点から10世紀初頭前後の土壇墓2基が検出されている(第192・193図)が、時期

第56表 埼玉県内の土壌（木棺）墓出土遺跡

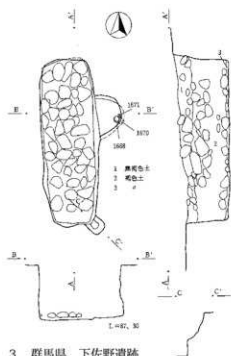
遺跡名	遺構	所在地	時期	形態	長軸×短軸×深さ (m)	本館	出土遺物・備考	文献		
1 北島26・27次	1号墓 (円形区画墓)	熊谷市	9C末～10C前半	長楕円形	2.30 1.38～1.15	0.30	有 鉄釘	土師杯3・高台壇、ロクロ土師 外、灰軸陶器 高台碗3・高台皿・長頸瓶、鉄 釘、粘土、青 棺外に厨師品 墓域に突出部	本書	
2 北島26・27次	2号墓 (土壇墓)	熊谷市	10C末～11C初頭	長楕円形	1.15 (0.45)	0.24	無	底面に粘土と炭化物	本書	
3 北島26・27次	3号墓 (土壇墓)	熊谷市	10C末～11C初頭	長楕円形	1.30 (0.50)	0.16	無	全身人骨 露	本書	
4 北島4地点	10号土壇	熊谷市	9C後半～末	長方形	1.93	0.98	0.10	不明	須恵器長頸瓶 須恵器杯 土師器 杯 灰軸高台碗	22
5 北島4地点	11号土壇	熊谷市	10C初頭か	楕円形	2.13	1.14	0.15	不明	須恵器杯(混入) 灰軸高台碗 土師器壺	22
6 北島19地点	SK106	熊谷市	12C	楕円形	1.06	0.68	0.06	無	山吹双鳥鏡、短刀片、歯、骨片	25
7 向田	1号土壇墓	美里町	10C前半	長方形	2.02	0.54	0.35	有 鉄釘	高台付埴、灰軸高台碗、小型意、 鉄釘 堅穴住居内産屋敷	20
8 大久保山	1号墓壇	本庄市	10C中葉	長方形	1.70	1.10	0.07	有 鉄釘	短冊状鉄製品、端文八稜鏡、 鉄釘、銅鏡。 土師質高台杯、棺外厨師 緑集 積 積石塚	3
9 大久保山	2号土壇墓	本庄市	10C前葉	長楕円形	2.37	0.90	0.95	無	須恵高台付杯、非ロクロ土師器 杯	3
10 大久保山	3号土壇墓	本庄市	10C前葉	楕円形	2.22	1.42	0.44	無	土師質高台付杯	3
11 大寄	1号土壇墓	深谷市	10C後半～11C	長方形	1.64	0.45	0.44	無	ロクロ土師高台壇 住居跡内産 屋敷	24
12 大寄	JS66 1号土 壇	深谷市	11C前半	長方形	1.90	0.61	0.14	無	ロクロ土師器小皿 住居跡内産 屋敷か 小児用	24
13 青柳古墳群	1号土壇墓	神川町	9C前半～中頃	楕円形	2.49	0.98	0.30	無	灰軸陶器高台碗 (K-14)	27
14 飯塚北	1号本館墓	熊谷市	10C前半	長方形	2.14	1.68	0.28	有 鉄釘	須恵杯・高台付埴、灰軸陶器高 台付碗。 高台付皿4、鉄釘、棺門金具・ 棺金具 枕木溝あり	26
15 追々谷戸	土壇墓群11基	鳩山町	9C前半か					無	楕円形土壇が横一列に並び、喪 壇を伴う	36
16 臥原	土壇墓数基	川口市	8C後半～9C末	円形・楕円形				無		9
17 反り町	SK22	神川町	10C前半～中頃	長楕円形	2.30	1.00	0.84	無か	灰軸陶器高台碗・高台皿、須恵 杯・高台杯	10
18 古井戸	1450号土壇	本庄市	9C	隅丸方形	2.00	1.57	0.44	無	放射状暗文土器片、金銅製身 具	21
19 田阿赤	1号土壇墓	深谷市	9C末～10C初頭	長方形	1.95	0.65	0.29	無	須恵杯・高台壇	23
20 田阿赤	2号土壇墓	深谷市	9C末～10C初頭	長楕円形	2.09	0.80	0.18	無	須恵高台壇	23
21 大堤	1号土壇墓	熊谷市	10C初頭か	長楕円形	2.58	0.76	0.60	有 鉄釘	須恵杯・高台壇、鉄釘	6
22 虫草山	22号土坑	鳩山町	9C後半	不整楕円形	1.87	1.10	0.40	無	須恵杯	35
23 虫草山	24号土坑	鳩山町	9C後半	不整長方形	2.00	0.80	0.20	無	なし	35
24 揚糠木	1号土壇墓	狭山市	9C末	長方形	2.36	1.46	0.62	有 鉄釘	須恵杯4、鉄釘、石郭墓、四隅 にビット	29
25 揚糠木	2号土壇墓	狭山市	9C末	長方形	2.08	1.28	0.32	有 鉄釘	鉄釘	29
26 揚糠木	3号土壇墓	狭山市	9C末	長方形	2.33	1.20	0.43	有 鉄釘	鉄釘	29
27 宮ノ越	1号墓	狭山市	9Cか	隅丸長方形	2.50	1.40	0.20	無か	なし 石郭土壇墓	19
28 宮ノ越	2号墓	狭山市	9Cか	楕円形	1.40	0.90	0.10	無か	なし 石郭土壇墓	19
29 宮ノ越	3号墓	狭山市	9Cか	隅丸長方形	1.50	1.20	0.15	無か	なし 石郭土壇墓	19
30 諏訪木	IV区5号 土坑墓	熊谷市	9C末	不整長方形	1.38	0.88	0.18	無か	須恵器高台壇2、ロクロ土師高 台壇1	13
31 諏訪木	V区3号 土坑墓	熊谷市	9C末	長方形	1.52	0.38	0.42	無か	須恵器高台壇2	13
32 諏訪木	V区4号 土坑墓	熊谷市	9Cか	長方形	1.50	1.20	0.18	無か	歯	13
33 諏訪木	V区5号 土坑墓	熊谷市	9C末	長楕円形	2.59	0.67	0.40	無か	須恵器高台壇1	13
34 諏訪木	V区6号 土坑墓	熊谷市	9Cか	隅丸長方形	2.05	0.76	0.16	有	須恵器高台壇2、灰軸陶器高台 壇1 長軸の北西端に張り出しあり	13



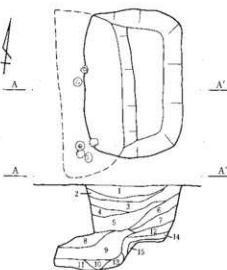
1 熊谷市 北島遺跡第4地点 10号土坑



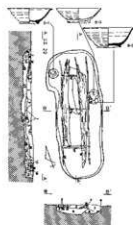
2 群馬県 内匠日影周地遺跡 A区18号土坑



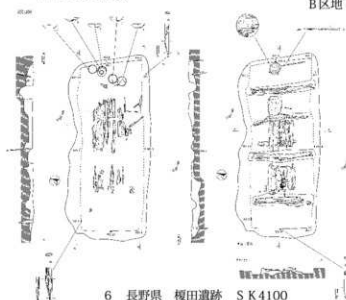
3 群馬県 下佐野遺跡
7区113号土坑



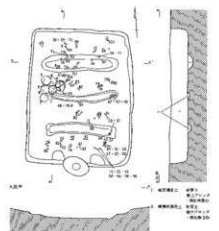
4 群馬県 国分境遺跡
B区地下式土坑



5 熊谷市 諏訪木遺跡
Ⅶ区第6号土坑墓



6 長野県 榎田遺跡 SK4100



7 熊谷市 飯塚北遺跡 第1号木棺墓

第191図 土坑(木棺)墓参考資料

的に隔たりが大きく、墓域として認識されていたか疑わしい。北島遺跡の中では墓が比較的集中する区域として抽出することはできる。墓域は存在した筈であり、その候補地にはなるかもしれない。

火葬墓は広大な北島遺跡の調査範囲の中で本例と第6地点の2例のみである。西田の集成によれば、埼玉県内の火葬墓は、34遺跡78例が出土している。そのうち、武蔵型甕を蔵骨器に使用したものは9遺跡34例ある。時期的には8世紀前半に出現し、8世紀後半から9世紀に盛行するという(西田2015)。北島遺跡例は火葬墓盛行期の一例となろう。仏教や寺院との関わり、被葬者像を含めて今後の検討が必要である。

(4) 道路と溝跡

第101号道路跡

第26・27次調査区南サイドスタンド西側から波板状圧痕と両側側溝を持つ道路跡(第101号道路跡)が検出された。道路の走向はN-69°-Wである。道路幅は側溝芯々間で約6mである。ある程度埋まった段階の北側側溝から、土師器甕が2個体、入れ子状に重ねた状態で出土した。9世紀中頃から後半には側溝は埋まっていたが、道路は機能していたと考えられる。道路の構築時期はそれよりも遡るのは確実である。9世紀前半頃と推定しておきたい。この道路跡を約1.16km東に延長すると、第19地点で検出された道路跡に繋がる可能性が高い(第192・193図)。第19地点の溝跡は南に屈曲している。その先は不明だが、第17地点の西側、第14地点の東側を通して南下すると思われる。第101号道路跡の西側は不明確であるが、第6地点の北側に側溝状の溝があり、第6地点北側に沿ってほぼ直線的に西に延びる可能性がある。第17・19地点で想定された条里区割りの方向とは明らかに異なり、条里成立前の地割りを留めているのかもしれない。第15地点で検出された道路跡は90°屈曲していたが、ほぼ条里区割りに沿った方向であった。

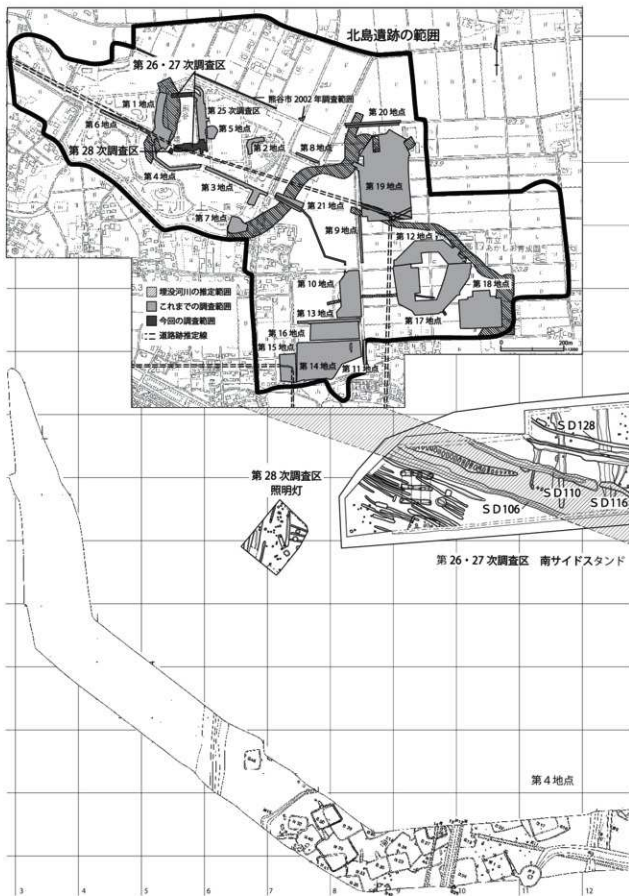
道路跡の性格は今後の検討に委ねられるが、9世紀代の敷設、幅員6mの直線道路という条件からは、東山道クラスの道路跡にも比肩される規模である。勿論東山道とは異なるが、郡家間を繋ぐ「伝路」とみても違和感はない。いずれにせよ、西に進めば東山道武蔵路、その先には幡羅郡家と推定されている幡羅遺跡が位置する。古代幡羅郡の幹線道路跡といえる。

第3・6号溝跡

第3・6号溝跡は、第5地点から第25次調査区を経由して第26・27次調査区まで延びることが確認された。2条が平行して延び、北西隅で「L」字状(直角)に屈曲する。溝の間隔は約4mである。第26・27次調査区南端は直線的に抜けているが、その南に位置する第4地点ではその延長部は確認されておらず(第192・193図)、その手前で東に屈曲することが予想された。そうした視点で見ると、南サイドスタンド南端に東西方向に走る第101号溝跡の存在に気付く。調査区が幅狭いため詳細は不明確であるが、第3号溝跡の延長とみなすことが可能であれば、「コ」の字状に屈曲する二重の区画溝となる。内側の区画溝間は約74mと思われる。方形区画であれば一辺74m、古代末期に掘削された何らかの「区画」となる。

「区画」溝の掘削時期は、第3号墓跡の年代測定から10世紀末葉以降掘削されたことは明らかである。第6号溝跡確認面の上層には、浅間B軽石の混在する土層が被覆していた。つまり、第3・6号溝跡埋没後に浅間B軽石が降灰したことになる。第6号溝跡覆土中から12世紀後半～13世紀の常滑焼の甕、第3号溝跡に横されていた古代の第102号井戸跡から渥美焼の鉢(12世紀後半～13世紀初頭頃)が出土している。後者は本来第3号溝跡に伴うと判断される。

浅間B軽石が降灰した1108年から間もなく溝跡が埋没したのであれば、12世紀後半～13世紀の渥美・常滑焼が溝の覆土から出土するのは整合



第192図 第101号道路跡、第3・4・6号溝跡位置図(1)



第193図 第101号道路路跡、第3・6号溝跡位置図(2)

的ではなく、疑問点として残るが、区画溝の存続（埋没）時期が中世初期まで続き、第3・6号溝跡が同一時期に機能していたと考えておきたい。

古代の第101号道路跡の北側に位置する第128号溝跡、第117・119号溝跡は、波板状圧痕こそないが、芯々で幅約2mの両側側溝を備えた道路跡となる可能性がある。第101号道路跡とは微妙に方位が異なるが、第3・6号溝跡に対しては直角に振れており、第3・6号溝跡に規制された古代末期の道路跡を想定しておきたい。

このように第3・6号溝跡が古代末期の方形区画となる可能性が高いと思われるが、内部からは建物跡や溝跡、井戸跡や遺物が皆無である。遺物が少ない時期ではあるが、在地頭主層の館を想定するのであれば、生活痕跡がもう少し検出されても良いと思うが、現状では、この区画が館や屋敷に比定しうる根拠に乏しい。古代末期の館跡として知られる本市市大久保山では、12世紀中葉～12世紀後葉の館跡は不整形の区画溝が掘削され、12世紀末から13世紀にかけて、方形館に変化するという（荒川1998）。性格については、周辺地域における歴史的な動向と、中世館跡の調査例を精査して慎重に検討する必要がある。

（5）集落の消長

第57表は、各調査区の構成住居跡数を時期別にまとめたものである。調査区は概ね西から東、北から南に向かって配列した。住居跡に限って時期判別をしたので、掘立柱建物跡他の遺構はカウントしていない。また、第7地点は沼地から遺物が多量に出土したが、住居数に連動しないため、時期別の供膳器数を参考として掲載した。時期不明な住居跡はカウントから外した。住居跡数を集落の盛衰に置き換えた便宜的でやや乱暴な分析であるが、一定の傾向は反映していると考えられる。

まず、時期別の合計軒数をみると、弥生時代中期と古墳時代前期の集落は第19地点に集中する。第19地点は奈良・平安時代においても拠点集落

が形成され、一貫して集落域として選択されたことがわかる。弥生時代後期と古墳時代中期から後期前半にかけては、北島遺跡は集落としては断絶乃至、大幅な縮小期にあったようだ。

古墳時代後期以降の集落は6世紀後半～10世紀前半まで形成され、ピークは9世紀前半で、148軒を数える。9世紀後半までは80軒と多いが、10世紀前半では21軒と急激に減少し、11世紀前半に集落は終息する。但し、第14地点と第15地点の溝跡から10～11世紀にかけての土器が多量に出土しており、堅穴住居跡は少ないが、該期の集落としては、中心的な存在だった可能性がある。集落がピークを迎える9世紀は第19地点に区画溝・四脚門・四面廂の大型建物等から構成される豪族居宅が成立する段階で、豪族居宅の成立と堅穴住居跡の増加は連動する動向であった。調査区を大きく3ブロックに分けると、第6地点から第2地点までの西側ブロックと、第19地点を中心とする中央ブロック、第14・15・17地点などの東南ブロックに分かれる。

西側ブロックは6世紀～7世紀代に中心があり、8～9世紀を通じて維持され、10世紀前半まで迎えられる。第7地点の多量の土師器環頸の出土は7世紀における西側ブロックの優勢を物語っている。

中央ブロックは第19地点に象徴される。7世紀後半から急速に成長し、9世紀には豪族居宅を中心に隆盛し、11世紀まで継続する点で長く集落の命脈が保たれていた。南東ブロックは本格的に集落が形成されるのは8世紀代と、北島遺跡の中では後出的である。9世紀が盛期であるが、前述したように10～11世紀代の遺物が溝跡から多量に出土しており、10世紀以降の集落の中心的な地位に成長した可能性がある。

以上、北島遺跡集落の動向をまとめた。集落以外にも条里水田・畠・道路・墓・河川の利用等多岐にわたる分析視点がある。周辺遺跡の状況と合わせて立体的、総合的に分析する必要がある。

第57表 北島遺跡における集落の消長

	弥生 中期	弥生 後期	古墳 前期	5C 前	5C 後	6C 前	6C 後	7C 前	7C 後	8C 前	8C 後	9C 前	9C 後	10C 前	10C 後	11C 前	11C 後	合計
第6地点								1	6	10	2	1	4					24
第1地点										4	6	4	3	1				18
第26～28次			1					7	7	5	6	3	1	4	5			39
第25次			1					8	10	6		15	12	2				54
第4地点				1		2	2	6	9	6	1		6	1	1			35
第5地点			1					2	8	5	8	2	3					29
第3地点								3	4	5	7	16	7					42
第2地点										1		1	6					8
第7地点								2	1				3					6
第7地点土器数					1	62	192	153	65	5	2	3						
第8地点										1		1						2
第21地点																		0
第9地点								1	2				1					4
第20地点			4				1	1	3	4	4	10	4					31
第19地点	65		150				4	12	22	13	26	34	20	9	10	2		367
第12地点			15							1								16
第10地点											1	1						2
第13地点																		0
第16地点												2						2
第15地点										1	7	14	3	1				26
第14地点	1		2							1	21	24	3	2				54
第17地点			3				2		4	5	6	21	4					45
第18地点																		0
合計軒数	66	0	177	1	0	2	18	49	71	72	86	148	80	21	11	2	0	804

※第7地点土器数は、沼地から出土した供養器の出土数を参考としてカウントした。

注

- 註1 表には掲載していないが、埼玉県神川町反町遺跡からは土壇墓と併存して側壁挟込土坑が6基検出されている。
 註2 埼玉県美里町向田遺跡からは木棺内底面近くから灰釉高台碗が出土し、棺内に副葬された可能性が高い。また、覆土上層から葉形の小壺が出土した。棺の上に副葬したものが、土圧で棺上部に落ち込んだと推定される。

引用・参考文献

- 1 愛知県史編纂委員会 2012『愛知県史 別編室業3 中世・近世・常滑系』
- 2 浅野晴樹 2015「第VI章第1節 中世の熊谷」『熊谷市史 資料編1考古』熊谷市教育委員会
- 3 荒川正夫 1998「北武蔵における中世館の成立と展開」『大久保山』VI 早稲田大学本庄校地文化財調査報告6
- 4 荒川正夫 1999「まとめ」『大久保山』VII 早稲田大学本庄校地文化財調査報告7
- 5 安藤美保・篠原曉美 1995「方形周溝遺構と側壁挟込土坑の概観」『東日本における奈良・平安時代の墓制』
- 6 出淵康行 1995「39. 大境遺跡」『東日本における奈良・平安時代の墓制』
- 7 井上尚明 2015「第V章第2節 古代の熊谷」『熊谷市史 資料編1考古』熊谷市教育委員会
- 8 金子彰男 1998「埼玉県における豪族居館関連遺跡について」『第8回東日本埋蔵文化財研究会 古墳時代の豪族

居館をめぐる諸問題』

- 9 川口市遺跡調査会 1985『叭原遺跡（歴史時代・図版編）』川口市遺跡調査報告第7集
- 10 神川町教育委員会 1995『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡』神川町教育委員会文化財調査報告第12集
- 11 木下 良 2001『古代道路研究の現況』『古代交通研究』第10号 古代交通研究会
- 12 行田市教育委員会 1975『旧盛徳寺址の発掘調査』行田市文化財調査報告書第2集
- 13 熊谷市遺跡調査会 2001『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書
- 14 熊谷市教育委員会 1999『女塚遺跡・女塚4号墳』
- 15 熊谷市教育委員会 2015『熊谷市史 資料編1 考古』
- 16 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『下佐野遺跡Ⅱ地区』平安時代・中・近世編（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 17 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『国分境遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第104集
- 18 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『内匠諏訪前遺跡 内匠日影周地遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第138集
- 19 埼玉県遺跡調査会 1982『宮ノ越遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第44集
- 20 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
- 21 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『古井戸・得監塚Ⅰ』古墳・歴史時代編1 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 22 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集
- 23 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集
- 24 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000『大奇遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集
- 25 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004『北島遺跡Ⅸ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第293集
- 26 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006『飯塚北/飯塚古墳群Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第321集
- 27 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012『向/十二天/青柳古墳群南塚原支群/包樹原Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第389集
- 28 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018『北島遺跡ⅩⅣ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第446集
- 29 狭山市教育委員会 1986『揚幡木遺跡』狭山市埋蔵文化財調査報告4
- 30 関 義則 2015『第Ⅳ章第1節 古墳時代の熊谷』熊谷市史 資料編1 考古』熊谷市
- 31 長野県埋蔵文化財センター 1989『古田川西遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 32 長野県埋蔵文化財センター 1999『榎田遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12
- 33 中島洋一 2008『行田市池守遺跡の調査』『第41回遺跡発掘調査報告会』発表要旨 埼玉考古学会
- 34 西田真由子 2015『埼玉県における古代火葬墓—武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に—』『研究紀要』第29号
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 35 鳩山町遺跡調査会 1992『鳩山窯跡群Ⅳ 工人集落編（2）』
- 36 鳩山町遺跡調査会 2008『追ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書』鳩山町埋蔵文化財調査報告第33集
- 37 原 明芳 1998『信濃の古代墳墓』『長野県考古学会誌』86号
- 38 原 明芳 2009『平安時代に出現する木棺墓からみえる信濃の在地社会』『信濃』61巻第4号
- 39 東日本埋蔵文化財研究会 1995『東日本における奈良・平安時代の墓制』
- 40 洞口正史 2018『ネズミがかじったモモの種—モモとネズミと堅穴建物の廃絶—』『研究紀要』36群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 41 松田 哲 2016『熊谷市前中西遺跡の調査』『第49回遺跡発掘調査報告会』発表要旨 埼玉考古学会
- 42 松本富雄 2017『行田市諏訪山遺跡（7次）の調査』『第50回遺跡発掘調査報告会』発表要旨 埼玉考古学会
- 43 宮瀧交二 2002『埼玉県における郡家研究の現状と課題』『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会
- 44 吉野 健 2015『熊谷市諏訪木遺跡の調査』『第48回遺跡発掘調査報告会』発表要旨 埼玉考古学会
- 45 渡辺修一 1983『群小区画墓の終焉期（2）』『研究連絡誌』14（財）千葉県文化財センター
- 46 渡辺 一 1990『南比企窯跡群の須恵器の年代—鳩山窯跡の年代を中心に—』『埼玉考古』第27号